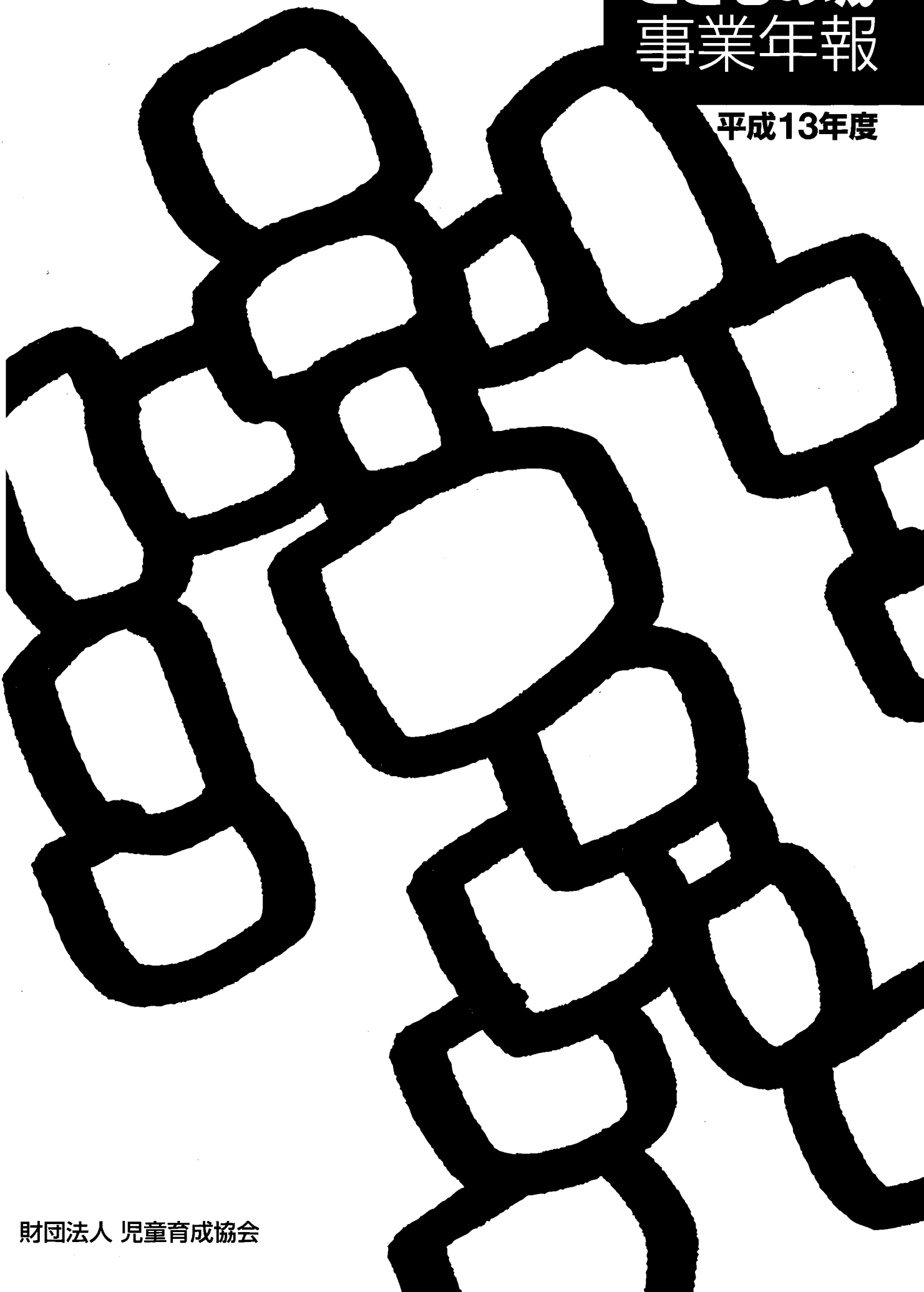
こどもの城
事業年報

平成13年度



財団法人 児童育成協会

こどもの城
事業年報

平成13年度

CONTENTS

こどもの城 事業年報　平成13年度 目次

1 事業の概要

平成13年度の活動 …… 9
1. 〔こどもの城〕の概要 …… 9
2. 一般事業活動 …… 11
3. その他の活動 …… 13
4. 国庫補助による事業活動 …… 13
5. 開館時間・入館料（こども活動エリア） …… 14
平成13年度活動一覧表 …… 15
1. 来館児・者数 …… 15
2. グループ活動実施状況 …… 16
3. 講座・クラブなど …… 17
4. 視察・見学実績 …… 19
1年の歩み …… 20

2 各部の事業

体育事業部

平成13年度の活動 …… 23
1. 一般利用 …… 23
2. 講座・クラブなど …… 25
3. グループ活動 …… 28
4. その他 …… 28
5. まとめ …… 28
平成13年度活動一覧表 …… 29
1. 一般利用 …… 29
2. 講座・クラブなど …… 31
3. その他 …… 35

プレイ事業部

平成13年度の活動 …… 37
1. 一般利用 …… 37
2. 講座・クラブなど …… 40
3. グループ活動 …… 42
4. パソコンを使った遊び …… 42
5. まとめ …… 42
平成13年度活動一覧表 …… 43
1. 一般利用 …… 43
2. 講座・クラブなど …… 46
3. その他 …… 47

造形事業部

平成13年度の活動 …… 49
1. 一般利用 …… 49
2. 講座・クラブなど …… 52
3. グループ活動 …… 55
4. その他 …… 55
5. まとめ …… 56
平成13年度活動一覧表 …… 57
1. 一般利用 …… 57
2. 講座・クラブなど …… 58
3. その他 …… 59
平成13年度プログラム一覧表 …… 60
1. 親子プログラム …… 60
2. 子どもだけのプログラム …… 61

音楽事業部

平成13年度の活動 …… 63
1. 一般利用 …… 63
2. 講座・クラブなど …… 64
3. グループ活動 …… 65
4. その他 …… 65
5. まとめ …… 65
平成13年度活動一覧表 …… 66
1. 一般利用 …… 66
2. 講座・クラブなど …… 70
3. その他 …… 73

AV（オーディオ・ビジュアル）事業部

平成13年度の活動 …… 75
1. 一般利用 …… 75
2. 講座・クラブなど …… 77
3. その他 …… 79
4. まとめ …… 80
平成13年度活動一覧表 …… 81
1. 一般利用 …… 81
2. 講座・クラブなど …… 82
3. その他 …… 83

保育研究開発部

平成13年度の活動 …… 85
1. 保育事業 …… 85
2. 一般利用 …… 87
3. 研修事業 …… 87
4. まとめ …… 88
平成13年度活動一覧表 …… 89
1. 一般利用 …… 89
2. 講座・クラブなど …… 90
3. その他 …… 92

小児保健部

平成13年度の活動 …… 93
1. 活動の概要 …… 93
2. 診療・相談活動 …… 94
3. 講座など集団を対象に行う活動 …… 96
4. 研修会などの啓発活動 …… 96
5. その他 …… 97
6. まとめ …… 97
平成13年度活動一覧表 …… 98
1. 一般利用 …… 98
2. 講座・クラブなど …… 99
3. その他 …… 101

企画研修部

平成13年度の活動 …… 103
1. 事業全般にかかわる企画調整 …… 103
2. 一般利用 …… 104
3. ボランティアの活動と養成 …… 107
4. 講座・クラブなど …… 109
平成13年度活動一覧表 …… 110
1. 一般利用 …… 110
2. ボランティア関係の活動 …… 111
3. 講座・クラブなど …… 115

CONTENTS

こどもの城 事業年報平成13年度 目次

劇場事業本部

平成13年度の活動 …… 117
1. 主な自主・提携公演 …… 117
平成13年度公演演目一覧表 …… 121
1. 青山劇場 …… 121
2. 青山円形劇場 …… 122

広報部

平成13年度の活動 …… 125
1. パブリック・リレーションズ …… 125
2. 宣伝・広告 …… 127
3. その他 …… 127
4. まとめ …… 128

利用者サービス

平成13年度の活動 …… 129
1. 業種別の状況 …… 129
平成13年度の概要 …… 130
1. 業務の一覧 …… 130

3 こどもの城から全国へ

こどもの城から全国へ

平成13年度の活動 …… 133
1. 〔こどもの城〕のセンター的機能 …… 133
2. 〈動くこどもの城〉 …… 134
3. 助成金による事業 …… 134
4. まとめ …… 136
平成13年度活動一覧表 …… 137
1. 〈動くこどもの城〉プログラム一覧 …… 137
2. 〈動くこどもの城〉実施一覧 …… 139
3. 児童厚生員向け講習会 …… 140
4. 助成金による事業 …… 141

利用案内

●開館時間

平　　日　　午後0時30分～午後5時30分

土・日曜日・祝日
学校の季節休み中　　午前10時00分～午後5時30分

●休館日

毎週月曜日

（月曜日が祝日や振替休日にあたる場合は翌日が休館日となります。
また、学校の季節休み等には休館日が変則となることがあります。）

●入館料

こども 400円（3歳以上18歳未満）　おとな 500円

（20人以上の団体は、こども320円、おとな400円です。
事前にご連絡ください。）

●交通案内

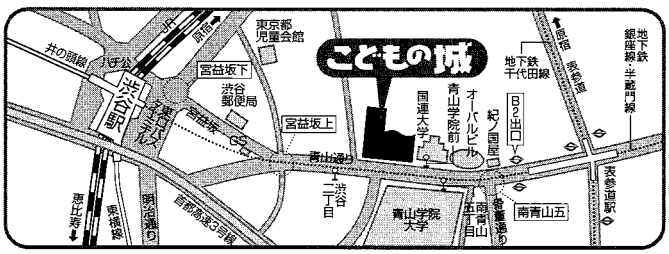
・渋谷駅　　徒歩10分（東口／宮益坂側）
JR山手線・埼京線／東急東横線・新玉川線／
京王井の頭線／営団地下鉄銀座線・半蔵門線
○渋谷駅（東口バスターミナル）から都営バスが
ご利用いただけます。
新橋駅北口行（渋88）「青山学院前」下車すぐ

・表参道駅　徒歩8分（B2出口）
営団地下鉄銀座線・千代田線・半蔵門線

●駐車場（地下）

有料・約80台収容・車高制限2m

日曜日・祝日は混み合いますので、なるべく電車・バスで
ご来館ください。



財団法人 児童育成協会

こどもの城

〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1
TEL 03-3797-5666（代表） FAX 03-3797-5676
http://www.kodomono-shiro.or.jp/

1

事業の概要

事業の概要

平成13年度の活動

1.〔こどもの城〕の概要

〔こどもの城〕は昭和54年('79)の国際児童年を記念して、厚生省（当時）が計画・建設した児童の健全育成のための総合施設である。

国が東京都から譲り受けた、渋谷区神宮前5―53―1の約1万m²の敷地に、昭和56年('81)11月に着工され、以来、4年の歳月と323億円（土地取得費を含む）の国費をかけ、地上13階、地下4階のミラーガラスに包まれた美しい建物が完成、昭和60年('85)11月1日に開館した。運営は、厚生労働省の委託を受けて㈶児童育成協会があたっている。

(ア)〔こどもの城〕の基本理念

〔こどもの城〕の創設にあたって、昭和54年に「こどもの城企画委員会」(葛西嘉資座長)が設けられ、「"こどもの城"（仮称）の基本構想に関する意見」が厚生省児童家庭局長（当時）に提出された。以来、厚生労働省と㈶児童育成協会は、この基本構想を踏まえ、協力しながら〔こどもの城〕の建設にあたり、運営に取り組んできた。現在も、社会環境の変化に柔軟に対応しつつ、基本構想に示された理念を大切に、より一層の充実をめざして児童のための福祉・文化活動を展開している。

〔こどもの城〕は、児童だけでなく、親をはじめ児童の福祉・文化関係者、研究者、教育者など、子どもの幸せを願うあらゆる人々が利用できるように開かれた施設である。

子どもを主な対象とした〈あそび〉のプログラムを中心に、親や児童福祉・文化関係者などの大人も視野に入れた子育て支援の活動や、育児に関する研究・研修活動にも力を入れるなど、幅広い活動を展開している。

これらの活動は、既成のプログラムにとらわれず、先駆的で実験的なプログラムの開発を心がけ全国に普及していくこと、そして国際的な視野に立って行われることが要請されている。

(イ)各種機能を併せ持つ総合施設

〔こどもの城〕は、乳幼児から高校生までのすべての児童を対象に、幅広い福祉・文化活動を行っている。「こども活動エリア」と総称される体育、プレイ、造形、音楽、AV（オーディオ・ビジュアル）の各部門のほかに、保育研究開発、小児保健、企画研修、劇場（青山劇場・青山円形劇場）、広報などの部門があり、子どもを取り巻くさまざまな分野の専門スタッフが活動している。

そして、(1) 芸術・文化・科学・スポーツなどの活動による児童の健全育成　(2) 児童福祉関係者の研修・現任訓練　(3) 児童福祉に関する研究・開発　(4) 国際交流――といった各種の機能を併せ持つ総合施設として、これらの機能を相互に関連させながら運営している。

【こども活動エリア】

〔こどもの城〕の活動は、(1) 一般来館児・者を対象とした活動　(2) 団体を対象としたグループ活動　(3) 講座・クラブ活動――の3つを柱に行われている。

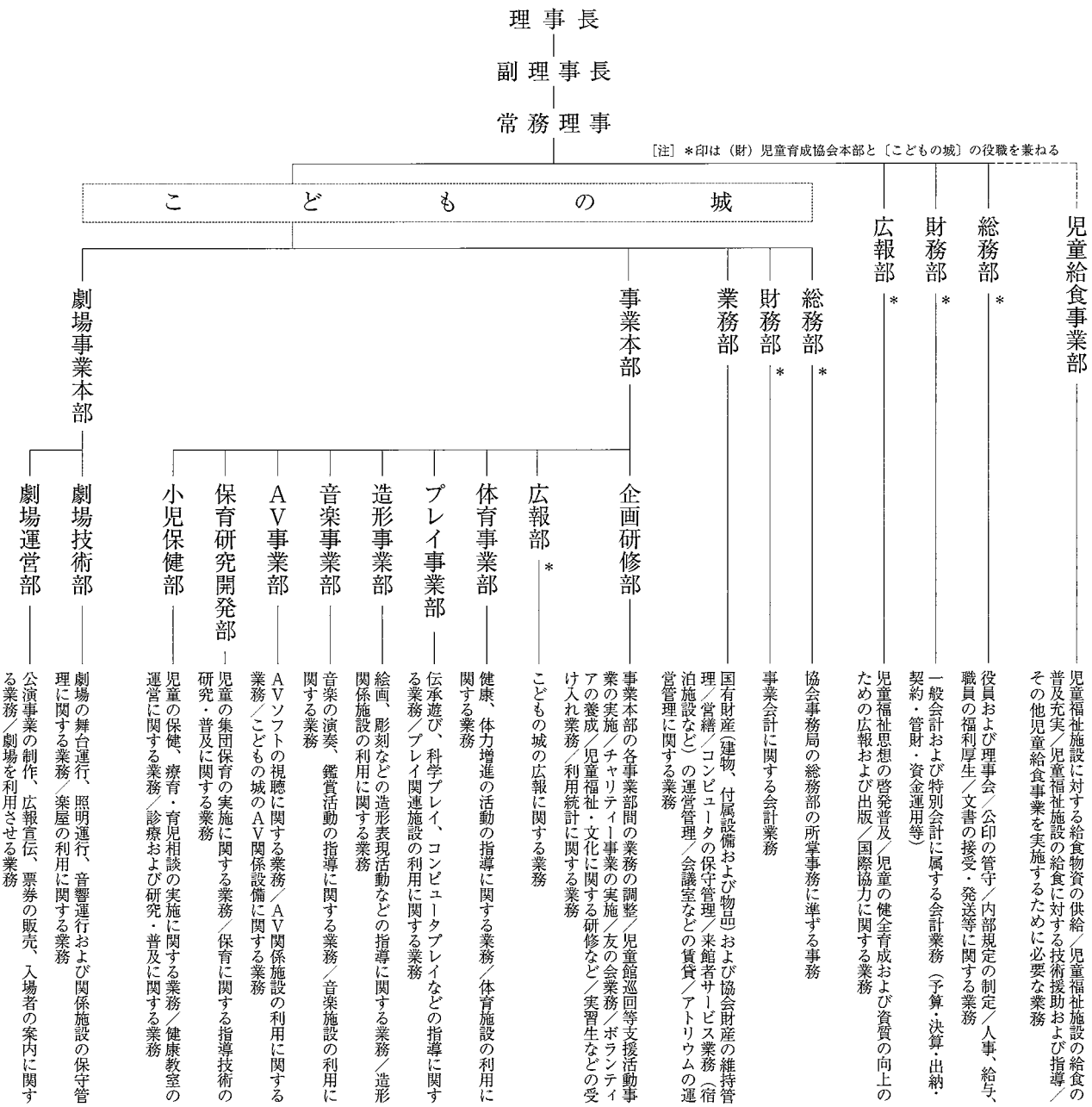
「一般来館児・者を対象とした活動」は、毎日「こども活動エリア」で行われている。〔こどもの城〕に遊びに来た子どもやその家族が楽しみながら参加、体験できるプログラムである。〈あそび〉をとおして、出会いと発見、そして仲間作りができるように工夫されたもので、初めての子どもでも、自然に〈あそび〉の輪の中に入って楽しむことが

できる。

平常期間の平日は、スタッフとのふれあいを大切にしたきめ細かいプログラムを、土・日曜日・祝日には、多くの子どもたちに対応できるようにプログラムの内容などを工夫している。また、学校の季節休み（春休み、夏休み、冬休み）と児童福祉週間（ゴールデンウイーク）、開館記念日（11月1日）の前後を特別期間とし、各部門が協力して、たくさんの人が参加できる大型のプログラムを集中的に行っている。

「グループ活動」は、保育所、幼稚園、小学校、ハンディキャップを持った子どものグループを対象に、平日の午前中に行っている。一般来館児・者の活動や講座・クラブ活動の経験をもとに、〔こどもの城〕ならではのプログラムを開発し、積極的に受け入れている。

【〔こどもの城〕組織機構図】（平成14年3月31日現在）



部＼職員数	一般	嘱託	計
総務	5	0	5
財務	5	0	5
広報	3	0	3
業務	19	0	19

部＼職員数	一般	嘱託	計
事業本部	1	0	1
企画研修	8	0	8
体育事業	7	1	8
プレイ事業	8	0	8
造形事業	4	0	4

部＼職員数	一般	嘱託	計
音楽事業	4	0	4
AV事業	6	0	6
保育研究開発	7	1	8
小児保健	4	0	4

部＼職員数	一般	嘱託	計
劇場技術	7	0	7
劇場運営	7	0	7
劇場事業本部	1	0	1
合計	96	2	98

「講座・クラブ」は、平日を中心に〔こどもの城〕の整った施設・設備を利用して実施している。幼児と親が一緒に受講するもの、就学前の幼児を対象にするもの、小学生から高校生までを対象にするもの、高校生から一般成人、さらに専門家を対象にするものなど50種類を超える講座・クラブを行っている。

【その他の活動】

「こども活動エリア」の各部門のほかに、先駆的な保育の実践と保育士などの研修事業を主とする保育研究開発部門、子どもの心や体の健康、育児相談などの家庭支援に取り組む小児保健部門、円滑な事業の推進をはかるために各部門間の調整や〔こどもの城〕に協力するボランティアの養成とコーディネート、全国の児童館などで子どもに遊びを指導する職員などの研修事業を担当する企画研修部門、〔こどもの城〕の活動への理解と周知をはかるために働きかけを行う広報部門、ホテルや研修室などの運営にあたっている利用者サービス部門などがあり、〈あそび〉をとおして直接子どもたちとふれあう活動だけでなく、研究や研修活動など幅広い活動を展開している。

【青山劇場・青山円形劇場】

〔こどもの城〕には、上記部門のほかに青山劇場・青山円形劇場の2つの劇場がある。あらゆる世代の人々が、それぞれの視点で楽しめ、見終わった後に対話が生まれるような、真の意味での“ファミリー向け”の演目を上演している。自主公演はもとより、貸し劇場の場合でも、企画の内容を吟味し、〔こどもの城〕の劇場としてふさわしいものを選んで上演している。

(ウ)〔こどもの城〕の組織機構と役員

〔こどもの城〕の組織機構と(財)児童育成協会の役員は別表のとおりである。

【(財)児童育成協会役員】(平成14年3月31日現在)

役員	氏名	
理事長	高峯　一世	
副理事長	小山　敬次郎	目白大学教授
常務理事	本橋　紘	
理事	石野　清治	資生堂相談役
理事	大野　出穂	
理事	上村　一	(社福)恩賜財団母子愛育会会長
理事	品川　正治	日本興亜損害保険(株)相談役
理事	篠原　徹	日本商工会議所常務理事
理事	成瀬　健生	日本経営者団体連盟参与
理事	山口　規容子	総合母子保健センター愛育病院院長
監事	秋山　昭八	弁護士
監事	藤間　秋男	公認会計士

2. 一般事業活動

(ア)本年度の事業をすすめるにあたって

毎年度、事業計画および予算の編成にあたっては、〔こどもの城〕利用者へのサービスを充実させながら、経費の節減・圧縮や業務の合理化に努める、という困難な命題に取り組んでいる。本年度も事業計画策定にあたっては、利用者のニーズに配慮しつつ、相反する命題を克服する努力をした。

平常期間では、講座・クラブ活動を重点的に実施することにし、「こども活動エリア」(プレイホール、造形スタジオ、音楽ロビー、ビデオライブラリー、パソコンルームなど)では自由利用を基本とするなど、効率的な事業の実施をめざした。平日は、保護者(親)と3歳未満児(無料)の組み合わせによる利用者が多いので、父親を含めた親子プログラムの充実をはかることを重点目標にした。また、平日の来館児・者増をはかるために平成11年度から導入している大人向けの「平日ゆうゆうパス」(平日専用優待パス)の普及に努めた。

特別期間については、期間中の来館児・者の動向をふまえて、事業を行うように配慮した事業計画を検討した。親子連れが多い時期には親子プログラムを多くしたり、小学生が多い時期には小学生が関心をもつようなプログラムを多くするなどして、来館児・者増をはかると同時に、期間中をとおして来館児・者が平均化するようにすることを課題とした。

このほか、センター的機能の充実・強化、運営の合理化をすすめることなどを本年度の事業目標とした。

(イ)来館児・者数

本年度の〔こどもの城〕来館児・者数は、一般有料来館児・者が252,625人、劇場入場者が309,832人。保育、小児保健、講座・クラブ関係の利用者および研修・会議やホテル関係の利用者を加えた総数は871,472人となった。

有料来館児・者数については、平成11年度、12年度は前年度に比べ微増傾向にあったが、本年度は減少した。

(ウ)一般来館児・者のための活動

【平常期間】

幼児と母親の来館が多い平日は、親子がゆっくりと過ごせる環境作りや気軽に参加できるプログラム作りに留意した。また、「平日ゆうゆうパス」の発売・利用促進、渋谷・港区内の小学校の創立記念日に児童を無料招待するなど、リピーターや新たな来館児・者の獲得への努力をした。

父親も含めた親子連れが多い、土・日曜日・祝日には、親子が一緒に参加できるプログラムの充実につとめると同

時に、小学生以上の子どもたちも満足できるようなプログラム運営を心がけた。

また、日替わりプログラムや「端午の節句」「七夕」「お正月」「節分」「ひなまつり」といった季節行事（歳時記）、造形スタジオにおける「すみか」「建築」のような年間をとおしたテーマの設定によって活動に変化をもたせ、来館児・者に新鮮な魅力を感じてもらえるように努めた。

【特別期間】

学校の季節休み（春休み、夏休み、冬休み）の期間および児童福祉週間、11月1日の〔こどもの城〕開館記念日を中心とした数日を特別期間とし、多数の来館児・者が同時に楽しめるようなプログラム作りと、施設利用の工夫をした。

屋上などを含め全館を使った大掛かりな企画を各部門協力のもとに行い、親子がそろって参加したいと思うような、魅力あるプログラムを展開するとともに、このようなプログラムが1回限りではなく、シリーズ化され定着するように努力した。

体育室では、遊びとスポーツの接点にある“鬼ごっこ”を年間をとおして特別期間のテーマに取り上げるなど、プログラム作りの工夫をした。

夏休み特別期間には、「数や量の認識」をテーマにしたギャラリー展示、渋谷駅周辺の展示・体験施設5館（NHKスタジオパーク、たばこと塩の博物館、電力館、東京都児童会館、こどもの城）で共催して「渋谷スタンプラリー」を開催して、共同でPRすると同時に、連携をはかった。

【外部団体・企業との共催事業】

〔こどもの城〕の活動趣旨に賛同する外部団体・企業の協力を得て、積極的に事業展開を行った。

夏休み特別期間の恒例プログラムになった「キンダー・フィルム・フェスティバル」（ベルリン国際映画祭の子ども映画部門と提携して行われている、子どものための映画祭）には、本年度も多数の観客が集まった。この映画祭は、さまざまな企業・団体の協力を得て、実行委員会を組織して運営している。

3月には、これも恒例となった「ニッサンゆかいな絵本と童話展」を日産自動車（株）と共催で実施した。

（エ）講座・クラブ活動

継続的、体系的に〔こどもの城〕を利用してもらうために、講座・クラブを実施している。講座35種55コース、講習会9種23コースを開講し、受講者数は1,453人、クラブは6種6コースで受講者数は771人であった。

このほか、夏休み特別期間と春休み特別期間に体育、造形、音楽、AVなどの各部門で短期集中講習会（15種135コース、2,366人受講）を行うと同時に、専門指導者向け講習会（11種18コース、1,001人受講）を実施した。

ダイナミック・ヘルス・クラブや講座・クラブで使用している、地下2階のスイミングプールをリニューアル、4月1日から使用開始した。

（オ）グループ活動

〔こどもの城〕開館時間前の、平日の午前中を利用して、ハンディキャップを持った子どものグループ、保育所・幼稚園および小学生のグループを対象に、各部門のプログラムを提供している。

本年度は、131グループ、3,084人を受け入れた。幼稚園（46グループ、1,486人）がいちばん多く、ついで保育所（28グループ、519人）、小学校（22グループ、698人）。養護学校・小学校特殊学級などハンディキャップを持った子どもたちのグループの利用は、グループ数で全体の約25％（12グループ、97人）をしめている。

（カ）保育研究開発・小児保健（クリニック）

保育研究開発部では、子ども家庭支援プログラムとしての保育事業（親子教室、保育クラブ、幼児グループ）、保育現場を持っていることを生かした研修事業（保育セミナー、育児相談研修会、子育て支援のニュースレターなど）、一般来館児・者を対象とした親子遊びのプログラム（親子工房、よちよちクラブなど）を3つの柱に、積極的に子育て家庭支援のための活動を行った。

小児保健部では、小児保健クリニックでの診療・相談活動を核として、グループで行う講座や子育て支援の活動（マタニティ・スイミング、健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉、赤ちゃんサロンなど）、講習会・研修会（小児保健セミナー、小児肥満のための指導者講習会）などの啓発活動、そして活動の成果をまとめて広めるための研究活動の4つを柱に活動した。特に、月2回実施している「赤ちゃんサロン」は、若い母親たちの育児相談、交流の場として、年間3,091人にもおよぶ参加者を集め、好評を得ている。

（キ）劇場事業

自主公演としては青山劇場で1公演、青山円形劇場で8公演、提携公演としては青山劇場で6公演、青山円形劇場で1公演を行った。

このうち、青山劇場での『島﨑徹の世界 HUMANGATE』、青山円形劇場の『PANTDANCE』の2作品は、日本芸術文化振興基金の助成対象に選ばれた。

また、〔こどもの城〕開館15周年を記念して、平成12年8月27日に青山劇場で行われた、こどもの城児童合唱団公演「サウンドメッセージ～ずっと友だち」が、平成13年

	使用可能日数	使用日数	稼働率（%）
青山劇場	330	257	77.8
青山円形劇場	348	291	83.6
計	678	548	80.8

度児童福祉文化賞を受賞した。これを記念して、平成14年2月3日に青山劇場で、受賞記念コンサートを開催した。

劇場の貸与については、青山劇場24件、青山円形劇場50件で、国費による工事期間などを除いた稼働状況は、上表のとおりである。

（ク）利用者サービス事業

〔こどもの城〕を利用する人などの便宜をはかるため、宿泊施設、売店、各種自動販売機および駐車場の営業を行った。

また、各種の研修・会議などに研修室を貸与し、広範な利用者の確保に努力した。

とくに、宿泊施設の利用者にはインターネットを通じての照会が多いことから、従来の電話予約に加え、インターネット上からの予約システムを併用し、1,120件の予約を受けた。これは全体の利用件数の10％に相当する。

3．その他の活動

（ア）広報

〔こどもの城〕の事業・活動内容をより理解・認識してもらうとともに、利用者の増加をはかることを目的に、各種の広報活動を行った。

活動の主な柱は――、

(1)『こどもの城ニュース』の発行（年11回）
(2) 各種広報資料（パンフレット、ちらしなど）の作成
(3) 月刊誌（『保育界』＝日本保育協会発行など）をとおして〔こどもの城〕の活動内容の紹介
(4) 新聞・テレビ・雑誌などをとおしてのパブリシティ（情報提供）
(5) 広報企画の推進

――などである。

新聞、テレビ、雑誌などの取材は、海外からのものを含めて214件にのぼった。

（イ）こどもの城友の会

〔こどもの城〕の活動をより理解し、利用してもらうために家族単位で参加する、いわば〔こどもの城〕の“応援団”。『友の会通信』を発行し、会員との交流を深めるなどしている。常に加入の呼びかけを行い、平成14年3月31日現在の会員数は、1,548家族となっている。

（ウ）国際交流

首都圏のインターナショナルスクールの生徒（日本の小学校5年生～高校3年生）の合同美術展「アートスケープ展」にギャラリーを提供するなど、子どもたちが気軽に自然なかたちでできる国際交流をめざした。

（エ）実習生・研修生の受け入れ

大学などの要請に応じて、〔こどもの城〕の各部門をフィールドとし、その活動内容を研修対象とする実習生・研修生を受け入れている。本年度は、実習生22人、研修生29人を受け入れた。

（オ）講師派遣

〔こどもの城〕で行う指導者向け講習会・セミナー、〈動くこどもの城〉の派遣事業以外にも、児童館を中心とした全国の児童健全育成の現場からの要請により、講師派遣という形で職員が各地に出向き、〔こどもの城〕のプログラム運営の実際と理念の普及に努めた。派遣実績は、131件。

（カ）助成金による事業

社会福祉・医療事業団の「子育て支援基金」の助成を受け、異世代間の遊びをとおして子育て支援を行う「こどもの城ファミリーフェア事業」、ボランティア国際年を記念してボランティアとの交流をとおして子どもたちの健全育成に取り組む「小・中学生ボランティア交流事業」、乳幼児を持つ母親を中心とした子育てサークルのネットワーク化を推進する「子育てサークルネット支援事業」を行った。

また、日本財団の助成を受けて、音楽と声優の読み語りによる『おはなしコンサート』を実施した。

4．国庫補助による事業活動

以上の諸活動に加え、〔こどもの城〕が全国の児童館等のセンター的役割を果たすため、国から助成を受けて次のような事業を行った。

（ア）啓発活動

児童の健全育成にかんする月刊誌『こども未来』（こども未来財団発行）を購入し、中央官庁、地方公共団体、社会保険事務所、各県経営者協会および商工会議所、中央児童福祉審議会委員などの関係者に配付した。

（イ）児童館巡回支援活動等事業〈動くこどもの城〉

全国の児童厚生施設に対し、〔こどもの城〕で開発・蓄積した活動プログラムを巡回、提供し、地域における健全育成活動を支援するとともに、児童厚生員等に対する実技

	巡回支援活動	巡回実技指導
音楽関係	3か所	6か所
映像・パソコン関係	2 〃	4 〃
体育関係	1 〃	1 〃
乳幼児への親子支援	5 〃	5 〃
絵本関係	1 〃	2 〃
折り紙作品の展示	10 〃	―
計	22か所	18か所

指導を行った。また、今後の〈動くこどもの城〉活動の充実に向け、プログラムの準備、開発につとめた。

（ウ）中央児童厚生施設活動推進事業

〔こどもの城〕の事業に理解と協力が得られるボランティアの養成、児童の健全育成活動に参加するボランティアの拡充などをはかるための事業を行った。

平成14年3月31日現在までのボランティア講習修了者は2,124人で、〔こどもの城〕のボランティアとして登録しているのは376人。本年度中に〔こどもの城〕の事業活動に参加したのは、延べ5,660人にのぼっている。

5. 開館時間・入館料（こども活動エリア）

（ア）平常期間

〔こどもの城〕の「こども活動エリア」の開館時間は以下のとおりである。

平　日	午後 0 時30分～午後5時30分
土・日曜日・祝日	午前10時00分～午後5時30分
月曜日	休館（祝日・振替休日にあたるときは開館。翌火曜日が休館。開館時間は、午前10時～午後5時30分）

（イ）特別期間

学校の季節休み（夏休み、冬休み、春休み）などは特別期間とし、多数の来館児・者が同時に楽しめるようなプログラム作りと施設利用の工夫をした。特別期間の日程は下記のとおり。

■児童福祉週間（ゴールデンウイーク）特別期間■
4月28日～5月6日（5月1日は休館）

■夏休み特別期間■
7月20日～8月31日（毎日開館）

■こどもの城ファミリーウイーク（開館記念）特別期間■
10月27日～11月4日（10月29日は休館）

■冬休み特別期間■
12月22日～平成14年1月7日（12月25日、29日～1月2日は休館）

■春休み特別期間■
3月26日～4月7日（毎日開館）

（ウ）入館料・優待パス

【一般入館料】

一　般	18歳未満		400円
	（保護者同伴の3歳未満児は無料）		
	18歳以上		500円
回数券	18歳未満（6枚つづり）		2,000円
	18歳以上（6枚つづり）		3,000円
団　体（20人以上）		18歳未満	320円
		18歳以上	400円

【優待パス】

平日ゆうゆうパス（1年間有効）	18歳以上	3,000円
わくわくパス（夏休み期間限定）	18歳以上	1,800円
ドキドキパス（夏休み期間限定）	18歳未満	1,500円

平成13年度活動一覧表

1．来館児・者数

	一般来館児・者			劇場			その他	計
	有料		総数	青山劇場	青山円形劇場	小計		
		(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)	(人)
4月	大人	10,301	30,101	4,283	9,440	13,723	12,503	56,327
	子ども	10,011						
	団体	1,962	推計					推計
	招待など	7,827	(35,259)					(61,485)
5月	大人	11,018	30,014	27,036	7,502	34,538	12,215	76,767
	子ども	7,534						
	団体	863	推計					推計
	招待など	10,599	(35,529)					(82,282)
6月	大人	7,360	22,253	3,006	4,723	7,729	14,086	44,068
	子ども	5,707						
	団体	669	推計					推計
	招待など	8,517	(25,939)					(47,754)
7月	大人	10,828	30,501	27,674	8,977	36,651	13,691	80,843
	子ども	10,050						
	団体	2,348	推計					推計
	招待など	7,275	(35,922)					(86,264)
8月	大人	23,581	65,395	36,901	5,651	42,552	9,093	117,040
	子ども	26,251						
	団体	4,282	推計					推計
	招待など	11,281	(77,193)					(128,838)
9月	大人	7,728	22,028	22,147	8,409	30,556	12,150	64,734
	子ども	6,195						
	団体	703	推計					推計
	招待など	7,402	(25.897)					(68,603)
10月	大人	7,714	22,582	27,964	7,042	35,006	11,216	68,804
	子ども	5,997						
	団体	1,399	推計					推計
	招待など	7,472	(26,443)					(72,665)
11月	大人	9,004	26,538	30,128	7,442	37,570	12,661	76,769
	子ども	7,127						
	団体	1,290	推計					推計
	招待など	9,117	(31,047)					(81,278)
12月	大人	6,217	18,400	13,349	8,890	22,239	9,009	49,648
	子ども	5,720						
	団体	679	推計					推計
	招待など	5,784	(21,515)					(52,763)
平成14年 1月	大人	9,455	30,016	9,983	6,381	16,364	10,219	56,599
	子ども	7,796						
	団体	4,858	推計					推計
	招待など	7,907	(34,749)					(61,332)
2月	大人	7,887	24,274	12,050	2,035	14,085	12,682	51,041
	子ども	6,190						
	団体	2,071	推計					推計
	招待など	8,126	(28,225)					(54,992)
3月	大人	9,453	36,383	14,293	4,526	18,819	13,281	68,483
	子ども	9,938						
	団体	2,439	推計					推計
	招待など	14,553	(41,116)					(73,216)
計	大人	120,546	358,485	228,814	81,018	309,832	142,806	811,123
	子ども	108,516						
	団体	23,563	推計					推計
	招待など	105,860	(418,834)					(871,472)

注）「一般来館児・者」の“推計”は、3歳未満児の推定入館者数を含めたものである。
「招待など」は、招待と講座・クラブ受講生を合算したもの。
「その他」は、宿泊施設・研修室等の利用者。

2. グループ活動実施状況

		保育所	幼稚園	小学校	中・高校	養護学校	盲学校	小学校特殊学級	中学校特殊学級	自主保育グループ	計
件数		28	46	22	1	17	3	12		2	131
月別内訳	4月		1								1
	5月	2	3	3		1	1	4			14
	6月	4	2	3		4					13
	7月		1			1					2
	8月										
	9月	1		2		4		1			8
	10月		2	5	1	4					12
	11月	2	5	3		1		1		1	13
	12月	4	4							1	9
	平成14年 1月	6	7	4				4			21
	2月	4	14			1	1	1			21
	3月	5	7	2		1	1	1			17
地域別内訳	東京都 区	28	45	20		11	3	11		2	120
	東京都 市			1		2		1			4
	他府県		1	1	1	4					7
参加児童数別内訳	10人未満		1			5	3	7			16
	10~19	19	19	4	1	10		5		2	60
	20~29	8	11	9		1					29
	30~39	1	3	3		1					8
	40~49		2	3							5
	50~59		5	1							6
	60~79		2	1							3
	80~99		2	1							3
	100~149										
	150人以上		1								1
参加児童数	延べ人数	519	1,486	693	12	224	18	97		35	3,084
	1件当たり人数	18.5	32.3	31.5	12.0	13.2	6.0	8.1		17.5	23.5
引率者数		93	194	69	1	216	13	59		1	646
付添者数		2	27	31		11	10	4		20	105
活動部門	体育	7	7	4				5			23
	プレイ	12	16	1		3		2			34
	造形	4	13	12							29
	音楽	2	19	7		14	3	5		1	51
	AV	4	13	8	1					1	27
	プレイ自由	24	37	19		5	3	10		2	100
	AV自由		1	1		1					3

注）「活動部門」は、1つの団体が複数の部門を利用することがあるので、重複して計上してある。

3. 講座・クラブなど

〈講座〉

部　門	プ　ロ　グ　ラ　ム　名	対　象	コ　ー　ス	総　定　員
体　育	親子水泳	幼児・親	1　年　2コース	60（組）
	幼児水泳	幼児	〃　5　〃	270（人）
	幼児体育	〃	〃　3　〃	120
	小学生水泳	小学生	〃　7　〃	380
	シニア・スイミング	小・中学生	〃　2　〃	60
	シニア・スイミング・フレッシュ	〃	〃　1　〃	30
	小学生体育	小学生	〃　2　〃	60
	ジュニア新体操	小学生の女子	〃　1　〃	35
	シニア新体操	小・中学生の女子	〃　1　〃	35
	手足の不自由な子の水泳	小・中学生	〃　1　〃	15
プレイ	キッズクラブ	小学生	〃　1　〃	30
	ユースクラブ	小・中学生	〃　1　〃	40
造　形	こどもクリエイティブクラブ（クレイワーク）	〃	〃　1　〃	20
	〃　（ゆかいな造形）	〃	〃　1　〃	20
	〃　（プリントワーク）	〃	〃　1　〃	20
	〃　（絵本の世界へ）	〃	〃　1　〃	20
	〃　（ハンズワーク）	〃	〃　3　〃	20
音　楽	おかあさんもいっしょリトミック	幼児・母親	〃　3　〃	60（組）
	リズムムービング	幼児	〃　2　〃	32（人）
	リズムムービング&パーカション	小学生	〃　1　〃	15
	おとなのためのリズムムービング	18歳以上	〃　1　〃	15
	合唱講座	小学生	〃　1　〃	30
	児童合唱団	合唱講座修了生	〃　2　〃	90
	ガムラン講座	小・中・高校生	〃　1　〃	15
	ガムラングループ	ガムラン講座終了生	〃　1　〃	15
	三味線	小・中学生	〃　2　〃	24
	混声合唱	高校生以上	〃　1　〃	15
	和太鼓グループ	小・中・高校生	〃　1　〃	12
	エレクトリック・アンサンブル	中・高校生	〃　1　〃	8
	パーカッションアンサンブル	小・中・高校生	〃　1　〃	15
	レッツ・プレイ・サンバ初級	小学生	〃　1　〃	10
	レッツ・プレイ・サンバ	小・中・高校生	〃　1　〃	10
	シンセワーク初級	中・高校生	〃　1　〃	8
小児保健	健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉	小学生（肥満児）	〃　1　〃	20
	母と子のリトミック〈ダウン症児クラス〉	ダウン症幼児・親	〃　1　〃	15（組）
合　計	35種		55コース	1,644

〈クラブ〉

部　門	プ　ロ　グ　ラ　ム　名	対　象	コ　ー　ス	総　定　員
体　育	ダイナミック・ヘルス・クラブ	一般	通　年　1コース	−
	レディース・コース	一般女性	〃　1　〃	150（人）
	マタニティ・スイミング（4月〜12月）	〃	〃　1　〃	420
保　育	幼児グループ	幼児	1　年　1コース	22
	保育クラブ	〃	〃　1　〃	400
企画研修	L．I．T．（高校生ボランティア）	高校生	〃　1　〃	30
合　計	6種		6コース	1,022

〈講習会（1か月以上のもの）〉

部門	プログラム名	対象	コース	総定員
体育	幼児・母親体育 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（1・2歳）	幼児・母親	3か月 3コース	60（組）
	幼児・母親体育 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（2・3歳）	〃	〃 3 〃	90
	母と子のすくすくランド Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	〃	〃 3 〃	60
	ぱちゃぱちゃファミリースイム Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	幼児・保護者	〃 3 〃	90
プレイ	小学生パソコン教室 ⅠA・ⅠB	小学生	2か月 2 〃	40（人）
	小学生パソコン教室 Ⅱ	〃	〃 1 〃	20
音楽	おんがく星みつけた Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	幼児・母親	3か月 3 〃	90（組）
保育	親子教室	幼児・親	〃 3 〃	45
企画研修	手話講座（前・後）	高校生以上	5か月 2 〃	60（人）
合計	9種		23コース	555

〈短期講習会（1か月未満のもの）〉

部門	プログラム名	対象	コース	総定員
体育	夏休みこども集中水泳講習会（A・C）	小・中学生	5日間 2コース	100（人）
	〃 （B・D）	幼児	〃 2 〃	80
	夏休み体操教室 ガンバ	小学生	〃 1 〃	30
	春休みこども集中水泳講習 A	小・中学生	〃 1 〃	50
	〃 B	幼児	〃 1 〃	40
	成人水泳集中講習会（4月～12月）	一般	7日間 12 〃	240
プレイ	春休み小学生パソコン教室スペシャル	小学生	5日間 1 〃	20
造形	夏休み造形教室	小・中・高校生	1日 35 〃	525
	親子体験ワークショップ	小・中・高校生の親子	〃 5 〃	60
音楽	夏休み手作り楽器のワークショップ	小・中・高校生の親子	〃 19 〃	570
	お箏体験短期講習会	小・中・高校生	2日間 2 〃	20
AV	夏休み映像・科学ワークショップ	〃	1日 47 〃	521
小児保健	夏休みこども1日ドック	小・中学生	〃 1 〃	10
	季節の離乳食講習会 春夏秋冬	乳児と母親	〃 4 〃	40
企画研修	立体飛行機凧のワークショップ	小4～	〃 3 〃	30
合計	15種		133コース	2,336

〈専門指導者向け講習会等〉

部門	プログラム名	対象	コース	総定員
AV	プロフェッショナルビデオ講習会	指導者・一般	2コース	60（人）
	映像技術セミナーシリーズ	一般	3コース	90
保育	保育セミナー	保育関係者	1 〃	150
	育児相談研修会	育児相談担当者	1 〃	50
	育児相談概論研修会	保育関係者	2 〃	260
小児保健	小児肥満のための指導者講習会	養護教諭など	2 〃	100
	小児保健セミナー	保育士・保健師など	1 〃	100
	子育て支援研修会	〃	1 〃	50
企画研修	おりがみによくなる講習会	児童厚生員など	2 〃	120
	つくって演じる人形劇	〃	1 〃	120
	こどもの城児童厚生員等実技指導講習会	〃	3 〃	150
	青年ボランティア講習会	18歳以上	2 〃	60
	女性ボランティア講習会	一般女性	1 〃	20
	ボランティア・グレードアップ講習会	ボランティア登録者	2 〃	60
合計	14種		24コース	1,390

4. 視察・見学実績

年度	都道府県・市区町村の本庁その他の行政部局、公共団体		児童館、保育所、幼稚園、学校、施設、サークル、これらの団体		海外からの視察・見学		その他		計	
昭和60年度	(100)	1,122	(100)	1,578	(22)	169	(18)	410	(240)	3,279
61年度	(121)	714	(192)	4,085	(52)	359	(31)	513	(396)	5,671
62年度	(107)	439	(123)	2,437	(36)	347	(20)	477	(286)	3,700
63年度	(91)	598	(69)	770	(30)	211	(32)	296	(222)	1,875
平成元年度	(72)	541	(71)	931	(10)	86	(25)	195	(178)	1,753
2年度	(65)	605	(27)	292	(8)	156	(17)	212	(117)	1,265
3年度	(63)	417	(47)	705	(11)	77	(6)	274	(127)	1,473
4年度	(78)	585	(62)	1,038	(9)	122	(6)	35	(155)	1,780
5年度	(69)	698	(75)	1,182	(14)	119	(9)	41	(167)	2,040
6年度	(96)	782	(73)	1,251	(13)	144	(13)	116	(195)	2,293
7年度	(136)	956	(101)	1,542	(19)	273	(16)	94	(272)	2,865
8年度	(63)	402	(188)	1,691	(19)	139	(8)	48	(278)	2,280
9年度	(89)	723	(134)	1,335	(14)	229	(24)	43	(261)	2,330
10年度	(63)	474	(150)	1,470	(26)	204	(24)	145	(263)	2,293
11年度	(83)	863	(171)	975	(18)	177	(17)	68	(289)	2,083
12年度	(85)	616	(154)	596	(14)	128	(27)	37	(280)	1,377
平成13年度 4月	(1)	6	(9)	57	(1)	18	(1)	1	(12)	82
平成13年度 5月	(1)	1	(20)	48	(0)	0	(1)	1	(22)	50
平成13年度 6月	(2)	16	(7)	20	(1)	34	(1)	1	(11)	71
平成13年度 7月	(0)	0	(12)	78	(2)	9	(2)	3	(16)	90
平成13年度 8月	(4)	18	(14)	107	(1)	5	(0)	0	(19)	130
平成13年度 9月	(1)	2	(18)	63	(0)	0	(3)	7	(22)	72
平成13年度 10月	(5)	88	(22)	127	(3)	9	(1)	1	(31)	225
平成13年度 11月	(1)	48	(33)	156	(1)	2	(5)	8	(40)	214
平成13年度 12月	(3)	7	(28)	111	(1)	3	(4)	33	(36)	154
平成13年度 1月	(3)	35	(14)	63	(1)	3	(4)	7	(22)	108
平成13年度 2月	(4)	23	(22)	147	(2)	7	(3)	5	(31)	182
平成13年度 3月	(4)	10	(17)	52	(2)	19	(1)	1	(24)	82
平成13年度 合計	(29)	254	(216)	1,029	(15)	109	(26)	68	(286)	1,460
累計	(1,410)	10,789	(1,953)	22,907	(330)	3,049	(319)	3,072	(4,012)	39,817

注）（ ）内は、団体数
「海外からの視察・見学」は、韓国、中国、台湾、アメリカなど。
「その他」は、中央官庁、中央団体、会社など。

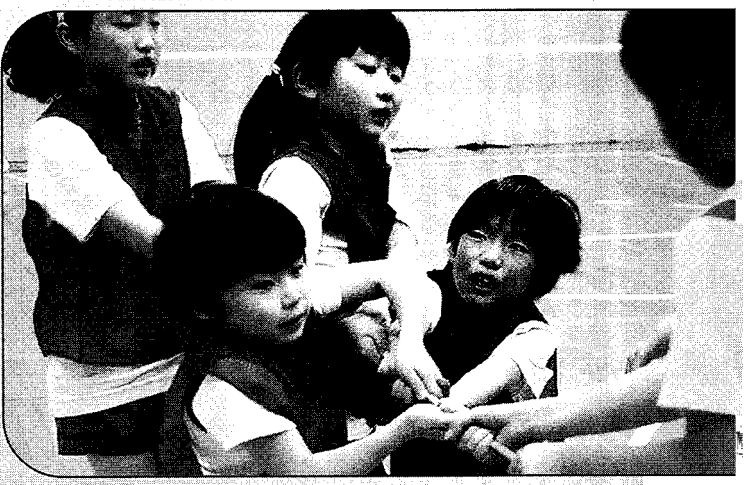
1年の歩み

月　日	事　項
4.1	スイミングプール（地下2階）がリニューアル・オープン
5.20	第16回「こどもの城マタニティ・コンサート～shima “風のうた・風のことば” クロマチック・ハーモニカの調べ」（青山円形劇場）
4.28～5.26	ゴールデンウイーク（児童福祉週間）特別期間（キャッスルクエスト　忍者武勇伝～こどもの城の乱／こども歳時記「端午の節句」／鬼ごっこはスポーツの原点だ！～とにかくいろいろ鬼ごっこ／太鼓がいっぱい「たいこフェスタ！」　ほか）
5.4～6	「こどもフェスティバル」（青山円形劇場）
5.11	こどもの城児童合唱団の青山劇場公演「時をつなぐサウンドメッセージ～ずっと友だち」（平成12年8月27日）に児童福祉文化賞（舞台芸術部門）が贈られた。
5.16・24	平成13年度第1回こどもの城児童厚生員等実技指導講習会「手で遊ぶ!!　手遊び・手品・手話ソング～」（2日間通い）
6.9	公開講座　みんなで子育て「お風呂はどっちがいれる？～お父さんの育児参加」
6.23	「育児相談概論研修会」（第１回＝育児相談の基本）。第2回は“相談活動とネットワーク”テーマに10月27日に開催
6.30	子育て支援講習会「子育ては、0.1.2歳から～現場でどうささえるか」
7.13	「小児肥満のための指導者講習会」
7.20～8.31	夏休み特別期間（オープンスタジオ「すみかと造形」／Go-! Go-! カッパラダイス～水あそび大作戦～／世界の楽器にチャレンジしよう! ～面白楽器商店街／こんなのいたかな　復元コンピュータ／鬼ごっこはスポーツの原点だ! ～新・おにごっこの楽しみ方～　ほか）
7.27～29	「月猫えほん音楽会2001」（青山円形劇場）
7.28～8.5	第9回キンダー・フィルム・フェスティバル
8.4・5	保育セミナー「子どもと生活・家庭と文化　ＰＡＲＴⅡ～これからの子育て家庭を支える支援」
8.16～19	第7回「人形劇カーニバル」
8.24～28	こどもの城・キリン・ファミリー劇場「葉っぱの　ぱ　はパワーの　パ～さっちゃんの大冒険」（青山円形劇場）
8.5・26	L.I.T. の夏休みプログラム「キャッスルミステリーアドベンチャー～キャッスルガーディアンズ＝秘密特殊部隊」
10.5	公開講座　みんなで子育て「子どもと何を話す～家族のコミュニケーション」
10.24～26	平成13年度第2回こどもの城児童厚生員等実技指導講習会「ボランティア活動の“困った！？”を解決するために」
10.27～11.4	こどもの城ファミリーウイーク（開館記念）特別期間（親子でアスレチック／親子体験ワークショップ／キャッスルトラベルで行く、あそんでめくる日本の旅／つくって遊ぼう親子工房　ほか）
10.27～11.18	「全国児童館おりがみ作品展」、第8回「おりがみカーニバル」
10.28	「子育てママの悠遊タイム～香り豊かな生活でリラックス」
10.30	赤ちゃん大集合
11.23～25	大型児童館の“遊びのボランティア”が集う「じょいんフェスティバル」
12.22～ 平成14年1.5	冬休み特別期間（こども歳時記「お正月」／2002あそびのおせち／冬休み　おにごっこ／わくわく☆カレンダー／へんしん大飯店／新春もちつき大会　ほか）
1.2～7	第14回こどもの城・キリン・ファミリーオペレッタ「とびこむ絵本～ぷっかりタウンにクルクルがくる」（青山円形劇場）
1.23～25	平成13年度第3回こどもの城児童厚生員等実技指導講習会「子どもと造形活動」
2.3	児童福祉文化賞受賞記念コンサート「こどもたちからのサウンドメッセージ～うたは友だち」（青山劇場）
2.15	公開講座　みんなで子育て「子どもをどんなふうに叱る？～子どもとしつけ」
3.1～10	「アートスケープ展」
3.6・7	「島﨑徹の世界　HUMAN　GATE」（青山劇場）
3.22～24	音楽講座・クラブ合同コンサート「ぼくらのサウンド2002」（青山円形劇場）
3.26～4.7	春休み特別期間（なんでも、かんでも鬼ごっこスペシャル／こどもの城映画劇場「カナダのアニメーション特集」／春休みオープンスタジオ「建築と造形」／パソコン似顔絵ペインター／みんなでおどろう　春ダンス　ほか）

2

各部の事業

体育事業部



平成13年度の活動

25m×5コースのプール、バスケットコート約1面分の広さの体育室、体力測定を行う健康開発室、マシントレーニングなどができるトレーニングジム――このスペースを利用して、一般来館児・者へのプログラムである一般利用のほか、6か月の乳児から大人までを対象とした水泳、体操の講座・講習会、大人のためのスポーツクラブであるダイナミック・ヘルス・クラブ（D.H.C.）、そして6種類のプログラムが用意してあるグループ活動を行っている。また、夏のキャンプや冬・春のスキースクールなどの野外活動、そして他事業部との協力事業を行っている。

本年度の一般利用のメインプログラムは「おにごっこはスポーツの原点だ」。昔からある代表的な遊び“鬼ごっこ”だが、よくみてみると、スポーツにも“鬼ごっこ”の要素が入っていて、共通点があることに気付く。サッカーやラグビーなど、ボールを奪い追いかけて進めていくゲームは、まさにボールが加わった“鬼ごっこ”。数多くの“鬼ごっこ”を体験させるとともに、そのおもしろさを伝え、さらに小学生には共通点があるスポーツへとつなげていった。

1．一般利用

（ア）平常期間

平常期間の一般利用は土・日曜日と祝日に、プール・体育室・健康開発室で行っている（平日の特定時間にもプールを一般開放）。体育室の活動は、さまざまなスポーツ活動とふれあいながら、スポーツの楽しさや喜びを感じたり、親子のコミュニケーションをはかる場になるように考えている。幼児から中学生までの参加があり、対象となる年齢幅が広いので、活動内容に工夫をこらしている。最近では小学校高学年生や中学生の参加が増えてきた。

土・日曜日のプログラムは、週ごとに内容をかえて、定例化しているが、火～金曜日の祝日（特別期間を除く）にはタックルの代わりに腰につけた鉢巻きのようなひも（タグ）を取る、「タグラグビー」を行っている。タックルをしないので安全なラグビーができる。特に小学校高学年生は少し練習をすると、パスを回したりステップを踏んで敵をかわしたりとラグビーのゲームが展開できた。

【体育の日】

体育の日には「世界一蹴～サッカーの旅～」を行った。サッカーが盛んな国の特色を分かりやすく説明し、パスゲームやドリブルゲームを行った。幼児にもできるようなゲームを考えた。

後半はウオールサッカー（独自のルールで行う室内サッカー。壁も利用する）を行った。体育の日にはサッカーを取り上げてきていることが定着してきたのか、電話の問い合わせやリピーターが増えてきたように感じる。

【親子三代健康づくり】

学校5日制やハッピーマンデーなどの導入で休日が増えて、親子・家族でふれあう時間も多くなり、その過ごし方が大切になってきた。しかしながら、なかなか実行できないのが現実。そこで野外で体を動かすプログラムを中心に、家族（親子三代）の絆を深めることを目的に、前年度から始めたプログラム。

最近では、リピーターも増え、毎回キャンセル待ちがでるようになった。参加家族間の交流も盛んになった。

（イ）特別期間

特別期間もプールの一般利用、健康開発室での体力測定、

体育室のプログラムを行った。体育室のプログラムでは平常期間にはなかなかできない種目を実施したり、その年度の主となるテーマのスポーツ遊びを取り上げている。本年度は“鬼ごっこ”。「おにごっこはスポーツの原点だ」というタイトルで実施した。

スポーツとの共通点をプログラムの中で見いだし、遊びの要素が多い鬼ごっこを楽しみながら、運動の要素を多くしたスポーツへと結びつけて、スポーツの楽しさ、おもしろさを体験してもらった。

誰もが遊んだことのある鬼ごっこ。追いかけ鬼、色鬼、高鬼、手でタッチするかわりに影をふむ影ふみ鬼などたくさんの鬼ごっこが伝承されている。名称やルールは場所によって違いはあるが、遊びの柱になっているところは同じである。

追いかける“鬼”、そしてみんなはつかまらないように逃げ回る、という構造はほとんど変わらない。この場面はサッカーやラグビーの試合でボールを追いかけている姿に似ている。スポーツの中には、フェイントという技術があるが（右に行くとみせかけ左に行くなど）、これは鬼につかまらないように身をかわすテクニックと共通する。このような例題をだしながら子どもたちに分かりやすく説明し、鬼ごっこからスポーツへと進めていった。

【ゴールデンウイーク（児童福祉週間）特別期間】

「おにごっこはスポーツの原点だ」第1弾の「とにかくいろいろ　おにごっこ」を行った。伝承鬼ごっこから、スポーツ的要素が含まれている鬼ごっこまで、いろいろな鬼ごっこを体験できるようにした。

ゴールデンウイークは家族連れが多いため、幼児や親子でも楽しめる、やさしい鬼ごっこ「まてまて鬼」「色鬼」などを行った。小学生は、鬼ごっこのあとに人をかわすテクニックをいかして、サッカーやラグビーを行った。

【夏休み特別期間】

「おにごっこはスポーツの原点だ」第2弾の「新・おにごっこの楽しみかた」。特別期間でもいちばん長い夏休み特別期間はさらにステップアップ。鬼ごっこに必要な要素をテーマ化して進めていくことにした。“攻め”“守り”“フェイント”など、期間を決めて行った。各テーマと主な内容は以下のとおり。

○ 攻めと守り＝タッチする、むかっていく、タッチされない、逃げる、かわす

○ 基本と裏技＝簡単な鬼ごっこから複雑なルールを伴った鬼ごっこへ、1対1の鬼ごっこからグループ対抗の鬼ごっこへ

○ おとりの美学＝人を“おとり”にして逃げる。自分が“おとり”になって鬼の気をひき、仲間の補助をする。鬼がほかの鬼を“おとり”として捕まえる

○ フェイクとフェイント＝相手をあざむいて、みせかけの攻撃をする。鬼から逃げる、鬼が捕まえるときのフェイント、フェイクテクニック

○ だましのタイミング＝鬼や相手をいつ、どのようにだまして逃げるか、捕まえるか

○ スペシャリストへ＝まとめ

また、毎年恒例になっている、山田光明氏によるトランポリンの指導を2日間にわたって、特別プログラムとして実施した。

【開館記念特別期間】

「親子でアスレチック　みんなでアスレチック」を行った。道具や器具を使わず、体を使ってのアスレチック。午前中は3～6歳（幼児）の親子を対象とした、ふれあい、力だめし体操、午後は年齢に関係なく、家族でも友だち同士でも楽しめる、レクリエーションプログラムを行った。

【冬休み特別期間】

「おにごっこはスポーツの原点だ」第3弾の「冬休みおにごっこ対抗戦」。鬼ごっこには、個人鬼ごっこと集団鬼ごっこに大別される。おいかけ鬼や色鬼など、個人をつかまえる個人おにごっこと、けいどろや手つなぎ鬼のように自分の仲間を助けたり、作戦をたてて集団で捕まえにいく集団鬼ごっこである。今回はチームを作り、集団鬼ごっこを

「おにごっこはスポーツの原点だ」

「親子でアスレチック　みんなでアスレチック」

中心に、対抗戦にして捕まえた人の数や得点で勝敗を決める、よりスポーツ的な要素を強調した鬼ごっこを楽しんだ。

【春休み特別期間】

「おにごっこはスポーツの原点だ」の第4弾「なんでもかんでも おにごっこスペシャル」。1年間のしめくくりとして、今までに行ってきた、いろいろな鬼ごっこを集めて行った。

1年間をとおして感じたことは、幼児も小学生も、自由遊びの時間や休み時間に鬼ごっこで遊んでいないようなのである。画面の中で人を追いかけたり、戦ったりするバーチャルで楽しむファミコン世代の子どもたちにとって、実際に走り追いかけ汗を流すことが必要ではなかろうか。鬼ごっこという、スポーツ（ゲーム）の原点ともいえる遊びを後世に残すためにも……。

2. 講座・クラブなど

（ア）講座

体育事業部の活動の中心である講座は、2歳児親子対象の「親子水泳」から、幼児、小・中学生までと幅広い年齢層を対象に指導を行っている。講座ごとに担当を決め、その担当を中心に技術レベルにあわせた班分けをしている。

受講生には体育や水泳の苦手な子どもが多いので、指導は技術的なことだけでなく、親や子どもとのコミュニケーションを心がけながら、個性的な子どもたちに対応している。技術的にも高く、クラブ的な要素のある「シニアスイミング」の受講生は、渋谷区の大会や長水路で行われる東京都の大会（辰巳プール・江東区）などに挑戦した。

【親子水泳と幼児のプログラム】

「親子水泳」は母親のみならず、父親も参加できるようにしたところ、たくさんの父親が参加するようになった。水曜日と土曜日に実施するこのクラスは、2歳児とその親を対象に、水を媒体に親と子のコミュニケーションをはかるものである。

「幼児水泳」は3・4歳児のクラスと4・5歳児のクラスに分かれている。3・4歳児のクラスで、講座当初は泣いて嫌がる子もいるが、水に慣れることとプールを楽しめるような活動を心がけているので、元気良く活動できるようになっている。4・5歳児のクラスでは泳ぐことだけではなく、水の中で巧みに体を動かせるように進めている。いちばん上の班では、クロールなどで25m泳げる子も多くなってきている。

「幼児体育」も3・4歳児のクラスと4・5歳児のクラスに分かれている。一人遊びの世界から少しずつグループでの運動へと移行していく。遊びの中の運動的な要素を多くしていく。並ぶこともままならなかった子どもたちも3期には全員でリズム体操ができるようになった。4・5歳児のクラスは球技や器械体操を含め、バランスの良い運動体験、基本的な体の使い方の習得を目標とした。

【小・中学生のプログラム】

「小学生水泳」はクロール、背泳ぎからはじめ、平泳ぎ、バタフライへと進んでいく。以前より早い段階から平泳ぎとバタフライを始めることで、この2種目の上達が目ざましく、4泳法の習得が早くなってきた。しかし平泳ぎのキックができずに苦労する子どもも多い。今後もより良い指導をめざしていきたい。

「シニアスイミング」2コース、「シニアスイミングフレッシュ」1コースの3コースあるが、クラブ的要素があるため、どの講座に参加しても良いこととした。

「シニアスイミング」は小学生水泳のステップアップの講座である。ここ数年「小学生水泳」で上級に合格した子どもに「シニアスイミング」を勧めている。前年度から変更する子どもが多くなってきた。

「シニアスイミング・フレッシュ」は、小学3年生以上で25m泳げない子どものために設けられた講座である。練習時間が長いため初心者の上達も早いようである。

夏には渋谷区や東京都の大会に参加した。ここ数年、参加していることもあって、試合慣れもあり思っていた以上

「新体操発表会」

「水泳記録会」

の成績を上げた。子どもたちはふだん見せない緊張した一面を見せていたが、良い自信にもなったようである。東京都の大会会場である辰巳プールは50mの長水路のプールで、ふだん使っている25mプールとは違い、なかなか泳ぐ機会も無く、また、日本選手権などの公式試合も行っているプールで泳ぐことは、子どもたちにとっても良い経験になっている。

「手足の不自由な子の水泳」ではボランティア・リーダーと一緒に水慣れから始め、徐々に自分にあった泳ぎを見つけられるように指導している。水を怖がっていた子どもも水の中で楽しく活動できるようになり、長く継続している子どもはかなりの体力、泳力がついてきている。

「小学生体育」はそれぞれのクラスで目標を作り、それに向かって講座をすすめた。1期の初めと3期の終わりに体力測定を実施し、講座の指針にした。測定値も上がり、続けて受講した結果がでていた。この講座には運動が得意でない子どもが多く、技術的な練習をするための基礎的な体力トレーニングを行うこともあった。

近年、運動体験の少ない子どもが増えてきたように感じる。バランスのとれた体力作りをめざしているので、水泳と体育の両講座を受講できるシステムにしてあり、都合の良い曜日を選べるので受講者が増えている。

「新体操」は、「ジュニア」と「シニア」のクラスに分かれている。手具を扱う巧ち性、柔軟性、ジャンプなどで必要な瞬発力が要求されるスポーツ。「ジュニア」は基礎的な運動（柔軟）から手具を使い、簡単な演技の練習を行う。「シニア」では、それから一歩進めて個人や団体の演技を自分たちで作る。ここでは自主性や表現力などをはぐくめるようにしている。

東京ジュニア新体操選手権に参加し、個人、団体、チャイルドの部にエントリーした。毎日練習しているクラブの子どもたちとは差があるにせよ、刺激を受けて帰ってくる。年々大会にも慣れてきて堂々と演技できるようになってきている。

【水泳記録会と新体操発表会】

「水泳記録会」は1年間の総まとめの意味と、集中して泳ぐ緊張感を味わうことで一回の泳ぎの大切さを知ってもらう意味が込められている。「幼児水泳」「小学生水泳」「シニアスイミング」「同フレッシュ」の受講生が日々の練習の成果を発揮する場であるのはもちろんのこと、異なる曜日に練習している子どもたちとの交流、相互の刺激が生まれれば良いと考えている。日ごろは人の泳ぎをあまり見ていない子どもも、真剣な顔で上手な子どもの泳ぎを見ている。その後の練習でも参加した子どもの顔つきが変わっていることもあり、大会の意義を感じる。

「新体操発表会」は「ジュニア新体操」「シニア新体操」講座1年間の集大成である。人前で演技をすることへの緊張感や達成感は子どもたちにとって良い経験である。照明など他事業部の協力もあり、良い発表会ができた。

（イ）クラブ

【ダイナミック・ヘルス・クラブ（D.H.C.）】

成人のためのクラブ「ダイナミック・ヘルス・クラブ」は、平日の昼と夕方（子どもたちの活動のない時間帯）にプール、体育室、トレーニングジムで体力作りや健康維持をめざし、個人会員、法人会員、ビジターとそれぞれに合った方法で利用してもらっている。

シーズンプログラムとして体育室のプログラムを展開、健康作りや技術習得のきっかけにしてもらっているが、それ以外でもメンバー相互の交流ができる場になっている。3か月ごとにプログラムを変更。卓球やバドミントンは人気がある。

前年度に引き続き入会金を100％オフにして、会員確保に努めている。

【レディースコース】

「レディースコース」は13回のチケット制にして「レディーススイミング」3コースと「リズム＆ストレッチ」1コースを合わせて4コースの全てを受講できるようにした。以前のシステムだと、休んだ場合に振り替えがきかなかったが、有効に使えるようにした。13回分のチケットを使い切った人には、6回受講できる追加チケットを購入してもらった。受講者は当初、以前に受講していた曜日のコースのみの参加であったが、徐々に他の曜日やコースも受講するようになってきた。受講者の反応も良いようである。

【マタニティ・スイミング】

小児保健部との共同事業である「マタニティ・スイミング」は妊娠16週以降の妊婦を対象に、月単位で実施している。夏季には人数も多く活気のある講座になるが、冬季は寒さのためか参加人数が減少する傾向にある。プールでリラックスや、呼吸法の練習などを行っている。

（ウ）講習会

講座と同じ時間割のなかで10回（3期は9回）で完結する「母と子のすくすくランド」「幼児・母親体育」「ぱちゃぱちゃファミリースイム」の3コースがある。開始月までに対象年齢に達していれば参加できるので、講座に入る前に経験したい人や、地域的に通いきれない人も参加しやすくなっている。6か月～3歳の子どもと母親を対象に、講座に一人で参加するための土台作りをしている。

「母と子のすくすくランド」は、お座りができるくらいの乳児が、はいはいでの運動を自発的にすることで、この時期に必要な体力作りや母親とのスキンシップをめざしてい

る。講習会終了の２か月後には思い出会を開き、家族も一緒に集まって活動中に撮影したビデオを見たり、近況報告やゲームをして過ごしている。同じ年齢の子どもを持つ仲間作り（家庭外での交流）ができればと考えている。

「幼児・母親体育」は１・２歳、２・３歳児対象の２コースがあり、親子体操やリトミック的な遊びなどを中心にいろいろな運動を体験している。子どもとのふれあい、ともに汗をかくことで生まれてくる信頼関係やコミュニケーション作りが目的である。はじめは親から離れない子どもも一人で元気に体育室を走り回り、遊べるようになった。

「ぱちゃぱちゃファミリースイム」は母親だけでなく、父親、祖父母も参加できる講習会である。

（エ）短期講習会

春休みと夏休み特別期間には５日間連続の「集中水泳講習会」を実施している。５日間連続で練習。いろいろな泳法に挑戦したり、泳ぐ量を増やしているので上達も早いようである。

「成人集中水泳」は月単位の講習会。前月２０日から募集、水・金曜日に行っている（月７回）。水泳経験のない人から、レベルアップをめざしている人を対象に２つの班に分かれて練習している。

継続して受講する人もいるが、冬季に新規受講者が減少する傾向があるので、広報などを強化して、１年間平均してに受講者が集まるようにしたい。

（オ）野外活動

【夏休みのキャンプ】

「スポーツキャンプ」はテニスの技術を学んだり、マラソンで体力トレーニングをしたりするほか、サッカーやラグビーなどの球技も行っている。栄養を考えた野外料理作りなどのプログラムもあり、合宿的要素が大きいハードなキャンプである。プールで遊ぶなどのリラックスタイムもあるが、練習が主な活動である。苦しい練習を乗り越えて帰ってきた子どもは、出発前より一回り大きく成長したかのように見える。

「チャレンジキャンプ」は小学校１～３年生を対象に“何にでも挑戦しよう”を合言葉にＹＭＣＡ山中湖センターで開催。本年度のチャレンジは石割山登山である。登山口には４００段の階段があり、これを登らなければ登山道に入れないきびしい山である。前日に一人１個拾った石を頂上に持って登り、ケルンを作った。自分の顔ぐらいの石を持っていった子どももいた。

【スキースクール】

「スキースクールパート１」は妙高高原・池の平スキー場（１期）とグリーンピア津南（２期）で行った。池の平スキー場は自然の地形を生かしたロングコースが楽しめるゲレンデである。一方、グリーンピア津南はファミリー的なゲレンデで子どもたちもスタッフも安心して使えるゲレンデである。また、年明けのこの時期は降雪量やゲレンデの混雑具合も含めて最高の状況で開催できた。

問題点として、１期のスクールは冬休み直後ということもありすぐに満員になるが、２期は正月明けということもあってか応募者数が１期にくらべて少ない。スキーから帰ってくると、すぐ学校が始まるということにも関係しているかもしれない。子どもたちへの負担も少なく、時間も正確な交通手段として、新幹線などの利用も検討中である。

「スキースクールパート２」は小学校１～３年生の低学年を対象としたキャンプで、雪遊びとスキーレッスンをとおして自然と多くふれあうことが目標。低学年ということもあり、初めてスキーをはく子どもも少なくない。しかし、楽しみながらスキーをしているので上達も早く３日目には頂上から滑ってくることもできるようになる。

３月で天候も安定し、日中はポカポカ陽気で子どもたちには寒い思いをさせずにレッスンすることができた。恒例の雪上レクリエーションは、雪上運動会、雪合戦協会のル

「チャレンジキャンプ」

「スキースクール」

ールでの雪合戦を行った。

【新体操合宿】

「新体操合宿」は集中的に練習を行うことで講座ではできない活動を経験する。生活面、精神面の自立を促し、集団活動により協調性を養うことを目標とした。集中的な練習なため、精神面を含め個人の成長が見られた。

3. グループ活動

グループ活動は、講座開講日との関係で火・木曜日の午前中に実施している。6種類のプログラムがあるが、体を動かす楽しさや、あまり経験できない種目を紹介し、体験できるようにしている。

また利用団体のニーズに対応できるように、いくつかのプログラムの中から種目をピックアップして作っている。本年度はアイスホッケーのようなスティックを使うユニホックの実施回数が多かった。幼児のお別れ遠足としての利用が多かった。

4. その他

(ア) 動くこどもの城

〔こどもの城〕のスタッフが都内、他府県の児童館などにでかけ、通常行っているプログラムを数多くの子どもたちや地域の健全育成関係者に伝える活動である。「スポーツ遊びで体力作り」は小学生を対象にしているが、親子を対象とした「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」は、参加者にもまして地域の健全育成関係者に好評であった。

(イ) 協力事業

「こども一日ドック」「マタニティ・スイミング」「健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉」「小児肥満のための指導者講習会」(以上、小児保健部と合同)、「ジュニア・アウトドアー・スクール」(企画研修部と合同)などを行った。

(ウ) 講師派遣

親子体操、肥満児予防講習会、骨粗しょう症予防講習会、レクリエーション指導など、スタッフが全国各地に講師として出かけ指導にあたった。

(エ) 研究活動

○厚生科学研究「肥満の改善と敏捷性の変化について―健康スポーツ教室の試み―」(羽崎泰男、渡辺恒一)

5. まとめ

体育プログラムの基本の“スポーツ遊び”は毎年内容を工夫しながら現在にいたっている。

身近な道具を使ったものから昔から伝わる伝承的なものまで、ちょっとしたアレンジで遊びの幅が広がる。そのことによって運動の強弱、運動量の多少を作り出すことができるようになり、子どもたちの年齢に応じた“スポーツ遊び”の指導をすることができる。このようにして、さまざまな運動を子どもたちに伝え、“動くこと”に対しての興味がでてくれることを望んでいる。

平成13年度活動一覧表

1．一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
プール一般利用	土曜日　13:30～16:00 日曜日・祝日 10:30～17:30	土・日曜日、祝日にそれぞれの時間帯で一般開放。18歳以上300円、小1～17歳200円、幼児100円。レンタル（タオル・水着）各200円。幼児は保護者が1対1でついて利用。（プール）
体育室一般開放 レクリエーションゲーム ドッジボール 卓球 ウオールサッカー ユニホック	各月 第1日曜日と前日の土曜日 第2日曜日と前日の土曜日 第3日曜日と前日の土曜日 第4日曜日と前日の土曜日 第5日曜日と前日の土曜日	週ごとに内容を変えている。卓球の週は終日卓球のみ（混み合う場合は各グループ20分交代で利用）。他の種目は、日曜日は14:00と16:00 の2回、土曜日は14:00に練習とゲームを行い、それ以外の時間帯はフライングディスクの的当てとフリースローイングを行っている。利用時間は土曜日が13:30～16:00、日曜日が10:00～17:00。児童福祉週間（ゴールデンウイーク）、開館記念特別期間を除く、土・日曜日と重ならない祝日は、タックルのかわりに腰に付いた“タグ”をとるタグラグビーを行った。（体育室）
体力測定	土・日曜日と祝日	7種目9項目の体力測定を行っている。4歳児くらいから大人までが利用でき、男女別に全国平均値と比べることができる。利用料は1人100円。土曜日＝14:00、15:00の2回、日曜日＝11:00、13:00、14:00、15:00、16:00の5回。（健康開発室）
グループ活動	火・木曜日	午前中を使って、まとまった団体(グループ)を指導する。体育室を使っていろいろなプログラムを展開している。時間＝10:00～12:00。（体育室）
親子三代健康づくり	5.20 8.5 9.15・16 11.11 H14.2.22～24	学校5日制やハッピーマンデーなどの導入による休日の増加にともない、前年度から実施している“家族交流プログラム”。野外で体を動かして楽しむプログラムを中心に、親子三代(家族)でふれあいながら体を動かすことが目的。参加費＝子ども500～26,000円、大人1,000～33,000円。 □5月20日＝「家族みんなでピクニック」（井の頭公園＝東京都） □8月5日＝「川遊びハイキング」（秋川渓谷・伊奈キャンプ場＝東京都） □9月15・16日＝「自然ふれあいキャンプ」（佐倉草ぶえの丘キャンプ場＝千葉県） □11月11日＝「紅葉ハイキング」（権現山・弘法山＝神奈川県） □平成14年2月22～24日＝「スノーキャンプ」（グリーンピア津南＝新潟県）
世界一蹴サッカーの旅	10.6～8	「体育の日」特別プログラム。パスゲーム、ドリブルゲームなどののち、〔こどもの城〕ルールでウオールサッカーの試合をした。（体育室）
第14回水泳記録会	12.9　9:30～13:30	体育の水泳講座受講者がエントリー（1人2種目1,000円）を行い参加。年齢別・男女別で記録に挑戦。幼児4種目、小中学生10 種目。幼児20人、小学生以上178人、計198人参加。講座対抗のリレーも行った。（プール）
第14回新体操発表会	H14.3.17	「ジュニア新体操」「シニア新体操」受講者による発表会。1年間の成果を発揮し、親、祖父母の前で演技を発表した。今年のテーマ「夢」を盛り込んだ演技を披露。44人参加。（体育室）

〈特別期間〉

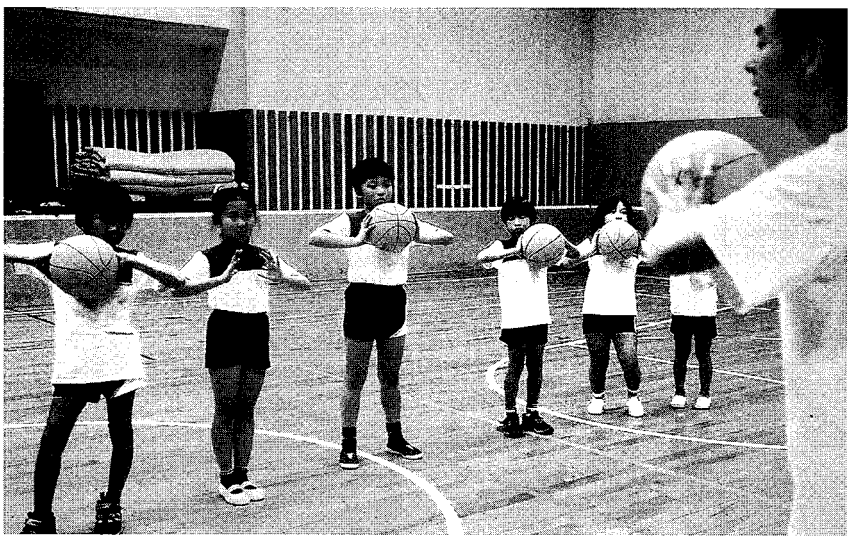
名　称	期　間（日　時）	備　考
〈児童福祉週間〉 おにごっこはスポーツの原点だ とにかくいろいろおにごっこ	4.28～30、5.3～6	伝承鬼ごっこからスポーツ的要素を含んだ鬼ごっこまで、いろいろな種類の鬼ごっこを体験。（体育室）
〈　〃　〉 反射であそぼう！ 体力測定	4.28～30、5.3～6	視覚や聴覚の刺激に対する反応時間などを測定、スポーツをするときの敏捷性をみがいた。（健康開発室）

名　称	期 間（日 時）	備　考
〈夏休み〉 おにごっこはスポーツの原点だ　第2弾・新・おにごっこの楽しみ方		
攻めと守り	7.20～29	タッチする、タッチされない、逃げる、かわす、などをテーマに鬼ごっこを行った。
基本と裏技	7.30～8.5	簡単な鬼ごっこから、いろいろなルールをともなった鬼ごっこへ。このようにやればうまく逃げられるなど、“裏技”を紹介した。
おとりの美学	8.6～12	人をおとりにして鬼から逃げる。自分がおとりになって仲間を助ける。鬼がほかの鬼をおとりにして子を捕まえるなど、鬼ごっこに必要なおとりにかんして説明。より戦略的な鬼ごっこを行った。。
フェイクとフェイント	8.13～19	相手をあざむき、みせかけの攻撃をする。鬼から逃げるとき、鬼がつかまえるときなどにフェイントを使うなどを説明。さらに、ゲーム性が高まった鬼ごっこを行った。
だましのタイミング	8.20～24	鬼や相手を、いつ、どのようにだまして逃げるか説明してから、鬼ごっこを行った。
スペシャリストへ	8.27～9.2	「攻めと守り」「基本と裏技」「おとりの美学」「フェイクとフェイント」「だましのタイミング」を総合して鬼ごっこを行った。
特別プログラム トランポリン	8.25・26	毎年恒例になっているトランポリン。指導は山田光明氏。 （以上、体育室）
〈　〃　〉 ちびっこプール	7.20～9.2	屋上に仮設プールを設置、一般に開放。利用料200円、レンタル（タオル・水着）各200円。 （プール）
〈　〃　〉 こども一日ドック	7.26	小児保健部との協力事業。体力測定など運動面の指導を担当した。　（健康開発室）
〈開館記念〉 親子でアスレチック みんなでアスレチック	10.27～11.4	道具や器具を使わず、体を使って親子体操や力だめし運動。「親子でアスレチック」は3～6歳の親子が対象。「みんなでアスレチック」は年齢に関係なく友だち同士でも楽しめるレクリエーションゲームを取り上げた。　（体育室）
〈冬休み〉 おにごっこはスポーツの原点だ　第3弾 冬休み・おにごっこ対抗戦	12.22～H14.1.7	鬼ごっこは、個人対個人で行うものと集団対集団で行うものに大別される。チームに分かれ集団鬼ごっこを行った。勝敗は人数、得点制。　（体育室）
〈春休み〉 おにごっこはスポーツの原点だ　第4弾 なんでもかんでもおにごっこスペシャル	H14.3.26～4.7	1年間のしめくくりとして、さまざまな鬼ごっこを行った。参加人数によって臨機応変に対応してゲームを行った。　（体育室）
体力測定	特別期間中	健康開発室で7種目9項目の体力測定。男女別に全国平均値と比べることができる。利用料1人100円（児童福祉週間特別期間を除く）　（健康開発室）
プール　一般利用	〃	10:30～12:00、13:30～17:30に一般開放（プログラムにより変更あり）。有料。

2. 講座・クラブなど

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
	(組)	(組)		
親子水泳　A	親子	① 36	水曜日	本年度から親と子の水泳教室とし、お父さんの参加を促した。ダイナミックな動きなどは、さすがお父さんと思わせた。親子での参加であるので子どもも安心してできるようである。
	(30)	② 33	10:00～11:00	
		③ 22		
〃　B		① 38	土曜日	受講料＝1・2期27,000円、3期17,000円。
		② 41	10:00～11:00	
		③ 37		
	(人)	(人)		
幼児水泳　A	3・4歳児	① 17	木曜日	単に泳法の修得だけでなく、陸上と同じように水中でも楽しく活動できるように指導。プールでの活動をとおして、水に慣れることやバランスよく水に浮く感覚など、水泳に必要な運動の基礎を身につける。クラスの人数も少ないので、ゆったりとした雰囲気で行われている。6段階にレベル分けをして、次のステップへの目標としている。
	(50)	② 15	14:00～15:00	
		③ 15		
〃　B	4・5歳児	① 37	木曜日	
	(60)	② 41	15:00～16:00	
		③ 45		
〃　C	〃	① 48	金曜日	
		② 55	14:30～15:30	
		③ 56		
幼児水泳　D	3～5歳児	① 18	火曜日	水慣れから泳ぎへと個人差に応じた班分けを行っている。クロールなどの練習のみならず、幼児期に必要な水中感覚を得られように指導を行っている。6段階にレベル分けをして、次のステップへの目標としている。
	(50)	② 22	14:30～15:30	
		③ 24		
〃　E	〃	① 35	水曜日	受講料＝1・2期21,000円、3期14,000円。
		② 41	13:30～14:30	
		③ 37		
幼児体育　A	3・4歳児	① 26	水曜日	たくさんの友だちと一緒に思いきり体を動かし、運動遊びリズム遊びなど楽しく動きながら健康な体や運動の基礎を作る。
	(40)	② 22	14:30～15:30	
		③ 20		
〃　B	4・5歳児	① 30	火曜日	受講料＝1・2期19,000円、3期13,000円。
	(40)	② 36	15:00～16:00	
		③ 33		
幼児体育　C	4・5歳児	① 22	木曜日	「幼児体育A・B」を土台にして、それを発展させながらさまざまな運動を体験し体の使い方を学んでいく。
	(40)	② 18	15:00～16:00	
		③ 21		受講料＝1・2期19,000円、3期13,000円。



「小学生体育」

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
	（人）	（人）		
小学生水泳　A	小学生（60）	①61 ②55 ③41	水曜日 14:30～15:30	生涯楽しめるスポーツ“水泳”を基礎から学び、4泳法をマスター。「シニア・スイミング」へのステップアップを目標。各学期の後半に進級テストを実施（10級～1級）。次への目標としている。
〃　B	〃	①20 ②17 ③16	火曜日 15:30～16:30	受講料＝1・2期21,000円、3期14,000円。 10級　顔付け　もぐり　息こらえ　ボビング　水なれ 9級　伏し浮き　背浮き　板キック　ボディーイメージ1
〃　C	〃	①43 ②46 ③40	水曜日　〃	8級　伏し浮きキック　背浮きキック　ボディーイメージ2 7級　ノーブレクロール　バックキック　ボディーイメージ3 6級　クロール・バック(12.5)　ブレスト・バタフライ（キック）
〃　D	〃	①38 ②37 ③34	金曜日　〃	5級　クロール・バック(25)　ブレスト・バタフライ（リズム） 4級　クロール・バック(50)　ブレスト・バタフライ（呼吸） 3級　ブレスト(50)　バタフライ(25)　個人メドレー（タイム）
〃　E	〃	①47 ②40 ③33	木曜日 16:00～17:00	2級　個人メドレー(100)（タイム） 1級　個人メドレー(200)（タイム）
〃　F	小2～6（60）	①33 ②30 ③21	火曜日 16:30～17:30	
〃　G	〃	①31 ②30 ③24	木曜日 17:00～18:00	
シニアスイミング　A	小・中学生（30）	①4 ②4 ③5	火曜日 16:30～18:00	小学生水泳からの移行の場であり「シニアスイミングB」へのステップとしての役割もあるため、基礎体力の向上と4泳法の完成を中心に行った。個別のメニューを組んでより速く泳ぐことにチャレンジする上級者向けのコース。水球も経験する。指導者の推薦が必要。
〃　B	〃	①13 ②10 ③8	水曜日　〃	
シニアスイミングフレッシュ	〃	①14 ②12 ③7	金曜日　〃	小学3年生以上で泳ぎが不得意な人のクラス。クロールで25m以上泳ぐことを第一目標に練習を進める。90分の練習とあいまって上達の度合いが大きかった。 受講料＝1・2期21,000円、3期14,000円。
小学生体育　A	小学生（30）	①12 ②13 ③10	火曜日 16:00～17:00	器械体操、球技を中心に多種多様な運動経験をして苦手な種目を克服する。 受講料＝1・2期17,000円、3期11,000円。
〃　B	〃	①28 ②16 ③13	木曜日　〃	※バランス良い発達が出来るよう体操と水泳の2講座の受講ができる。 受講料＝1・2期25,000円、3期17,000円。
ジュニア新体操	小1～3の女子（35）	①22 ②25 ③25	水・金曜日 15:30～17:00	跳ねたり、跳んだり、回ったり、リボンやボールを使って楽しく体を動かす。基礎的な運動も含めた新体操の初歩を指導。 受講料＝1・2期26,000円、3期19,000円。
シニア新体操	小4～中3の女子（35）	①21 ②18 ③17	水・金曜日 16:30～18:00	「ジュニア新体操」から一歩進んで新体操独特の美しい表現ができるような練習。創作活動や発表会も開催。 受講料＝1・2期26,000円、3期19,000円。
手足の不自由な子の水泳	小・中学生（15）	①7 ②7 ③6	土曜日 17:00～18:00	身体に障害があり、水泳の機会に恵まれない小・中学生が対象。スタッフ・ボランティアの個人指導を中心に楽しく活動。 受講料＝1・2期16,000円、3期10,000円。
健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉	太りすぎの小学生とその親（20）	①21 ②20 ③20	土曜日 16:00～17:00	小児保健部との協力事業。医師、栄養士による健康・栄養のチェック、体育指導者による体力チェック――3者が協力してトータルな活動を行う。 受講料＝1・2期22,000円、3期18,000円。

※講座回数＝1期13回、2期13回、3期9回（「ジュニア・シニア新体操」は週2回）

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
ダイナミック・ヘルス・クラブ（D.H.C.）	（人） 成人 メンバー ビジター 法人 その他	（人） 年間延 7,305 172 127 900 合計 5,504	火～土曜日 12:00～13:30 18:00～21:00 日曜日・祝日 18:00～20:00	18歳以上大人のためのクラブ。プール、体育室、ジムほかを利用し体力作り、健康管理のために最適な環境で楽しく活動。個人会員は、入会金100%オフ、会費20%オフキャンペーンを実施して、新規会員の募集に努めた。入会金0円、年会費50,000円、4か月20,000円、月会費 5,500円、利用料（利用の都度)300円。パス券（月3,000円、4か月11,000円)、ビジター1,500円。『渋谷ウォーカー』に広告掲載。
レディースコース スイミング リズム &ストレッチ	18歳以上の女性 （150）	① 84 ② 72 ③ 67	火曜日 10:00～11:00 木曜日　〃 土曜日 11:00～12:00 水曜日 10:00～11:00	レディースのスイミング3コース、リズム&ストレッチ1コースを併せてレディースコースとし、13回チケットでどの時間帯でも参加できるようにした。13回終了後は6回分の追加チケットを発行。受講料＝1・2期21,000円、3期14,000円。クーポン券（6回）5,000 円。生活習慣の中に定期的な運動を取り入れることが健康づくりの第一歩。各クラスとも4班編成。「スイミング」では、クロールの練習から4泳法の修得を目標に健康作り。「リズム&ストレッチ」では、ゆったりと気持ちのよいストレッチと軽快なリズム運動で、楽しく動きながら明日への活力を生みだす。
マタニティ・スイミング	妊娠16週以降の妊婦 （月35）	年間延 258	火・木曜日 11:00～12:00	小児保健部との協力事業。水泳プログラムをとおして、妊娠中を楽しく過ごすためのクラス。医師が活動前後に健康チェックを行い 、活動中も不測の事態に備えて常駐する。お産や子育てにかんするレクチャーや栄養・心理の相談も受けられる。受講料12,000円（月7回)。

〈講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
母と子のすくすくランド	（組） おすわりのできる乳児と母親 （20）	（組） ① 32 ② 34 ③ 21	金曜日 10:00～11:00	はいはいから歩行へと成長していく時期の赤ちゃんを対象に、楽しい体操や親子での遊び、お母さんのシェープアップも。1・2期は10回、3期は9回。 受講料＝1・2期23,000円、3期21,000円。
幼児・母親体育　A 〃　B	1・2歳児と母親 （20） 2・3歳児と母親 （30）	① 28 ② 32 ③ 34 ① 31 ② 31 ③ 34	火曜日 13:30～14:30 水曜日 11:00～12:00	親子が体育室でリズムに合わせて跳ね、跳び、走るうちに運動神経を養い、楽しさを身につける。1・2期は10回、3期は9回。 受講料＝1・2期19,000円、3期17,000円。
ぱちゃぱちゃファミリースイム	1・2歳児と父母、祖父母 （30）	① 15 ② 26 ③ 21	金曜日 10:00～11:00	楽しくプールの活動をして、水慣れとともに親子・祖父母と孫のコミュニケーションを深める。1・2期は10回、3期は9回。 受講料＝1・2期25,000円、3期23,000円

〈短期講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
	(人)	(人)		
夏休みこども集中水泳講習会A	小・中学生 (50)	51	7.20～24 9:30～10:30	5日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。受講料＝7,000円。
〃　B	幼児 (40)	40	7.20～24 10:30～11:30	
〃　C	小・中学生 (50)	50	8.18～22 9:30～10:30	
〃　D	幼児 (40)	41	8.18～22 10:30～11:30	
ガンバ！2001	小学生 (30)	30	8.18～22 9:30～10:30	器械体操や球技などの基本動作を習得する、体操の苦手な子どもの体操教室。受講料＝7,000円。
春休みこども集中水泳講習会A	小・中学生 (50)	50	4.1～5 9:30～10:30	5日間の集中練習で泳力アップといろいろな泳法体験。受講料＝7,000円。
〃　B	幼児 (40)	40	〃 10:30～11:30	
水泳集中講習会	18歳以上 (月20)	延べ 121	水・金曜日 18:00～19:00 (各月7回)	18歳以上の初心者やレベルアップを考えている人の集中水泳講習。月ごとに募集を行い、各月の講習種目に合わせて指導を行う。受講料＝10,000円。

〈専門指導者向け講習会等〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
	(人)	(人)		
小児肥満のための指導者講習会	保育士・保健師・養護教諭など (40)	41	7.9	小児保健部との協力事業。体育では運動指導や体力測定についてのレクチャーおよび実践を行った。
〃	〃		H14.3.15・16	〃

〈野外活動〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
新体操夏合宿	7.29～31	新体操講座生の技術向上をめざした合宿。福島県東白河郡ユーパル矢祭。練習はもちろんのこと、仲間との親交を深めた。お互いに切磋琢磨している姿が見られた。
スポーツキャンプ	7.25～28	小3～中学生30人が参加。新潟県グリーンピア津南での3泊4日のキャンプ中でテニスの技術の習得やランニング、球技と合宿的な要素のキャンプを行った。
チャレンジキャンプ	8.27～30	小1～3年生44人が参加。山梨県ＹＭＣＡ山中湖。みんなでチャレンジ！が合言葉の低学年体験キャンプ。石割山登山に挑戦。
スキースクール パート1　1期	12.26 ～29	前年度から積雪の関係で年末と年明け2つに分けてスクールを開催。 1期は、小2～中学生45人が参加。新潟県妙高高原池の平スキー場で実施。積雪量は多くなかったが、全面滑走ができて十分なレッスンが行えた。
〃　2期	H14.1.4～7	2期も、小2～中学生39人が参加。新潟県グリーンピア津南にて実施。積雪量、雪質ともに良好なコンディション。ゲレンデの利用者も少なく良い条件でレッスンを展開できた。1期に参加予定していた人が多いが、2期の参加希望者も多くなり、安定してきた。
スキースクール パート2	3.26～29	小1～3年生45人参加。新潟県グリーンピア津南。コテージに宿泊し、スキーや雪遊びで雪と親しむ小学校低学年のキャンプ。

3. その他

〈動くこどもの城〉

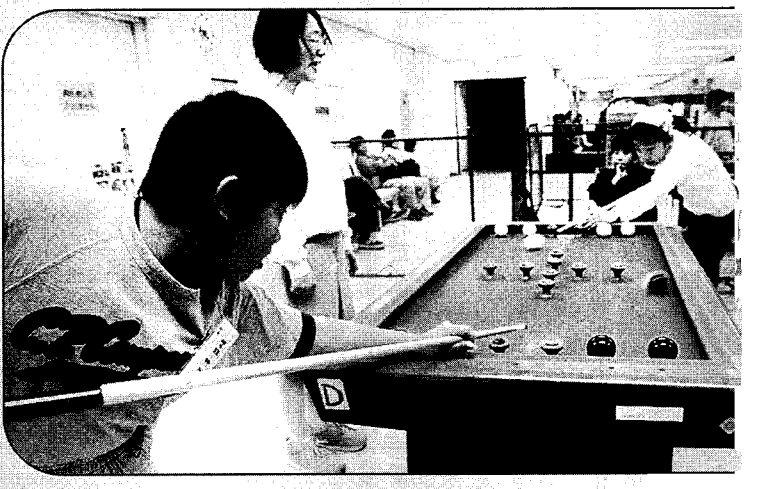
名　称	期 間(日 時)	備　考
お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ	7.7	音楽や楽しい遊具を使いながら、赤ちゃんのできる簡単な体操をとおしてスキンシップ。表情や動きの新しい発見をしてもらいたいと思います。名古屋市・育ちあい広場。
〃	7.8	名古屋市・子どもと大人をつなぐ会。
〃 ／「おにごっこ」で楽しく体力づくり	10.26・27	佐賀県・鳥栖市社会福祉協議会。
お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ	12.13	埼玉県越谷市児童館コスモス
〃	H14.1.17	千葉県印西市立そうふけ児童館

〈講師派遣など〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
横浜市骨粗しょう症予防教室	4.1～H14.3.31	横浜市衛生局神奈川区保健所及び泉区保健所
0.1.2.3歳を対象とした運動あそび	5.9	東葛支会保育士研修会市民プラザウエブ101
児童支援ボランティアセミナー	5.13	福井県児童科学館ホール及びグランド
1歳児親子体操	5.18	世田谷区保健福祉部児童課世田谷区代田児童館遊戯室
子育てセミナー	6.2	神奈川県藤沢市教育委員会御所見公民館
ぽんぽこ学級	6.3	神奈川県藤沢市教育委員会長後公民館
親子キャンプ教室	6.9・10	杉並区スポーツ振興財団原パーク
ようじのつどい	6.14・15	目黒区立不動児童館
子育て支援、保育ボランティア養成講座	6.15	さわやかちば県民プラザ
楽しい運動あそび	7.5	板橋区児童女性部（東板橋体育館）
小児期の生活習慣病予防のために	7.11	埼玉県、町体力向上推進委員会・童謡のふる里アスタホール
食生活セミナー	9.8、10.13、H14.1.12、3.9	平塚市保健福祉事務所・平塚市総合公園ほか
おにごっこの理論と実践	9.19	東京都公立保育園研究会第5ブロック・杉並区立第4小学校体育館
乳幼児の運動あそびと関わり方	9.21	新潟市保健福祉部児童福祉課・新潟市総合福祉会館

名　　称	期　間（日　時）	備　　考
親子でできる健康体操～小児生活習慣病予防のために～	10.20	愛媛県西条中央保健所・東予市民体育館
太りすぎ改善のためのスポーツ指導について	H14.1.25	平塚市保健福祉事務所
動いて、遊んで、楽しく育児	2.8	北区赤羽保健センター
食生活探検セミナー	2.10、3.10・26	平塚市保健福祉事務所
0－3歳児運動発達と体操実践	2.13	浦和市母子専門研修会・浦和市民保健センター
父親の子育てセミナー	2.25	伊豆健康福祉センター・西伊豆町子育て支援センター

プレイ事業部



平成13年度の活動

プレイ事業部は、〔こどもの城〕の遊び場所の中心であるプレイホールや屋上遊園、またコンピュータプレイルームやパソコンルームの運営を担当し、年間をとおしてさまざまなプログラムを実施した。

これらの場所で具体化されるプレイ事業部の役割は――(1)子どもの発達年齢や遊びの種類を考えたより良い遊び環境の整備、(2)さまざまな児童文化財を題材にしたプログラムの提供、(3)集団遊びや交流を促進するプログラムの開発、提供――である。子どもたちが育つさまざまな環境の変化により、子どもたちの仲間遊びの機会が減ったり、人間関係が希薄化していると言われはじめて久しいが、プレイ事業部では開館以来一貫して、子どもたちの仲間遊び、交流体験による社会性の向上を活動の中心課題としてさまざまな活動を実施してきた。

本年度は、小学生以上の子どもたちを対象に、レクリエーションゲームをとおした交流遊びや、「人形遊び」を素材に親子のスキンシップや子ども同士の交流をねらいとしたプログラムを新しい試みとして実施した。

また近年児童館にパソコンの導入が始まっているが、「子どもたちの遊びを広げるパソコンの活用方法」をテーマに、パソコンルームにおいて実践してきたプログラムを、指導者向け講習会の内容としてとりあげた。

1．一般利用

（ア）遊び空間の整備

プレイホールは、〔こどもの城〕を訪れた来館児・者を最初に受け入れる場所として、幅広い年齢の子どもや親子のニーズに応えるため、常に新しい試みを含めてさまざまな遊びの提供を考えている。遊びの自由さを残すことや日々入れ替わるプログラムを実施するために、フリースペースを確保することも必要な視点である。

また、現在課題になっている子育て支援の考えに基づき、従来の幼児～学童期以上の子どもたちと共存をはかりながら、乳幼児と保護者のために、エリア内でどう遊び空間を整え、支援・展開していくかが課題となっている。

【遊び空間の構成】

プレイホールでは、子どもの発達年齢や遊びの種類・内容を基本に、より利用者のニーズに応えられるように遊び空間を構成した。近年の利用傾向に基づいて本年度は「乳児コーナーの確保（体を動かして遊べる）」、「小学生（低学年）が仲間と遊べるコーナーの確保」について考え、活動を展開した。

プレイホールは〔こどもの城〕を訪れるほとんどの来館児・者が立ち寄り、遊ぶ場所である。異年齢が混在し遊ぶことで、他の子どもの存在を感じたり、譲り合いや協調することなどでさまざまなことを感じ、学ぶ場である。一方では遊びの種類や年齢層をすみ分けることで、安全性を確保し、ねらいがはっきりとしたプログラムを提供することができる場所でもある。プレイホールに求められる遊びの提供はこの異年齢の混在とプログラムのすみ分けという二つのバランスの上に成り立っているということができる。

本年度もプレイホールでは、遊びを追求するためにさまざまな試みを実践した。その一つとして、利用年齢層の幅を広げるため、乳児に対してのスペースを確保した。遊びの内容としては、より能動的な遊びとなるように、体を動かして遊ぶようなコーナーにすることに重点において前年度から検討し、特別期間などの特に来館児・者が多い時期

に試行を重ねた。本年度は常設コーナーとして設置し、小さい子の利用に配慮した安全性や、保護者のための子育て情報掲示など、乳児のための親子コーナーとして雰囲気作りに配慮した。

また、もう一つのコーナーとして、年長児～小学校の低学年ぐらいの子どもたちに向けた、集団遊びのきっかけとなるようなゲームを数種類用意した場所について検討をし、設置に向けた準備を進めた。

【みんなで遊ぼうパペットランド】

これまで、紙コップ人形や靴下人形などを使用した人形遊びをとおして、子どもたち同士や親子のコミュニケーションを深める遊び場を構成するプログラムとして検討し、実施してきた。

紙コップでネズミの人形を作り、口がパクパク動くことを利用して会話やバトンリレー、お店やさんごっこなどをしたり、靴下人形を使って体を登りあいっこするなどの親子のコミュニケーションやスキンシップをはかったりするものである。いずれも、効果を高めるため参加者数を限定しての実施が多かった。

本年度は、参加人数を限定しないでよりたくさんの子どもたちが参加できること、また、時間を設定して参加劇を上演し、その場に集まった全員で人形を使った遊びを展開できることを課題として「みんなで遊ぼうパペットランド～パクパク人形をつくろう～」を実施した。

子どもたちは、紙コップでイヌ・ネコ・ネズミの中のいずれかを作り、スタッフが上演する「おおきなかぶ」に参加する。劇が始まる前に、スタッフが紙コップ人形を持って、わりばしのバトンを口移しに回していくリレーをしたり、ティッシュペーパーの玉運びゲームをしたりと、知らない子ども同士でも参加しやすい遊びを展開した。参加劇「おおきなかぶ」では、登場人物になり、人形を使ってかぶを抜く手伝いをしてもらう場面を設けた。

人形を使うことで、知らない人とも自然に話せたり、劇に参加して役になりきったりしやすくなり、子どもだけでなく、保護者の参加も高められ、気持ちを共有する場を設けることができた。

いろいろな人形が集まった（みんなで遊ぼうパペットランド）。

幼児から参加できるプログラムの中で、よりたくさんの参加者を受け入れ楽しんでもらうためには、保護者の子どもへの補助は必要不可欠なものとなってくる。保護者に対しても、期待感を高めたり、容易に理解できるような内容の提示は、重要な要素だと改めて認識した。

（イ）児童文化、子どもの遊び文化を題材にした活動

紙芝居、人形劇、折り紙などの文化財をテーマにしたプログラムを日常の活動として実施している。また、伝承遊びや七夕、ひなまつりといった季節の行事も大切な文化財を伝える機会と考え、それぞれの由来や意味を遊びにアレンジしたプログラムを提供している。このような活動は、子どもたちの豊かな心をはぐくむ大切な機会であり、季節感や歳時記が忘れさられていく現代において、伝統的な文化を伝承する機会としての必要性も強く感じている。

【週間行事】

週間行事は、毎週日替わりのプログラムを実施している。さまざまな遊具の設置だけでなく、プログラム内容や、スタッフとボランティアが介在することで生まれる温かな空間を提供することで、プレイホールでの遊びの充実をはかっている。

プレイホールで紙芝居や人形劇が始まると、目の前で繰り広げられるお話の世界にぐんぐん引き込まれていく子どもたちの姿が多く見られる。お話の主人公に自分をダブらせ、一緒に喜んだり、笑ったり、ときには悪者のおおかみが怖いと泣いたりと、子どもたちの感情は短い時間の中で、大いに揺れ動く。そんな子どもたちの気持ちを共有し、一緒に寄り添ってくれる親の存在は、子どもの成長に欠かせないものである。また「あの時楽しかったね」「そうね」と一緒に過ごした時間が家に帰ってからも続くことの願いも込めて、親子での参加をうながしている。

この空間では、親子での交流だけでなく、いろいろな人と人との豊かな交流がはぐくまれるように働きかけた。特に折り紙では、できあがる過程をゆったりと楽しみながら、子どもたち同士、親同士、またはそこに介在するスタッフやボランティアとの心のふれあいを大事にした。

また、これらのプログラム運営をする上で、ボランティアの存在は欠かせないものである。ただ単に折り紙の折り方を教える人としてでなく、折り紙をとおしてコミュニケーションを楽しみつつ、いろいろな人との交流を広げていく、という取り組みをしている。そのようなボランティアの思いが温かな雰囲気を作ったり、常連の子どもたちを増やしたり、親の参加率を高めたりと、プログラムの広がりにつながっている。

親子ではっけよい、のこった（おりがみあそび広場）。

一方、第２・第４土曜日に行った「おはなし人形広場」は、プロあるいはアマチュアの人形劇団による上演をプロデュースする形で運営している。子どもたちにとってよりいいもの、本物を見る機会としての場を提供した。テレビやビデオなどのメディアの存在がより大きなものになり、実物を生で見る機会が少ない子どもたちにとって、人形広場のような機会は今後ますます必要になってくるのではないだろうか。

【お正月遊び大集合】

現代の子どもたちの遊び文化の中から、コマ回しや凧揚げ、けん玉、メンコなどの昔から伝わる「伝承遊び」と呼ばれる遊びが消えつつある。

伝承遊びには、例えばコマのように、最初はなかなか回せない子が回せるように努力をしたり、さらにいろいろな技に挑戦したりという、子どもたちにチャレンジする心を起こさせて、できたときの喜びが達成感や自信につながるといった効果がある。

また伝承されてきた遊びという性質から、子どもだけではなく両親から祖父母までが一緒に楽しめ、家族交流の促進に効果がある。さらに口承で伝えられた“説明書”の無い遊びなので、“教える”“教わる”かかわり、あるいは“勝負”といったかかわり方で、子ども同士の交流促進の効果もある。

〔こどもの城〕では、単に遊びを伝承するというだけでなく、子どもたちの達成感、家族交流の促進、子ども同士の交流の促進などの効果に期待して、お正月の時期に伝承遊びを取り上げた。本年度は「あそびのおせち」と題して、さまざまな伝承遊びの中から、コマ、メンコ、けん玉、紙相撲、三つ馬、缶ぽっくりを取り上げて、館内各所で体験できるようにした。

スタンプラリーのような参加カードも作成したので、全部のスタンプを集めようと、全ての遊びを順に回って楽しんでいる子どもが多かったが、なかには気に入った遊びの所で一日中過ごし、一心に新しい技を練習したり、できるようになった技を自慢しあったりと、それぞれに楽しんでいたようである。

父母、祖父母が一緒に参加して、子どもたちに遊び方を教えている姿も見られたり、その場に集まった子どもたち同士で「競争」や「勝負」が始まったりと伝承遊びの効果も充分に得られたようである。

（ウ）子どもの交流を促進するプログラム

〔こどもの城〕は都市型の大型児童館であるため、施設周辺地域のみならず各地から来館する利用者が多い。子どもたちみんなが、いわゆる“顔なじみ”ではない状況で、〔こどもの城〕の施設を利用する中から人間関係をはぐくむことは難しい。そこでプレイ事業部では、特に全国各地からの利用者が多い春・夏・冬休みやゴールデンウイーク（児童福祉週間）の特別期間を中心に、子どもたちが集団で遊ぶ楽しさを体験したり、遊びをとおして出会い、交流をはぐくむ機会とすることをねらいとして、さまざまなプログラムを展開している。

【キャッスルクエスト～忍者武勇伝～】

ゴールデンウイーク（児童福祉週間）特別期間に行った「忍者武勇伝～こどもの城の乱～」は毎年この時期に行っているごっこ遊びのプログラム“キャッスルクエスト”シリーズである。今回は参加者が忍者となり、さまざまな忍者修行を重ね、悪者忍者『雷魔』を倒すというストーリーを設定した。

受付で、「こどもの城の危機だ」という投げかけを受けた子どもたちは、参加の証（あかし）であるはちまきを制作。４つの修行エリアで忍者修行のゲームを行う。修行ゲームは、師範が後ろを向いている間に見つからないよう近づく「だるまさんがころんだ」のようなゲーム、ゴム製の手裏剣をなるべく多くの的に入れるゲームなど、簡単な遊びを忍者ふうにアレンジしたもの。

レベルアップした子どもたちは、いよいよ〔こどもの城〕館内に武者修行の旅に出て、隠された謎を解き、悪者忍者『雷魔』を倒すためにほかの忍者仲間と集うのである。こうして、何人かの忍者が集まった時点でいよいよ物語のクライマックス、悪者忍者『雷魔』との対決となる。この対決もジャンケンを忍者の技ふうにアレンジしたもので行った。

今回のプログラムは「忍者カード」を子どもたちの交流のアイテムとして活用した。すなわち、カードの種類を増やしコレクションの要素を持たせ、自発的に交換させるようにしたことである。修行をクリアするともらえるこのカードはランダムに渡されるため、同じカードが重なることがある。子どもたちはほかの忍者を見つけては、カード交換をしている場面が多く見られた。

またここ数年ではあるが、このようなプログラムに参加

する保護者の姿をよく見かけるようになってきた。これは、父親が子どもと遊ぶ機会が増えたこと、〔こどもの城〕の来館児・者が低年齢化し、家族ぐるみでプログラムに参加するようになってきたことなどが要因と思われる。もちろん、保護者がこのようなプログラムに子どもと一緒に参加することは望ましいことである。しかし、約2～3時間かけて館内の各所を探検するプログラムのため、家族全員が一緒にまわることも難しく、迷子になりやすい状況でもあった。

【エンジョイ・レク広場】

エンジョイレクタイム「J－Master 2002」は、春休みの2日間にわたって地下1階のフリーホールで行われた。来館した子どもたちが集い、約1時間にわたってさまざまなレクリエーションゲームのなかで、協力や競争といった要素を体験し、交流をはぐくむことを目的とした。

近年、〔こどもの城〕の来館児・者の低年齢化が進み、館内での催し物も低年齢対象のものが多く、そのことが、来館児・者の低年齢化に拍車をかけている。そこで、小学校中学年以上を対象とし、少々複雑なルールのゲームも含め、小学生がおもしろいなと感じてもらえるようなゲーム大会とした。

各日とも2回ずつ約1時間のプログラムを行った。内容は、ジャンケンで同じものを出したもの同士で集まりその素早さを競う「ジャンケン集合」、ジャンケンをして勝ったら相手からカード（1億円札）を1枚もらえ、その総数を競う「3億円ゲーム」、2チームに分かれジャンケンの勝ち抜きを対抗で行う「人間ボウリング」など、主にジャンケンゲームを中心として展開した。

参加した子どもたちは、みんな最後まで十分に楽しんでいたようだったが、その反面、地下の室内という場所はイメージが開放的ではなく、またそれを払拭するだけの装飾や雰囲気作りがなかったこと、「J－Master 2002」というネーミングが何をするか分かりづらかったこと、春休み期間とはいえ比較的来館児・者の少ない日を選んで行ったことなどが原因となり、参加者が今ひとつ伸び悩んでしまい、残念な結果に終わってしまった。

2. 講座・クラブなど

（ア）キッズクラブとユースクラブ

子どもの成長・発達に“遊び”は欠かすことができないものである。また、“遊び”をとおしてその後の人生を過ごすための力を身につけていくとも言われている。「キッズクラブ（小学校1～4年生）」と「ユースクラブ（小学校5年生～中学校3年生）」は、“遊び”をとおして子どもたち自身が持っている自らの可能性を発見したり、自ら課題に挑戦することをとおして自主性・協調性・積極性を身に付けることを目的としている。特に今日の家庭や学校では経験することの難しい異年齢の集団活動をとおして、人との出会いのすばらしさや、温かい人間関係作りのあり方を体験的に学ぶ機会にしたいと考えている。

活動は1期（3～4か月）に6回。固定化されたプログラムはなく、毎回どんなことをして遊ぶかをメンバーとともに話し合いながら決めている。子どもたちが遊びに対して主体的・能動的にかかわれるように心がけた。内容はス

【キッズクラブのプログラム一覧】

日　時	タ　イ　ト　ル	プ　ロ　グ　ラ　ム　内　容
4月 7日	キッズミラクルダイス	新メンバーにサイコロをふってもらい、出た目に表記されたゲームで班ごとに競争。
4月22日	探検・発見・ウォークラリー	地図を持って、〔こどもの城〕周辺を班ごとに探索するクイズウオークラリーに挑戦。
5月19日	オリジナルTシャツを作ろう	○や□、△に切った色とりどりのアップリケで、オリジナルのTシャツを作成。
6月 9日	ネイチャーゲームで遊んじゃおう！	世田谷にある砧公園を舞台に、自然観察の目を養うネイチャービンゴを実施。
6月23日	ウオータープロジェクト　VI	代々木公園で、2チームに分かれて水鉄砲を使った陣取りゲームを実施。
7月 7日	たなばたケーキコンテスト	七夕をテーマにしたケーキ作り。保護者に味やみばえを採点してもらった。
9月15日	ナンダーコール大作戦！	代々木公園で、ひたいに3文字の読み札をつけ、敵の旗を奪い取る陣取りゲームを実施。
10月 6日	秋の大「運どうかい?」	秋にちなみ、屋上ネット広場で“運”で勝負する運動会ふうのゲーム大会を実施。
10月20日	キッズ・ミラクルすごろく	班ごとにテーマを相談し、オリジナルのすごろくを作成。全部を合体させて遊んだ。
11月10日	親子クッキング	〔こどもの城〕館内で、金券を利用したお買い物ゲームを兼ねた親子クッキングを実施。
12月 1日	キッズ・ドッジボール大会	屋上ネット広場でキッズオリジナルルールのドッジボール大会を開催。
12月 8日	代々木公園でいろいろ遊ぼう	縄跳び、Sケン、しっぽ取り、ハンターゲームなど広い公園でさまざまな遊びを展開。
1月19日	だじゃれカルタで大爆笑！	“だじゃれ”を考え、それを読み札にしてカルタを作成し、大会を開く。
1月26日	怪人21面相ｖｓキッズ少年探偵団	怪人21面相から知恵比べの挑戦状が！浅草を舞台に少年探偵団ごっこを実施。
2月16日	おかしなお菓子な中華まん	班ごとに中身を相談し中華まんを作成。皮は粉と水から作り、具にはお菓子も使用。
2月23日	キッズスーパー陣取り・缶けり	しっぽとりと缶けりを合体させたゲームや、パッカン、人間ジャンケンなどを遊ぶ。
3月16～17日	プレイホールに泊まってうーんと遊んじゃおう！	最終回は土・日曜日を利用してプレイホールで館内宿泊。だじゃれカルタ、暗闇陣取り、代々木公園での自由遊び、卒業生を送る会など2日間をとおして思いっきり遊ぶ。

【ユースクラブのプログラム一覧】

日　時	タ　イ　ト　ル	プ　ロ　グ　ラ　ム　内　容
4月 8日	フレンドシップゲーム大会	新メンバーを迎えて紹介やジャンケンゲームなど、お互いが知り合える活動を行った。
4月22日	春ララら！ 代々木で遊ぼう大作戦	広い公園で、思い切り体を動かしてアドベンチャーゲームを楽しんだ。
5月13日	発見!! 探検!? アーバンジャングルハンティング	デジカメで街中にいる動物を撮ってくるゲームを行い、最後にグループで発表した。
6月10日	新世紀かれー開発プロジェクト	こどもの国（横浜市）で野外炊事を実施。秘密のスパイス入りカレーを班ごとに作る活動。
6月24日	ゲームDEハッピー Go!! Go!! ゲーム大会	自作の巨大ボードゲームを行う。各班を会社に見立て、発展させていく過程を競いあった。
7月15日	あなた色に染めて！！	Tシャツを染めるプログラム。絞りの技法で模様を作った後、好きな色に染めた。
8月19日	夏だ! 遊ぼう!! サマーウオーター大作戦	夏休みの特別活動。代々木公園で、水鉄砲を使った陣取り合戦とスイカ割りを実施。
9月 9日	よろしくゲーム大会&作戦会議	新メンバーを迎え、ゲームでなごんだ後、2期の活動計画を話し合った。
9月30日	とれじゃーはんてぃんぐ in こどもの城	渋谷の土地にちなんだ宝探しを行った。古文書を解読し地図を読み宝を見つける活動。
10月21日	思いっきりフィールドゲーム	代々木公園で、思い切り体を動かしドロケイや陣とりゲームを楽しんだ。
11月11日	新名所発見!! 大江戸線でオーエード！	地下鉄大江戸線沿線で、人が知らない名所を発見し、デジカメなどでレポートした。
11月25日	2期最終回プロジェクト会議	最終回の活動をみんなで考える会議。ユースらしいメニューでパーティー実施を決定した。
12月15～16日	思い切り遊んじゃおう!! 遊びプロジェクトinこどもの城	みんなの夢である思い切り遊ぶことと自分たちで独自の料理を班ごとに考えて持ち寄り、クリスマスパーティーを開いた。
1月13日	作戦会議&ユニーク七草がゆ作り	作戦会議で話しながら、ビニール袋を使って七草がゆを作り、食べる活動を行った。
1月22日	よよぎで遊ぼう!! & 3期まとめの作戦会議	雨天のため、オリジナル巨大ボードゲームを実施。後半は最終回について会議を行った。
2月17日	どっちにいくの？ポイントさがし! オリエンテーリング	こどもの国でオリエンテーリングを実施。独自のポイントを加え班ごとに競い合った。
3月10日	「あしあと」プロジェクト会議	テーマ「ユースのあしあと」を具体的に考え一年の出来事をスゴロクにすることを決定。
3月23～24日	あしあとプロジェクト 「ゆーすごろく」をつくる	プレイホールに巨大スゴロクを協力して作り、自分たちで楽しむとともに、遊びにきていた一般の人たちをまきこんで、たくさんの子どもたちに遊んでもらった。

ポーツ、クラフト、クッキング、昔遊びなどバラエティーに富んでいる（別表参照）。また毎回の活動ごとに5～6人の小グループを作り、いろいろな個性の仲間とふれあえる機会を作っている。さらに各グループにはボランティアリーダーが入り、グループワーカーとしてプログラムや子どもたちの仲間作りの援助を行った。

近年、子どもたちの人間関係の希薄さが危惧されているが、もともと人間関係の基礎の部分は子ども時代の“遊び”によってのみはぐくまれると言われている。平成14年度から始まる学校週5日制を前に、今一度“遊び”のクラブの使命と重要性を再認識している。

（イ）パソコン教室

「小学生パソコン教室」は、開館以来パソコンを子どもたちのグループ活動や、仲間遊びの媒介として機能させることを中心テーマに実施し、本年度は3コースの教室を実施した。

「小学生パソコン教室」では、ロゴ言語によるプログラミングという形で、グループでグラフィックスを共同制作するという場面を設定し、交流と協力を進めながら、パソコンのプログラム作りに取り組んだ。また、2年目となる「マルチメディア探検隊」は、やはりグループでの取材、レポート作りを土台としながらも、情報化が進んでいる現代の社会生活の中でより良い形で情報を受け取り、また発信することに気づけるようにという意図を盛り込んだ。これらは、子どもたちにとって大切な視点であるので、今後もより充実、発展させていく必要があろう。

パソコンを仲間遊びの媒介として機能させるという当初からの意図は大切にしながら、学校や家庭へのパソコンの普及、またより情報化が進むこの社会生活に合わせて、パソコン教室の内容の見直しも必要となってきた。

（ウ）野外活動（キャンプ）

プレイ事業部では、毎年夏休みと冬休みにキャンプ活動を行っている。平成元年（'89年）にスタートした夏のキャンプ「ちびっこ冒険団（小学校1～3年生対象）」は本年度で13回目。平成4年（'92年）スタートの冬季キャンプ「ゆきんこ冒険団（小学校1～3年生対象）」は10回目を迎えた。さらに平成8年（'96年）には高学年を対象とした夏のキャンプ「フェローシップキャンプ（小学校4～6年生）」をスタートさせ、本年度で6回目。いずれも周囲を豊かな自然に恵まれた国立の施設「那須甲子少年自然の家」を利用し、舎営型のキャンプを行っている。

プレイ事業部の大きな目的の一つに、子どもたちの交流

の促進があげられるが、キャンプ活動の目的もまた同様である。ふだんなかなか接する機会の少ない自然にふれ、家庭や学校といった日常を離れ、異年齢の仲間たちとダイナミックに遊ぶことをとおして、仲間とともに遊ぶ楽しさを知ってもらう機会にしたいと願っている。

そのため、これらのキャンプは6～7人で1つの班を構成し、班での活動に重きを置いていることが特徴である。生活の場面はもちろん、プログラムも班の仲間たちと相談して決める場面を多く設定し、班で何をして遊ぼうか、どうしたら楽しく過ごせるのかなどを、お互いに考えたり意見を交換し合い、ときには言い合いやけんかを経験しながらも、集団生活の中のルールや思いやり、協調性などを身に付けるきっかけにしている。

こうした目的がよりよく達成されるよう、各班には担当のボランティアリーダーが付き、グループワーカーとして子どもたちの生活やプログラムの援助などを行っている。

ここ数年、プレイ事業部のキャンプでは全体活動を減らし、班単位の活動時間を増やしてきた。これはちょうど学級崩壊が話題になりはじめたころから、キャンプにおいても“集団活動にストレスを感じて参加できない”、あるいは“集団から遁走してしまう”といった子が出てきていて、現代っ子には小グループ単位のゆったりとした活動が必要と考えたからである。

しかしながら、キャンプ参加者全員が集い活動する場面は、他の班を意識し改めて自分たちの班を見直す機会としても重要である。限られた時間の中で最大の効果を得るためにも、班別活動と全体活動のバランスについて、さらに検討を進めていく必要があると感じている。

3. グループ活動

さまざまな“ごっこあそび”や“劇遊び”などのプログラム活動をとおして、豊かな心をはぐくむと同時に、子どもたち同士が仲間意識を感じられるようになることを主な目的としている。

本年度実施したプログラムは、「忍者修行道場」17回、「森へ行こう」10回、「みんなでつくろうパペットトランド(みんなであおむしくん)」3回、「こどもの城オリンピック」2回、「みんないっしょに」2回の合計34回であった。秋に台風の影響や園の都合などで日程の変更や予約の取り消しなどが数件あった。

言葉が未発達な年少児向けプログラムとして、前年度の一般活動の中で企画した「みんなであおむしくん」を先生と子どもとの遊びとして実施した。また、〔こどもの城〕幼児グループの利用があり、保育スタッフと打ち合わせを行うなかでプログラムを客観的に検証する機会が得られた。

4. パソコンを使った遊び

パソコンルームでは、パソコンのレイアウトやペイント機能などさまざまな機能を使ったプログラム活動を行っている。カレンダーや合成写真のはがき作り、似顔絵描き、言葉遊びや音楽遊びなどを、1か月から1か月半単位で内容を変えて実施した。子どもたちの中には、家にパソコンがあり、メールやゲームをしている子どもも多くなってきているが、いろいろな機能を使ったプログラムを新鮮に感じ、存分に楽しんでいた。

また、全国の児童館などにもパソコンが普及してきて、インターネットやゲームソフトの使用以外に、子どもたちの活動にパソコンをどう利用してよいか分からないという声も多く、パソコンの活用方法についての関心も高まってきている。今後は、パソコンの機能を生かしたプログラムの考え方、準備方法の研修についても企画・運営が必要となるであろう。

5. まとめ

本年度いくつかの部分で事業内容を見直した。

遊ぶスペースの整備として、プレイホールにある大型の遊具「わくわくらんど」のつり橋やネット遊具の部分を改装、屋上のネット遊具も2年計画で改修を始めた。これらの工事は老朽化対策という意味もあるが、近年、子どもの遊び場や遊具の安全性がより強く求められるようになってきているので、これに対応するものでもある。遊び場の安全については、今後も引き続き研究すべき点である。

プログラム活動の面でも、鑑賞型の人形劇や人形劇フェアのプログラム数を減らし、参加体験型で“交流”をねらいにした人形劇遊び「パペットランド」を実施したのは新しい流れであった。

〈動くこどもの城〉やプログラム指導のための講師派遣など、プレイ事業部の活動を外部に伝える活動が大幅に増加し、〔こどもの城〕本来の役割を充実させることができた。パソコン遊びの活動の指導など、外部に効率良く伝える準備がこれからのものもあり、今後の重点項目である。

来年度以降、学校の完全週5日制の導入により、子どもたちの生活も大きく変化することが予想される。特に小学生の遊びのプログラム充実が望まれるところである。

平成13年度活動一覧表

1．一般利用

〈平常期間（プレイホール）〉

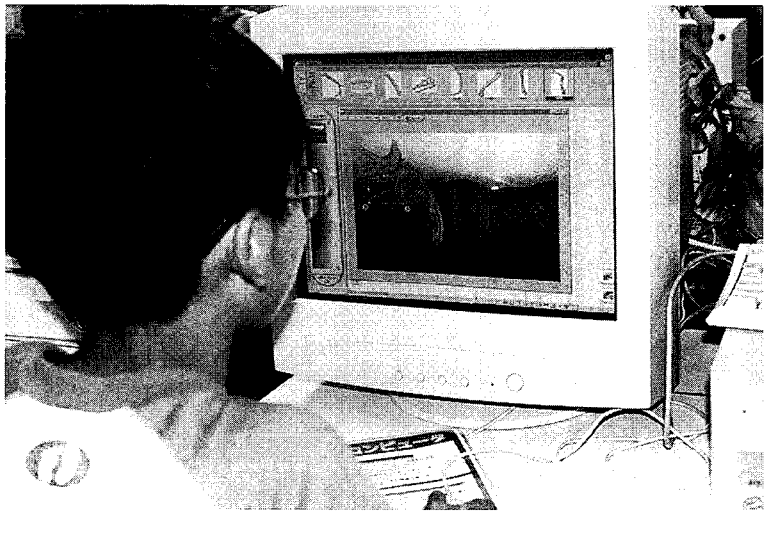
名　称	期　間（日　時）	備　考
おはなし 紙芝居のつどい	毎週火曜日 15:00～15:30	女性ボランティアによる紙芝居の公演。子どもたちと対話をしながら楽しめる作品や物語の作品など、季節感も考慮しながら毎回3本選んで上演した。2～6歳の子どもたちが中心に集まり、物語の世界を楽しむことができた。（プレイホール）
みんなの にこにこ広場	毎週水曜日 15:00～15:30	女性ボランティアの人形劇・影絵グループとスタッフによる公演や簡単な人形を作って遊ぶワークショップを実施。人形劇や影絵、パネルシアターや参加劇など週替わりの演目に「今日は何が出てくるの？」と聞いてくる子どもたちも現れ、集まったみんなで楽しむことができた。鑑賞型のプログラムのためか、赤ちゃん連れのお母さんも多く、音楽に合わせて人形が踊ったりすると一緒になってからだをゆらして楽しむ姿も見られた。（プレイホール）
おりがみ遊び広場	毎週木曜日 14:00～15:00	女性ボランティアの協力を得て実施。各回1～2種類取り上げる折り紙は、動物、食べ物や季節にちなんだもの、作って遊べるものなどバラエティに富むように工夫した。折り方だけを教える場としてでなく、折り紙をとおしてボランティア自身が親子との交流を楽しむことで、親子がゆったりとできる空間を作ることができた。また、親子同士が共有する時間を持てるように、親への声かけも積極的に行った。（プレイホール）
おはなし人形広場	第2・4土曜日 15:00～16:00	プロの人形劇団やアマチュア人形劇サークルによる公演を音楽ロビーで行っている。人形劇やパネルシアターなどの上演を親子で楽しむ姿が見られた。また、小学生も人形たちが繰り広げるお話の世界を見入っていた。（音楽ロビー）
〈七夕行事〉 天までとどけ ねがいごと	7.4～6　13:00～16:00 7.7～8　11:00～16:00	願い事を短冊に書いてプレイホール内にある竹に飾るワークショップと、七夕祭りの由来や関連することがらを遊びながら伝える「七夕のいわれクイズパネル」や、“わくわくらんど”のなかで絵札を探す「織り姫探し」「牽牛の牛数え」を行った。めくると情報がでてくるしかけが子どもたちの興味をひき、七夕の問題に答えてはめくり、めくっては答えるという姿が見られた。（プレイホール）
第28回 バンパー大会	9.23　13:00～16:30 （小・中・高校生合同）	プレイホールの高学年コーナーにある人気遊具『バンパー』の大会。普段から高学年コーナーに集まる子どもたちの、さらなる交流のきっかけづくりを目的に行った。小学生の部8人、中高生の部3人が参加。小学生の部では、初参加の子どもたちが多かったが、この大会をきっかけに新たな交流が生まれたようである。（プレイホール） ※バンパー：ビリヤードに似たニュースポーツゲーム。
〈節分〉 節分会 大まめまき大会	H14.2.2　16:00 2.3　14:00／16:00	会場に集まった子どもたちにむけて、福の神が節分の由来を分かりやすく説明、途中突然現れた鬼軍団を福の神と参加者で豆をまいて追い返すという、参加劇仕立てのプログラムで行った。また、節分にちなんだ鬼の的めがけて輪を投げる「鬼わなげ」や、“わくわくらんど”の中に隠してある鬼を探す「鬼さがし」もあわせて実施。（プレイホール）
〈ひなまつり〉 みんなでひなまつり	3.2　13:00～16:00 3.3　11:00～16:00	空中で手をはなすとひらひらと舞い降りるおもちゃを作り、下にあるおびな・めびなめがけて落とすというプログラムを実施。作って遊ぶプログラムだったため、比較的長い時間、ゆったりと作る過程とおもちゃで遊ぶ過程を親子で楽しんでいた。その他に、折り紙で角香箱を折ったり、ボランティアの協力でひなまつりの由来をクイズで楽しみながら伝える博士クイズ大会を行ったりと、ひなまつりを感じる2日間となった。（プレイホール）
第29回 バンパー大会	3.21　13:00～16:30 （小・中・高校生合同）	秋分の日と同様に高学年コーナーに集まる子どもたちの、さらなる交流のきっかけづくりを目的に行った。小学生の部9人、中高生の部3人が参加。前回の大会の参加者も引き続き参加し、交流もさらに深まっている様子である。中高生の部の参加者が前回に続き3人。参加者増が望まれる。（プレイホール）

〈特別期間〉

名　称	期 間（日 時）	備　考
〈児童福祉週間〉 キャッスルクエスト ～忍者武勇伝～	5.3～6 11:00～15:30	忍者をモチーフにした勧善懲悪物の体験型RPG（ロールプレイングゲーム）。悪の忍者を倒すために、正義の忍者になって、さまざまな修行ゲームに参加したり、武者修行の旅（館内オリエンテーリング）などで強い忍者をめざし、最後に子どもたちの前に現れた悪の忍者を、協力して忍術合戦（ジャンケン）で倒すという内容で実施した。ふだんはゲームのなかでしかできないRPGの世界を実際に体験できることから、多くの子どもたちが楽しんで参加した。またゲーム修行を終えた後に配ったさまざまな忍者の道具のカードは、お互いに見せあったり、交換したりと子どもたちの交流に役立ったようだ。（ふしぎが丘ほか）
〈 〃 〉 ゴールデンウイーク 人形劇フェア	4.28～30 11:00～16:00 公演＝11:30／13:30／15:30	人形を作る、遊ぶ、人形劇を見るという3本立てで実施した。発泡スチロールを使ったパクパク人形、靴下人形、封筒人形の3種類の人形を準備し、自分の作った人形を使って歌や劇遊びを楽しんだ。今年は実施する場所を変えたことで、子どもの参加人数の増加、親の参加性が高いなど、いい効果が得られた。また、例年のことではあるが、人形劇サークル、児童文化研究会に所属している大学生の取り組みが、温かな雰囲気を作り上げ、子どもたちののびのびとした活動につながっている。（Bスタジオ、音楽ロビー）
〈夏休み〉 Go-! Go-! カッパラダイス	8.11～15 11:00～15:00	恒例になった屋上を使った豪快な水遊び。本年度は、趣向を変えて簡単で誰でもが楽しめるゲームを4種類用意。参加ポイントを集めると、ネット広場で行う水鉄砲大会に参加する権利ができるという方式にした。イメージキャラクターにカッパを取り入れ、楽しい雰囲気を作り、またゲームを単独でも参加できるようにしたため、多少濡れることはあるが、子どもから大人まで参加しやすい活動となった。（ふしぎが丘）
〈開館記念〉 人形あそびのワークショップ　1 紙コップ人形で遊ぼう	10.27・28 11:00～15:30 公演＝13:00／15:30	口がパクパク動く人形を身近な材料・紙コップで工作し、作った人形でおはなし「おおきなかぶ」の登場人物になり、会場全体でおはなしの世界を楽しんだ。人形はイヌ・ネコ・ネズミのいずれかを作り、参加劇の中での自分の役割を認識し、参加への期待を高めるものとなった。また、大人の参加を呼びかけ、親子での人形作りをすることで人形あそびの楽しさを親子で共有してもらえるように心がけた。（プレイホール）
〈 〃 〉 人形あそびのワークショップ　2 みんなであおむしくん	11.2～5 11:00～12:00	3～5歳児とその親を対象に、参加者を事前公募し、Aスタジオで実施。幼い子どもでも口をパクパク操作をしやすい靴下を手にはめ、人形ごっこをする表現遊び。絵本「はらぺこあおむし」をモチーフに、靴下であおむしを作り、花を会場にはったり、親が形作る木や山に登ったり、新聞紙の食べ物を食べたり、ちょうちょに変身したりあおむしになりきって遊んだ。口を動かす操作や親子のふれあい・語りかけという要素を盛り込んだ。また、親子ペアを動きの基本にしたが、周りの親子とふれあえるよう展開をしていった。（Aスタジオ）
〈冬休み〉 2002年あそびのおせち おなかいっぱいあそんじゃえ	H14.1.3 13:00～17:00 1.4～6　11:00～17:00	屋上やBスタジオでさまざまな種類の伝承遊びを実施した。遊びの種類は、コマ、三ツ馬、缶ぽっくり、めんこ、けん玉、紙相撲の6種類。子どもたちは自由参加の形でそれぞれのコーナーで伝承遊びを体験した。どの遊びも、特に父親の参加が多く見られ、親子で遊ぶ姿が見られた。コマでは、その場に集まった子どもたちで“長回し競争”が始まるなど子どもたち同士の交流も見られた。夕方には、正月や昔遊びにちなんだクイズにどの解答者（博士）が正解しているかをあてる「博士クイズ大会」も実施した。（Bスタジオ、屋上遊園）
〈春休み〉 エンジョイ・レク・タイム J-Master2002	4.1・2　13:30／15:30	高学年を対象にしたレクリエーションゲームを楽しむ集い。じゃんけんを使ったゲームは、個人で楽しむものから集団での遊びに広がるように構成し、集団で遊ぶ機会とした。見知らぬ人もいる中で、子どもたちはプログラムをとおして交流の輪を少しづつ広げていったようだ。（フリーホール）

〈パソコンルーム〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
ことばあそびの A☆B☆C	4.18~6.5	「しりとり」「アナグラム」「暗号解読」の3つの言葉遊びを用意してコンピュータを相手に活動を楽しんだ。文字を遊びにしているため、小さい子はひとりで遊ぶことは難しかったが、親子で話しながら楽しむ姿が印象的であった。
うつしとるとる なぞってアート	6.6~7.10	果物、野菜、パン、ケーキなど食べ物の写真から好きなものを選び、その写真をペンタブレットを使ってなぞり、色をつけて印刷するというプログラム。パソコンでペンの種類や太さ、色を選ぶ機能があり、陰影を表現してより本物らしく見えるよう、機能を十分に使いこなす高学年や親の姿が多く見られた。
どんなのいるかな 探検マップ	7.11~8.5	「恐竜が住む謎の島」の地図を作るプログラム。島の地図に恐竜や生き物、岩、山、木などのパーツを想像をはたらかせて並べていく。なかには「ここが出発地点で、ここが怪物がいる洞くつで……」と物語を考えなら作品を作る姿も見られた。小さな子どもから高学年まで楽しめた。
こんなのいたかな 復元コンピュータ	8.6~9.27	恐竜の化石の骨格パーツを並べて、恐竜を復元してみようというプログラム。本物の恐竜と同じように骨格を組み立て、最後に表皮をかぶせて恐竜を復元したり、自分で化石を並びかえて、空想の恐竜を作ったりして楽しむことができた。
ネイチャークイズ	9.28~10.23	野鳥や草花の名前をパソコンの図鑑ソフト使って検索した。写真や特徴をヒントにしたクイズ形式で行ったため、子どもたちはもちろん、親子で相談をしながら答えを見つけたり、野鳥や草花を話題にして楽しむ姿も見られた。
葉っぱのぬりえ	10.24~12.4	6種類の木の葉の形を楽しみながら、色や模様をつけて、できあがった葉は、大きな木にはり、みんなで一つの作品に仕上げるプログラム。葉の形を選ぶと、その葉の情報(花期、分布、特徴など)も画面に表示されるようにしたため、単に色をぬるだけでなく、葉への興味にもつなげることができた。
わくわくカレンダー	12.5~H14.1.22	壁にはることもできる平面の型と、紙コップを利用した立体の型の中から1つ選びカレンダーを作るプログラム。飾り枠やイラスト、家族の誕生日や行事などを自由にレイアウトして自分だけのカレンダーを作ることができる。用意してあるマークやイラストをはりつけるという比較的容易な作業なので、小さい子どもから大人まで作成することができ、多くの参加があった。
サウンド エフェクター OTOPITA-55	1.23~3.12	ある場面の写真に雨や雷、叫び声などの効果音や、場面に合ったBGMをつける、パソコンを使った効果音遊び。子どもたちは独自の物語を作りながら、それぞれの場面に合わせてさまざまな効果音をつけていた。
似顔絵ペインター	3.13~4.16	コンピュータに接続してあるCCDカメラで自分や友だち、家族の顔の画像を取り込み、画面上で1ページ透明なシートを重ねて、透けて見える画像をなぞって似顔絵を描くプログラム。“なぞる”のはなかなか難しく、目や鼻、口などを何度も描き直したり、マンガふうにデフォルメして描いたりして、個性豊かな似顔絵ができあがった。



トリケラトプスは直立歩行だったかも？。化石を組み立てて、恐竜を復元（復元コンピュータ）。

2. 講座・クラブなど

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
	(人)	(人)		
小学生パソコン教室 I	小4～6 (20)	11	ＩＡコース 4.8～5.27 (6回) 日曜日 10:30～12:30	ロゴ言語のプログラミングという形で、5人のグループによる共同作業の場面を設定し、グラフィックスの共同作品を制作する。パソコンを仲間遊びの媒介ととらえた活動で、子どもたちは、パソコン操作やプログラミングと、仲間と一緒に楽しく作品作りを進めた。ＩＢコース（2月開講）は、受講者が少なかったため開講しなかった。受講料＝9,000円
小学生パソコン教室 II	小4～6 (20)	16	9.2～9.30 (5回) 日曜日 10:30～12:30	小学生パソコン教室 I を終了した子どもたちのためのコースで、ゲーム作りがテーマ。ゲーム作りのプログラミングをとおして、変数や再帰といった概念を学び、創意工夫する楽しさを体験した。受講料＝7,500円
小学生パソコン教室スペシャル～マルチメディア探検隊～	小4～6 (20)	14	H14.3.26～30 (5日連続) 10:30～12:30	取材とパソコン操作による資料作成という形で、5人のグループによる共同作業の場面を設定し、写真入りのレポートの共同作品を制作することを内容にした。デジタルカメラで、自分たちが考えた視点で〔こどもの城〕館内を取材、グループごとにレポートを作成し、〔こどもの城〕のホームページで発表した。受講料＝7,500円

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
	(人)	(人)		
キッズクラブ	小1～4 (30)	① 30 ② 30 ③ 30	隔週土曜日 15:00～17:00 (原則)	小学校1～4年生までの遊びのクラブ。家庭や学校では体験できない活動を行う、地域や学校とは違う新しい人間関係作りをめざす、子どもたち自身がプログラムを考え作り上げる――ことで、自主性、協調性、積極性を養うことを目的としている。1・2期は6回、3期は5回開講。受講料＝9,000円（1・2期）、8,000円（3期）
ユースクラブ	小5～中3 (40)	① 31 ② 30 ③ 27	隔週日曜日 13:30～15:30 (原則)	小学校5年～中学3年の遊びのクラブ。10代前半の心の成長期に集団活動をとおし豊かな人間形成をはかるのがねらい。色々な活動をとおしてさまざまな直接体験をする、仲間との活動をとおして人間関係を学ぶ、遊びの計画・企画をとおして夢を実現する――を目的とする。1・2期は6回、3期は5回開講。受講料＝9,000円（1・2期）、8,000円（3期）

「虫がついている。キャー、ベツのにして！」だじゃれカルタは、子どもたちに大人気（キッズクラブ）。

〈野外活動〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
ちびっこ冒険団2001	7.27～30　3泊4日	小学校1～3年生のための舎営キャンプ。豊かな自然に恵まれた那須高原を舞台に、冒険ハイキングや秘密基地作り、ハンモック作り、クラフト、野外炊事、キャンプファイヤーなど、生活班を中心としたさまざまな活動を行った。班の仲間とともに“何をして遊ぼうか”“どうやって遊ぼうか”などを相談したり協力しあう中で、自己と他者との関係性を学んでいったり、協調性や社会性を獲得していくことを大きなねらいとしている。子どもたちの中からさまざまな遊びが生まれてくるのには毎回驚かされる。参加者71人、ボランティア23人、職員3人。（福島県国立那須甲子少年自然の家）
ゆきんこ冒険団2001	12.25 ～28　3泊4日	小学校1～3年生のための舎営キャンプ。冬の自然を感じ、その中で遊ぶことをとおして、仲間との交流を広げる活動を行う。本年度は雪に恵まれ、ソリやかまくら作り、雪合戦など冬の遊びを満喫した。恒例になっている「もちつき」も実施した。ふだんの生活の中では体験することのできない、たくさんの雪を使ってグループごとに考えた遊びを十分に楽しみ、仲間との関係も深まったようである。参加者74人、ボランティア25人、職員4人。（福島県国立那須甲子少年自然の家）
フェローシップキャンプ 2001	8.5 ～ 9　4泊5日	小学校4～6年生のためのキャンプ。基本は舎営とし、1泊は自分たちの作り上げた基地にビバークする。小グループによる活動を基本として、仲間との連携や思いやりなどの社会性を豊かにすることを目的の中心に考えて実施している。今年度で6年目を迎え活動も順調に進むようになり、目的にそって充実した活動を展開することができた。今回はふだん体験できない「沢歩き」をメインの活動とし、自然を豊かに感じ仲間とともに楽しみながらさまざまな体験をすることができた。参加者37人、ボランティア13人、職員 3人。（福島県国立那須甲子少年自然の家）

3. その他

〈動くこどもの城〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
やってみよう！パソコン遊びのプログラム	10.22	市川市の児童館児童厚生員21人を対象とした、パソコン遊びの研修会。児童館等にもパソコンの導入が始まっているが、ゲームなどでの利用が多く、充分活用されているとは言い難い状況である。この研修会では〔こどもの城〕で実施しているパソコン遊びのプログラムを体験しながら、子どもにとってのパソコン活動の意味と、プログラムの計画・準備の具体的な方法について紹介した。（千葉県市川市中央こども館）
〃	11.9　研修会 11.10 ～29　ワークショップ	「児童館にパソコンが配付されたが活用できない」との依頼により派遣を実施。研修会では姫路市内の児童厚生員13人が参加し、パソコン遊びの意義とパソコン遊びのプログラムを体験しながら、子どもたちへプログラムを提供する方法を考えた。また、ワークショップでは現地の児童館職員がプログラムを運営。児童館のパソコン2台含む9台のパソコンを使用し、「ジャングルカメラ」「わくわくカレンダー」の2つのプログラムを実施。期間中多くの子どもたちや母親グループも楽しんだ。児童館側もパソコンの活用方法のヒントを得たようである。（兵庫県姫路市立東児童センター）

森の中にたてたテントで、楽しいランチタイム（フェローシップキャンプ2001）。

〈講師派遣など〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
親子体験教室	6.3	学校5日制が始まり週末に家族がふれあう機会が増えることを受けて、親子で取り組める活動を紹介する教室で野外活動を指導する。具体的には野外炊事体験の指導を行った。（東京都渋谷区教育委員会千駄谷社会教育館）
富山県こども未来館運営委員会	10.4	富山県こども未来館の運営委員会へ運営委員として職員を派遣。こども未来館の年間活動計画や運営について検討した。
子どものためのボランティア養成講座	10.20	地域で活動する子どもたちのためのボランティアを養成する講座の実技講習を担当。簡単な記録に挑戦するゲームを考え、準備し、実際に講習参加者が地域の子どもたちを集めてゲーム大会を運営するところまでの活動へ指導・助言を行った。（東京都渋谷区教育委員会千駄谷社会教育館）
パーソナルコンピュータを使用した活動の研究会	10.30／11.13／12.12／H14.1.16／2. 8	茨城県の児童館における、パーソナルコンピュータを使用したさまざまな遊び活動や交流活動、またホームページの在り方など、プログラムの研究、検討会に職員を派遣した。（茨城県立こどもの城）
静岡県放課後児童指導員等講習会	11.16 浜松市 11.26 静岡市 11.27 沼津市	県内の学童クラブ等、学童保育を担当する先生方に対する講習。実技指導の講習を担当、「身近な遊び」のテーマで、前半「ジャンケンゲーム」のバリエーションを紹介、後半は「新聞で遊ぼう」と題して新聞紙を使った遊びやゲームを紹介した。同じ内容の講習を県内3か所で実施した。
平成13年度地域子育て支援センター担当者研修会	11.29 12.6 12.13	日本保育協会主催の講習会。会場は〔こどもの城〕。本年度は3歳児とその親のペアを想定した、人形を使った交流遊びのプログラム「みんなであおむしくん」を実施。靴下で作った青虫の人形を手にはめてお互いに挨拶しあったり、くすぐりあったり、体を山や木に見立ててよじ登ったりという、親子のスキンシップに大きなポイントを置いている。（こどもの城）
愛知県学童クラブ指導員講習会	H14.1.18	県内の学童クラブの指導員に向けた研修会。レクリエーションゲームの紹介として、「ジャンケンゲーム」のバリエーションの紹介と「新聞紙で遊ぼう」と題して新聞を材料にしての遊びやゲームの紹介を行った。（愛知県岡崎市）
コンピュータを使用した活動	1.24	茨城県の児童館活動情報化推進事業の一環で行われた、「コンピュータを使用した活動」をテーマにした講習会に講師2人を派遣。児童館等におけるパーソナルコンピュータを活用した遊びプログラムの事例や計画準備の方法について指導。(茨城県こどもの城)
御殿場市子ども会連合会定期研修会	3.9	地域の子ども会役員初任者に対する講習会。御殿場市は子ども会と児童館が密接に関わっていて、市の中央児童館からの依頼で講師派遣を行った。講義の内容は、今の子どもたちの現状と遊びの大切さを含め「子ども会の世話人としての心構え」という演題で講義を行った。（静岡県御殿場市）

「テングだぞー！」ひょうきんな友だちのしぐさに、笑顔の輪が広がる（ちびっこ冒険団2001）。

造形事業部

平成13年度の活動

開館以来、子どもたちが造形体験を豊かにしながら、感性を健やかに育てていく、下記の3つの方法を軸にしたワークショップを順次くりかえしながら、造形スタジオの運営にあたっている。

⑴ 新しい視点で素材を探究して、子どもたちに素材への広い関心を抱かせる方法（素材との出会い展）

⑵ そのままでは素材になりにくい音や光などを制作の媒体としてとらえ、子どもたちの造形感を新しくする方法（造形発見展）

⑶ 制作活動の基本となる「素材と道具と技法」の3つの関係を理解できるように視覚化した方法（オープンスタジオ）

3つのワークショップを軸とした活動は、「展示・体験・制作」という基本コンセプトに加え、プログラムに応じた環境設定を行い、その環境に子どもたちが積極的にかかわっていけるようにプログラムを展開した。本年度は「やってみよう! つくってみよう！～すみかと造形」「オープンスタジオ～すみかと造形」「オープンスタジオ～建築と造形」を実施し、次年度の「造形発見展～建築と造形」へと継続する活動を行った。同じテーマでも平坦にならないように節目ごとにアクセントをつけた。

1．一般利用

一般来館児・者活動は、人間の家や生き物のすみかを造形のテーマに選んだ。4月からの「やってみよう！ つくってみよう！～すみかと造形」、夏休み特別期間の「オープンスタジオ～すみかと造形」、9月以降は「オープンスタジオ～建築と造形」を実施したほか、四季折々に季節感を題材にした「こども歳時記」も実施した。

（ア）すみかと造形

□やってみよう！つくってみよう！～すみかと造形
4.11～7.19（こども歳時記の期間を除く）

□オープンスタジオ～すみかと造形 7.20～9.2

4月からは、人や動物などの“すみか”の不思議さやおもしろさなどを造形的にとらえ、いろいろな素材とそれぞれの素材に合わせた道具の使い方の体験をより深める「やってみよう！つくってみよう！～すみかと造形」を、夏休み特別期間には「オープンスタジオ～すみかと造形」のワークショップを実施した。

人は太古より寒暑や風雨、外敵からの攻撃から身を守るために“隠れ家”や“すみか”を必要としてきた。それらはラスコーやアルタミラに見られるような洞窟だったり、大木のほこらや岩かげだったりしたが、何千年何万年もの間に、その地方にある植物や鉱物などを加工して、気候や風土、生活にあった家を作ることを学んできた。森林圏では木を加工して組み合わせ、乾燥地帯では石やレンガを積み重ねた。また湿度の高い地方では開放的な構造、寒さの厳しい地帯では閉鎖的構造となり、遊牧民や狩猟民の家では、移動性を特徴としたテント構造の家が主となっていった。

また自然界においても、さまざまな“すみか＝巣”が見受けられる。補食のためや産卵、育児、休息、睡眠のために利用するもので、それぞれの生き物によって目的や形態、構造、使用時期などはまったく変わってくる。

例えば補食のために巣を設けるクモは、空中に自らが出した糸で編んだ巣を作る。アリジゴクなどは日陰の土の上にすり鉢状の巣をつくってエサになる虫を待ち伏せる。双方とも巣が壊れたら、せっせと修復作業にとりかかる。

多くの鳥も巣を設ける。茎や小枝を編んだもの、泥と唾液を混ぜ合わせたもの、岩肌に穴を掘ったものなど多岐にわたる。多くは繁殖期のみに作られ、使い捨てられるものがほとんどのようである。

一方、ゴリラやチンパンジーなどは、毎日夕方に木の枝と葉で新しい睡眠用の巣を作る。逆にアリの一種は代々数十年にわたって、地下や地上に巣を拡張しながら使用し続けるものさえいる。

“すみか＝巣”といっても、いろいろな形や利用形態がある。私たちの目を楽しませてくれる形もあれば、想像をはるかに超えた使い方のものもあり、さまざまである。

人や動物などのさまざまな“すみか”を造形的にとらえ、ロビーと造形スタジオ内に各種アプローチから“すみか”をとらえた展示・体験コーナーを設け、子どもたちの“すみか”に対する感心を高めた上で、自然に制作（ワークショップ）へといざなう環境を設定した。

【展示・体験】

エレベーターホールからロビーに至るまでの3階廊下の壁面には、「なんの巣？！　どんな巣？！」と題したクイズ形式のパネル6枚を設置した。

「葉っぱと樹皮」「木と石と泥」「土と木くず」などの素材が展示され、それぞれに巣の作り方のコメントが添えてある。答えのパネルはロビー中央に設置し、ミノムシやビーバー、スズメバチなどの巣を断面図などのイラストと文章で紹介した。また、青山円形劇場スロープ壁面には、エスキモーの氷の家やモンゴルの布の家（パオ）、デンマークの海草葺き屋根の家など、世界各地のさまざまな素材でできた家を紹介した。

造形スタジオ入口前には、大きな木のほこらをイメージした構造物を建てた。縦1.5ｍ×横2ｍ×高さ2.2ｍほどの大きさのものを厚い木の板で作り、子どもはもちろん大人も入って遊べる空間を確保した。中に入ると、天井部分に用いた多数の木の枝によって光がやわらげられ、あたかも木もれ日の中にいるような感覚にとらわれた。

「オープンスタジオ～すみかと造形」

数十本の割竹をしならせて作ったアーチをくぐり抜けて造形スタジオに入ってくると、受付後ろの壁面には、幅10cmほどの杉板が、幅3.5ｍほどに渡って天井まで、あるところは整然と、またあるところは雑多な感じで立体的に組まれており、一見「なにかここに住んでいるのかな」と思わせる不思議な構築物を制作した。

造形スタジオ奥には、トルコのカッパドキア地方にある岩山洞窟の家やシリアの泥造りの家をイメージした「土の部屋」を設置。縦2.2ｍ×横4ｍ×高さ2.2ｍの壁面と床に泥を塗り付けて土壁のようにし、壁面上部はせり出した岩を擬した凹凸のある造作に仕上げた。「土の部屋」の中には、テラコッタ粘土を焼成して作った数百個の小さなレンガブロックを置き、小さな子どもから大人まで自由に小さなすみかを作って遊べる空間とした。

造形作家の松本秋則氏の竹と和紙による、音の環境彫刻「松本劇場」は、“建築空間”という視点からも、さまざまなインスピレーションを与えてくれる作品。一昨年から引き続き造形スタジオに展示した。

【制作】

「やってみよう！ つくってみよう！」では、親子コーナーで8プログラム、小学生コーナーで7プログラム、「オープンスタジオ」では親子コーナー、小学生コーナーともに3プログラムを実施した。

それぞれのプログラムでは、子どもたちが紙を折って立体にする、ミラーシートを使って空間を広げる、木の枝や枯れ葉、竹を使って空間を作るなど、いろいろな素材やその変化を体験し、そしてそれら素材に合わせた道具の使い方の体験をより深めるためのワークショップを展開した。

（イ）建築と造形

□やってみよう！つくってみよう！～建築と造形

9.7～平成14.3.24（こども歳時記の期間を除く）

□春休みオープンスタジオ～建築と造形

平成14.3.24～4.7（こども歳時記の期間を除く）

建築は、人間が寒暑や風雨や攻撃から身を守るために家を作ることと、神をまつり祖先を葬るために記念物を作ることから始まったとされている。そのため建築術は原始時代から、人間の物質的要求と精神的要求の双方を満たす役割をになってきた。それゆえ、それぞれの国や地方や時代の人間生活を建築様式、建築材料、建築方法、装飾性などからかいま見ることができる。

9月から始めた「やってみよう！ つくってみよう！～建築と造形」、引き続き行った「春休みオープンスタジオ～建築と造形」では、人間と密接な関係にある建築をテーマに、さまざまな素材を使って、構造の重要性や形のおもしろさなどを検証した。

導入として、世界各地にある特有な建築物の中から世界一高い塔・世界一古い木造建築・世界一長い橋など、“世界一”を集めてパネル展示した。“世界一”建築をシルエットで表現したものを通路に配置することで、パネルとの連動を試み、親しみがもてるようにした。

造形スタジオの入り口付近には、実際に入ることができる小屋を設置。骨組みや構造が見えるように作りかけの部分を残したり、さまざまな装飾による壁で触感の違いを楽しめるよう工夫した。

素材によって同じ形の物でも大きく変化して見えることが分かるように、同サイズの柱を紙管で作り、金属、人工芝、壁紙、スポンジで飾り付け、スタジオ内に設置。子どもも大人もそれぞれの柱の触感を楽しんでいた。プログラム面でも、素材の違いによる表情の変化、素材の持つ形との相似性を取り入れて、橋、柱、壁といった身近な物をテーマに制作したり、専門的な建築構造を模倣したりしながら展開した。

（ウ）こども歳時記

季節感を感じさせる造形活動として、季節の節目に6回の「こども歳時記」のワークショップを実施した。

ロビーに季節に合わせた展示を行い、「造形スタジオでは何をやっているんだろう？」と興味や好奇心を持たせ、スタジオへ足が向くように動機づけした。また、プログラム制作へ無理なく参加できるような楽しい雰囲気や、季節感、それぞれの歳時記の特徴を出した展示で、制作への足がかりとした。

【端午の節句—こどもの日】

3階廊下の壁を水色に塗装して大空に見立て、紙で制作したいろいろなデザインのコイのぼりを泳がせた。廊下を抜けた先にある造形スタジオ入口には、巨大なコイのぼりを飾り付け、“コイ太郎”という架空の男の子に持たせた。造形スタジオ奥の展示コーナーに「コイ体験コーナー」を設け、ひもを引くとビニールのコイの体の中に入ってしまう「シースルー・ゴイ」やコイの音具を置き、遊べるスペースを設けた。

【七夕】

7月6・7日の2日間限定で親子プログラム「おりプラネット」を実施。おり姫やひこ星がスタジオの中に飾られ、子どもたちの制作を見守った。

【クリスマス】

「やってみよう！つくってみよう！～建築と造形」期間中なので、建物とクリスマスを意識しながら展示を構成。スタジオ入口には、ボイド管（大きな紙の筒）を配置し、天井に紙で制作したステンドグラスを飾った。子どもたちは中に入り、上を見上げて光りと影を楽しんでいた。

スタジオ奥の展示コーナーの壁には、紙で作った家並みを飾った。壁の穴に魚眼レンズを取り付け、のぞくと部屋の中が見える装置や、窓を開けるとサンタやトナカイに変身できる「変身ミラー」を設置した。

また、プレイングボードが改修工事中だったので、○△□などの幾何学的図形のスタンプを組み合わせ、家の形をつくるスタンプシート「お家をつくろう」を実施した。

【お正月】

廊下に、巨大な門松やおもち、コマなどを紙で作って飾り、スタジオ入口には干支の馬のオブジェを展示した。馬の体をボイド管（大きな紙の筒）で作り、子どもたちがその中を通り抜けて遊べるようにした。

スタジオ内には、大黒様やオリジナル凧の飾りでお正月のにぎやかな雰囲気作りをした。プログラムも干支にちなんだ「ゆらり馬」を制作した。また、全国各地の干支（馬）にまつわる伝統的な民芸品も展示した。

スタンプシート「お家を作ろう」は、台紙をお正月のデザインに変えて実施した。

【節分】

廊下の壁を幾何的図形で構成した建物の通りにし、雪だるまに角をつけた鬼だるまや鬼のパンツ、金棒などを飾った。造形スタジオ入口には、富士山の上からのぞく大きな青鬼と黄鬼を飾り、子どもたちを出迎えた。造形スタジオ内にもいろいろな鬼グッズを飾った。受付後ろのパーテーションには、鬼の目や鼻を飾りそれ自体を大きな鬼の顔にした。受付で説明を聞く子どもたちは、鬼に見守られている状態だった。

【桃の節句—ひなまつり】

廊下や造形スタジオへ春を感じられるよう、紙で作った桃の花やぼんぼり、丸い体のおひな様、ひしもちを飾った。親子コーナーでは「おひなだんだん」を制作。実際に子どもたちが作るものよりも大きなサイズのものを、受付後ろの屏風に展示した。

こども歳時記「桃の節句—ひなまつり」

（エ）第16回造形スタジオ展

〔こどもの城〕開館記念行事にあわせて実施し、今回が16回目。平成12年11月から13年10月までの1年間に行った「遊びと造形発想展2000」「オープンスタジオ～すみかと造形」「こども歳時記」「こどもクリエイティブクラブ」の活動を紹介した。

「遊びと造形発想展2000」は、高山正喜久筑波大学名誉教授が、数十年にわたって造形の基礎教育にたずさわり、培ってこられた「遊びと造形発想法」をもとにしたプログラム。子どもたちが遊びを通じてものを見、さわり、作りながら、造形の楽しさ、からくり的要素のおもしろさを見い出すことが目的。

「オープンスタジオ～すみかと造形」は、生物の“すみか”をキーワードに、木や紙、金属、布などさまざまな素材を用い、それら各素材に合わせた道具の使い方の体験を深めるプログラム。「こども歳時記」は、恒例になっているお正月、節分、桃の節句などの季節感を生かしたプログラムである。

造形スタジオの活動で使われる、素材、道具、技法などは多岐にわたっているので、テーマごとに分かりやすく見せるために、それぞれを統一したプログラムボックスに収納し、造形スタジオ入り口前に16点、造形スタジオ奥の展示コーナーに26点の合計42点を展示した。

「こどもクリエイティブクラブ」のコーナーでは、火曜日から土曜日までの各コースを作品と活動風景写真で紹介した。各コースとも、扱う素材や技法が異なるため、展示された作品もさまざまでユニークな展示となった。

「造形スタジオ展」は、過去1年間の活動のダイジェスト版的な展覧会。多くの人に紹介すると同時に、スタッフ自身もこの展覧会から過去の内容を振り返り、そして新たな活動につなげていけるよう心がけている。

また、開館記念特別期間プログラムとして「第8回親子体験ワークショップ」も行った。

「第8回親子体験ワークショップ」

2. 講座・クラブなど

講座・クラブの活動では、「こどもクリエイティブクラブ」5コース、「夏休み造形教室」5プログラムを実施した。「こどもクリエイティブクラブ」では、指導者が得意とする技法や領域を積極的に子どもと共有するために、素材・表現法・創造性の刺激などにこだわるプログラムを、「夏休み造形教室」では造形スタジオで行っている「すみかと造形」に関連したプログラムを実施した。

（ア）こどもクリエイティブクラブ

【こどもクリエイティブクラブA「クレイワーク」】

土にはいろいろな種類があり、技法や釉薬、焼成方法などもさまざまである。「クレイワーク」では、土による表現の可能性を追求しながら、子どもたちの表現力を引き出す活動を行った。

土をこねる、たたく、つかみだす、といった初歩的な行為から、次第にくり抜きやぞうがん、たたら、型押し、ひも作りなど、陶芸の基本的な技法を用い、子どもたちが遊びながらも個性を発揮できるよう指導した。年間に子どもたちが使用する粘土は、一人あたり合計100kg以上というダイナミックな活動である。

1期は「かたまりからの変化」とし、ふだんは用いることのないような大きさの粘土のかたまりを使い、体全体を使った活動を行った。初回は粘土に慣れること、クラブメンバーにも慣れることを目的としたワークショップ「粘土の冒険旅行～海底探検編」（グループ活動の一つをアレンジしたもの）を実施。これによって、最初は緊張していた子どもたちも和やかな雰囲気となった。次に、計50kgの土の粉に大量の水を混ぜ、足で踏んで粘土を作り、一部を平らにのばして自分たちの足型をとった。足型のそばに日付けをいれたり、足型だけではものたりず、手型のプレートを作る子どもも出てきて、にぎやかな活動となった。

そのほか、くりぬきの技法を使う「たたいてくりぬいてつくる土の家」、ぞうがん体験の「板ぞうがんでつくる石の皿」、くり抜きとぞうがん、磨きの技法を使う「くりぬきみがき」、ろくろ体験の「ろくろ星人2号」、ひも状にした粘土をつなげてつくる「ひもひもオブジェ」などを制作した。

2期は「板からの変化」。こねて立方体にした粘土をたたら板と切り糸で切っていくと、たたら板の厚さ分の粘土の板「たたら」ができあがる。これを丸めて形作る「かびんをつくろう」、変型させてつくる「ワイヤーアニマル」、ガラスを溶かした飾りをつける「ガラスタイルつくろう」、箱状に組み立て、指人形でゲームができる「市松模様ゲームボックスと指人形」などを制作した。

2期の最終日には、部屋中にロール紙を敷きつめ、その

上で粘土の版画を楽しむ「クレイプリント」を実施。通常は卓上での活動が中心だが、この時は全身を使っての活動のためか、子どもたちもはしゃいでいた様子だった。

3期はひも状にした粘土を、蛇がとぐろを巻いているように巻いたり、積み上げたりして作る「ひもからの変化」。粘土のひもから器を作り、その中に植物も作る「エセボンサイ」、1期にみんなで粉から作った粘土を使って大物の「粘土の椅子」を制作した（平均的な大きさは直径25 cm、高さ30 cmくらい）。椅子には、型取りの技法で作った飾りをつけたり、ガラスを埋め込んだり、弁柄（古来から使われている酸化鉄の釉薬）で模様を描いたりして仕上げた。

年間をとおして土にふれながら、たたいたり、こねたり、のばしたり、ひもにしたり、道具を使って変化させたりしながらも、粘土をほかの造形素材と同じように表現の材料としてとらえ、子どもたちが自由に発想し、そして創造力をかきたてるよう、指導した。

【こどもクリエイティブクラブB「ゆかいな造形」】

「ゆかいな造形」では、木や金属、プラスチックなど、さまざまな素材と用途に合った道具を使い分け、遊びのなかで、より深い造形体験をすることを基本としている。

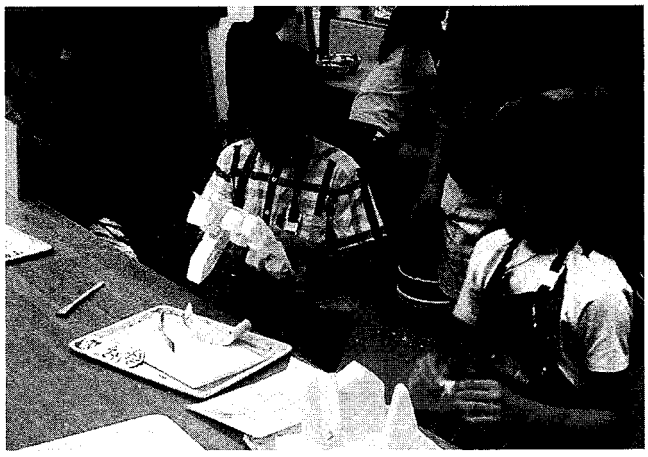
1期の最初は、全身を使った造形体験「自分人形コピー君」を制作。1.5 m四方ほどの大きなケント紙の上に寝転んで、好きなポーズをトレースして切り抜き、フロッタージュや型押しの技法で装飾した後、つめものをして立体作品に仕上げる。1回で終わるはずだったが、子どもたちが飾りや鞄、装身具などの身の回りグッズ作りに凝ってしまい、計3回のプログラムになった。

次はモザイクタイルで作る「モザイク灯台」。灯台の形に切った発泡スチロールと土台にタイル片をていねいにはっていき、最後にタイル目地材で仕上げると、色鮮やかな灯台ができあがる。中に仕込んだ電球とガラス片により、見る方向によって光の色が変わり点滅する。

そのほか、鏡面になっている金属パイプの内側に色とりどりの光を乱反射させる「ミラクルスコープ」、直径15 cmほどの丸太を半分に割ったものにネジや釘、針金、金属板などを自由に飾り付ける「なんでもありの木」を制作した。

2期の最初は全員で「新聞紙であそぼう」。新聞紙を細く細く巻いていくと、ある程度強度のある筒ができるので、これを6本合わせて三角錐にし、どんどん増殖させて大きな構造体を作る。最終的にできあがったものは、縦4 m×横10 m×高さ1.5 mほどの巨大な構造物。子どもたちも大はしゃぎだった。

「海賊の島」は、木づちで洞窟のある島の形に整えた金網を、水とボンドを混ぜ合わせた土でおおい、その上に木やスポンジ、針金などをジオラマに施す。そして木片や布を使って海賊船を作り、島の洞窟の中に入れて完成。この海賊船は、船底に金属のワッシャーが仕込んであり、台の下から柄のついた磁石で操作ができる。子どもたちはどうすれば船を上手く動かせるか競ったり、隣の子の島に出かけて行ったりして、楽しそうに遊んでいた。



こどもクリエイティブクラブE　創造探検「ハンズワーク」

アルミ板を鍛金（たんきん）の技法で打ち出して作る「金属仮面」、共鳴箱やはじき棒まで全て手作りの「カリンバ」、真鍮板を腐食させて模様を作る、組み立て式の「ケイタイツリー」を制作した。

3期は、石膏の型取りで作る壁掛け時計の「時空の島」と宝物の数々を作る「宝箱をつくろう」。木工と金属の打ち出しの技法で作る箱や、石膏の型取りと金属の鋳物の技法で作るコイン、色とりどりのアルミ針金をつないで作るネックレスなどのアクセサリー、木から削り出して作る勇者の剣、そして金属棒と紙粘土を組み合わせた魔法のつえなど、さまざまな技法を体験しながら作品を制作して、1年を終了した。

プログラムの変わり目には必ず「先生、今日は何するの？」と目を輝かせて聞いてくる。「今日は金属を溶かすよ」とか「光るものを作るよ」などと話すと、「どうやって作るの？」「何を使うの？」と制作にかんする質問が次々ととんできた。

子どもたちは、さまざまな素材や道具、そして技法に接し、個人の造形表現の幅を広げながら、それぞれに楽しみを見い出していた。回を重ねるごとに取り組み方や制作技術も向上していったことも見逃せない点である。

【こどもクリエイティブクラブC
プリントワーク「版画の楽しみ」】

紙版画、木版画などの版画（プリント）の領域・素材・技法にとらわれず、刷る対象も紙だけに限定しないで、身の回りにあるあらゆるものに目を向けて、色・形・テクスチャーなどを写し取る“うつす”を楽しむ講座。

1期は、紙の見本市「ペーパーショー」へ足を運び、さまざまな印刷用紙に出合うことから始まった。手に直接絵の具をつけてスタンプすることで、いろいろに変化した手の形を写し取ったり、石膏を手にもりつけて型をとり、立

体的に手を写すことも試みた。ふだん気付かなかった手の表情をあらためて観察した。

2枚重ねにしたガーゼ布を中空に張り、絵の具やインクで色付けを行い、染み込んだり、裏写りした効果をそのまま生かしてマントに仕上げた。たまごパックなどで、紙漉(す)きをしてできた再生紙を使ったお面作り。新聞紙をすきな形にまるめてコピーしたものをもとにシルクスクリーンでTシャツにプリントするなど、一つのものがさまざまに変化して新しい表情をあらわす表現方法を体験した。

2期には、足の形をなぞりフェルト毛で作る「おかしなクツ」、紙ねんどの指人形とポラロイドカメラで撮影した自分を切り抜いて登場人物にして、透明シートと色セロハンを照明がわりに使用した「どきどき舞台」、従来の木版画技法を使いながらも、版木自体が分割されたパズルになり、日付けを入れた角材と組み合わせて立体的なカレンダーに変身する「パズ版カレンダー」、石膏の板にクリスマスツリーを彫刻刀で彫り、溶かした合金を流し込んでできる「メタルツリー」など、素材による物の表情や雰囲気の違いを楽しんだ。

3期でもいろいろな表現に挑戦した。感光シートを利用した巨大スタンプを作成、市販の感光機を手作りのBOXに入れて実験。A4サイズほどの大きなスタンプを完成させた。ほかにも型ぬきを応用したのれん染め、スチレン板につまようじでへこみを付けて石膏を流し反転させ、金属箔(はく)でコーティングし立体的な版画に仕上げたりした。版画(プリント)を作ることや、物を写すことが、身近な素材と伝統的な道具・方法を往復することで自由に発想できるクラブとなった。

【こどもクリエイティブクラブロ
イメージする楽しみ「絵本の世界へ」】

製本した“絵本”を制作することにとらわれず、自分たちの中にある、お話やイメージの世界を人に伝えられるような表現力を身に付けてもらいたいと、いろいろな素材、技法を体験し、世界に1冊しかない絵本作りをめざした。

1期は、お話やイメージの世界を表現するために必要な、いろいろな素材、技法、手法を体験することを目的とした。絵の具でスパッタリングやドロッピング、シャボン玉に絵の具を混ぜて吹き付け、紙にふれずに絵を描いたり、新聞紙を切り張り(コラージュ)して名札を制作した。また、発泡ウレタンで「新型サイコロ」、木で「パズル」、石膏で宝物が埋め込まれた「石版」を制作した。見慣れている素材でも、あまり体験できない技法を取り入れ、“表現方法は無限にあるんだ”ということを提示した。

2期は、さらにお話的な要素を取り入れ、いくつかの構成でつくる絵本の制作を行った。透明なシートを何枚か重ねると絵に変化がでる「透明シート絵本」、ある物(動物や建物など)のへんてこな根っこを考える「地面の下を描く」、布を染めて制作した「ふわふわ絵本」、2002年のカレンダー12か月分に季節に合った絵を描いた「カレンダー絵本」を制作した。

3期は、活動の集大成として1冊の絵本「商店街絵本」を制作した。一人ひとりが立体で店や家具、登場人物を制作し、場面ごとにデジタルカメラで撮影。プリントアウトしたものを製本した本にはりつけて絵本を制作した。一人ひとり違う店を制作したので、ほかの子どもの店にも登場人物を行き交いさせていた。自分の世界のほかに、別の子どもの世界への興味や連帯感も生まれていた。

プログラムを進めながら、少しでも子どもたちの世界を引き出せるように、子どもたちが表現した世界について声がけをすることを大切に活動した。

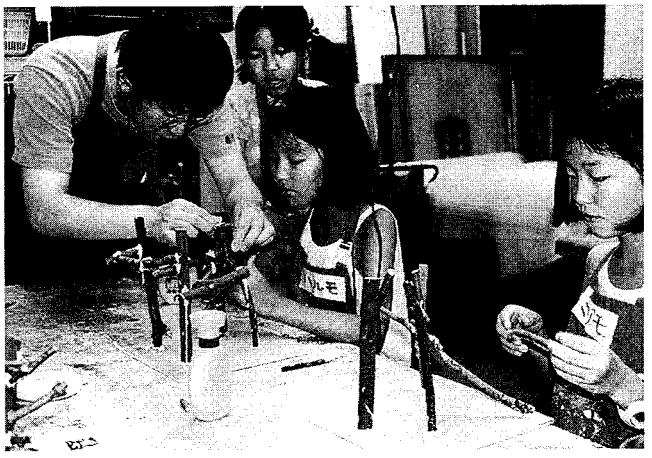
【こどもクリエイティブクラブE
創造探検「ハンズワーク」】

前年度と同様、対象年齢は小学校4年生～中学校3年生。造形表現にかかわる造形力を養う高学年向けの講座。新素材による実験的表現から、古典技法を活用し現代ふうにアレンジしたものまで幅広く、作ることが楽しく探検できるようなプログラム実施に努めた。

はじめに、オーブンで温めると固まる、液体消しゴムを素材にして名札の制作をした。熱によって物が変化する様子に引きつけられていた。できあがった名札は、もちろん消しゴムとしても活用できる。昔の人はどんなふうに絵を描いたのだろう？そんな疑問から現代洞窟壁画の制作を進めた。石膏でジオラマの型取りをして、デコボコした支持体を作り、フレスコ技法の要領で、水で溶いた顔料で彩色を試みた。従来の絵の具顔料ではなく、身の回りにある粉末状の物をかき集めて使用。食紅・カレー粉・ココアなど主に料理に使われる物が多かったが、色も臭いもさまざまな粉が、絵の素材へと変身することにとても生き生きとした反応を示していた。

私たちの使っている言葉・文字を立体的な表現の材料として使えないかと考えて「ことばのオブジェ」を制作。映像情報のあふれる世界で、コラージュをしながら言葉の並びかえや文字作りを楽しんだ。なにげなく見ている印刷されている文字にも、形・大きさがさまざまあることを発見し、それぞれに工夫をこらし制作。仕上げたオブジェをコピーし、別の作品へと展開させた。ほかにも、溶かした金属を石膏型に流し込んでできる夢のかぎ「キーメタル」、靴底がスタンプになる「サンダール」を制作した。

2期は光や建築をモチーフに、透明アクリル板や色セロハン、油性ペンを活用した「光の名札」「光りシアター」「ぴっかリライト」、アクリルコップを浮島にみたてた「カップランド」、地面が立ち上がりブックエンドになる「ブックマ


夏休み造形教室「パラダイ巣」

ップ」、垂木でミニチュアの柱を作る「ハシラート」のプログラムを実施した。

3期はビニール素材を使ったポンチョ作り、焼きごてで木に絵を描いたり、石膏取りした自分の指オブジェをとってにした小物入れの制作などを、時間をかけて行った。

（イ）夏休み造形教室

木や紙、金属などさまざまな素材を組み合わせたり変化させたりしてオブジェや玩具作りなど、造形スタジオの活動テーマ「すみかと造形」に関連したプログラムを取り上げた。1週間に1つのプログラム、計5つのプログラムを実施した。前年度までは1日コースだけだったが、本年度から半日コース（午前、午後の2コース）を新設した。

◎プログラムA：T・A・B（トラベラートボックス）（1日）

フロッタージュやデカルコマニー、モアレなど、各種アートの技法を使った作品の数々を制作。

◎プログラムB：パラダイ巣（1日）

木の枝や葉っぱ、土などを組み合わせて作る、不思議な生物のすみか。

◎プログラムC：あみあみアニマル（半日）

鉄の金網をベースにして、その他の金属を組み合わせて思い思いの動物を制作した。

◎プログラムD：ミルルーム（1日）

木、竹、金属などの素材を使ってインテリア模型を制作。できあがったものを特殊スコープでのぞくと、実物そっくりに見える。

◎プログラムE：ホワイトタウン（1日）

石膏の型取りの技法を使って古代遺跡を作り、秘密の地図をてがかりに発掘する。

3．グループ活動

平常期間の午前中は、受け入れ窓口の総合案内課と協力してグループ活動のプログラムを行った。

「かげをうつそう」「木をつくろう」「ねんどのジャングル旅行」と前年度から実施している「竹体験ワークショップ」を実施した。

以前から実施している3つのプログラムは、定例化したものとなっているので事前の打合せ、リハーサル、実施とスムースに運営できた。

「竹体験ワークショップ」は、造形スタジオの一般利用プログラムから生まれたもので、素材としての竹の特性をスタッフとともに手、体、道具などをフルに使い体験し、実際に竹の玩具などを制作。参加する子どもたちの年齢や経験などを考慮している。

健常児のグループだけでなく、特殊学級の子どもたちの参加があった。参加する子どもたちの状態を考慮し、実施プログラムをアレンジして実施。約1時間半の「竹体験ワークショップ」プログラムを楽しんだ。今後もそれぞれのグループに合わせた展開が重要になると思われる。

4．その他

（ア）共同事業

【紙でジャケットをつくろう】

洋紙問屋の㈱竹尾とアーチストひびのこづえ氏からの協力依頼に応え、紙の見本市「竹尾ペーパーショー2001」で新素材の紙を使って服を作ろうというプロジェクトに参加した。

「こどもクリエイティブクラブ」受講生のなかの希望者20人を対象に、ひびの氏のデザインによるジャケットに子どもたちが直接マーカーで描き、切り取り、縫いあわせて完成させた。平面的な型紙が着たときにどこに絵柄があらわれるか考えながら、ダイナミックに描いていた。応募多数で全員が参加できなかったことは残念であるが、クラブで培った経験からか、子どもたちは自分で表現をすることが素直にできていたように思う。

完成したジャケットはひびの氏のスタッフが改めて裁縫し、4月19～22日にスパイラルホール（港区）で展示された後、全国各地での巡回展示。終了後、子どもたちに返却された。異なるコースの子どもたちとも制作を共有できたこと、現役で活躍するアーティストの作品を見ながら一緒に制作したことが大きな刺激になった。

【第5回図工大好き子ども美術展】

東京都小学校図画工作専科の教師が全員参加している東京都図画工作研究会の有志の研究グループ「東京児童幼画堂」と共催で子どもたちの造形作品の展覧会を開催した。参加校は都内の小学校27校と中学校、養護学校高等部各1校。約300点の絵画、立体、オブジェ作品などが出品された。同時に、いろいろな素材を透明シールにはってコラージュするワークショップも実施した。

「第5回図工大好き子ども美術展」（イベント）

「こどもの城児童厚生員等実技指導講習会」

また、9月22日にはピロティで、道行く子どもたちが自由に参加できる、新素材のロール紙に絵を描くイベント、19日には「あしたを拓く感性の教育」と題して参加校の教師と造形スタッフの代表をパネラーに、多数の造形教育関係者が参加したシンポジウムを開いた。

展覧会場には、期間中、約3,500人の入場者があり、〔こどもの城〕を知らない人たちへアピールできた。今後も、継続して多角的に子どもの造形活動を考える展覧会、シンポジウムなどを外部の団体と協力して実施していきたい。

【ブルーノ・ムナーリ展】

造形事業部所蔵の「ブルーノ・ムナーリ巡回展キット」を長野県小海町高原美術館に貸し出し、展示、ワークショップ、ギャラリートークを行った。

展示だけなく、町立小学校の各学年の児童が美術館へ来館して、ワークショップ活動や子どもたちの家族が参加したギャラリートークを行った。子どもたちだけでなく大人も巻き込んだ活動として有意義であった。

これからの美術・造形活動を考えて行く上で、地域の学校、美術館、児童館がそれぞれ連携して事業を運営する重要性を感じた。

【特別企画「鉄はうたう」】

日本口琴協会との共催で、鉄の特性を生かして作られた音具——特に「口琴」「親指ピアノ」といったユーラシアやアフリカに広く分布するユニークな音具に焦点をあてた催し。(1) 展示（日本口琴協会の直川礼緒氏のコレクションを中心としたもの） (2) 制作体験のワークショップ (3) コンサート、クリニックなど、鉄の音具を多角的にとらえて提示した。

特に会期の前半はサハ共和国からスピルドン・シシーギン氏とインノケンティイ・ガトーチェフ氏を招聘し、伝統的なサハの口琴と新しい方法で製作されている口琴も展示した特別展を行った。

親子体験ワークショップはキャンセル待ちがでるほど好評で、展示やコンサートも問い合わせが多く盛況だった。日ごろ、来館しないような大人や親子連れなど新たな層へアピールができた。

日本口琴協会の直川礼緒氏の協力がなければ実現し得ないすばらしい展覧会であった。

【平成13年度第3回児童厚生員実技指導講習会
「アート探検ハンズオン・素材・発想2002」】

今まであまり取り上げてこなかった金属素材、高学年プログラム、前年に実施した「エリック・カール氏の手法のコラージュワークショップ」など造形活動をより多角的にとらえたプログラムの一つとして3日間実施した。

会場の研修室には、16年間の造形活動から約120点のプログラムパネルを展示した。造形スタジオで子どもたちが実際に見て、さわって、体験した体験展示物を再構成したものである。造形スタジオが引っ越したかのように変身した楽しい雰囲気の中で研修会を行い、参加者からは大変好評であった。

5. まとめ

前年度まで約3年間にわたって「素材との出会い展〜竹と造形」を実施してきた。前年の暮れからは人間を含めたさまざまな生物の“すみか”をテーマに、子どもたちが“生きる”“生活する”知恵を分かりやすく理解できるように素材、道具、制作方法を軸にした「オープンスタジオ」のワークショップを実施している。竹で学んだ自然資源、環境問題などの意味からも、“すみか”というテーマは、子どもたちにとって“生きる”知恵、さまざまな生物が共存する知恵などを、改めて理解する機会になったのではないだろうか。

また、前年度の「日本・ノルウェー友好こども絵画展」のような活動理念に共感できるものとして、本年度は「紙のジャケットをつくるワークショップ」「第5回図工大好き子ども美術展」「特別展〜鉄はうたう」など造形スタジオの活動に幅を持てるような外部との共同事業を積極的に行った。今後も継続実施していきたい。

平成13年度活動一覧表

1．一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
やってみよう！つくってみよう！「すみかと造形」	4.11～4.27 5.9 ～7.19	夏休み特別期間プログラム「オープンスタジオ～すみかと造形」に向け、人や動物などの“すみか”の不思議さやおもしろさを造形的な視点で見直し、いろいろな素材を用いて、すみかの形の違いや特質を体験的に知るワークショップ活動を実施した。
やってみよう！つくってみよう！「建築と造形」	9.7 ～10.26 11.6～12.2 2.5 ～2.17 3.5 ～3.17	「オープンスタジオ～すみかと造形」に引き続き、人間と密接な関係にある建築をテーマにいろいろな素材を使い、建築構造の重要さ、形のおもしろさなどを造形的にとらえ、春休み特別期間プログラム「オープンスタジオ～建築と造形」に向けたワークショップ活動を実施した。
こども歳時記「七夕」	7.6～7.7	「七夕」にちなんだワークショップを実施した。プログラムは「おりプラネット」（親子）。
こども歳時記「節分」	H14.1.16～2.3	「節分」の鬼にちなんだワークショップを竹を素材に使い実施した。プログラムは、「おにコローゲ」（親子）、「鬼は外　福は内」（小3 ～）。
こども歳時記「桃の節句」	2.19～3.3	「桃の節句」にちなんだワークショップを実施した。プログラムは、「おひなだんだん」（親子）、「ゆびびな」（小1～）。

〈特別期間〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
〈児童福祉週間〉こども歳時記「端午の節句」	4.28～5.5 （5.6）	「こどもの日」のこいにちなんで「のってコイ」（親子）、「ぷるっコイ」（小3～）を実施した（5.6は「ぷるぷるオブジェ」と「クーキー」／基本的な構造は同じ）。
〈夏休み〉オープンスタジオ「すみかと造形」	8.20～9.2	素材、道具、技法の関係を分かりやすく提示した「オープンスタジオ～すみかと造形」を実施した。人や動物などの「すみか」の不思議さやおもしろさを造形的な視点で見直し、いろいろな素材を用いて、すみかの形の違いや特質を体験的に学べるよう展示・体験・制作のワークショップを実施した。
〈開館記念〉第8回親子体験ワークショップ	10.27 ～11.4	「親子ワークショップ」の8回目。親子で協力して一つずつ実際に頭にかぶる大きな紙の帽子「はっとハウス」を制作した。
〈 〃 〉開館16周年記念第16回造形スタジオ展	11.1～11.25	平成12年11月から13年10月までに、造形スタジオに来館した子どもたちが制作したさまざまな作品と「こどもクリエイティブクラブ」の子どもたちの作品の展示。一般プログラムでは、実物見本と写真・キャプションで説明したプログラムボード形式の展示を行い、分かりやすい展示をめざした。
〈冬休み〉こども歳時記「クリスマス」	12.5～24	クリスマスにちなんだワークショップを実施した。プログラムは、「プレゼントハウス」（親子）、「バランスツリー」（小2～）。
〈 〃 〉こども歳時記「お正月」	12.26 ～H14.1.14	お正月にちなんだワークショップを実施した。プログラムは「ゆらりうま」（親子）、「パズルーム」（小2～）。
〈春休み〉春休みオープンスタジオ「建築と造形」	3.20～4.7	人間と密接な関係にある建築をテーマにいろいろな素材を使い、建築構造の重要さ、形のおもしろさなどを造形的にとらえたワークショップを実施した。

2. 講座・クラブなど

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
こどもクリエイティブクラブ A 土の冒険〜クレイワーク	（人） 小1〜中3 （20）	（人） ① 10 ② 15 ③ 16	火曜日 16:00〜17:30	“土”は楽しい——をテーマに、陶芸の枠組みにとらわれないプログラム活動を実施。器作りだけでなく、粘土による表現の可能性を追求し、素材を冒険的に体験しながら、子どもたちの無限の表現力を引き出すクラブ。
〃 B 素材の楽しみ〜ゆかいな造形	〃 （20）	① 20 ② 15 ③ 14	水曜日 16:00〜17:30	造形の基礎の楽しさは、素材を扱うことから始まる。紙、木、金属などさまざまな素材を組み合わせたり、変化させて、いろいろな素材がもつ創造するエネルギーを引き出す。
〃 C 版画の楽しみ〜プリントワーク	〃 （20）	① 3 ② 1 ③ 1	木曜日 16:00〜17:30	版画の領域を超えて、紙だけでなく身の回りにあるさまざまなものに色・かたち・テクスチャーなどを写していく、なんでもプリントクラブ。
〃 D イメージする楽しみ〜絵本の世界へ	〃 （20）	① 20 ② 17 ③ 18	金曜日 16:00〜17:30	絵本を描くときに使われる方法——描画材料・絵の具・インク・紙などを用いた基本的な技法からユニークな方法まで幅広く体験しながら絵本の世界を体験する。
〃 E 創造探検〜ハンズワーク	小4〜中3 （20）	① 18 ② 14 ③ 12	土曜日 16:00〜17:30	紙・竹・木・金属などの素材や新素材をじっくりと吟味しながら、素材と技法、あるいは、道具などについてより広い知識を求め、造形表現にかかわる造形力を養うクラブ。

※講座回数＝1期11回、2期12回、3期9回。
受講料＝1期27,500円、2期30,000円、3期22,500円（「クレイワーク」は各期ごとに焼成費8,000円が必要）。

〈短期講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
夏休み造形教室 A T.A.B.（トラベラートボックス）	（人） 小3〜高3 （5日間 計75）	（人） 計 50	7.25〜29 10:30〜17:00	フロッタージュやデカルコマニー、スパッタリングなど、いろいろなアートの技法をつめこんだ携帯ボックス作り。自分だけの移動美術館にした。受講料5,000円。
〃 B パラダイ巣	〃	計 55	8.1〜5 10:30〜17:00	自然のなかにはさまざまな形態の巣がある。ここでは、木の枝、葉っぱ、土、つたなどさまざまな素材を組合せ、不思議な生き物が住んでいる“巣”を作った。受講料5,000円。
〃 C あみあみアニマル	小3〜高3 （5日間 =2回／日= 計150）	計 100	8.8〜12 10:30〜13:00 14:30〜17:00	身の回りにはさまざまな種類の金属がる。「あみあみアニマル」は鉄の金網を丸めて胴体にし、アルミ、銅、真鍮など他の金属と組み合わせたユニークな動物を作った。受講料3,000円。
〃 D ミルルーム	小3〜高3 （5日間 計75）	計 75	8.15〜19 10:30〜17:00	木、竹、金属などの素材を使って、部屋やインテリアなどを作った。穴を開け、特殊スコープでのぞくと本物のような空間が広がる。受講料5,000円。
〃 E ホワイトタウン	小3〜高3 （5日間 =2回／日= 計150）	計 83	8.22〜26 10:30〜13:00 14:30〜17:00	石膏を使った型取り技法で、謎の町「ホワイトタウン」を作る。さらに石膏を流し町をふさぎ、石膏が乾いたら釘を使って町の発掘作業をする。受講料3,000円。

名　　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　　考
特別企画「鉄はうたう」親子体験ワークショップ「口琴」	（組） 小1以上の親子 （3日間計36）	（組） 延べ 22	H14.2.3、10、11 13:00～16:00	軟鉄の丸棒を素材として、全長4～5cmの小型口琴を親子で協力して制作した。 講師は鍛冶師の目次伯光氏。受講料3,000円（親子）。
〃 「親指ピアノ」	〃 （2日間計24）	延べ 24	2.17、24 13:00～16:00	鋼鉄のリボンを素材として鍵盤の数が10本ほどの比較的小型の親指ピアノを親子で協力して制作した。 講師に日本口琴協会代表で音楽家の直川礼緒氏。受講料3,000円（親子）。

3．その他

〈講師派遣〉

名　　称	期　間（日　時）	備　　考
目黒区「子育て講座（公開講座）」	H14.2.22	3・4歳児とその保護者25組を対象にした実技ワークショップ「身近な素材を使って親子で楽しめる造形」。「マペット」「ヨーヨー」などを実施した。 （目黒区向原住区センター児童館）
赤坂児童館	3.6	「身近な素材を使って楽しめる造形」。赤坂児童館に来館している小学生を対象に身近な素材を使ったワークショップを実施。実施プログラムは「ひかりのチューブ」。

〈共同事業など〉

名　　称	期　間（日　時）	備　　考
紙でジャケットをつくろう	4.8	株式会社竹尾 とアーティストひびのこづえ氏との共同事業。 紙の見本市「竹尾ペーパーショー2001」で「こどもクリエイティブクラブ」の希望者20人を対象にひびの氏デザインのジャケットに子どもたちが直接描いた。完成したジャケットは、全国各地での巡回展示。（造形スタジオ）
第5回図工大好き子ども美術展	9.11～10.7	東京都小学校図工専科教師の有志団体「東京児童幼児画堂」との共催で都内公立小学校の子どもたちの作品展を開催。（ギャラリー）
ブルーノ・ムナーリ展	7.18～9.24	こどもの城開館記念事業として「こどもの創造性をいかに引出し、心身を豊かに育てるか」という視点にたち実施した「ブルーノ・ムナーリ展」の作品を中心にした「ブルーノ・ムナーリ巡回キット」を小海町高原美術館（長野県）で展示。過去15年間で全国約20カ所の児童館や美術館などで展示とワークショップを開催している。
ひとりひとりがみえてきた！“ワクのない表現”展	11.23～H14.1.14	平成9年6月20日～7月10日に共催事業として開催した「万人のための美術展」展示作品を中心に、造形活動に関する資料の貸し出しした協力事業。（愛知県児童総合センター）
平成13年度第3回こどもの城児童厚生員等実技指導講習会	H14.1.23～25	造形事業部は過去2回、こどもの城児童厚生員等実技講習会を担当してきた。今回は「アート探検ハンズオン・素材・発想2002」のテーマで、より多角的に造形をとらえたプログラムを実施した。（研修室）
特別企画「鉄はうたう」	2.2～24	日本口琴協会との共催で、サハ共和国からスピルドン・シシーギン氏とインノケンティイ・ガトーチェフ氏を招聘し、鉄の特製を活かした音具、口琴と親指ピアノの展示（子どもたちの口琴の絵も展示した）、親子体験のワークショップ、コンサートなどを実施した。（造形スタジオ）
〃 コンサート・クリニック	2.2、9 18:30～20:00 2.8、13 18:30～20:00	スピルドン・シシーギン氏、GORO氏、直川礼緒氏による口琴、親指ピアノなどのコンサート。 スピルドン・シシーギン氏による口琴の演奏指導。（造形スタジオ）

平成13年度プログラム一覧表

1．親子プログラム

名　　称	内　　容
ケイタイハウス	色紙（小）を家やテントに見立てて折り、半分に折った色紙（大）の中にはり、飾り付けをすると完成。色紙（大）を開くと、なかから家が飛び出すポップアップ絵本になる。
のってコイ	傘袋の中に小さく切った紙を少し入れ、膨らませて口を縛る。次に紙帯を自分の頭のサイズに合わせて輪にし、膨らませた傘袋につけて、こいのぼりの飾り付けをする。できあがったら頭にかぶって遊ぶ。
クーキー	「のってコイ」の通常期間版。コイに限定しないで自由な飾り付けをする。
ペーパーゲート	色紙の帯を半分に折り、折り線から2～3本切り込みを入れ、それぞれの切り込みにいくつかの折り目をつける。帯を開いて台紙にはり、飾り付けをすると完成。にぎやかな感じの門ができる。
ミラルーム	色紙帯の真ん中にポンチで穴（のぞき穴になる）を開け、四角い箱になるように折り線をつける。ポンチ穴の対面に鏡面紙をはり、残りの面には自由に飾り付けをし、四角く組み立てるとできあがり。ポンチ穴からのぞくと、鏡面紙に反射した飾りが見える。
オープンワールド	半分に折った色紙の内側片面に紙帯をはってから、色紙の端をセロハンテープでつなげる。色紙の折り目とつなぎ目をはさむように押さえて色紙を開き、紙帯の反対端を色紙の内側反対側にはる。その紙帯に飾りをつけると完成。色紙をはさむように押さえて開くと、中に飾った世界が展開する。
おりプラネット	色紙を蛇腹状に折って中央を紙の帯でとめ、両端を広げるとお椀のような形になる。なかに七夕の飾り付けをする。
おりおりシアター	「おりプラネット」の通常期間版。自由な飾り付けをする。
くるりハウス	色紙の帯を丸めたりねじったりして好きな形を作り、台紙にとめる。できた形を家や山など自由に見立てて飾り付け、ミニチュアワールドを作る。
オープンハウス	四つ折りにした色紙を蛇腹に開くようにしたら、色紙の外側になる部分には家の外壁の飾り、内側になる部分には室内の飾りをする。色紙の両端を引っ張ると、家の中が現われるからくり絵本になる。
カドルーム	色紙を四つ折りにして広げ、折り線の一か所に中央まで切り込みを入れる。切り込みの部分をずらして、のりではると立体に変わる。これを室内に見立てて飾りつけをする。
はっとハウス	大きな色紙を自分の頭の大きさに合わせて丸め、のりとホチキスでとめる。家の飾りをすると完成。
かわるーむ	帯状の色紙を半分、半分、半分と折って広げると、色紙が八面に分割される。六面に室内の飾り付けをする。残した二面にのりをつけて反対側とつなげ、外側の飾り付けをすると完成。折り方を変えると室内の表情が次々と変わる、からくり工作。
ステップルーム	色紙帯を四角く組み立て、角から切り込みを入れて、内側に階段状に折り込む。家の中のように飾りつけをすると完成。四角い枠の中に、2・3階建てのような上下のある空間ができあがる。
プレゼントハウス	2本の色紙帯を中央でクロスさせてつなげ、それぞれ上に折り込み、箱型に組み立てる。後は飾りつけ。箱の中にクリスマスプレゼントを入れたり、箱自体を飾ったりする。
ゆらりうま	半分に割った竹を2cm程度の幅に切り、紙やすりで仕上げ、馬の飾りつけをして完成。ゆらゆらと動く、干支（馬）のおもちゃができあがる。
おにコローゲ	しの竹を3cmほどの長さにのこぎりで切り、紙やすりで仕上げ、色紙帯の端にテープでとめる。色紙帯が輪になるようにとめ、飾り付けをする。おきあがりこぼしのようなおもちゃになる。
X-ハウス	2枚の色紙を半分に折って、それぞれの折り線に半分まで切り込みを入れて、切り込みどうしを組み合わせる。それぞれの面に飾りつけをすると、絵本のようにページがめくれるおもちゃができる。
おひなだんだん	色紙帯を蛇腹に折ったものを広げて、両端を向かい合わせにしてとめる。段々になっているところにお雛様の飾りつけをする。

名　称	内　容
やねやねん	色紙に切り込みを数本入れ、切り込みを重ねて立体にする。家に見立てて飾りつけをすると完成。
エアースペース	家の中にあるものの飾りをつくり、ビニール袋の中にテープでとめる。ビニール袋を膨らませて封をすると、透明感のある家ができる。

2. 子どもだけのプログラム

名　称	内　容
巣カップ	紙管を半分に切り、別の紙管につけてカップ状にする。毛糸や小枝、寒冷紗などを使って巣のようにし、なかの生き物を作ると完成。(小2以上、1時間)
ぷるっコイ	半分に割った竹と小さく切った2個のしの竹に、それぞれ手回しドリルで穴を開ける。次に、真ちゅう針金を竹ひごに巻き付けてバネを2本作り、それぞれにしの竹半分に割った竹を組み合わせる。これにこいのぼりの飾りつけをするとできあがり。飾りがバネの力でぷるぷると動く。(小3以上、1時間)
ぷるぷるオブジェ	「ぷるっコイ」の平常期間版。コイに限定しないて、自由な飾り付けをする。(小3以上、1時間)
のびーるハウス	紙管と色紙を組み合わせてカップ状のものを作り、中に入れる1～3階の床を別の色紙から切り出し、蛇腹に折った色紙帯でつなぐ。カップと全ての床の中央に穴を開けて竹ひごを通し、屋根をと飾りをつける。竹ひごを動かすと、カップの中から3階建ての家がでてくる仕掛けおもちゃになる。(小2以上、1時間)
巣DE巣（すです）	段ボールの土台に4本の小枝を差し込み、それらに毛糸や枯れ葉、フェルトの切れ端などを組み合わせてすみかを作る。自分の好きな生き物を、小さく切ったしの竹で作って入れる。(小2以上、1時間)
幻街(まぼろしタウン)	紙管の片面に、スクリーンにするトレーシングペーパーをはり、余った部分を切り取る。次に別のトレーシングペーパーを側面に巻き付けて筒状にしたら、本体のできあがり。紙で作った飾りを筒の内側に立ててはったり、筒に直接描いたりして直進光にかざすと、飾りがスクリーンに投影される。(小2以上、1時間)
まわるーむ	色紙を2枚重ねて巻いて筒状にする。内側の筒に切り込みを入れ、内側に折り込んでステージを作り、底に回転用の竹ひごをつける。外側の筒にも切り込みをいれて大きな窓を作り、内側の筒と組み合わせる。ステージの真ん中に壁をつけて、壁の表側と裏側に違う飾り付けをする。竹ひごを回すと、回り舞台のようにステージが回転し、反対側の飾りが現われる。(小2以上、1時間)
プルプル巣DE巣	「巣DE巣」のバージョンアップ版。真ちゅう針金を竹ひごに巻き付けて作ったバネを、しの竹で作った生き物につけて土台とつなぐ。生き物がバネの力でぷるぷると動く。(小2以上、1時間)
ナンノス	紙バンドを輪にし、片側に別の短かめの紙バンドを二本つけてカップ状にする。毛糸や小枝、和紙などをつけて巣のようにし、中の生き物を作ると完成。(小2以上、1時間)
どっちもハウス	四角い段ボールの中央にポンチで穴を開けて、ストローを差し込む。側面の一つには持ち手にする平竹を入れ、残り三つの側面にそれぞれ色紙をつける。次に竹ひごの片端にたこ糸を三本つけたものをストローに通し、たこ糸をそれぞれの色紙につける。たこ糸の反対端は、ぴんと張った状態で竹ひごの端につける。後は、段ボールと色紙の表裏にそれぞれ部屋の飾り付けをする。竹ひごを上下させると、たこ糸に引っ張られて色紙の壁がひっくり返り、上下異なる部屋が現われる。(小3以上、1時間30分)
キューブロックハウス	発泡スチロール片をヒートカッターで2つに切り、土台に自由につけ、家に見立てて飾りをつける。(小2以上、1時間)
オルルーム	紙の帯を輪にし、好きな形に折り目をいれて台紙にとめる。家に見立てて室内外を飾りつけると、インテリア模型のようなカットハウスができる。(小2以上、1時間)
ダンだんランド	段ボールから土台になる島の形を決めて切り出し、別の段ボールからはその他の島々を切り出す。島のそれぞれにポンチで穴を開け、柱にするストローを通してで何段かにつなげ、飾りつけをする。島の上にいくつもの島が浮いているような、不思議な世界ができる。(小2以上、1時間)
クルクルランド	段ボールの中央に穴を開けてストローを固定したら、角2か所にゴム用の穴を開ける。次に、片端にゴムをとめた竹ひごをストローに差し込んで、ゴムを先程の穴に入れてとめる。後は飾り付けをすると完成。竹ひごを回すと、ゴムの力で段ボールが回りながら上下する。(小1以上、1時間)

名　称	内　容
ループハウス	色紙の帯を好きな形に丸めて、交わるところをはさみで切って組み合わせる。これを台紙にとめ、飾り付けをする。曲線で構成された建物の俯瞰模型ができあがる。(小1以上、1時間)
バランスツリー	半分に割った竹を2～3cm幅に切り、真ん中に手回しドリルで穴を開け、竹ひごを差し込む。飾り用の竹を自由に切って穴を開け、竹ひごに通し、クリスマスの飾り付けをする。ゆらゆらと動くツリーができる。(小2以上、1時間)
パズルーム	一本の垂木（3cmほどの角材）から同じ大きさの駒を6個切り出し、それぞれの上面を部屋とみなして飾りつけする。段ボールの縁に色紙の帯をつけて箱を作り、駒を中に入れて完成。駒を動かして場所を変えると、部屋の構成を次々と変えられる。(小3以上、1時間半)
鬼は外　福は内	本体にする竹を7～8cmの長さに切り、真ん中に貫通穴を開けて竹ひごを差し込む。次にその中に入る大きさのしの竹を2個切りだし、中央に穴を開ける。竹ひごとともに、本体の竹の中で竹ひごをまたぐように組み込み、節分の飾りつけをする。ゆっくり振ると、本体の竹の中から飾りのついたしの竹が左右にぴょこぴょこと飛び出す。(小3以上、1時間)
コアハウス	薄い段ボールから1～3階の床を切り出し、色紙帯でそれぞれに壁を作る。1階と2階の壁には柱にする竹ひごをつけ、2、3階の壁には下の階からの柱が通るストローをつける。各階を順番に組み合わせ、飾りつけをする。2、3階がクルクルと動く、おもしろい建物ができる。(小2以上、1時間)
ゆびびな	段ボールの台座に竹ひごを2本差し、背屏風にする段ボールをL型にとめる。しの竹を4～5cmの長さに2本切り、それぞれに雛人形の飾りつけをする。台座と背屏風にも飾りつけをし、雛人形を竹ひごに飾ると完成。作った雛人形は、指人形にもなる。(小1以上、1時間)
カットDEハウス	垂木をのこぎりで切る。切り離した垂木を好きな形にはり合わせ、建物に見立てて飾りつける。(小2以上、1時間)
ハシラート	垂木の上下に薄ベニヤ板をはり、柱に見立てて自由に飾りつけをする。小4以上のコーナーでは、釘打ちやドリルで穴開けをするなど、工作の範囲を広くしている。(小2以上、1時間)

音楽事業部

平成13年度の活動

音楽ロビーを一般活動の拠点とし、スタジオは特別な催しと講座・クラブの活動の場とするという形が定着した。設計段階では音楽ロビーは子どもたちの活動の場所とは考えられていなかったが、長年の実験的プログラム実施の積み重ねで、ユニークな音楽遊びが展開されるオープンスペースとして〔こどもの城〕の中でもなくてはならない遊びの場となった。

手作りの楽器や民族楽器などをそろえ、いかに音楽の楽しさと共感する喜びを子どもたちに伝えることができるかをコンセプトにプログラム開発を行い、環境整備に工夫を重ねている。

1．一般利用

（ア）平常期間

平日は、一日1回の音楽遊びのメインイベントを核として、ストリートオルガンの体験と童謡コンサート「うたってハッピー」を数回実施している。

音楽遊びのプログラムでは、特に親子のスキンシップがはかれる歌遊びやダンスが中心となっている。1回30分のプログラムの流れのなかで、歌遊びや手遊び、ダンスなどをどのように組み立てていくのかが大切になる。構成の仕方一つで、それぞれの遊びが魅力あるものになっていく。プログラムの流れのなかで“動”と“静”のめりはりをつけるうえに最適なパネルシアターを取り入れるなどの工夫をした。スタッフは日々「構成」の研究を重ねている。

日曜・祝日には、午後0時30分から5時までの間に、4種類7回のプログラムを組んでいる。ストリートオルガンの体験、童謡コンサート「うたってハッピー」、音楽遊びの「音楽広場」、そして世界の民族楽器が体験できる「いろいろ楽器コンサート」である。本年度からは、それらのプログラムの合間をぬって管楽器や打楽器による編成のマンボ・ポルカ・サンバなどの演奏を始めた。自然に体が動き出すような楽しい選曲で、子どもたちも自由に楽器を鳴らし、常に音楽で遊べるスペースとなった。

[わいわいスタジオ]

世界各地の民族音楽を定期的に取り上げて、来館する親子に鑑賞型の音楽体験の場を提供している。

本年度は、草笛のコンサート、アフリカンタムタムの大合奏、おはなしと音楽でつづるクリスマス、ラテン音楽ビッグバンドなどを実施、好評を博した。

また、手作り楽器ワークショップも「わいわいスタジオ」の枠として毎月のように実施、参加型のプログラムとして確立された。フィルムケースを素材にした「カモを呼ぶ笛」や「まわす鳥笛」などユニークなものが子どもたちの人気をよんだ。

（イ）特別期間

【ゴールデンウイーク（児童福祉週間）特別期間】

◎おんがくがスキ!

9年目となる〔こどもの城〕のスタッフによるオリジナルバンド「ガドガド」のコンサート。音楽事業部で行っている日々の活動の要素を1時間に凝縮して構成。さまざまな音楽遊びに加え、民族楽器や手作り楽器などを紹介する演奏などをおりこみ、ほかでは体験できない音楽プログラムになっている（5月5日青山円形劇場）。

◎太鼓がいっぱい「たいこフェスタ！」

音楽事業部が所有する世界各国の太鼓を体験できるコー

太鼓がいっぱい「たいこフェスタ！」

ナーを音楽ロビーの一角に設けた。特にアジア各国――韓国やタイ、ベトナム、ミャンマー――の太鼓などは形も珍しく、人気をよんだ。またアフリカの太鼓にあわせて展開するリズム遊びや、ブラジルのサンバで踊るダンスプログラムなども実施した。

【夏休み特別期間】

◎世界の楽器にチャレンジしよう！「面白楽器商店街」

世界各地の民族楽器、がらくたを集めて作った楽器など、素材やジャンル別に5つのコーナーに分けて、それぞれを“楽器屋さん”として設定。音楽ロビー全体を、いろいろな“楽器屋さん”の立ち並ぶ商店街としたプログラム。各店自慢のプログラムで、子どもたちの即興的な合奏やリズム遊び、ダンスやクイズなどの音楽遊びが体験できる。

インドネシアの竹楽器で合奏体験ができる「竹屋」、青銅でできたインドネシアの楽器ガムランの合奏をする「青銅屋」、アフリカやブラジルの太鼓を体験してダンスプログラムも行う「皮屋」、中国・南米・日本・ヨーロッパの珍しい楽器が体験できる「めずらし屋」、台所用品などで演奏する「がらくた屋」が軒を連ねた。

【冬休み特別期間】

◎へんしん大飯店

正月の企画として定着した「へんしん大飯店」。音楽ロビーは中国ふうの飾りつけで赤と金に染め上げられ、中国楽器の生演奏も繰り広げた。さまざまな変身グッズを用意し、子どもだけでなく大人も変身して家族で楽しめるプログラムとなった。

ストリートオルガンの体験から始まり、チャイナ服に身をつつんだスタッフによるマンボ・ポルカの演奏、童謡コンサート「うたってまんぷく！」、音楽遊びのプログラム「へんしん大宴会」、世界各地の楽器を体験する「たらふくコンサート」を実施した。

【春休み特別期間】

◎みんなでおどれ春ダンス！

ダンスプログラムの「みんなでおどれ春ダンス！」を実施。アフリカンドラムに合わせたダンスや、ブラジルのサンバダンス、親子で楽しむフォークダンスに加えて、本年度の新プログラムはインドネシアの神秘的な踊り“ジョゲダンス”。インドネシアの竹楽器「ジョゲットブンブン」に合わせて、インドネシアの衣裳をまとったスタッフが踊り、子どもたちもほかのダンスとは違う不思議なゆっくりとした踊りを体験し、楽しんだ。

世界の楽器にチャレンジしよう！「面白楽器商店街」

2. 講座・クラブなど

開館して15年が経過し、見直しが必要な講座・クラブもある。恒常的に定員割れしているものについてはクラス統合や時間短縮などの措置をした。統合により活気がもどったものもあり、今後も必要な見直しを進めていく。

また、夏休み特別期間には、「親子で作ろう 手作り楽器のワークショップ」を開催。楽器を作るだけでなく、作った楽器を演奏して楽しむという、音楽的アプローチを強く打ち出した半日講座を実施した。

（ア）ぼくらのサウンド2002

年度末の春休み特別期間直前の3日間、音楽事業部の講座・クラブ受講生が1年間の成果を発表する合同コンサート。青山円形劇場で開催。講座・クラブの発表の場である

「ぼくらのサウンド2002」

「へんしん大飯店」

「みんなでおどれ春ダンス！」

と同時に、一般の来館児・者などにも、広く〔こどもの城〕の活動を知ってもらうことも目的としている。全5公演で約400人のメンバーが出演した。

（イ）こどもの城児童合唱団 平成13年度児童福祉文化賞受賞記念公演

こどもの城児童合唱団が、平成13年度の児童福祉文化賞を受賞したのを記念して、平成14年2月3日に青山劇場で「こどもたちからのサウンドメッセージ　うたは友だち」の公演を行った。ゲストとして、かねてから交流の深いクニ河内、浜田均、野田美佳らの音楽家各氏を招いた。

（ウ）夏休み・手作り楽器ワークショップ

夏の手作り楽器ワークショップも5回目を迎え、Bスタジオで行った。本年度は例年好評の「竹のハンドベル～アンクルン」「アフリカン・ジェンベ」「竹のたて笛スリン」「宇宙人の声が出せる～口琴」に加え、新プログラム「アフリカのおしゃべり太鼓タマ（トーキングドラム）」を実施した。講師に西アフリカ、セネガル出身のパーカッショニスト、ワガン・ンジャエローズ氏を招き、氏の全面的協力のもとに講座を開講した。

全プログラムの受講者はほぼ定員一杯（充足率90％以上）となり夏の企画として定着した感がある。リピーターも非常に多く、新プログラムのニーズも高い。期待も大きい分だけに今後どのような新しいものを提供できるかということも課題となっている。

3. グループ活動

〔こどもの城〕のグループ活動全体の利用件数のうち約半数を音楽プログラムが占めている。それだけ利用する側のグループの要望にフレキシブルに対応できる柔軟で積極的な姿勢と応用力のあるプログラムが用意できているといえよう。幼稚園・保育所はもとより、盲学校、養護学校、インターナショナルスクールの利用も多く、小学校高学年の楽器体験のニーズにも対応できる形が整っている。

4. その他

派遣事業は要望も多く、積極的に展開している。グループ活動と同じく各団体の要望に応えて一つひとつがオーダーメイドのような形をとっている。型にはまったものだけでは限界もすぐにくる。できるだけあらゆる要望に応えていくことでスタッフも試行錯誤し、新しいプログラム展開へのヒントとなることも多く、逆に〔こどもの城〕の一般来館児・者活動へフィードバックされていくこともある。

各地に出向くことで〔こどもの城〕の存在をアピールし、また各団体から学べることも多い。今後も積極的に取り組んで行きたい。

5. まとめ

幼児・小学校低学年向けのプログラムについては、15年以上の活動を経てさまざまなものを作り、それらを基本スタイルとして目的に合わせて発展させていくベースができた。今後さらに力を入れるべきものとしては、高学年のプログラムがあげられる。

今までは高学年のニーズに対しては講座・クラブの活動の中で応えていくということが基本姿勢で、音楽ロビーは特に「小さい子どもたちの遊び場」というイメージが強い。平成14年度から学校5日制が導入されるということもあり、高学年や中学生の児童も興味がもてる民族楽器・洋楽器・邦楽器・電子楽器などのプログラムをどのような形で提供できるかが今後の大きな課題である。

平成13年度活動一覧表

1．一般利用

〈平常期間〉

名　称	期 間（日 時）	備　考
みんなでライブ！	毎週火曜日 14:30～15:00	子どもたちのよく知っている手遊び、季節に合わせたパネルシアター、童謡、体を動かす遊びのプログラム。音楽を楽しむ中で、親子のふれあいを感じるものを取り入れている。親子がペアになって楽しむダンスも好評で引き続き行っている。（音楽ロビー）
すいようパチパチパーク	毎週水曜日 15:30～16:00	歌遊び・手遊びを中心とした参加型プログラムと、アフリカ、インドネシア、ブラジル、中国の音楽を聞かせる観賞型プログラムを実施。後者は観賞型であるが、使用した楽器に触れたり、スタッフと演奏する参加部分も設けた。（音楽ロビー）
木曜なかよし広場	毎週木曜日 14:30～15:00	親子を対象としたプログラム。音楽を聞き、体を使い、体を動かして自由に表現をすることをねらいとしている。ピアノ、ドラムなどの伴奏でリズム運動や歌遊び、ダンスなどさまざまなものを取り入れた。参加する子ども用の手作りの名札が大変好評だった。（音楽ロビー）
王さんの楽器屋さん	毎週木曜日 15:30～16:00	音楽スタッフ扮する「楽器屋さん」が世界各地の楽器を紹介する、鑑賞と体験をねらいとしたプログラム。素材別のテーマで毎週違う楽器を紹介した。ボランティアによる導入の手遊びやサンバの演奏等も行っている。（音楽ロビー）
みかんちゃんずのオバオバサンバ！	毎週金曜日 15:00～15:30	サンバのリズムに合わせて、体を動かすことに重点をおいた。ただ動かすのではなく、最後に新聞の中に飛び込む障害物を設けたことで、家庭ではなかなかできないことを体験できると好評。引き続き女性ボランティアが中心になって活動している。（音楽ロビー）
ハートフル・ライブ	毎週土曜日 13:00～13:30 14:00～14:30	演奏を聞く・楽器に触れて演奏してみるという体験をとおして、さまざまな音楽を楽しむ鑑賞・体験合体型のコンサート。日本・中国・インドネシアをはじめ世界の楽器を、毎回テーマ（「弦楽器のおと」など）に沿って紹介。インドネシアの竹の楽器、アフリカの楽器の二つが新プログラムに加わった（「おはなし人形広場」がない週は15:00～15:30も実施）。（音楽ロビー）
うたってハッピー	毎週日曜日・祝日 13:00～13:30 14:00～14:30 15:00～15:30 16:00～16:30	歌、シンセサイザー、ベース、ドラムという楽器編成のバンドでさまざまな歌を演奏。レパートリーは童謡のほか、アニメのヒットソングなどのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しんだ。それぞれのスタッフが毎回工夫し、個性豊かな内容を展開することができた。（音楽ロビー）
マンボ・ボルカ！	毎週日曜日・祝日 13:45～14:00 14:30～15:00 15:45～16:00	マンボ、ボルカ、サンバなどのリズミカルな楽曲を、マリンバ、サックス、フルート、トランペットなどの楽器で演奏。子どもたちはそれらの楽曲に合わせて手作り楽器や木琴などを自由に演奏する（「みんなであそぼう！　音楽広場」を実施する日は14:30の回は無し）。（音楽ロビー）
みんなであそぼう！音楽広場	毎週日曜日・祝日 14:30～15:00	担当職員一人ひとりの個性とレパートリーを生かした手遊び、歌遊び、リズム遊びを中心とした豊富な内容に、パネルシアターやダンスなども加えバラエティー豊かなプログラム。本年度は特に親子で楽しめる内容を充実させるよう心掛けた（「わいわいスタジオ」のある日は実施しない）。（音楽ロビー）
いろいろ楽器コンサート	毎週日曜日・祝日 16:30～17:00	世界各地の楽器を演奏し、紹介・体験する参加型のプログラム。世界のさまざまな楽器を演奏し、楽器の特長を紹介。ふだんなかなか体験できることのない楽器に触れ、文化までも感じとれるよう構成した。（音楽ロビー）
わいわいスタジオ	日曜日・祝日 （ほぼ隔週） 13:30～14:00 15:30～16:00	来館している親子全般を対象にしているコンサートで、幼児でも楽しめるように構成している。アフリカ、インドネシア、ブラジル、中国などの民族音楽、ラテンジャズやロック、草笛、手作り楽器のワークショップなど、常に新しい企画、さまざまなジャンルの音楽を取り上げるように努めている。（Bスタジオ）

〈特別期間〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
〈児童福祉週間〉 いろいろ楽器コンサート	4.28～30、5.3～6 16:30～17:00	世界の民族楽器を紹介するコンサート。アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、インドネシアのアンクルン、カリブ海のスチールドラムを演奏。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 うたってハッピー	4.28～30、5.3～6 13:00～13:30 14:00～14:30 15:00～15:30 16:00～16:30	歌、シンセサイザー、ベース、ドラムという楽器編成のバンドでさまざまな歌を演奏。レパートリーは童謡のほか、アニメのヒットソングなどのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる。それぞれのスタッフが毎回工夫し、個性豊かな内容を展開することができた。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 太鼓がいっぱい たいこフェスタ	5.3～6　開館時間中	世界各国の太鼓の展示と体験。ミャンマー、ベトナム、タイ、インドネシア、トルコ、ペルーなど。アフリカの太鼓やブラジルのサンバを体験するリズム遊びを14:30から行った。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 ゆったり親子のおんがく園	5.3～6　開館時間中	0～3歳の乳幼児と親がゆったりとした雰囲気のなかで音のでるおもちゃ〔音具〕で遊ぶことのできる部屋として前年度に引き続き開園した。親子のふれあいを楽しむためのスペースと位置づけられ、大勢の親子に利用された。（Aスタジオ）
〈 〃 〉 おんがくがスキ！	5.5　11:00～12:00 13:30～14:30 15:30～16:30	毎年恒例になった〔こどもの城〕オリジナルプログラムのコンサート。民族楽器やがらくた楽器をまじえたバンド編成で、音楽の楽しさを個性的なアプローチで訴えている。会場参加の遊びの部分も充実し、ファミリーで楽しめた。（青山円形劇場）

「わいわいスタジオ　草笛コンサート」。演奏を聞くだけではなく、草笛の吹き方を教わりました。

名　称	期 間（日 時）	備　考
〈夏休み〉 いろいろ楽器コンサート	7.20～8.5 16:30～17:30	世界の民族楽器を紹介するコンサート。アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、インドネシアのアンクルン、カリブ海のスチールドラムを演奏。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 夏のごいっしょライブ	7.20～8.5 13:00～13:30 14:00～14:30 15:00～15:30 16:00～16:30	歌、シンセサイザー、ベース、ドラムという楽器編成のバンドでさまざまな歌を演奏。レパートリーは童謡のほか、アニメのヒットソングなどのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる。それぞれのスタッフが毎回工夫し、個性豊かな内容を展開することができた。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 みんなであそぼう！音楽広場	7.20～8.5 14:30～15:00	担当職員一人ひとりの個性とレパートリーを生かした手遊び、歌遊び、リズム遊びを中心とした豊富な内容に、パネルシアターやダンスなども加えバラエティー豊かなプログラム。今年は特に親子で楽しめる内容を充実させるよう心がけた。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 面白楽器商店街	8.6～31　開館時間中	世界各地の民族楽器、がらくたを集めて作った楽器など、素材やジャンル別に5つのコーナーに分けて、それぞれを「楽器屋さん」として設定し、音楽ロビー全体をその楽器屋の立ち並ぶ商店街としたプログラムである。（音楽ロビー）
〈冬休み〉 わいわいスタジオ～クリスマススペシャル	12.23・24 13:30～14:00 15:30～16:00	歌とピアノ、人形のジェームスで展開するファミリーコンサート「うたおうクリスマス」と、5人のアカペラグループによる「歌のクリスマスプレゼント 5人のアカペラコンサート」を行った。（Bスタジオ）
〈 〃 〉 うたってハッピー	12.22～24 13:00～13:30 14:00～14:30 15:00～15:30 16:00～16:30	歌、シンセサイザー、ベース、ドラムという楽器編成のバンドでさまざまな歌を演奏。子どもたちに大人気のクリスマスソングを中心に演奏し、親子で楽しむ姿が多くみられた。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 いろいろ楽器コンサート	12.22～24 16:30～17:00	世界の民族楽器を紹介するコンサート。アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、インドネシアのアンクルン、カリブ海のスチールドラムを演奏。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 へんしん大飯店	H14.1.3～7　開館時間中	平成12年の春休み特別期間にスタートしたプログラム。華やかな装飾と扮装で一年の始まりらしい雰囲気をかもしだした。子どもたちも大人も変身グッズを身につけ、日常とは違った空間を演出。変身したお母さんの姿にびっくり！という子どもがいたり、親子で楽しむきっかけ作りになっていた。弾き語りの「うたって　まんぷく」、歌遊びやダンスを楽しむ「へんしん大宴会」、世界の音楽を紹介する「たらふくコンサート」などのプログラムが行われた。合間にはスタッフによるマンボやボルカが演奏され、楽器をもって子どもたちとスタッフが自由に接する時間も好評だった。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 ゆったり親子のおんがく園	1.3～7　開館時間中	対象の中心は親子だが、家族で訪れ祖父母などと一緒に過ごし、こころゆくまで滞在し、ゆっくりすごす人たちがたくさんいた。今回はロビーの「へんしん大飯店」も小さい子どもから楽しめるとあって、混雑のない落ちついた雰囲気が保てた。（Aスタジオ）

名　称	期 間(日 時)	備　考
〈春休み〉 みんなでおどれ 春ダンス！	3,26～4.7 14:30～15:00	アフリカンリズム、サンバ、フォークダンス、ヒップホップのリズムに合わせてダンスをするプログラム。簡単なステップを組み合わせ、参加した人がすぐに踊れるように工夫した。本年度は新たにインドネシアの「ジョゲットブンブン」という竹楽器にあわせたダンスを取り入れた。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 いろいろ楽器コンサート	3,26～4.7 16:30～17:00	世界の民族楽器を紹介するコンサート。アフリカの太鼓、ブラジルのサンバ、インドネシアのアンクルン、カリブ海のスチールドラムを演奏。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 うたってハッピー	3.26～4.7 13:00～13:30 14:00～14:30 15:00～15:30 16:00～16:30	歌、シンセサイザー、ベース、ドラムという楽器編成のバンドでさまざまな歌を演奏。レパートリーは童謡のほか、アニメのヒットソングなどのリクエストも多く、子どもたちが積極的にロビーの楽器を楽しめる。それぞれのスタッフが毎回工夫し、個性豊かな内容を展開することができた。（音楽ロビー）
〈 〃 〉 ゆったり親子のおんがく園	3.26～4.7　開館時間中	ロビーが大きな子どもたちでにぎわっていたため、落ちついてすごせる「おんがく園」を利用する0～3歳ぐらいの親子が多く、混雑気味であった。混雑時も落ちついた雰囲気を保つ工夫をしていきたいというのが今後の課題である。（Aスタジオ）
〈 〃 〉 ぼくらのサウンド2002	3.22　17：00～	「和太鼓グループ」「レッツ・プレイ・サンバ」「レッツ・プレイ・サンバ初級」「エレクトリックアンサンブル」の公演。（青山円形劇場）
	3.23 14:00～／16:30～	「おかあさんもいっしょリトミック」「合唱講座」「こどもの城合唱団」「混声合唱団」の公演。（青山円形劇場）
	3.24　13：00～	「リズム・ムービングA・B・C」「リズム・ムービング&パーカッション」「パーカッション・アンサンブル」の公演。（青山円形劇場）
	17：00～	「三味線」「ガムラン講座」の公演。（青山円形劇場）
平成13年度児童福祉文化賞受賞記念公演 こどもたちからのサウンドメッセージ～うたは友だち	2.3　11：00～	児童福祉文化賞の受賞記念公演として青山劇場で公演。この賞は毎年中央児童福祉審議会によって選ばれた特別推薦文化財の中から、特に優れた児童文化財及び児童文化活動に対し、厚生労働大臣から表彰されるものである。ゲストに兼ねてから交流のあるクニ河内／浜田均／野田美佳らの音楽家をむかえた。後援は、(財)児童健全育成推進財団。（青山劇場）

こどもの城児童合唱団公演「時をつなぐサウンドメッセージ～ずっと友だち」(平成12年8月27日・青山劇場)が、平成13年度児童福祉文化賞（舞台芸術部門)を受賞（写真右)、その受賞記念コンサート「こどもたちからのサウンドメッセージ～うたは友だち」が、たくさんのゲストを招いて青山劇場で行われました（写真左)。

2. 講座・クラブなど

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
リズム ムービングA	(人) 3歳児 (12)	(人) ① 8 ② 7 ③ 6	火曜日 14:30～15:20 (全32回)	身の回りのさまざまなことからリズムを感じさせ、子どもたちの眠っている感覚を揺り動かし、創造性を引き出し、はぐくむことをめざした活動を行っている。主にコンガ、ボンゴなどの打楽器、リズムやメロディー、ハーモニーを即興で演奏できるオルフ楽器を使用しているが、そのほかに聞こえた音を全身で表現したり、造形活動を行ったりしている。楽譜は使用していない。受講料＝1・2期21,000円、3期14,000円。
〃 B	4・5歳児 (20)	① 18 ② 15 ③ 12	火曜日 15:30～16:20 (全32回)	
リズムムービング&パーカッション	小1～3 (15)	① 9 ② 9 ③ 8	火曜日 16:30～17:20 (全32回)	リズムによる自己表現を行う。さらに読譜力など、音楽的基礎力の理解、打楽器演奏法の導入、オルフ楽器を使った即興演奏をするなど一歩踏み込んだ指導を行う。受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
パーカッションアンサンブル	小4～高3 (15)	① 24 ② 21 ③ 20	火曜日 17:30～19:30 (全32回)	さまざまな打楽器をふんだんに使い、演奏したり、体を楽器にしてリズム打ちを行ったり、子どもたちのはじけるようなリズム感を表現する。初心者もていねいな指導で、すぐに楽しんでいる。 受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
おとなのためのリズム・ムービング	18歳以上 (15)	① 14 ② 12 ③ 8	火曜日 18:00～19:30 (全16回)	本年度から開講。かねてから要望のあった大人のためのコース。小学校教諭や音楽教室の指導者、一般企業の会社員や子どもコースの保護者とさまざまなメンバーが集まった。受講料＝1・2期15,000円、3期10,000円。
おかあさんもいっしょ（リトミック） I	(組) 3歳児と母親 (20)	(組) ① 24 ② 19 ③ 18	水曜日 14:00～15:00 (全32回)	子どもの発達段階に即したリズム遊び、歌遊び、簡単な造形活動をとおして親子のコミュニケーションを図り、音楽を楽しむ心と豊かな感受性を養うことをめざしている。 受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
〃 II	4歳児と母親 (20)	① 20 ② 20 ③ 18	水曜日 15:00～16:00 (全32回)	初級（I）で培ってきた感性や音に対する感受性を引き続き伸ばすよう心がけ、それぞれの成長の実際に合わせながら、個性豊かな発達を促すような活動へとさらに高めていっている。 受講料＝「おかあさんもいっしょI」と同じ。
〃 III	5歳児と母親 (20)	① 17 ② 16 ③ 15	水曜日 16:00～17:00 (全32回)	就学を迎えるころになると子どもの感受性も親離れが始まり、子どもたち同士の接触の機会が多くなる。生き生きと目を輝かせて音楽を楽しみ、遊んでいる子どもたちが印象的。受講料＝「おかあさんもいっしょI」と同じ。
シンセワーク初級	(人) 中1～高3 (8)	(人) ① 4 ② 1 ③ 1	金曜日 17:00～18:00 (全29回)	シンセサイザーの基礎やコンピュータとの接続、レコーディングなどを体験する基本講座。本年度から1年間の講座となり、2期後半から3期にかけてはバンド実習も行う。受講料＝1・2期13,000円、3期11,000円。
和太鼓グループ	小3～高3 (12)	① 19 ② 17 ③ 16	土曜日 14:00～15:30 (全32回)	湯島（東京都文京区）に伝わる「助六太鼓」のコース。大太鼓、中太鼓、締め太鼓の3種の太鼓を使って演奏する組み太鼓。口唱歌で指導している。 受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
レッツ・プレイ・サンバ初級	小1～3 (10)	① 9 ② 9 ③ 7	土曜日 13:00～14:00 (全15回)	本年度は試験的に開講。サンバ講座の入門コースとして位置づけている。サンバの打楽器のアンサンブルを核にゲーム、楽器作りなども取り入れた。 受講料＝1・2・3期6,000円。
レッツ・プレイ・サンバ	小4～高3 (10)	① 15 ② 14 ③ 14	土曜日 15:30～17:00 (全29回)	ブラジルの独特な打楽器を使い、サンバのリズムを楽しくアンサンブルするコース。対象年齢を引き上げたため、より高度で力強い演奏を展開している。受講料＝1・2期15,000円、3期14,000円。

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
合唱講座	(人) 小1～4 (30)	(人) ① 35 ② 36 ③ 37	土曜日 14:00～15:30 (全32回)	遊ぶことをとおして無理なく声を出し、身体表現なども取り入れて、上手に歌うことだけではなく、体全体で音楽を表現するユニークな合唱活動プログラム。受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
こどもの城児童合唱団　I	小2～3 (30)	① 42 ② 40 ③ 40	土曜日 15:30～17:30 (全32回)	音楽をとおし、協調性・創造性・幅広い知的好奇心を養い、豊かな音楽性を育てることを目的としている。合唱活動だけでなく野外活動、シンセサイザーやリズム楽器による合奏なども体験するユニークな総合プログラムを展開。受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
〃　II	小4～中3 (60)	①111 ②110 ③107	土曜日 17:00～19:00 (全32回)	
混声合唱団	高校生以上 (15)	① 51 ② 49 ③ 49	土曜日 19:00～21:00 (全32回)	子どもたちに豊かな音楽や表現のすばらしさを伝えることをめざしている。コンサートや合宿などのときは、常に「こどもの城児童合唱団」と活動をともにしている。受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
エレクトリック・アンサンブル	中1～高3 (8)	①　7 ②　6 ③　6	土曜日 10:00～12:00 (全32回)	アンサンブルの中での各楽器の役割が分かりやすいバンド形式のプログラム。無限の音色が操れるシンセサイザーを活用することで、さまざまなジャンルの音楽にチャレンジしている。 受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
三味線講座　A	小2～高3 (12)	① 15 ② 12 ③ 12	日曜日 10:00～11:30 (全32回)	「ぼくらのサウンド」に加え、毎年出演している田島講師主催の「三味線のつどい」では「わらべ歌」「太鼓の曲」を演奏。プロの演奏家とともに熱演。4月からの教育指導要領の改定に伴い、学校教育の中に邦楽器が取り入れられるようになった。これに関連して、イベントへの出演依頼や新聞などの取材(NHK「シリーズ日本の音色」)が前年度に比べ増加。邦楽器への関心度の深まりを、受講している子どもたちも実感している。 受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
〃　B	小2～高3 (12)	① 13 ② 12 ③ 10	日曜日 11:30～12:45 (全32回)	
ガムラン講座	小1～高3 (15)	① 15 ②　7 ③　7	日曜日 13:00～14:30 (全32回)	インドネシアの青銅の打楽器アンサンブル「ガムラン」の初心者のクラス。さまざまな音楽的な要素が潜在しているガムラン音楽は、アンサンブルすることでその特異さが分かる民族音楽。 受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。
ガムラングループ	小4～高3 (15)	①　7 ②　5 ③　5	日曜日 14:30～16:00 (全32回)	ガムラン講座の修了者のコース。年齢の差を超えて、子どもたちは打楽器の合奏を楽しむことができる。「ガムラン講座」修了者と経験者が一緒になってアンサンブルを楽しみ、練習している。 受講料＝1期17,000円、2期18,000円、3期13,000円。

《講習会》

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
おんがく星みつけた	(人) 2歳児と母親 (30)	(人) ① 31 ② 33 ③ 30	木曜日 10:30～11:30 (1・2期＝10回／3期＝9回)	就園前の幼児と母親が対象で、リズム遊びを中心に、造形活動や身体表現なども取り入れた活動を行っている。母親とスキンシップをしながら楽しく音楽と遊べることをめざす。受講料＝1・2期15,000円、3期14,000円。

〈短期講習会〉

名称		対象・定員	受講数	曜日・日時	備考
手作り楽器のワークショップ	トーキングドラム“タマ”	（人）小1～高3の親子 ※小4以上は子どもだけでの参加も可。（各日20）	（人）計 150	8.10、16、20、27、30 ※時間は各日とも 13:00～16:00	新プログラム。西アフリカの多くの国や地域にある太鼓の制作とアンサンブルのプログラム。西アフリカのセネガル共和国、ウォロフ族に伝わる小型のトーキングドラムを取り上げた。太鼓の胴にたくさんのヒモがあり、それをコントロールすることで音程が変わり、しゃべっているように演奏することができる。講師はセネガル出身のパーカッショニスト、ワガン・ンジャエローズ氏。受講料＝親子9,800円、子どものみ4,900円。
	アフリカン“ジェンベ”		計 150	8.11、17、23、28、31 ※時間は各日とも 13:00～16:00	西アフリカのジェンベを中心とした太鼓だけの合奏音楽「サバル」のワークショップを行った。手作り楽器のコンセプトである“作る”＋“音を出す”＋“合奏”の後半部分のみの活動であったが、ほとんど定員いっぱいの参加があり好評であった。講師はセネガル出身のパーカッショニスト、ワガン・ンジャエローズ氏。受講料＝親子9,200円、子どものみ4,600円。
	竹のたて笛“スリン”		計 113	8.9、15、19、25 ※時間は各日とも 13:00～16:00	インドネシアの多くの地域で使われている竹のたて笛「スリン」の制作と合奏。ガムラン音楽にも使われるジャワ島スタイルのスリンと「おもしろ笛・スライドホイッスル」の制作も行った。受講料＝親子5,400円、子どものみ2,700円。
	竹のハンドベル“アンクルン”		計 77	8.8、18、29 ※時間は各日とも 13:00～16:00	インドネシアの竹のハンドベルと言われている「アンクルン」は、昨年の好評を受け2年連続の実施となった。2年連続ということで全日フル動員にはならなかったが、3時間のワークショップが、“レクチャー”＋“製作”＋“演奏”のバランスのとれた内容で、多くの受講者に興味を持ってもらえたようだ。実施日数の再検討を。受講料＝親子5,400円、子どものみ2,700円。
	宇宙人の声が出せる“口琴（コウキン）”		計 47	8.12、14 ※時間は各日とも 13:00～16:00	口琴は世界の多くの国々や地域にある楽器で、口にあてた弁を振動させ、口や頭に共鳴させて音を出す、とてもユニークな楽器。宇宙人の声のような音を出して会話を楽しむことができる。受講料＝親子4,400円、子どものみ2,200円。
こどものための“お箏”体験短期講座		小1～高3（各10）	計 22	H14.2.24・3.3（全2回） A 13:00～14:30 B 15:30～17:00	学校教育への邦楽器導入を前にして、子どもたちに日本の音にふれてもらおうと、前年度に引き続き2回目の実施。個人でひくだけではなく、合奏も取り入れ、大勢で演奏することの楽しさも伝えるように工夫した。受講料＝3,600円。

「手作り楽器のワークショップ　宇宙人の声が出せる口琴」（写真上）と、「アフリカン“ジェンベ”」では、セネガル出身のパーカショニスト、ワガン・ンジャエローズ氏の指導で、作りたての“マイ・ジェンベ”を使って合奏（写真右）。

3. その他

〈動くこどもの城〉

名　称	期 間（日 時）	備　考
ガドガドコンサート「おんがくがスキ！」	9.8	市内の学童、幼稚園、保育所の園児とその保護者を対象とした参加型コンサート。300人が参加。岐阜県恵那市大井児童センター。
竹の響き「アンクルンコンサート」	9.15～17	来館した親子を対象に竹の楽器アンクルンのコンサートを実施。アンクルンの演奏体験もまじえ約１時間の公演。同時に手作り楽器のワークショップも行った。香川県さぬきこどもの国。
音楽ゲームセンターであそぼう「スーパースターゲッター！」	10.5～7	栃木県子ども総合科学館のフェスティバルに参加し、〔こどもの城〕オリジナルプログラム“音楽ゲーム”の実施。あわせて、県内の児童館職員むけに講習を行った。

〈講師派遣など〉

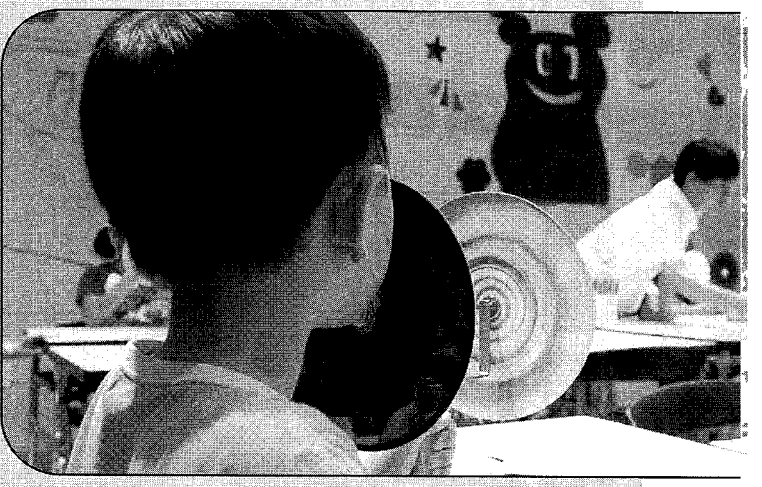
名　称	期 間（日 時）	備　考
親子で楽しくリズム遊び	5.1	近隣在住の2歳以上の未就学児とその親を対象にした講習会。簡単なリトミックやリズム遊び、歌遊びを実施。台東区立子ども家庭支援センター
打楽器であそぶワークショップ	5.23・24	児童館職員を対象とした講習で、アフリカンタムタムやサンバを活用したリズム遊びを指導。100人が参加。長野県児童館連絡協議会（長野県諏訪町）。
子育て担当職員研修会	8.25	金沢市の保育所で行っている、子育て支援事業に携わる指導者のための講習会。保育士60人が受講。金沢市安原保育園。
子育て支援の輪づくり講座	9.28、H14.2.13、2.20	9月は指導者を集めての講習会。2月は実際に講習を受講した指導者の活動現場に出向き、実際のプログラムを参観後、指導法やプログラムの進め方、環境設定なども含め、指導した。那覇市与儀幼稚園。
打楽器であそぶワークショップ	11.16	児童館職員を対象とした講習で、アフリカンタムタムやサンバを活用したリズム遊びを指導。100人が参加。山口県児童センター。
童謡コンサート～プッチガドコンサート	12.8	市内の幼稚園、保育所の園児とその保護者を対象とした参加型コンサート。200人が参加。茨城県土浦市子育て支援センター。
親子で楽しむリズム	H14.3.5・6	平成12・13年度文部科学省指定「幼稚園における子育て支援活動の推進に関する調査研究の委託事業」として企画された講習会。指導にあたる人への講習だけではなく、親子とあそぶ実践的な活動も行った。那覇市与儀幼稚園。

「こどものための“お箏”体験短期講座」

〈その他〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
〈講座合宿〉 こどもの城児童合唱団夏合宿	8.17~23	愛媛県内3か所で公演。県内の子どもたちとの交流を深めた。また瀬戸内海に浮かぶ小島「風の顔ランド」などでの野外活動なども楽しんだ。公演は、8月18日＝えひめこどもの城、19日＝松山市総合福祉センター、20日＝内子座の3回。21日に予定の今治市公演は台風接近のため中止。
〈演奏依頼〉 第十三回三味線のつどい	H14.1.13	〔こどもの城〕三味線講座講師の田島佳子氏と音楽事業部が共催する演奏会。三味線講座生も2クラスそろって出演。「わらべ唄」(絵日傘・ずいずいずっころばし・雪やこんこん)「太鼓の曲」を演奏。青山円形劇場。
〈　〃　〉 おんがくがスキ！ ガドガドコンサート	2.9~19	欧州にいる日本人学校の児童を対象とした参加型プログラムのコンサート。スイス(ジュネーブ)、ドイツ(フランクフルト、デュッセルドルフ)、ベルギー(ブリュッセル)で公演。計1,800人の家族が参加した。主催は、(株)全日空。
〈　〃　〉 おんがくがスキ！ ガドガドコンサート	3.9	市内の幼稚園、保育所の通園児童とその保護者を対象とした参加型コンサート。茨城県阿見町地域子育てセンター。180名が参加。
〈　〃　〉 東京新聞フォーラム「邦楽教育ルネッサンス」	3.19	東京新聞主催の催し、「伝統文化の継承-中学授業に取り入れられる和楽器」と題して、新聞の一般読者を対象に行われた。前半には邦楽演奏家などによるパネルディスカッション(講師田島氏含む)。後半は琵琶、三味線、箏、尺八などが演奏され、こどもの城三味線グループが三味線の演奏を担当した。イイノホール(東京都千代田区)。

AV（オーディオ・ビジュアル）事業部



平成13年度の活動

ＡＶ事業部は、子どもたちがさまざまな映像体験をとおし、知的好奇心や創造性を刺激し、豊かな人間性をはぐむことを目的に活動している。

〈みる〉

主に、４階にある「ビデオライブラリー」と「こどもの城映画劇場」で映像を見せる活動を行っている。

「ビデオライブラリー」には、35の視聴用ブース（１～５人用の小部屋）が設置されており、ビデオ作品は約１万８千タイトル登録されている。開館時間中、子どもたちはこの中から作品を選択し、家族あるいはグループ単位で何度でも視聴できる。

「こどもの城映画劇場」は、日曜・祝日や学校の季節休みにＢスタジオで実施されているプログラムであり、国内外の優れた作品を厳選して大画面で上映している。上映に際しては、作品のあらましや背景を解説するなど、きめ細やかな対応を心がけている。

これらの両活動が好対照をなすことで、子どもたちがふだんあまり接する機会がない、〈みるプログラム〉を構成している。

〈しる・つくる〉

日曜・祝日や学校の季節休みに、Ｂスタジオや音楽ロビーで実施している「不思議な映像実験室」では、子どもたちに〈しる・つくる〉というテーマから映像にアプローチしてほしいと願ってプログラムを行っている。

何で映像は動いてみえるの？　どうしてフィルムには像が写るの？　など、子どもたちが“不思議”と感じる素朴なことがらを取り上げ、これを遊びながら解き明かして行くプログラムや、実際に映像作品作りを行うプログラムなどを実施している。

昨今のハイテク化で便利になった反面、多くのものがブラックボックス化され、いろいろなプロセスが見かけ上は簡略化された。その結果、基本原理やしくみを知りたい、実際に自分で何かを作ってみたい、という子どもたちにとっての“不思議”を探ってみようというきっかけが見つけづらい世の中になったのではないか。

「不思議な映像実験室」では、この点に着目し、映像やその周辺の不思議を取り上げ、子どもたちの好奇心や想像力を喚起するようなプログラムを実施している。

１．一般利用

（ア）〈みる〉活動

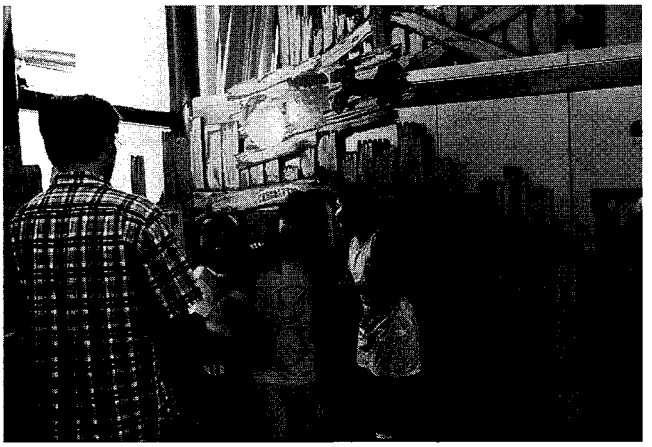
【ビデオライブラリー】

本年度のビデオライブラリーの利用者は、前年度に比べ、組数にして1,000組程度の減少になった。その一方で平均視聴時間が1.８分増加した。この結果、総時間数（総組数と平均視聴時間をかけた数字）では前年を上回り、件数換算する2,500件分の増加となる。

本年度の特徴としては、2002年（平成14年）に冬季オリンピックとサッカーのワールドカップがあることから、スポーツ関連のソフトが多く利用された。また、一昨年に特集を組んだ“昆虫”が減少し、昨年の特集“水の中の生き物”関連ソフトが引き続き良く利用されていた。

◎夏休み特別期間の特集

今夏は過去３年間で、最も多い利用者数であった。1組当たりの利用回数が増加したことと、〔こどもの城〕全体で考えるとビデオライブラリーを利用する人の率が増加したと予想できる。


ビデオライブラリーに、恐怖体験するなぞの部屋が出現。

夏休みに、おばけなどの怖いものをテーマにした“こわいこわい特集”を実施した。ライブラリー内の空きスペース（10畳ほどの場所）にベニヤ板で迷路のような暗い部屋を作り、室内にはオリジナルの怖いビデオを流したり、狼の声や電話の音、小人の笑い声などをパソコンで作り、音響効果などで恐怖体験ができるようにした。

子どもの様子を観察すると、半日も入ろうかどうか迷いつづけている子どもや、出たり入ったりと様子をうかがう子ども、知らない子ども同士が仲間作りをして部屋に入ったり、他の子どもの親に話をして一緒に入ってもらったりといろいろな姿が見られた。ただの暗い部屋にもかかわらず、子どもたちはこの中に未知のものへの冒険心がかき立てられたのだと思われる。年が改まった現在でも、おばけの部屋のあった場所に子どもたちが訪れ、部屋がないことが分かるととても残念がる。前述のように、特集の効果は特集期間だけに留まらず、その後も影響があるようだ。

【こどもの城映画劇場】

本年度もフィルムライブラリー「武藤行雄記念文庫」収蔵のカナダ国立映画制作庁（NFBC）作品を多数上映した。ここでの上映では、短編を2～3本組み合わせ、幼児でも無理なく鑑賞できるように上映時間が約30分になるように構成している。ふだんはまず見る機会がないアニメーションを取り上げているので、導入として作品の見どころや画面のおもしろさ、作者の紹介などを短く解説している。観客である子どもたちに鑑賞の心構えを付けさせることがなにより重要であると考えるからだ。

本年度は、多数来場する幼児を意識した作品選択を心がけ、コ・ホードマンの人形アニメーションやイブリン・ランバートの切り紙アニメーションなどの幼児向け作品を多く選択した。

この催しの会場であるBスタジオは4階のいちばん奥に位置しているため、場所が目立たないうえ分かりにくく、時間帯によっては来場者が極端に少ないことが多かった。そこで、音楽事業部との調整で、音楽ロビー側からも入場できる時間帯を設けたところ、入場者数がたいへん増加した。これ以後、Bスタジオでの催しでは恒常的にロビー側扉を開けることにして来場者増をめざした。

◎キンダー・フィルム・フェスティバル

夏休み特別期間には毎年恒例となっている子ども映画祭「キンダー・フィルム・フェスティバル」を同実行委員会と共催。今年で9回目を迎え、ベルリン映画祭の子ども映画部門で受賞した劇映画やアニメを中心に、日本で独自にノミネートした作品を加えたプログラムを複数構成して上映し、9日間で約3,000人の入場者を数えた。

上映に際しては、外国語作品を声優がライブで吹き替えるオーバー・ボイス方式を採用している。そこで今回は、この声優の希望者を募って、実際に短いアニメの画面に合わせて声を吹き替える声優体験ワークショップを実施。講師には専門学校で声優養成を行っているプロの指導者を招き、約2時間にわたる指導が行われた。短い練習時間ながらも、参加した子どもたちは、最後には観客の前で堂々と実演できるまでになり、来場者に好評を得た。

子どもたちが審査員になって上映作品に賞を与える「こども審査員」賞も前回同様に実施し、ドラマ部門にドイツ映画『ベルリン・エンジェル』が、アニメ部門にイギリスの人形アニメ『となかいロビー』が選ばれた。

また今回は、来日ゲストとして18年間にわたりベルリンで映画祭のディレクターを務めているレナーテ・ツィラさんを迎え、上映前に映画祭の意義や映画を見る楽しさなどを語っていただいた。

12月には「クイズ大会『シュレック』のヒミツ」を開催。冬休みに公開されるCGアニメ『シュレック』の画面作りの舞台裏を紹介する映像資料を配給元のUIP映画から借用し、楽しいクイズを交えて上映した。

（イ）〈しる〉〈つくる〉活動

【不思議な映像実験室】

映画発明以前の動く絵を見る“視覚玩具”を作るワークショップや、ビデオ機器を使用したワークショップを総称して『不思議な映像実験室』と呼んでいる。

“視覚玩具”を題材としたプログラムでは、他の施設にプログラムを紹介した場合にも容易に同様のプログラムが実施できるように、身近な材料を使用している。

『不思議な映像実験室』は視覚玩具を紹介するプログラムを中心に、特別期間や平常期間の土・日曜日に実施してきた。しかし、平常期間にかんしては、ここ数年参加者数の落ち込みが気にかかる状態となってきた。

参加者数の多い少ないでプログラムの善し悪しを計ることは難しいが、参加者数の少ないプログラムに対して内外ともに「つまらないプログラム」という印象を与えてしま

うことは確かである。特に来館児・者に対して「つまらないプログラム」という印象を与えてしまうと、連鎖反応的に客足は遠のいていってしまう。〔こどもの城〕自体の来館児・者の減少ともあいまって、その閑散とした会場が「つまらないプログラム」と映ってしまう状況になりつつあった。しかし、つまらないから参加者が少ないのではなく、別に要因があるとしたらどうだろうか？

従来行ってきた形式は、館内が混雑している状態を想定して、次々と参加者が入れ代わっていけるように、会場内の参加者の滞留時間をいかに短くするかに重点をおいたプログラムの設計であった。来館児・者が減少してきている現状では、1人の参加者の滞留時間をいかに長く引き延ばせるかで、会場のにぎわい具合は大きく変わってくる。また、来館児・者の低年齢化もプログラムへの集客に大きく影響する状況になってきている。

本年度1月から平常期間の日曜日に行う『不思議な映像実験室』では、参加者の滞留時間延長作戦として、展示コーナーを増設し、数種類の視覚玩具を展示するようにした。さらに、来館児・者の低年齢化対策として、展示コーナーに低年齢向けに2枚の絵を描いてつくる簡単アニメ玩具「くるくるアニメ」コーナーを併設。従来行ってきたプログラムも1日3回実施することにした。しかも、当日中のリピーター確保のために、3回それぞれ別のプログラムを実施するように変更した。

さらに、Bスタジオの廊下側の入り口に加えて音楽ロビー側の入り口も開放して、来場しやすいように工夫してみた。これまでは音楽ロビーのプログラムに与える影響や、Bスタジオへ流れ込む演奏の音の影響など、さまざまな問題から音楽ロビー側の扉は閉めておくべきという考えであった。しかし、来館児・者の移動経路の問題を解決せずに参加者数の増加は見込めない状況となりつつあったため、音楽事業部の協力を得て『不思議な映像実験室』実施の日曜日にかんしては扉を開放状態としている。

結果的には人の流れが変わり、Bスタジオのイベントへの参加者は急増した。音の問題は少々残るが、コンサート中は扉を半開にするなどで対処している。来館児・者にとっても、音楽ロビーとBスタジオが地続きのような位置関係となり、兄弟姉妹で好きな方のプログラムに参加してもはぐれる心配もなく、よい結果となっていると思える。

土曜日に音楽ロビーで行っている『不思議な映像実験室』は、音楽プログラムあるいは人形劇の終了後、短時間に仕込み替えをして集客しなくてはならない関係上、展示コーナーの設置は困難である。そのため、従来の「くるくるアニメ」に加えてプログラムを増設する方向で考えた。

日曜日などよりもさらに低い年齢層への対応となるため、比較的低年齢向けの「ソーマトロープ」を検討した。

『不思議な映像実験室』に展示とくるくるアニメのコーナーを併設。

円盤の表と裏の絵が重なって見える視覚玩具である。従来はハサミを使用してきたが、土曜日の参加者は幼児が多く、時に乳児がテーブルの上のペンを投げて遊んでいるような状態の中にハサミを置いておくのは危険きわまりなく、ハサミを使わないで工作可能なことが絶対条件となった。

10月ごろから試作をはじめ、紙を折ることで組み立て可能な用紙を制作。11月ごろから試験的に実施と改良をくり返し、12月ごろにほぼ現在の形になった。

これまでのソーマトロープの用紙は、表と裏の絵のうち、片面に絵を印刷しておくことでゲーム性（創意工夫の余地）を持たせてきた（4種類の用紙を用意）。今回新しく設計した用紙では、当日中のリピーター確保に加え、翌週、翌々週へのリピーター確保のため、絵柄も本年度中で9種類程度に増強し、週がわりで4種類ずつ出している。

従来どおり3時30分から「くるくるアニメ」を開始。この時点では音楽ロビーのテーブル数の少なさもあり満員となってしまう。しかし幼児向けの、短時間で完成するプログラムのため、4時ごろに次第に会場が閑散としはじめる。このころを見計らって「ソーマトロープ」コーナーを併設してオープンするようにしている。

この結果、くるくるアニメを終えた子どもがソーマトロープを作り、場合によっては数種類制作していくため、滞留時間が長くなり、結果として会場がにぎわう形となった。以前に比べ、4時30分から5時ごろに会場に訪れる参加者も増えたように感じられる。

以上の改善を試みた結果、来場者数は倍増し、プログラムの実施会場に以前のような活気が出てきつつある。

2. 講座・クラブなど

（ア）プロフェッショナル・ビデオ講座

本講座を始めるきっかけは、ビデオの撮影や送出設備が備わっていても操作する専門知識を持った職員がいないために、ほとんどそれらの機器が使われていないので、その

操作方法を教えてほしいという要望や、催しのビデオ記録は行っているが編集の経験がないので、撮りっぱなしのテープを編集したいといった要望が、ＡＶ事業部に寄せられたことであった。そこで施設や事業所の職員などを対象に、一般向けのビデオ講座のステップ・アップ特設講座として開始した「業務用ビデオ講座」は、より専門的な知識をという要望に即して、ビデオの電気的な信号を制御するための知識を伝授する「プロフェッショナル・ビデオ講座」の開設に至った。

ビデオの電気的な知識は即席ですべてを覚えられるほど簡単ではないので、電気関係の専門学校などでしかこれらの知識を得る術がないのが現状である。しかし、機器運用にかんしてはそのアウトラインだけでもつかんでおくのが望ましいので、最低限必要な知識だけにしぼった講義を行うことにした。他にこのような講座やセミナーが存在していないことも功を奏して、毎年好評で、施設や事業所のビデオ担当者だけでなく、電気メーカーの新人職員やケーブルテレビ局員などの参加も増加している。

本年度は、ハード運用に関する基礎的なビデオ信号に関する知識を解説する「VE（ビデオ・エンジニア）コース」と、映像機器に不可欠な電気全般に関する知識や音声収録のノウハウを深める「ビデオマンの電気基礎コース」を開催した。本講座では、実践からの経験を元にオリジナルに作成したテキストを使っている。このテキストは、講座を担当した職員が毎年講座実施後に意見を交換し合って、細かい改訂を進めているので、実際のビデオ機器運用に役立つと受講者に好評である。テキストのみを購入したいという問い合わせもあり、数年後には、広く頒布することも検討している。

本年度は、デジタル・カメラとパソコンの普及で、パソコンでの映像作りに関心を抱く人が増えている状況を見て「ビデオとパソコン基礎講座」や「アニメーション撮影技術セミナー」を実施した。これらの講座は、家庭用のビデオカメラでの上手な撮影の方法やビデオ編集ソフトでの編集のノウハウなどを知ることを目的とした初心者向け講座と位置付けたので、主婦層や学生の参加が目立った。

「天体望遠鏡工作教室」

（イ）夏休み短期講習会

一般来館児・者を対象としたワークショップとは別に、より複雑で材料費が少々高額になる短期講習会『映像・科学体験ワークショップ』を夏休み特別期間に実施した。前年度は充足率がふるわなかったので、本年度はいくつかの対策を立てた。

まずコースの種類を豊富にすること。同じ内容のコースを、延べ400人以上の定員で行っても、それだけの需要が期待できないため、本年度は、それぞれが延べ100人前後の定員になるようにし、５コース設置した。

また、視覚玩具など知名度の低いものを扱ったコースもあるため、ちらし配付の充実に加え、館内の映像放送を使った宣伝、アトリウムでの実物展示などを行い、講習会の内容を分かりやすく伝えるようにした。この結果総合的な充足率では約90％と良い結果を出すことができた。Ａスタジオを講座会場とし、一般来館児・者向け活動スペースの併設は避けた。

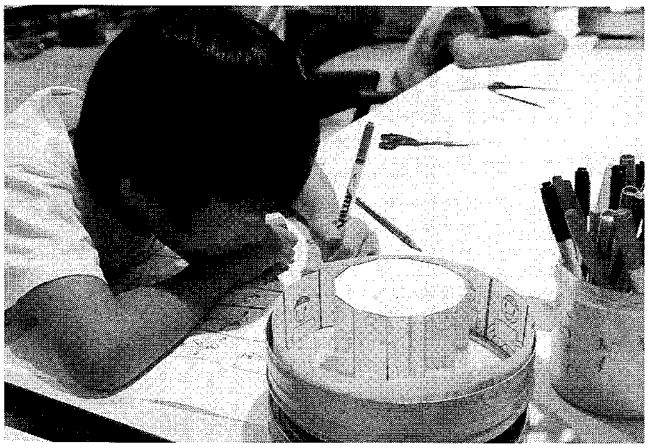
◎**ヘリオシネグラフ**＝前年度用意した部品の在庫を使い、円盤に描かれた絵が動いて見える視覚玩具を制作。

◎**プラクシノスコープ**＝新規に用意したプログラムで、鏡に映った絵が動いて見える視覚玩具を制作。「ヘリオシネグラフ」は独自に設計した部品が多く、加工・制作が煩雑になった点を反省し、可能な限り市販されている物を加工することで部品が制作・準備できるよう設計を行った。

◎**ピンホールカメラ写真教室**＝写真の撮影から暗室でのプリント作業までを体験するコース。用意した空き缶ピンホールカメラに４×５判のモノクロフィルムを入れてセルフポートレートを撮影。フィルムは、スタッフが暗室で現像。現像を待つ間、別のスタッフがＡスタジオで紙製のピンホールカメラの工作を指導。プリント作業はＡスタジオを暗室にして行った。

この講座では撮影できる形のピンホールカメラを持ち帰ることはできない。コストと時間的な問題が主な理由である。上記の行程だけで約３時間かかってしまうのである。そこで暗室でのフィルム装填や現像など特殊な訓練と設備が必要なピンホールカメラを持ち帰ることよりも、プリント作業など、写真の映像が現われる瞬間を体験することに重点をおいた体験型の講座とした。

◎**天体望遠鏡工作教室**＝過去に好評だったプログラムを復活させた。主要部品のレンズにはデッドストックを使用し、受講料も低く抑えることができた。ただし量的には講座３日分（６回分）しか確保できなかったため、受講者はすぐに満杯になってしまった。来年度は新たに部品調達をして、


手作り映像おもちゃ「映画のしくみを体験！」プラクシノスコープ

より多くの受講者を募りたい。

◎**混（まぜ）虫工場**＝11年度に行った昆虫紙工作教室の発展独立版。いろいろな昆虫のパーツを自由に組み合わせることができるようにしたので、“混ぜる”とかけて「混虫工場」という名称にした。

以前使用した型紙はキットにして売店で販売しているが、講座ではこのキットのほかに講座限定のカブトムシを加え、紙昆虫の作り方を実習した。カブトムシの工作はやや難しいが、講師が一人ひとりに指導することで、説明書では表現できないノウハウを伝えることができた。一度難しい工作をクリアしてしまえば、他の昆虫も容易に工作できるようになる。視覚玩具が自宅でも遊んだりできるように、このペーパークラフトも「作って飾っておしまい」にはしたくなかった。

（ウ）その他

一般向けの講座として「アニメーション撮影技術セミナー」に加え、「16mm撮影初歩セミナー」を新たに開設。アマチュアを対象として、主に16mm映画の撮影に関する入門講座を実施。今さら16mm映画？　の感もあるが、スタッフが所有する機材を使用することで支出を限り無くゼロに近い形にし、試験的に実施したところ、まずまずの受講者数を確保することができた。

そもそも、今後それほどの技術革新が無いであろう16mmの分野では、ことアマチュア向けに実施する限り最新鋭の機材を使用しなくても実施可能であり、需要がある限り継続し、あるいは発展させることのできる可能性があるのではないかと考えている。

3. その他

（ア）走れキャッスルトレイン~こども鉄道模型運転会

子どもが自ら鉄道模型の運転ができるイベント。本年度は残念なことに地下1階フリーホールで2回開催するにとどまった。子どもたちの要望とこの催しへの評価が得られたことで、来年度からは年4回開催することになった。

本年度は、鉄道のある町を作ろうということで、いろいろな廃材を使って家やビル、タワーのようなものを作り、一つの街を作った。また、自宅から持ってきた個人の電車を紹介する“紹介コーナー”を試みた。来年度以降も行っていきたい。

（イ）他部門との協力事業

他部との協力事業が年間に多数ある。本年度の協力事業をいくつかをあげてみる。

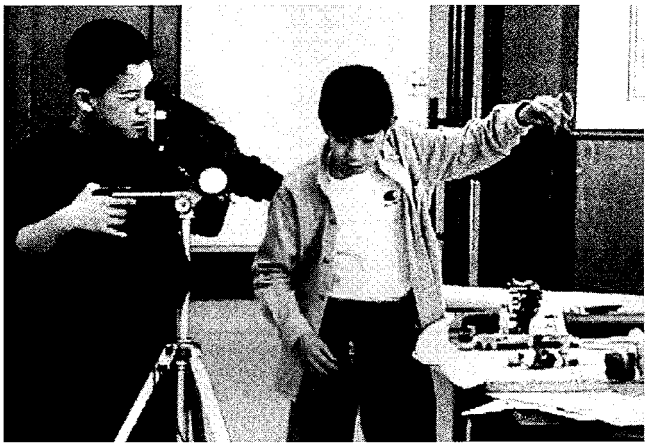
ゴールデンウイークにはプレイ事業部主催の体験ゲーム型イベント『キャッスルクエスト』をサポート。導入のために参加者に見せるビデオの制作などを行った。忍者をテーマとしたイベントのため、そのストーリー解説と雰囲気作りを目的とした短いビデオを制作した。ゲームの最終場面はBスタジオ。映像や音響を多用した演出をしており、これらの機器の調整・運用も担当した。裏方的な協力ではあるが、雰囲気作りが重要な要素となるこのイベントでは映像・音響演出のはたす役割は大きい。

この他に、Bスタジオでのイベントのテレビ中継収録などを行った。

（ウ）動くこどもの城

本年度は、映像が写ったり、動いたりする仕組みを簡単な工作をとおして体験する「不思議な映像実験室」を2件実施した。秋田県児童会館（6月14日）での児童厚生員等指導者講習会では、近隣の児童館や学童クラブの指導者が多数参加し、午前はピンホールカメラ作りやピンホールカメラで写真を撮る講習、午後はソーマトロープ、マジックロール（くるくるアニメ）などの視覚玩具を作る講習を実施した。ピンホールカメラの筒の中に写し出されるぼんやりとした映像や、マジックロールの2枚の絵が動いてアニメのように見える映像は、ハイテクな機器があふれている

「走れキャッスルトレイン~こども鉄道模型運転会」



パルテノン多摩で「アニメ・ワークショップ」を指導。

現代では、素朴で不思議な体験であり、参加者からはたびたび歓声が上がっていた。

同様の指導者講習会は、7月3日に埼玉県所沢市のつばめ児童館で行い、同所で14日に行われた「つばめこどもまつり」では、子ども対象の「不思議な映像実験室」ワークショップを実施した。

〔こどもの城〕で開発したいろいろなプログラムを紹介する〈動くこどもの城〉の目的は、参加した施設の指導者がプログラムを実際に独自に展開してもらうことである。しかし実際には、使用する材料などの関係からなかなか実施が難しいプログラムもあるようで、いかに手に入れやすい材料や代用できる材料を探すかがポイントとなる。そこで、AV事業部のプログラムでは、ティッシュペーパーの空き箱やペットボトルを材料とした視覚玩具なども用意して講習会で展示することにした。これらへの関心が高いことからも、材料の選択やプログラムの応用、展開の方法を示すことなども、指導内容に取り上げていくことが必要であると感じた。

(エ) 講師派遣

〈動くこどもの城〉では対応できない小規模な講習会、指導者向けの講演や講習会などの講師依頼が増加する傾向にある。一般来館児・者活動との調整やスタッフの勤務シフトを上手に組んで、その希望に沿うように努めた。

毎年恒例となった多摩市（東京都）のパルテノン多摩で行っているアニメ・ワークショップでは、リピーターが多く、より高度な内容の講座を望む声も聞かれるようになった。同じアニメ・ワークショップでも、参加者は高学年から中学生なので、〔こどもの城〕の来館児・者の多くを占める低学年とは違う反応も得られ、高学年向けプログラムの立案に大きく参考になっている。

本年度は大学の教育学部の学生を対象とした、子どもと映像をテーマにした講演の依頼や、保育士や地域子育て支援センターの職員を対象とした日本保育協会主催の研修会でのワークショップなども講師派遣として実施した。

多方面からの講師派遣依頼の増加は、「みる・しる・つくるアニメーション・キット」や事例集「うつる　うごく“映像遊び”探検隊」（編著＝こどもの城AV事業部／発行＝中央法規）をとおして、徐々にAV事業部の活動が知られていくようになったことであろうと思われる。また現在、映像が子どもたちの日常に深くかかわるようになってきているにもかかわらず、子ども向けの映像ワークショップや上映を継続的に行っている施設が他にほとんどないことも、依頼の増加につながっているのではないだろうか。

4. まとめ

〔こどもの城〕の開館当時（昭和60年）には、映像や音声を媒体とするメディアといえば、地上波テレビ放送やビデオ（ビデオテープやレーザーディスク）が中心であった。その後、十数年の時を経た現在の状況は、衛星放送やCD・DVD、そしてインターネットなど数多くの新たなメディアが台頭してきている。

しかし、この時間経過の中で、人間が情報を扱う能力に、大きな変化があったわけではない。氾濫する情報の中から自身にとって本当に必要なものを選択し、またその中に秘められた本質を見出す能力を培うことが、ますます重要になってきたと感じる。

このことは、近年“メディア・リテラシー”と呼ばれ頻繁に話題に上るが、子どもたちに多くの情報（映像）を提供している我々にとっても避けて通れない問題であろう。情報の「選択眼」や「認識力」がいかに重要で、どうすれば養えるのかを子どもたちに伝えることは、容易なことではない。しかし、膨大な情報（映像）を扱うものの責任として、今後この問題に一歩一歩取り組んでいきたい。

平成13年度活動一覧表

1．一般利用

〈平常期間〉

名　　称	期　間（日　時）	備　　考
ビデオライブラリー自由利用	開館時間中	趣味、教養、娯楽、スポーツ、アニメなどさまざまなジャンルにわたるビデオソフトが、18,000タイトル網羅されたビデオの図書館。利用者は、ビデオライブラリー内に設置された35のブース（小部屋）で好みのソフトを視聴できる。（ビデオライブラリー）
走れ！キャッスルトレイン～こども鉄道模型運転会（第11回）	6.2 ～10	鉄道模型（Nゲージ）の運転を体験できるプログラム。列車などを題材にした絵本や童話の本を置いたコーナー、鉄道関連のビデオを視聴したりするコーナーも併せて設置。“鉄道博士クイズ”という名で、博士に扮したボランティア3人がクイズも行った。（フリーホール）
〃　（第12回）	12.1～9	鉄道模型（Nゲージ）の運転を体験できるプログラム。鉄道関連のパソコンコーナーやプラレールコーナーなども設置。また、トイレットペーパーのしんなどの廃材を使ってさまざまな建造物を作る“ぼくらの町を作ろう”を併せて実施した。（フリーホール）
不思議な映像実験室写真館	3.22 ～24	写真をテーマにした、カメラオブスクラの展示やワークショップ。紙工作でピンホールカメラを作る、ピンホールカメラで写真を撮影する2つのワークショップを実施。（音楽ロビー）
おもしろビデオ館	毎週金曜日 15:30～16:00	ビデオライブラリーにある上映可能なビデオソフトから、テーマを決めて作品を選び、上映。（Bスタジオ）
不思議な映像実験室	毎週土曜日 15:30～17:30 日曜日・祝日（月1～2回） 11:00～17:30	土曜日は、2枚の絵を描いて簡単なアニメおもちゃ「くるくるアニメ」を作るワークショップ。ソーマトロープを作るコーナーも併設。（音楽ロビー） 日曜日・祝日は、映像が動いて見えるしくみや写るしくみを、展示とワークショップで体験する催しを開催。視覚玩具の展示と、幼児向けのくるくるアニメコーナーに加え、1日3種類のワークショップ（ぱたぱたアニメ、フィルムに絵を描こうなど）を実施。（Bスタジオ）
こどもの城映画劇場	日曜日・祝日（月1回）	フィルム・ライブラリー「武藤行雄記念文庫」収蔵のNFBC(National Film Board of CANADA）のアニメーション映画ほかを11:30／13:30／14:30／15:30の4回上映。（Bスタジオ）
〃　「シュレックのヒミツ」	12.9	CGアニメ映画『シュレック』の舞台裏を紹介するクイズ大会を実施。協賛=UIP映画。（Bスタジオ）
テレビ中継録画	日曜日・祝日、特別期間	Bスタジオで実施される、各部プログラムの館内へのテレビ中継及び録画。特別期間には、催し物案内情報の送出も実施。（Bスタジオ・映像調整室）

ビデオライブラリーには、CD－ROMが視聴できるコーナーも設けられています。

〈特別期間〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
〈夏休み〉 ビデオライブラリー 「こわいこわい特集」	7.20～8.31	子どもたちからのこわいビデオが見たいという要望に答えて「こわいこわい特集」を行った。また、ライブラリー内に音響や映像を使った“おばけ屋敷”を設置した。（ビデオライブラリー）
〈　〃　〉 第9回キンダー・フィルム・フェスティバル	7.28 ～ 8. 6	ドイツのベルリン国際映画祭・子ども映画部門「キンダー・フィルムフェスト・ベルリン」と提携して実施される日本で唯一の国際子ども映画祭。第9回目の今年の内容は、ベルリンでのグランプリ受賞作品をはじめ、世界各国から子ども向けの 短編映画を選りすぐって上映。また、子どもたちが専門の先生からレッスンを受けて、アニメの画面に声を吹き込む声優体験ワークショップなども実施。（Bスタジオほか）
〈春休み〉 こどもの城・映画劇場「 カナダのアニメーショ ン特集」	H14.3.26 ～4.7	フィルム・ライブラリー「武藤行雄記念文庫」所蔵のカナダのアニメから低年齢向けのものを中心に6プログラム19作品を上映。（Bスタジオ）

2. 講座・クラブなど

〈短期講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
混虫（まぜむし）工場2001	（人） 小4～高3 （7日間 =2回/日= 計140）	（人） 計126	8.7～13	オリジナル昆虫ペーパークラフトキット「混（まぜ）虫工場」に、カブトムシなどの講座限定昆虫の型紙を付け加え行った、実践的ペーパークラフト教室。受講料＝2,000円。（Aスタジオ）
写真のしくみを体験～ピンホールカメラ写真教室	小1～高3 （3日間 計60）	計 58	8.14～16	白黒の大判フィルム（4×5判）にピンホールカメラで自分の姿などを撮影する講座。スタジオで現像、プリントを行い、撮影からプリントまでを体験した。また、ペーパークラフトでスクリーンに映る映像を楽しむピンホールカメラの工作も実施。受講料＝2,000円。（Aスタジオ）
天体望遠鏡工作教室	小4～高3 （3日間 =2回/日= 計60）	計 60	8.17～19	塩化ビニールパイプやボール紙など、身近な材料を使って、天体観察用望遠鏡「マックロースコープ」を作る。受講料＝2,000円。（Aスタジオ）
手作り映像おもちゃ「映画のしくみを体験！」ヘリオシネグラフ	小1～高3 （3日間 =2回/日= 計90）	計 70	8.20～23 ※8.22は台風のため休講	回すと円盤に描いた絵がアニメのように動いて見える「驚き盤」を作る講座。絵の部分が取り外しでき、交換できる「ヘリオシネグラフ」の組み立てと、絵を描くことをとおして映画のしくみを体験。受講料＝2,200円。（Aスタジオ）
〃 プラクシノスコープ	小4～高3 （8日間 =2回/日= 計160）	計165	8.24～31	映画が発明される前にあった視覚玩具「プラクシノスコープ」を作る講座。帯状の紙にアニメのように絵を描き、その絵を多面体の鏡に映して絵がアニメのように動いてみえる映像おもちゃ作りを体験。受講料＝2,200円。（Aスタジオ）

『キンダー・フィルム・フェスティバル』では、アニメーション映画の吹き替えを体験。たくさんの来場者の前で“声優デビュー”。

〈専門指導者向け講習会等〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
ビデオとパソコン基礎講座	（人） 一般(20)	（人） 4	6.29 10:00～12:00	初心者を対象とした講座。パソコンでビデオを編集したり、デジタルカメラの使用方法を分かりやすく講義。受講料＝3,000円。（Bスタジオ）
プロフェッショナルビデオ講座 ◇ビデオマンの電気基礎コース	一般(30)	14	H14.3.2 13:00～17:00	伝送や照明などにかんして現場で起こりうるトラブルを検証しながら、ビデオ撮影や機器運用に不可欠な、電気にかんする基礎的な知識を再確認するための講座。受講料＝5,000円。（会議室）
〃 ◇VE技術コース	〃 (30)	19	H14.2.25 13:00～17:00	アナログ機器に必須なビデオの信号管理と実際の技術を、各種モニターを実際に使用しながら詳細に解説。ウェーブフォーム、ベクトル、ピクチャーの各モニターを受講者が体験使用する時間も設定。受講料＝5,000円（会議室ほか）
アニメーション「撮影」技術セミナー	〃 (30)	11	セミナー　8.18・19（2日間） ワークショップ 8月下旬～10月上旬	アニメ作りでの撮影技術にスポットをあて、カメラや照明機器の選び方とその使用方法などを講義するセミナーと、実際に受講者が短い作品を作るワークショップを実施。受講料＝10,000円。（会議室ほか）
16mmフィルム撮影初歩セミナー	〃 (30) 〃 (30)	8 14	7.21・22（2日間） H14.3.16・17（ 〃 ）	16mmフィルムでの映画撮影入門セミナー。フィルムの取り扱いから撮影技術まで、基礎的な専門知識を習得する講座。ボレックスやアリフレックスなどのポピュラーな16mm撮影機の取り扱いをとおして、フィルムについての基礎知識や露出の計測までを初心者に分かりやすく講義。受講料＝10,000円。（会議室ほか）

3. その他

〈動くこどもの城〉

名　称	期 間（日 時）	備　考
不思議な映像実験室	6.14	児童厚生員等研修会を実施。視覚玩具の制作をとおして残像現象など、アニメーションや映画が動く仕組みを体験。どの玩具も特別な機材を使用せず、紙工作でできるものを紹介した。秋田県児童会館。
アニメ・ワークショップ	7.3、14	埼玉県のつばめ児童館で開催された「つばめ児童館まつり」に併せて、ソーマトロープなどの視覚玩具作りのワークショップを実施（7.14）したほか、3日には児童厚生員等研修会も行った。

ビデオ・カメラを使って映像による“しりとり”にチャレンジ。『不思議な映像実験室』で。

〈講師派遣など〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
パルテノン多摩 アニメ・ワークショップ	4.1～4	小学校高学年を対象とした毎年恒例の出張プログラム。絵が動くおもしろさを体験する初級コースは、視覚玩具作りを中心に「ぱたぱたアニメ」など簡単なアニメ作りを、作品制作を行う中級コースは、ビデオを使って、切り紙、粘土など素材を生かしたアニメを各自が制作。
日本女子大学	6.20	施設の指導者や教員をめざす学生に対して、子どもと映像文化の関わりを考察し、メディア・リテラシーの観点からカナダアニメ作品を論じる講演と上映を実施。
ENBUゼミ 「アニメ講座」	8.8～12	いろいろな素材を使ってアニメ作品を自身で作る指導者・一般向け講座。
日本保育協会 地域子育て支援センター指導者研修会	11.29、12.6、13	日本保育協会主催の研修会。指導者を対象とした子育て支援のプログラムを〔こどもの城〕各部が紹介。AVプログラムは「不思議な映像実験室」と題して、絵が写ったり、動いて見える視覚玩具づくりのワークショップを実施。

〈映像記録〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
館内活動の記録	通年	館内の講座等をビデオ取材しソフト化して参加者に販売。体育事業部「母と子のすくすくランド」（Part 1～3）の3本。同作品はオリジナルソフトとしてビデオライブラリーに登録。
館外活動の記録	夏休み特別期間 冬休み特別期間 春休み特別期間	〔こどもの城〕の館外活動に同行してビデオ取材、ソフト化して参加者に販売した。 体育事業部「チャレンジキャンプ’2001」「スキースクール」（Part 1－1期、同－2期、およびPart 2）／プレイ事業部「ちびっこ冒険団2001」「フェローシップキャンプ2001」「ゆきんこ冒険団2001」／企画研修部「ジュニア・アウトドア・スクール2001」「ジュニア・スプリング・キャンプ2002」 同作品はオリジナルソフトとしてビデオライブラリーに登録。視聴できる。
劇場公演の記録	通年	青山劇場・青山円形劇場で行われた公演・発表会をビデオ記録し、編集の上ビデオライブラリーで公開。また一部を出演者等に販売。 ◎青山劇場＝自主公演「Korea Dance Selection」など2本。 ◎青山円形劇場＝自主公演「青山演劇フェスティバル　LAST SPECIAL」「音楽の玉手箱」および共催公演＝「とびこむ絵本」など28本。 ◎青山円形劇場＝外貸し公演「氷山ルリ」「ビバ・メヒコ」など4本。

透明な35mm映画のフィルムに、油性ペンで直接絵を描いて作るアニメーション。『不思議な映像実験室』では、いろいろな映像遊びを取り上げています。

保育研究開発部

平成13年度の活動

育児の社会化が言われている。私的営みと考えられてきた乳幼児の子育てが社会的な営みへと転化、発展していくことであるが、そうしたことは児童福祉施設などの果たす役割がますます重要なものとなるということでもある。

こうした動向を踏まえながら本年度も“子ども家庭支援プログラム”の保育事業（「親子教室」「保育クラブ」「幼児グループ」）を中心に、一般来館児・者事業（「つくって遊ぼう親子工房」「よちよちクラブ」「1・2歳児の遊び場」）、および研修事業（「保育セミナー」「子育て相談研修会・基礎編」、「子育て相談研修会・応用編」「子育て支援のニュースレターの発行」）を行った。

「保育クラブ」（2～5歳児対象）は登録をして利用する保育。本年度の年間の会員数は450人であった。会員に対するサービスは、(1) 保育の利用　(2) 家族プログラムの提供（親子遠足、運動遊びなど）　(3) 子育て情報（通信、保育相談等）の提供であるが、応募理由は集団遊びを子どもに体験させたい、とする家庭が圧倒的に多くなった。家庭と一緒に保育をとおして子どもの育ちを考えることを大切にしているが、保育の現場では家庭へのアプローチ方法の難しさをいろいろな面で感じている。

〔こどもの城〕の保育は大型児童館の中で行っている保育であることから、施設・設備を生かして、異年齢児の保育、チーム保育、保育ボランティアの活用などを特徴として、“子ども”と“家庭”のためのサポートプログラムを行っている。

保育活動の核となるのは保育事業のひとつである、2年間定期的に継続して保育に参加する4・5歳児（20～24人）の「幼児グループ」の子どもたちである。「幼児グループ」の中に「保育クラブ」の主に3歳児が曜日別に加わり、さらに不定期に利用する3～5歳児（幼稚園が休みの時など遊びに来る）が日替わりで参加して、3～5歳児（35人）の異年齢混合保育の形態をとっている。こうしたことから3～5歳児の保育とも呼んでいる。

異年齢児の保育だけではなく、「曜日別に顔ぶれの違う子どもたち」「不定期に保育に参加する子どもたち」の保育はオープン以来、保育スタッフにとっては試行錯誤の連続であった。平成9年から保育プログラムの見直しなどを少しずつ行い、本年度までの5年間で、まだまだ難しさはあるもののある程度の保育の進め方や方向性ができてきていると思っている。

このほかに、一般来館児・者事業と研修事業を行っている。〔こどもの城〕館内には1～2歳の親子を対象にしたプログラムが少ないこともあり、本年度は特に「よちよちクラブ」を定期的に土曜日に開催し、来館する親子に対応できるようにした。リピーターも多くなり特別期間に行っている「親子工房」とともに父母や家族がゆったりと参加できる楽しいプログラムと好評を得ている。

1．保育事業

（ア）親子教室

「親子教室」は保育スタッフの指導による親子遊びを中心に、育児を振り返ってみる、ほかの親子と交流する、講師をまじえてのディスカッションなどが主なプログラム内容である。

また、プログラムには1～2歳の幼児を育てている親に子育ての楽しさを伝えたいという願いが込められている。本年度は1期12回（土曜日3回含む）を年3期（第22

「幼児グループ」「保育クラブ」の親子プログラム「春の親子遠足」。

～24期）行った。

1期、2期は定員（16組）を満たしたが、3期は最終的には定員を上回った（18組）ものの、募集期間の延長と前期終了者の再度の参加を認めてのスタートとなった。冬季という時期的な影響はこれまでもあったが、来年度に向けては、子どもの年齢幅を広げる、リピーターの親子の参加も受け入れる、プログラム内容の見直し（例えば親にも軽食を出す）などが、定員確保の検討課題となった。

●参加親子の主な特徴

・仲良しグループの若い母親たちの参加（特に1期）があった。保育スタッフの働きかけにもかかわらず、グループでまとまり、一緒に参加している年齢の高い母親との交流が見られず残念だった。

・1歳4か月～2歳7か月の月齢幅であったが、子どもたちは集団の中に違和感なく入れた。

・二人目の子どもで参加した育児経験のある親は、余裕からか問題意識が薄く感じられ、集団の中での子どもへの規範を示さないケースが目立った。講師への質問、発言なども少なかった。

・親の自主企画の出し物などは十分に楽しんでいた。

・父親参加のプログラムは3回。参加率は高いが、自営業などの父親は仕事のため参加できないケースもあった。

●終了後の親へのアンケートから（自由記述）

・保育スタッフに気軽に子育ての悩みやさ細なことを話せることができてよかった。

・保育スタッフから子どもとの接し方を学び、子どもとのコミュニケーションがよくなった。

・育児の不安や、孤独感を解消することができた。

・木を中心にしたおもちゃや温もりを感じさせる手作りおもちゃがうれしかった。

●プログラムについての反省

プログラムの内容は定着したものとなっているが、保育環境を整えること（保育室、絵本、おもちゃなど）にかんしては、低年齢になるほどに今後も工夫や配慮が必要である。親子教室に参加するほとんどの親は在宅で子育てにあたっているが、子育ての知識や情報は豊富にあるものの実際の子どもの生活にどのようにかかわったらいいのか戸惑っている親が多い。

たとえば、保育スタッフは1・2歳の年齢では、食事場面をとおして、子どもが食べたくなるような親の声のかけ方、強制してスプーンやフォークを使わせる以前に手づかみでもいいから食べることへの関心を持たせることが大事であることなどを親に伝えるようにした。親のプライドを傷つけずに伝えることは難しいことであるが、親との信頼関係をとりながら進めることで子どもの身辺自立にもつながり親子教室への参加の意味も増してくる。

（イ）保育クラブ・幼児グループ

本年度も、集団での友だち遊びやいろいろな大人（スタッフ、ボランティアなど）とのかかわりをすることで人間関係を学ぶとともに、発達に見合った表現活動、親子で本物に出会う体験や家族同士の交流につながるプログラムを実施した。

【2歳児の保育】

2歳児の保育は定期保育（年間で利用する曜日を固定した保育）とフリーで利用する子どもたちが一緒になって活動した。3時間保育（Aプログラム5人）と4時間保育（Bプログラム7人）の2つを併せて一緒に行っている。時間の短いAプログラムには、まだ体力がない、上の子どもの帰宅時間に間に合わせるため、集団に少しずつ慣れるためなどの理由で、Bプログラムには、週に一度おもいっきり集団の中で遊ばせたい、母親の用事などに使いたいなどの理由で参加させている保護者が多い。

毎日顔ぶれの違う子どもたちを一日14人ずつ（不定期の利用2人を含む）、月～金曜日に延べ70人を受け入れている。不定期の利用枠は一日2人としているが、通常定期を利用していてさらに集団遊びを希望する家庭が例年多いが、通院、介護、用事などの緊急時の対応を考慮してこの2人枠を確保している。

●活動例＝「3びきのこぶた」の劇ごっこをとおしての子どもの成長と親子同士の交流

○ねらい＝子どもたちが友だちと一緒に共通のイメージを持って遊ぶ楽しさを経験する。

ふだんから、テレビ番組のヒーローになりきって見立て遊びをしている子どもたちの中には、型にはまったテレビからの強いイメージがあり、遊びもストーリーもなかなか発展しにくいところがあった。「3びきのこぶた」の劇ごっこでは、保育スタッフが絵本をくりかえし読むことで子どもたちはイメージをふくらませ、こぶたや，おおかみの言

う言葉を自分のものとしていき、自分なりのこぶたやおおかみを演じることができた。

曜日ごとに週一回の集団遊びを行っているが、子ども同士がお互いに顔や名前を覚えるのに時間がかかり、一緒に遊ぶきっかけもなかなかつかみにくい。劇ごっこをしたことで仲間意識が芽生え，友だちと一緒に遊ぶ楽しさを味わうことができた。「今日、ぶたさんやるの？」といってやって来る子どもたちは自分の役割や居場所をみつけて自信もついた。劇ごっこに使用するこぶたやおおかみの帽子は各家庭に呼びかけて作ってもらった。家族ぐるみの「３びきのこぶた」に発展していき、親子が他の親子と交流するきっかけにもつながった。

【3～5歳児の保育】

●チーム保育の役割分担

「幼児グループ」の４・５歳児に、曜日別に参加する「保育クラブ」(主に３歳児) が加わった異年齢児の保育を本年度も行った。曜日別に参加する３歳児（主に）に対しては受け入れる曜日も保育スタッフも決めて担当した。こうしたことで子どもも親も複数担任であっても、誰が直接の自分の担任であるのかが分かり、安定して遊びに入ることができた。

異年齢の保育の中では、自由遊びや全体の集まり、食事や生活の場面では３～５歳児が一緒に行動することでお互いがふれあい、学びあうことになるが、それぞれの年齢に応じた活動も意図的に行う必要がある。プログラムを計画するにあたって、例えばテーマ活動（造形、音楽、運動など）においては、３歳児と４・５歳児では遊びの経験も生活体験も異なることから、テーマを担当する保育スタッフと他のスタッフとでそれぞれの子どもたちに経験させたいことがらを綿密に話し合って進めた。

●親の保育参加について

子どもたちの保育生活を体験することで子どもへの理解を深めることがねらい。保育活動の予定を事前に知らせておき、保育参加は保護者同士が牽制しあうことも考えられることから一日一人としている。保護者は子どもたちと屋上でサッカー遊びや縄跳び、鬼ごっこなどをしたり、給食を一緒に食べたりして一日を過ごす。

保護者の中には、親として参加するよりはパフォーマー（歌を歌う、英語で詩を朗読するなど）としての参加を望む傾向が出てきていることから、特技のない保護者の中には保育参加自体を遠慮してしまうことが懸念されるようになった。親の保育参加の趣旨を保護者にしっかり伝える必要性を感じさせられた。

【延長保育】

保育クラブの３～５歳児については、火～金曜日に原則午後４時までの延長保育を行っている。年間の利用者数は延べ873人(フリーでの利用419人、定期的利用454人)、保育実施日139日。６人の定員枠は毎日ほぼ埋まった。

キャンセル待ちも10人になることもあり、11月から定員を８人まで広げて行ったが、利用待ちが続いた。利用の理由は集団遊びが圧倒的に多く、次に親の用事などであった。緊急での利用は延べ５人（通院、検査など)。

保育内容では少人数ならではの調理プログラムや友だちとのふれあい遊びを多くした。午前中の活動では目立たない３歳児が延長保育では活発に遊ぶ姿もみられた。

【家族プログラムなど】

家族同士の交流をねらいに「親子遠足」や「親子ｄｅスポーツ」を保育クラブ会員対象に行った。毎年２月にギャラリーで開催している「保育活動展」も大勢の家族連れでにぎわった。

また、保育相談や「幼児グループ」は全員、「保育クラブ」の会員には希望をとって健康診断（小児保健部と連携）を本年度も行った。

2．一般利用

ゴールデンウイーク（児童福祉週間)、夏休み、開館記念の各特別期間に、一般来館児・者プログラムの「つくって遊ぼう親子工房」を各３日間、保育室１で開催した。

また、〔こどもの城〕館内には低年齢児のプログラムが少ないことから、親子遊びを中心に「よちよちクラブ」を年10回、土曜日の午前と午後に行い来館する親子に喜ばれた。そのほか「１・２歳児の遊び場」(土･日曜日、祝日）として保育室２を一般に開放した。

3．研修事業

（ア）保育セミナー

第１５回こどもの城保育セミナー「子どもと生活・家庭と文化　PART Ⅱ」は、８月４・５日の２日間で実施した。

シリーズ２回目の本年度は、一日目の午前にＮＨＫの朝の連続ドラマ「ちゅらさん」の脚本家の岡田恵和氏と山崎

「第15回こどもの城保育セミナー」

美貴子明治学院大学副学長が「現代の家族を支えるために」というテーマで対談を行った。岡田氏から、沖縄取材のエピソードや自身の子育て観などを織り交ぜながら、現在の家族の実態に迫った話があり、その中からヒントを見つけあった。

午後の問題提起「子どもを巡るさまざまなトピックス」では、幼児を取り巻く環境の中から注目したい話題について取り上げた。まず最初に「幼稚園の子育て支援の実態」について、「遊育」編集長の吉田正幸氏からの報告後、幼稚園や保育所は、“育児のお手本”として機能することが望まれると同時に、親子ともに育ち、親の生涯学習を支える関係の育つ場として機能することが望まれる――とまとめた。次にメディア評論家であり、童話作家でもある高橋克雄氏からは、保育者がメディアを上手に制御しながら生活に取り入れる必要性や、文字・文書といったメディアの重要性についても強調された。

また、元公立小学校教師で現在フリースクールの代表でもある内堀照夫氏からは「小学校との連携」についての話があった。幼稚園、保育所から小学校への移行をスムーズに乗り越えるためには、幼児期によく遊び、自らの要求を出せ、好奇心旺盛で五感を働かせ優しく育てられ、人間の弱さを感じとることのできる力を蓄えておく必要があると述べられた。最後に「地域で暮らす」と題して戸田瑞穂氏から夫の転勤に伴い全く知人のいない土地で子育て、第2子出産などをすることになった経験などが、母親の視点から語られた。受講者のほとんどは保育を提供する側であり、利用する側の生のニーズにふれることができ、改めて自分たちの役割について考えるきっかけになった。

2日目の分科会は3つに分かれて行った。その中の一つ「子育て支援の実際」では、支援事業を担当している2人の助言者から最初に実践報告があり、「いつでも自由に出入りでき、親子がホッとできるスペースをたまり場として作りたい」とこれからの展望が述べられた。その後参加者が2グループに分かれて情報交換をし、その結果を相互に発表してディスカッションを行った。

保育関係者のほかにフリーの立場で「これから地元でなにかできないか」と考えている参加者もおり、子育て支援事業が保育関係者だけのものではなくなってきたと実感した分科会だった。

（イ）育児相談研修会

育児相談事業従事者を対象としているこの研修会は、それぞれが担当した（している）事例について具体的に検討しながら、相談の進め方を学ぶところに特色がある。本年度もテキストを使いながら「子育て相談における他機関との連携」などのテーマで年3回行った。

（ウ）育児相談概論研修会

本年度が6年目。1回目は「育児相談の基礎」がテーマ。小峰弘明厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課保育指導専門官の行政施策の説明「保育行政の動向」の後、山崎美貴子明治学院大学副学長が「保育者が行う育児相談の基本」について講義。その後、「事例で学ぶ」と題して〔こどもの城〕育児相談研修会企画委員から、事例の報告とその事例を使ってジェノグラムに表すことを学んだ。

また、2回目は「相談活動と連携（ネットワーク）」のテーマで、最初に小峰弘明専門官の行政説明「保育行政の動向」の後、山崎美貴子副学長が「なぜ、連携が必要か」について講義。その後、企画委員から「事例で学ぶ・他機関との連携の実際」と題して、事例の報告とその事例を使ってエコマップに表すことを学んだ。

最後にふたたび山崎氏から「園を中心とした資源リストの作り方」などについて講義を受けた。

（エ）ニュースレターの発行

名称を「子育て支援のニュースレター」と改めて4年目。昨年まで5本を外部に原稿依頼していたが、1本を減らして特別期間などに行っている「親子工房」の実践を紹介するコーナーを作り、コラムの柱立てをリニューアルした。本年度の特集は「これからの子育て世帯を支える支援」で、特に新規にスタートしたコーナーへ、児童館、保育所、などからも問い合わせがあった。

本年度の新規有料購読の申し込みは55件。合計400件余りになった。見学者、講師派遣先や関係機関の研修会のときなどにも配布（約500部程度）。随時バックナンバーの販売依頼も受け付けている。

4. まとめ

子育て支援における児童福祉施設の果たす役割が大きくなっている。地域の保育所、児童館をはじめ、子育て支援センターや幼稚園でも積極的に家庭での子育てを援助するプログラムを工夫して次々と行うようになってきた。保育研究開発部は保育事業を中心に一般来館児・者事業、研修事業等を行っているが、研修事業の育児相談研修会には各地から例年になく熱心な保育関係者の受講が目立った。保育の現場で子育て支援を担当している保育関係者からは保育所等が子育て支援の身近な砦（とりで）として親たちが利用しはじめている実態が報告されている。

「保育セミナー」「育児相談研修会」「ニュースレター」などの研修事業が子育て支援にかかわる関係者の情報交換の場になり、子育て支援の実践の場に生かされていくことを今後もめざしていきたい。

平成13年度活動一覧表

1．一般利用

〈平常期間〉

名　　称	期　間（日　時）	備　　考
春の親子遠足	5.12	「保育クラブ」「幼児グループ」の2～5歳児の親子プログラム。渋谷区にある代々木公園の自然の中で親子同士、家族同士を保育スタッフが仲介をして交流を深めることがねらい。保育スタッフが変装して木立などに隠れて親子が探すゲームや親同士が誕生月や地域ごとにチームを組んで新聞紙を使った「ぎゅうぎゅうハラマキゲーム」と名付けたプログラムなどを楽しんだ。知り合いになった家族同士が木陰で昼食を一緒に食べている場面も見られた。大人も子どももリフレッシュできるプログラムとして喜ばれた。課題は都市部の公園のため参加者には利便性があり好評であるが、場所確保のために早朝から担当者は出向かなければならないこと、また他の公園利用者も多いことから事前に情報などもキャッチしておくことが欠かせない。例年参加者が多いが、今回は祖父母親子約360人が参加した。
親子deスポーツ	10.13	「保育クラブ」「幼児グループ」の2～5歳児親子プログラムとして実施。昨年に引き続き場所はケアコミュニティセンター大ホール（旧渋谷小学校体育館）。雨天を気にせずプログラムが組める、参加の親子の様子がよく見えてよく分かる。参加者数が制限されるが室内ならではのゲームなどが楽しめて親子には好評。これまで代々木公園などで行ってきた、自然のなかでの多くの親子同士の交流をどのような形で生かすことができるのかが今後の課題。参加者親子50組。
保育活動展	H14.1.28～2.3	「幼児グループ」を中心に、「保育クラブ」の2～5歳児の1年間の作品や活動の様子を写真やビデオで紹介。「幼児グループ」の作品は一人ひとりのコーナーを作り紹介。今回は不定期（フリー）で利用の子どもたちの作品も展示した。また、他の児童福祉施設にはない試みだと一般観覧者から感想が寄せられた。（ギャラリー）
よちよちクラブ	土曜日　11:00～12:00 13:30～14:30	低年齢児のプログラムが少ないことから、1・2歳児の親子対象のプログラムを始めた。8月と3月を除く年10回。定員は15組の親子。保育スタッフが環境設定した中で親子が遊び、他の親子とも麦茶などを飲むなどしてゆったりと過ごすことがねらい。年間をとおしての担当者は一人で、保育スタッフ全員が補助として毎回一人かかわった。予約も受け付けたが、当日参加者が多かった。延べ約140組の親子が参加。両親のみならず祖父母一緒の参加も目についた。（保育室1）
保育室の一般開放	土曜日　14:00～17:00 日曜日　10:00～17:00	低年齢児のためのおもちゃや絵本を用意して、一般来館の親子が自由に遊べる場を提供した。毎週常連の親子の姿もある。2歳児になると保育クラブの会員に申し込みたいという親も多い。課題は常駐のスタッフ。（保育室2）

〈特別期間〉

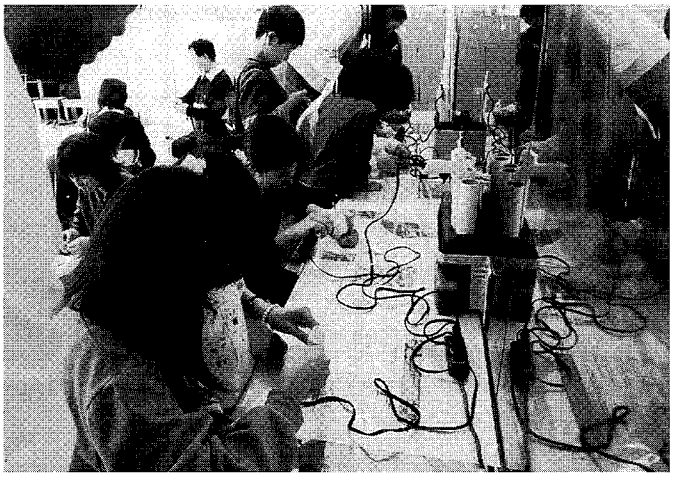
名　　称	期　間（日　時）	備　　考
〈児童福祉週間〉 つくって遊ぼう 親子工房「タロー凧」	5.3～5	“空っ風に凧上げ”と一般に思われているが、地方によっては季節を問わずに凧上げが行われている。凧上げは大人も子どもも楽しく気軽に遊べることから、ポリ袋を使って洋凧を作った。絵柄は、著作権継承者了承を得て、〔こどもの城〕の『こどもの樹』（岡本太郎作）の顔をモデルとした。常連のリピーターが多いが、児童の仕事にかかわる人の参加が目立った。材料は、竹ひご、水性ペン、セロハンテープ、ポリ袋などを。3日間で312人の親子が参加。（保育室1）

名　称	期間(日時)	備　考
〈夏休み〉 つくって遊ぼう 親子工房 「スライムチップス」	8.13～16	前年度の「スライムづくり」の第2弾。偶然、床にこぼれたままになっていたスライムが、翌日には乾燥して素敵なチップスになっていたことから思いついた造形遊び。「今年もスライムの感触を楽しみにしてきましたが、こんなこともできるんですね」という驚きの声や、〔こどもの城〕へ来ると新たな遊びの広がりと発見があるとの声も聞かれた。参加者には毎回材料とともに「作り方のポイント」を渡していたが、今回はスライムチップスをホットボンドで接着するだけなので口頭で説明した。アンケートには、子どもよりも大人の方が夢中になって作っていたという感想が多い。4日間で親子647人の参加者。（保育室1）
〈開館記念〉 つくって遊ぼう 親子工房 「石からにょきにょき」	11.2～4	川原で拾ってきた丸い石、ゴツゴツした石、つるつるの石など――いろいろな形の石にワイヤーなどをホットボンドで接着。石のオブジェを親子で作った。ヒンヤリとした石の感触を手や足で楽しむコーナーも設けたところ、オブジェを作るより懐かしそうに石の感触を楽しむ父親、母親の姿が目についた。3日間で親子237人が参加。熱心な児童福祉施設の職員も参加してきた。（保育室1）
保育室の一般開放	土曜日　14:00～17:00 日曜日　10:00～17:00	保育室2に低年齢児のためのおもちゃや絵本を用意。一般来館の親子が自由に遊べる場を提供した。父母そろっての利用や祖父母の姿、中にはベビーシッターによる利用もみられた。ここをめざして来館する親子が増えている。大きい子どもと混じり合うほかのスペースと違い、親子が安心して、のんびりとゆっくり過ごせる空間となっている。

2. 講座・クラブなど

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	曜日・日時	備　考
幼児グループ	（人） 4歳児 （11） 5歳児 （11）	（人） 10 10	火～金曜日	〔こどもの城〕を保育の場とする週4日、2年間にわたる継続的な保育活動。異年齢保育として「保育クラブ」の3歳児が、曜日ごとに異なる顔ぶれで加わる。一人ひとりの個性を発揮させるために遊びの選択を幅広く考えている。複数の担当者がそれぞれにテーマを持ち保育にあたる。また、多様な人間関係を体験する場として、本年度も夏休みに、小学5年生～中学3年生（体験保育）などのボランティアを積極的に受け入れた。子どもたちの創造性、協調性を養う意味から野外での活動を増やした。父母の保育参加が多かった。保育料33,000円、給食費4,800円（いずれも月額）。
保育クラブ	2～5歳児 （登録数 111）	14 9 （1日 あたり）	月～土曜日（2歳） 火～金曜日（3～5歳）	集団への参加、母親の社会参加などを主な目的とした子育て支援プログラム。日時を選べる保育、イベント・通信・子育て相談などの家族プログラムを行った。両親、祖父母の参加が目立った。親は兄弟、地域での友だち遊びが少ないことへの危機感を持ち、集団遊びの中での社会性、協調性を身につけさせたいと参加してくる。入会金10,000円、年会費5,000円。保育料として、2歳児1,200円（1時間）、3歳児以上850円（1時間）。昼食代600円、おやつ代200円（1回）。



つくって遊ぼう親子工房「石からにょきにょき」

〈講習会〉

名　　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　　考
親子教室	（組） 1歳児親子 （各14）	（組） ① 14 ② 14 ③ 14	月曜日 10:00～12:30 （12回）	親子遊びを中心に子育ての楽しさを両親で体験するプログラム。保育スタッフの援助で、ほかの親子との交流もはかれるようにしている。医学・心理発達にかんする講義、栄養士などからのアドバイスもある。父親の参加3回を含む。0歳児の親からの参加希望増。受講料は40,000円。

〈専門指導者向け講習会〉

名　　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　　考
第15回こどもの城保育セミナー「子どもと生活・家庭と文化 PART Ⅱ」	（人） 保育関係者など （150）	（人） 89	8.4 10:00～17:00 8.5 10:00～15:00	全国の保育所、児童館、行政の児童福祉担当者などが対象。子どもにかんするさまざまな立場の人たちと、それぞれに考え、疑問を出し合い、情報交換をはかることがねらい。 【対談】「現代の家族を支えるために」 山崎美貴子（明治学院大学副学長）／岡田恵和（脚本家） 【問題提起】「子どもを巡るさまざまなトピックス」 「幼稚園の子育て支援の実態」吉田正幸（遊育編集長） 「子どもの文化とメディア」高橋克雄（メディア評論家） 「小学校との連携」内堀照夫（元中央区立城東小学校教諭） 「地域で暮らす」戸田瑞穂（小学1年・5年の母親） 【分科会】 「より専門性をもつ職員を育てるには」 助言者＝吉村真理子（元東雲短期大学教授） 「子育ての実際」 助言者＝末次順子（社・福　湘南福祉センター平塚保育園副園長） 金沢ルミ子（社・福　白鳥会飯田中央保育園子育て支援担当） 「経験を通してみえる親子の姿」 助言者＝巷野悟郎（こどもの城小児保健部医師） 「50年の小児科医療の現場から」 秋元宏之（こどもの城保育研究開発部職員） 「20年の親子運動遊びの指導から」
育児相談研修会	育児相談担当者 （50）	31	5.19、12.8、 H14.1.26 14:00～20:00	テーマは「保育所や児童館が行う育児相談とは何か」。スーパーバイザーは、山崎美貴子（明治学院大学副学長）と山田美和子（元全社協・高年福祉部）の両氏。
育児相談概論研修会　春	〃 （130）	146	6.23 14:00～17:00	テーマは「児童福祉施設が行う育児相談の基本と実践」。春・秋とも「保育行政の動向」（小峰弘明厚生労働省保育指導専門官）、「保育者が行う育児相談の基本」（山崎美貴子明治学院大学副学長）の基本講義。秋には「なぜ連携が必要か」（山崎副学長）が加えられた。 各回とも、こどもの城育児相談研修会の企画委員の事例報告から事例をエコマップ、ジェノグラムで書き表す手法などを山崎副学長の解説で学んだ。
〃　秋	〃 （130）	117	10.27 14:00～17:00	

つくって遊ぼう親子工房「タロー凧」

3. その他

〈講師派遣〉

名　　称	期　間（日　時）	備　　考
幼児のつどい	毎月1回（8月を除く）	親子のふれあいを目的とした集い、幼児と親子が対象。主催は東京都港区高輪児童館。
こどもの城における保育の実際	6.10	〔こどもの城〕における保育研究開発部の事業説明、子ども家庭支援プログラムの実践例をビデオなどを使用して講義とワークショップを行った。学生の関心が高かった。主催は玉川大学文学部教育学科。
体を使った楽しい親子遊び	6.17	乳幼児を持つ親（特に父親）を対象に子どもとの接し方、遊び方を講義と実技で紹介。熱心な父親多かった。主催は、神奈川県藤沢市御所見公民館。
遊びのワークショプ	7.19	町立保育所みどり学園職員を対象に手遊び、パネルシアター、手作り玩具を実技研修した。〔こどもの城〕保育オリジナルのものが多く、参加者には新鮮と好評。参加者90人。主催は、埼玉県入間郡三芳町。
親子で楽しく遊ぼう	8.3	0～2歳児と母親を対象に遊びの楽しさを実技をとおして伝える。親もリフレッシュできたと喜ばれた。主催は、東京都千代田区四番町児童館。
こどもの造形指導研修会	8.22	公立幼稚園教諭を対象に幼児向けの造形指導の研修会を行った。幼稚園教諭の造形プログラムの実施経験がとぼしいように感じた。主催は、千葉県習志野市教育委員会。
一時保育者研修会	9.13	幼児期にある子どもの成長、発達の特徴などを知り、その時期に大切にしたいことや、一時保育者としての子どもたちとのかかわりについて学ぶ。参加者50人、主催板橋区教育委員会生涯学習会。
市原市公立保育所職員研修会	10.3	現代の保育事情を〔こどもの城〕の保育の実践例をもとに講演。熱心なディスカッションが行われた。参加者20人。主催者は千葉県市原市児童家庭課。
子育て講演会	10.10	子育て中のお母さんに子育ての不安や疑問について正しい知識や認識を得てもらう。体を動かしながら楽しく学ぶ。参加者40人。主催は、東京都多摩市民生委員協議会。
子育てセミナー	10.21	幼児期の親子を対象に「運動遊びと作って遊ぼう」を紹介した。久しぶりに子どもとゆったり遊ぶことができたと参加者に好評。主催埼玉県三芳町藤久保公民館。
三芳町立保育所及び心身障害児通園施設職員研修会	11.9	保育関係者を対象にした指導者向け研修会。「荒れる子、きれる子に対しての現状とケアについて、保育士としての対応」。参加者60人。主催は、埼玉県入間郡三芳町福祉児童課。
子育て支援講座 最近の子育て事情	H14.3.11	今時の日本の子育て事情、親子関係や生活の背景を講演、〔こどもの城〕保育プログラムの事例を引用しながら講演。主催は、東京都多摩市永山公民館。
子育て支援講座 子どもの感性を大切に	3.18	幼児期における子どもの感性について、いろいろな遊びの事例を交えて紹介。親たちも一緒に楽しくワークショップを行った。子どもも親も新たな遊びの発見をしたと好評。主催は、東京都多摩市永山公民館。

〈その他（ニュースレターの発行）〉

名　　称	期　間（日　時）	備　　考
ニュースレターの発行	第26号（7.15） 第27号（H14.1.15） 第28号（3.15）	行政、経済界、利用者にかんする情報及び子育てをめぐる情報、育児相談研修会の内容の概要などを紹介している。児童福祉施設における子育て支援のプログラム開発が活発化してきているなかで、具体的な資料を求める要望が多くなってきている。〔こどもの城〕で行っている「親子工房」の紹介をはじめ、児童の虐待や保育サービス第三者評価、子どもとメディアの問題を取り上げたのが好評だった。 主な配布先は、市長会、見学者、関係所管課。年間講読料2,000円（郵送費、印刷代一部負担金）

小児保健部

平成13年度の活動

1．活動の概要

小児保健部は、子どもの健康の問題に取り組む部門である。特に、子どもが心身ともに健康に育っていくように援助すること、そのために親の子育てを支援することが目的となっている。活動は、以下の4点を軸に行われている。

(1)「小児保健クリニック」での診療・相談
(2) グループで行う講座や子育て支援の活動・催し
(3) 研修会・講習会などの啓発活動
(4) 活動の成果をまとめるための研究活動

なかでも、小児保健クリニックの個別の診療・相談が中核になっている。小児科医、保健師、看護師、管理栄養士、臨床心理士などの専門職員が協力して、予約制で時間を十分とって相談できる場を提供。心身両面から親子にかかわり、その健康状態や生活の改善、人格の形成を援助していくことを心がけている。

また、子どもの生活習慣病予防のための「健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉」やダウン症児とその保護者のための「親と子のリトミック〈ダウン症クラス〉」などの講座、「マタニティ・スイミング」「赤ちゃんサロン」「季節の離乳食」など、妊娠期からの定期的な子育て支援活動を行っている。

このほか「マタニティ・コンサート」「マタニティ・スイミング同窓会」「赤ちゃん大集合」などの催しも開催している。これらは、〔こどもの城〕の他の事業部と連携して、多彩な内容になっている。

活動から得た結果は、主催する研修会・講習会を通じて外部の専門職の人々に伝えたり、見学者の受け入れや外部での研修・講演活動などの機会に広めていくこととしている。そのためには、日ごろの活動をまとめて学会などで発表する研究的な活動も必要となっている。

本年度は、特に「研修会・講習会などの啓発活動」の充実を図った。新しい事業として「子育て支援講習会」という、子育て支援に携わる専門職（保健所、保育所、子育て支援センター、児童館などの職員）を対象とした小規模の研修会を設けた。国の少子化対策事業として各地で0～2歳ぐらいの乳幼児とその保護者向けの“子育て支援活動”がさかんになっている。そのなかで、現場のスタッフは、一昔前とは様変わりしてきた子育ての状況やさまざまな親子への対応に苦慮することが多くなった。そこで、新しい知識や情報を取り入れながら、現場における悩みを話し合える研修会を企画したわけである。

毎年1回秋に開催している、同じく専門職対象の研修会「小児保健セミナー」では、「落ち着きのない子をめぐって」というタイトルで、心理・教育・小児精神科の各分野の専門家を講師に招いた。現場で切実に感じている問題であったためか、早くから参加希望者が定員を超えてしまうという状況であった。

専門職対象の研修会は、小児保健部の診療・相談やその他の日常活動の経験から、タイムリーな問題を意識的にとらえて生まれたものである。いろいろな地域や現場で起きていることと共通する面があり、“子育て支援”の裾野を皆で勉強し、支え合っていく必要性が感じられた。これからも、世の中の状況をとらえつつ啓発活動を行っていくことは、小児保健部の大きな役割であると考える。

「マタニティ・スイミング」は、プールの改修工事（平成13年1～3月）のため休止していたが、4月から新規に講座生を募集して再開した。幸いその後も参加者数は順

調に増えている。

子育て支援の活動の「赤ちゃんサロン」「赤ちゃん大集合」は盛況であり、2年目を迎えた「季節の離乳食」も軌道にのってきている。「マタニティ・コンサート」も、最近では絵本の上映・朗読を加え、子育て支援の目的でさらに内容が充実してきている。

「健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉」は、16年続いているが、肥満の小学生で満員となっている。

小児保健クリニックの診療・相談活動も総件数が増えている。いろいろな訴えに、現代的な子どもの生活や親子関係が反映されている。しかし、自発的に受診・来談するということは、子どもを健全に育てたいという保護者の気持ちの現れであろう。それを受け止めつつ、着実な活動をしていきたい。

2. 診療・相談活動

「小児保健クリニック」は予約制で、子どもの心や体の発育・発達、健康状態、社会適応などについて、診療・相談が受けられる小児科の診療所（保険診療機関）である。ただし、一般のかぜや腹痛といった急性の疾患は対象外としている。小児科医をはじめ、保健師・看護師・管理栄養士・臨床心理士などが連携し、心身両面から一人の子どもをみる体制をとっている。

医師の診療は健康保険が適用される。初診では1時間かけて、親の話をよく聴き、背景にある子どもの生活や親子関係を理解するようつとめている。また、乳幼児健康診査機関に指定され、公費で保障されている健康診査も行っている。さらに、必要な場合は、小児科診療のなかで小児精神科（週2回）・小児耳鼻科（月1回）に紹介し、より専門的な助言・指導が行えるようにしている。

本年度の月別診療・相談件数は、表1のとおりである。前年度と比べ、診療・相談の総件数は2,553件から2,656件へと103件（4.0％）の増加がみられたが、新規来所件数は316件から317件とほとんど同数である。新規来所者数は例年300件前後にあり、当クリニックの体制からはこれくらいが許容範囲であるといえよう。診療（健康保険適用）が前年度の1,045件が1,036件と9件（0.9％）減っているが、これは前年度が前々年度に比べ226件増加だったので、そのままの傾向を引き継いでいるといえる。

健康診査（公費）と健康診断（自費）は、計169件が144件にと25件（14.8％）減っている。保険適用外の医師による育児・健康相談は、13件から15件へと微増している。ダウン症療育相談も101件から90件へとわずかな減少となっている。心理・発達相談は、1,225件から1,371件へと146件（11.9％）の増加となった。新規来所者のなかでも、心理・発達相談に紹介されるケースがたいへん多かったためである。

表2は、新規来所者の居住地域別内訳だが、東京都が8割弱、他地域が2割強という割合は変わりない。地元渋谷区が多いのは、乳幼児健康診査の利用が定着してきているからと考えられる。割合としては前年度とほとんど変わらない。東京都以外では、交通の便の良い神奈川県がいちばん多く、次いで埼玉県からの来所者数が多い。

表3の初回来所時の年齢内訳は、5歳以下の乳幼児の受診が約6割で、特に乳幼児健診があるので0～1歳児の割合が多い。健診以外では、言葉の発達の遅れなど発達につ

【小児保健クリニック月別診療・相談件数（初診・再診内訳）】（表1）

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
診療		78	75	93	95	66	103	88	71	76	90	98	103	1,036
健康診査（公費）		8	11	4	5	13	10	5	11	12	6	9	8	102
健康診断（自費）		1	1	22	3	1	3	2	3	3	1	0	2	42
育児健康相談		0	2	2	3	3	0	0	2	1	0	1	1	15
心理・発達相談		105	107	120	112	102	111	104	107	129	118	122	134	1,371
ダウン症療育相談		8	1	13	7	6	9	9	8	9	6	7	7	90
合計		200	197	254	225	191	236	208	202	230	221	237	255	2,656
内訳	初診（新規）	23	24	29	32	29	28	21	26	27	20	26	32	317
	再診	177	173	225	193	162	208	187	176	203	201	211	223	2,339

【小児保健クリニック新規来所者の居住地域内訳】（表2）

居住地域	渋谷区	世田谷区	港区	新宿区	杉並区	その他23区	市郡部	計	神奈川県	埼玉県	千葉県	その他	計	合計
人	69	19	13	11	11	91	30	244	38	21	9	5	73	317
(%)	(21.7)	(6.0)	(4.1)	(3.5)	(3.5)	(28.7)	(9.5)	(77.0)	(12.0)	(6.6)	(2.8)	(1.6)	(23.0)	(100)

【小児保健クリニック初回来所時の年齢内訳】（表3）

年齢	0歳	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	7歳	8歳	9歳	10歳	11歳	12~17歳	18歳以上	合計
人	55	35	17	22	19	29	19	17	26	18	16	14	27	3	317
(%)	(17.4)	(11.0)	(5.4)	(6.9)	(6.0)	(9.1)	(6.0)	(5.4)	(8.2)	(5.7)	(5.0)	(4.4)	(8.5)	(1.0)	(100)

【新規来所者の診療・相談内容別内訳】（表4）

	内容	件（%）
発達についての相談	学習障害・注意欠陥多動性障害（疑いも含む）	28（ 8.9）
	言語発達遅滞（疑いも含む）	24（ 7.6）
	精神・運動発達遅滞（疑いも含む）	15（ 4.7）
	ダウン症、その他先天異常	7（ 2.2）
	自閉症・自閉的傾向（広汎性発達障害）	7（ 2.2）
	小計	81（25.6）
情緒・行動面の相談	不登園・不登校	29（ 9.1）
	情緒障害・情緒不安	29（ 9.1）
	育児不安（夜泣き・指しゃぶりなど）	9（ 2.8）
	神経症（強迫神経症・恐怖症など）	8（ 2.6）
	集団不適応	2（ 0.6）
	小計	77（24.2）
身体的・心身症的な相談	肥満・肥満と心理的な問題	31（ 9.8）
	心身症（脱毛・チック・吃音など）	10（ 3.2）
	夜尿症・遺ふん・頻尿など	10（ 3.2）
	身体疾患（扁桃腺肥大・血管腫など）	9（ 2.8）
	アレルギー疾患・湿疹・ぜんそくなど	2（ 0.6）
	小計	62（19.6）
合計		220（69.4）
健診	健康診査（公費）	69（21.8）
	健康診断（自費）	28（ 8.8）
小計		97（30.6）
総計		317（100）

【新規来所者の来所経路（紹介・直接）内訳】（表5）

	来所経路	人（%）
紹介	小学校・幼稚園・保育所	25（ 7.9）
	保健所	23（ 7.3）
	療育機関	15（ 4.7）
	医療機関	14（ 4.4）
	障害児親の会	1（ 0.3）
	小計	78（24.6）
	こどもの城　クリニック利用者	29（ 9.2）
	その他の知人・友人	28（ 8.8）
	こどもの城　保育	15（ 4.7）
	こどもの城　マタニティ・スイミング	14（ 4.4）
	小計	86（27.1）
合計		164（51.7）
直接	こどもの城に来館して看板をみて	65（20.6）
	新聞・雑誌・テレビ	30（ 9.5）
	インターネット	29（ 9.1）
	こどもの城の講座・クラブ利用者	14（ 4.4）
	兄弟姉妹が受診している	12（ 3.8）
	「こどもの城ニュース」「友の会」	2（ 0.6）
	不　明	1（ 0.3）
	合計	153（48.3）
総計		317（100）

いての気がかりや、ちょっとした育児不安から相談に来所することが多い。

小学生（6～11歳）は約35％で、情緒・行動面の問題や肥満のほか心身症的な問題が多いと思われる。中学生以上の思春期の来所者は、数は少ない（27人）が毎年度少しずつ増えている。

表4は新規来所者の診療・相談内容の内訳であり、小児科の初診時での集計である。診断名を集計しているが、まだはっきりと判断がついていない場合には、保護者の主訴を参考にして「疑い」としている場合もある。前年度と比べると、発達の相談が割合としては合計で69件（21.8％）から81件（25.6％）へとわずかに増加、とくに「学習障害・注意欠陥多動性障害（疑いを含む）」が前年の16件から28件（8.9％）に増加している。

情緒・行動面の相談は、58件（18.4％）から77件（24.2％）に増加し、特に前年は8件（2.5％）に減っていた不登園・不登校の相談が29件（9.1％）と3倍以上に増えたのが大きな変化であるが、この原因ははっきりしない。しかし、「不登校傾向」がみえ始めたころに来所し、1年も休まないでまた保健室登校などを始め、短期で相談を終わってしまう、比較的軽い事例も多くなっている印象がある。軽いともいえるが、根本的な問題が解決しないうちに登校は始まる。不登校が「症状」として表現されているといえようか。

身体的・心身症的な相談は、62件（19.6％）で、前年の74件（23.4％）からは減少した。これは、前年度に肥満の問題がマスコミでも報道されることが多かったため受診者が増え、それが元に戻ったという印象である。健康診断は、新規来所者の中でも昨年の115件（36．4％）から97件（30.6％）に減少している。

表5は、新規来所者の来所経路（紹介・直接）の内訳である。紹介164件（51.7％）、153件（直接48.3％）という割合は、前年度とあまり変わらない。

本年度の特徴は、マスコミの影響もあって「ADHD（注意欠陥多動性障害）ではないか」「LD（学習障害）ではないか」という訴えで受診する親子が目立ってきていることである。実際にはそうではない場合も多いのだが、初診時には、そうした保護者の訴えを受けて、知能検査をしたり心理・発達相談に紹介したりといった形で継続する形になることが多くなっている。子どもの状態を客観的にみなければならないのはもちろんであるが、子どもの行動面の問題の原因を子ども自身に求め、親自身が自分の子育てを振り返る姿勢が弱くなってきているという印象も受ける。

このほか、統計はとっていないが、受診の前に、医療機関、病名、薬の内容などをインターネットで調べてくる人が多くなっている。情報を知的に収集することは大切であるが、医療・相談機関での相談は人と人との信頼関係の形

成なくしては続かない。保護者自身が、子どもとの関係ばかりでなく、人とのコミュニケーションのなかで問題を解決していく姿勢を持てるかどうかも、相談の成否をになう要素として大きくなってきているように思う。

全体には、形としてわかりやすい教育的な働きかけが子どもの発達に合っていないところで行われていて、親子の自然な心の通い合いがみられないケースが増えている。子どもは症状を出したり、不適応になったりしているが、どこかで人との温かな心の交流を求めているのではないだろうか。そこに気づきにくくなっている保護者が多いということは、今の社会の一面を表していると思われる。

3. 講座など集団を対象に行う活動

「健康スポーツ教室〈太りすぎクラス〉」は、肥満の小学生を対象としているが、本年度も定員を超える希望者があった。運動のプログラムは、体育と水泳を週ごとに交互に行っているが、本年度は1学期に1回、親子一緒に皇居一周のウオーキングや代々木公園のオリエンテーリングなどの野外活動を取り入れてみた。楽しみながらの運動が目的だが、親子ともにふだんは家庭でそうした活動をしていないことが多く、たいへん好評であった。

プール改修工事のために休止していた「マタニティ・スイミング」は、4月から再開した。4～6月は定員35人のところ在籍が10～18人で推移したが、7月には30人と回復し、順調に運営することができた。医師や助産師の問診もあり医学的管理ができていることや、生まれてから後の子育てに〔こどもの城〕への期待感があるものと思われる。

子育て支援活動としての「赤ちゃんサロン」も、広い音楽ロビーに会場を移して2年目となったが、さらに参加者が増加し、親子総計で延べ3,091人となっている。最近は、インターネットで知って訪れる人も増えた。また、以前にくらべて継続者より新規の参加者が増えてきた。少し参加者の質が変わってきているのかもしれないが、今後の経過を見守りたい。

「赤ちゃん大集合」

年1回の秋の行事である「赤ちゃん大集合」も、以前は小児保健部が中心となって行っていたが、本年度からは全館的に会場を広げ、企画研修部が中心となって行う全館行事に発展した。育児用品の紹介などの展示・情報コーナーも21社の関係企業・団体が参加し、規模が大きくなった。天候にも恵まれ、約380組763人の乳児と保護者（特に母親）が参加し、熱のこもったにぎわう1日となった。

「親と子のリトミック〈ダウン症クラス〉」は、本年度から対象年齢を3歳から2歳6か月に下げ、集団生活に入る前の年齢層を対象にしてみた。来年から就学という年長組にあたる子どもたちが、より豊かな経験を身につけることを目的に参加することが多かった。

その他、年4回の「季節の離乳食」、「夏休みこども1日ドック」も定員に近い参加があり、順調に推移しているが、小児保健部としては、時代の方向性をとらえながら、今後どのような活動をしていったらよいのか、再検討する必要を感じている。

4. 研修会などの啓発活動

本年度、あらたに子育て支援の専門職を対象とした「子育て支援講習会」を設けた。定員を40人と少なめに絞り、小児科医による「子どもの発達」の講義で体と心の発達の原点を振り返ったのち、分科会形式で離乳食や食生活一般、健康管理や応急処置の方法、発達や親子関係などのテーマで現場における問題を話し合った。

分科会形式は、現場の悩みを討論できるよさはあるが、他の分科会のことが学びにくいという意見もあった。早くから参加希望者の申し込みがあいつぎ、現場の職員からのニーズの高さが感じられた。そこで、来年度は2日コースにしてそれぞれが各分野の新しい知識を学べるような内容も検討している。

「小児保健セミナー」の「落ち着きのない子をめぐって」も現場の切実なニーズに合ったテーマであったようだ。しかし、“落ち着きのない”は、現場の人々の“印象”であって、子どもの実態やその原因にはいろいろな可能性が含まれる。昨今、ADHD（注意欠陥多動性障害）という疾患名が一般に知られたために、全てがそのためであるかのような混乱が起きている。なかには、医学的な対処を必要とする子どももいれば、親子関係を含めて子どもの心理的な成長や存在をあせらずに長い視野で支えていくことが必要な場合もある。また、最近の家庭の養育機能が弱まっているところにその増加の原因を考える見方もある。

今回はそのあたりを整理するとともに、結果としては、子どもの成長を全体的に長い目でとらえながらみていくことの大切さを再認識することになった。

「マタニティ・コンサート」

「小児肥満のための指導者講習会（体育実技）」

「小児肥満のための指導者講習会」は毎年２回、すでに15年も続いている講習会であり、全国から学校の養護教諭や栄養士・保健師などが参加してきた。本年度も、１日コースと２日コースを行ったが、前者は定員には満たなかった。その分、情報交換などで、密度の濃い討議ができてはいるが、そろそろ見直しをする必要もあると思われる。

5. その他

〈動くこどもの城〉の活動は、本年度も体育事業部の「お母さんと赤ちゃんのすくすく体操」に同行して、４か所で「赤ちゃんサロン」の経験をもとにしたプログラムを行った。乳幼児とその保護者を対象に、実際に交流の場を体験してもらったり、トークを行ったりした。

また、その地域の実情に合わせた研修も行っている。これまでは専門職を対象とした研修が多かったが、最近は親の子育てサークル活動も盛んであり、そうした場での研修が増えている。相談活動に対する援助なども課題になりつつある。また、児童館で乳幼児を対象に活動を始めたいというニーズも高くなっている。

スタッフによる講師派遣や講演活動なども増え、「食育など子どもの食生活」「乳幼児期の親の接し方や子どもの理解など子育ての課題」「乳児の健康管理」など、それぞれの職員の専門性にあったテーマで、啓発活動を行った。

6. まとめ

小児保健部は、本年度も「子育て支援活動」や「子どもの心身の健康づくりの援助」のために、おおむね順調に活動してきたといえよう。しかし、21世紀を迎えて時代の流れは大きく変わりつつある。コンピュータや携帯電話の普及などにより、人と人とのコミュニケーションのあり方も変化している。また、女性（母親）の社会進出や離婚・再婚家庭の増加など、家庭の姿や形も多様になり、家族の安定感や凝集力も今までとは異なってきている。新しく親になっている世代の人々は、必ずしも子どもを育てるために十分な知識・経験・感性などを身につけておらず、子育てに援助を必要としている。そして、世間では、虐待や“落ち着かない”子どもの増加などが話題になり、子どもをとりまく話題は決して明るいものとはいえない。

そうしたなかで、子どもが子ども時代にしか身につけることのできない大切なものを失わずに、健全に成長できるための支援がますます必要となっている。子どもを取り巻く家族、親子を取り巻く地域の人々、専門職などに対して私たちに何ができるかをこれからも問い直しつつ活動を続けていきたいと考える。

平成13年度活動一覧表

1．一般利用

〈平常期間〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
診療・相談 小児科診療 育児・健康相談 乳幼児健診 健康診断 栄養相談 心理相談 発達相談	月曜日を除く毎日 9:30～17:30	小児保健クリニック。診療・相談はすべて予約制。小児保健部の小児科医師・看護師・保健師・臨床心理士・管理栄養士が診療・相談を行う（週2回小児精神科・月1回小児耳鼻科を含む）。 小児科医師の診療には、原則として健康保険が適用される。健康保険が適用されない相談もある。（育児・健康相談は相談料1回5,000円。心理・発達相談は担当者1人の場合1回50分5,000円、医師の診察を受けずに直接入る場合の初回相談料7,000円、専門相談のダウン症療育相談は、相談料8,000円である。）
※専門相談 ダウン症療育相談	日曜日・金曜日（各月1回）	専門医が担当。
赤ちゃんサロン	月2回火曜日（原則） 12:30～14:00	対象は3か月～1歳半までの子どもとその保護者、妊婦。入館料対応。参加者同士の自由な交流（井戸端会議）の場で、育児情報の交換や、医師・保健師・管理栄養士・臨床心理士による育児相談が行われる。本年度は延べ3,091人が参加した。（音楽ロビー）
第16回マタニティ・コンサート	5.20	妊娠によって生活に制約を受けがちな妊婦に、楽しくリラックスできるひとときをすごしてもらい、出産を迎えようという主旨のコンサート。絵本のスライド上映・朗読とクロマチック・ハーモニカ（小林史真）の演奏を合わせて行うコラボレーション。このほか、市川英子助産師の呼吸法の指導、野末源一医師（山王病院産婦人科）と巷野悟郎こどもの城小児保健部顧問のメディカル・トークを行った。264人参加。（青山円形劇場）
第9回マタニティ・スイミング同窓会	6.6　13:30～15:00	乳児（2歳未満）のいる、マタニティ・スイミングの卒業生（母親）を対象とした同窓会。小児科医のトークや体育事業部スタッフの親子体操を楽しみ、久しぶりに会った仲間と子育てについて語り合い、懇親を深めた。35組70人が参加。（研修室）

〈特別期間〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
〈夏休み〉 こども1日ドック	7.26　12:00～17:30	対象は小・中学生。体育事業部との共同事業。医師による診察、検査（尿、血圧測定）、身体計測、生活習慣調査、食生活調査、心理検査、体力測定の結果に基づいた診断・指導。受診者は12人。
〈開館記念〉 赤ちゃん大集合～赤ちゃんサロンスペシャル～	10.31 10:30～15:00	「赤ちゃんサロン」のイベント版。主会場での「小児科医トーク」「井戸端会議」（小児保健部）のほか、保育室で「親子遊び」（保育研究開発部）、体育室での「親子体操」（体育事業部）、音楽ロビーでの「音楽遊び」（音楽事業部）、育児用品や育児情報の展示コーナー、プレイホールの「みんなのにこにこ広場」（プレイ事業部）など、他の事業部も加わり全館を使って行われた。参加者は763人（379組）、天候に恵まれ盛況であった。

2. 講座・クラブなど

〈講座〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
健康スポーツ教室＜太りすぎクラス＞第18期	(組) 太りすぎ小学生とその親 (20)	(組) ① 21 ② 20 ③ 20	土曜日 14:00～17:00	体育事業部との共同事業。太りすぎの改善のために医学指導(東京女子医科大学附属第二病院小児科医)・栄養指導(和洋女子大学家政学部栄養学助教授・講師)・体育指導(水泳と体育を交互に)を行う。親向けレクチャー(数回)、親子で屋外活動(年3回)なども実施。 受講料1・2期(12回)22,000円、3期(9回)18,000円。
親と子のリトミック＜ダウン症クラス＞第18期	2歳半～5歳のダウン症児とその親 (15)	① 10 ② 12 ③ 10	木曜日 14:30～15:30	音楽事業部との共同事業。リトミックを利用し、子どもたちが親やスタッフとリラックスして一緒に活動する中で、自分の気持ちを表現できることをねらっている。講師は吉村温子(音楽事業部)。 受講料1・2期(10回)19,000円、3期(9回)17,000円。

〈クラブ〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
マタニティ・スイミング	(人) 妊娠16週以降の妊婦 (35)	(人) 4月12 5月11 6月18 7月30 8月31 9月27 10月28 11月22 12月21 1月17 2月18 3月23	火・木曜日(月7回) 14:00～17:00	体育事業部との共同事業。水泳という活動をとおして、妊娠中を心身ともに健康に過ごすことをねらっている。水泳の前後の検診は、日本赤十字社医療センター産科医師、助産師が担当。平成13年1～3月のプール改修工事の後、4月より再開。

〈短期講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
季節の離乳食	(人) 5～12か月の乳児とその親 (10)	(人) 春 13 夏 5 秋 16 冬 8	木曜日(年4回) 13:30～14:30	管理栄養士が担当。離乳食の作り方・与え方に悩む母親たちに実際に調理した食材などを見せながら、ちょっとした工夫でできる調理法などを紹介。小児保健部プレイルーム。

「季節の離乳食」

〈専門指導者向け講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　考
	（人）	（人）		
子育て支援講習会（第1回）～子育ちは0．1．2歳から～現場でどう支えるか	保育士、保健師、児童館職員など（40）	41	6.30 10:00～17:00	子育て支援の活動にたずさわる現場の職員の研修会。「子どもの成長と発達」（巷野悟郎こどもの城小児保健部顧問・小児科医）の講義、「赤ちゃんサロン」の事業説明、分科会（「健康管理や応急処置」「離乳食や食生活一般」「発達や親子関係」）で現場の悩みや実情を出し合い、討論を行った。講師は小児保健部スタッフ。
小児肥満のための指導者講習会（第30回）	養護教諭、栄養士、保健師、保育士など（50）	36	7.13 10:00～17:00	全国から肥満児の指導について学習したい養護教諭・栄養士らが集まった。「肥満の判定と指導」（村田光範和洋女子大学教授・小児科医）、「肥満改善のための食事・栄養指導」（坂本元子和洋女子大学教授・栄養学）、「肥満児の運動指導・実技紹介」羽崎泰男こどもの城体育事業部長。1日コース。
第17回小児保健セミナー「落ち着きのない子どもをめぐって」	保育士・保健師・養護教諭・児童館職員など子育て支援の専門家（100）	121	11.10 10:00～17:00	幼稚園・保育所・学校などで増えているといわれる「落ち着きのない子ども」をテーマにその理解のし方と対応について整理した。「子どもの心の発達の視点から」（吉田弘道専修大学教授）、「子どもが育つとは？」（小田豊文部科学省視学官）、「落ち着かない子どもって何～ADHDとその周辺」（木部則雄白百合女子大学助教授）の講義。
小児肥満のための指導者講習会（第31回）	養護教諭、栄養士、保健師、保育士など（50）	50	H14.3.15・16 10:00～17:00	「肥満の判定と指導」（村田光範東京女子医科大学名誉教授）、「肥満改善のための食事・栄養指導」（坂本元子和洋女子大学教授）、「肥満児の運動指導・実技紹介」（羽崎泰男こどもの城体育事業部長、山崎綾子同指導員）、「肥満児の理解と心理的対応」（井口由子こどもの城小児保健部長）。最後にグループに分かれて、情報交換の場を持った。2日コース。

「小児保健セミナー」

「子育て支援講習会（分科会）」

3. その他

〈動くこどもの城〉

名　称	期 間（日 時）	備　考
お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ	7.7・8	親子向けの体育プログラムに臨床心理士が同行。今回は子育てサークルの主催。親子関係や発達について親向けの助言を行ったり、児童厚生員対象の研修会を行った。名古屋市中川生涯学習センター・瑞穂生涯学習センター。
〃	10.26	親子向けの体育プログラムに臨床心理士が同行。親向けに乳児期に大切な親子関係などについて助言した。午後は児童館の職員対象に子育て支援のプログラムの持ち方について研修を実施した。佐賀県鳥栖市児童センター。
〃	12.13	親子向けの体育プログラムに臨床心理士が同行。「赤ちゃんサロン」のように、親同士の交流の場に援助者が加わって相談ができるようにする方法を実際に行い、助言した。午後は職員への研修を実施した。埼玉県越谷市立児童館コスモス。
〃	H14.1.17	親子向けの体育プログラムに管理栄養士が同行。「赤ちゃんサロン」のように、親同士の交流の場に援助者が加わって相談ができるようにする方法を実際に行い、助言した。午後は職員への研修を実施した。千葉県印西市立ふれあい文化館。

〈講師派遣など〉

名　称	期 間（日 時）	備　考
神奈川県藤沢市教育委員会「相談指導教室・いじめなんでも相談ふじさわ」	5.24、6.28、9.27、11.22、H14.2.28	不登校の児童・生徒の相談・指導にあたっている教職員の研修会に、定期的に臨床心理士が出向いて、助言・指導を行った。
(財)母子衛生研究会マタニティひろば～ハロー赤ちゃん	月1回	妊婦対象の教室で「妊娠中の栄養の話」（管理栄養士）と「妊娠中の健康管理について」（看護師）の短い講義を行った。
(財)母子衛生研究会育児と健康セミナー	5.31・6.1	母子保健関係の専門職対象に小児科医が子どもの健康・発達について、管理栄養士が子どもの食生活について講演を行った。新潟県上越国民年金健康センター・長岡リリックホール。
はつらつ子育てセミナー	6.5	小学生を持つ保護者に対し、臨床心理士が親子関係など子育てについての話やコミュニケーションの実技の講習。千葉県柏市藤心近隣センター家庭教育学級。
全国幼稚園教育研究協議会第50回記念大会	7.24・25	全国幼稚園教育研究協議会の第50回記念大会の分科会で、臨床心理士が助言者を務めた。
(財)母子衛生研究会育児と健康セミナー	8.28	母子保健関係の専門職対象に、小児科医が子どもの健康について、管理栄養士が子どもの食生活について講演を行った。東京都新宿区安田生命ホール。
子どもの心の発達	9.20	主に0～2・3歳の子どもの保護者向けに「子どもの心の発達」について臨床心理士が講義。東京都大田区萩中三丁目児童館。
子どもの心が育つとき～自立にむけて～	10.22	乳幼児を持つ保護者向けに子どもの心の発達と親子のかかわりについて、臨床心理士が講義。兵庫県津名郡一宮町子育てふれあいセンター。
幼児の食育セミナー	H14.2.28	長岡市の保育所における「幼児の食と食生活に関する」アンケート調査の結果をもとに保護者・保育・母子保健関係者のパネルディスカッションが行われ、管理栄養士がそのコーディネーターを務めた。新潟県長岡保健所。

名　称	期 間（日 時）	備　考
一汁三菜の提案	3.7	地域の3歳から15歳の子どもの食生活状況調査をもとに、健康に育つための食生活について管理栄養士が講演を行った。青森県鶴田町保健福祉センター。
ボランティア講座	3.11	地域に住む大人のボランティア向けに、臨床心理士が、コミュニケーションの取り方など、実技をまじえた講習を実施した。東京都品川区立平塚児童センター。
子育てコンサルタント研修会	3.18	岐阜県健康福祉課主催による子育てコンサルタントとその候補者の研修会で、臨床心理士が講義を行った。岐阜県関市役所・ソフトピアジャパン（大垣市）。
NHK奈良放送局「すてきママ倶楽部」	3.31	「食べること」のテーマで行われた乳幼児の親対象のイベントで、管理栄養士が「とりわけ離乳食」の実演と試食、「食べることと子育ての講演会」の講師を務めた。奈良県生駒市南コミュニティセンター。

企画研修部

平成13年度の活動

企画研修部での事業は前年度から大きな変更はなく、企画と研修の2部門で以下の事業を行った。

企画部門では、〔こどもの城〕の事業全般にかかわる企画調整、グループ活動、こどもの城友の会の運営、ギャラリーなどを使った展示やワークショップなど家族で楽しめる催しの企画・運営、子育て支援のための事業を行った。また、外部関連団体との協同事業、国庫補助事業〈動くこどもの城〉の事務局、全国の児童館などの情報の収集、インターネットを利用したホームページの運営、助成金事業のとりまとめなどを行った（詳細別項）。

研修部門では、ボランティアの養成と日常活動のコーディネートのほかに、夏休み・春休みの野外活動、高校生の社会参加のためのクラブ活動、児童厚生員などを対象とした実技指導講習会、手話講座などの企画運営にあたった。

1．事業全般にかかわる企画調整

（ア）事業全体のとりまとめ

企画部門の中心的な業務は、複数の事業部と劇場部門をも含めた〔こどもの城〕全体の事業調整にある。事業計画や事業報告書のとりまとめ、事業内容をまとめた小冊子「こどもの城事業と運営」の年次改訂、特別期間ごとの事業計画のとりまとめ、日常的なものでは週間事業予定表や土・日曜日、祝日や特別期間中に館内に掲示する「デイリー版」のプログラム表の作成など、が基本的な業務である。

特別期間の事業のとりまとめについては、単に事業部の計画をまとめるだけでなく、全体として統一性のあるビジョンを持ったイメージ作りが望まれるが、実際には既に決定したプログラムのなかからイメージを探すような手順となることが多かった。

平成11年度から、平日専用のパス（入館定期券）や夏休み特別期間専用の期間限定パスを新設して、少しでも多くの来館児・者に〔こどもの城〕を利用してもらうよう努めてきた。本年度の販売実績は、平日パスは114枚、夏期特別期間限定パスは大人179枚・子ども203枚の合計382枚で、いずれも前年度を上回った。

近隣の小学校・幼稚園・保育所などにも、利用をうながすはたらきかけをした。春休み特別期間に渋谷・港・目黒・世田谷の4区の新1年生を招待したほか、渋谷区と港区の公立小学校のそれぞれの開校記念日に全児童を招待した。児童福祉週間（ゴールデンウイーク）特別期間には渋谷区と港区の小学校、幼稚園、保育所に、夏休み特別期間には23区と三鷹・武蔵野の両市の小学校にチラシを送付したほか、同じ地域内にある児童館にはチラシに添えた優待券を送付した。

こうした試みは少しずつ定着してきているが、まず施設としての魅力を高めることが大切であり、小・中学校が完全週5日制になる次年度に向けて、魅力的な内容をアピールできるように、事業全体の企画調整をすることが課題である。

（イ）グループ活動

グループ活動の受け入れ件数は、131件3,084人と件数、利用者数ともに過去最高となった。ここ数年は、毎年100件を超える利用件数が続いている。数字的には満足な結果がえられたと考える。しかし、年度末（1～3月）に利用が集中することや、小学校の利用が少なく養護学校、保育所、幼稚園などにかたよる傾向は、本年度も変わらなかっ

た。

ここ数年新規プログラムの開発が進んでいないこと、活動紹介用の新しいビデオ制作が進んでいないことなどの課題は持ち越された。

（ウ）動くこどもの城

※「こどもの城から全国へ」（133～142ページ）参照。

（エ）こどもの城友の会

「こどもの城友の会」は家族単位で入会してもらい、〔こどもの城〕の施設を積極的に利用し、さまざまな催しに参加してもらう会員組織。本年度も下表のように一般の催しへの優待や友の会独自の催しを行った。

会報「こどもの城友の会通信」は本年度も年12号発行し、平成14年3月で通巻60号の発行となった。毎回会員から意見が寄せられてきている。このほかに、「こどもの城ニュース」(年11回)、講座受講生の募集や催しの案内などを会員あてにダイレクトメールで発送した。

「友の会ファミリーハイキング」

友の会独自の催しでは、会員から要望の多い「ファミリーハイキング」を11月に地元の渋谷・原宿地区で行った。代々木公園で活動したあと、謎探しをしながら〔こどもの城〕まで歩くという、身近な街の魅力を再認識するハイキング。

自然の中で行うキャンプやハイキングだけでなく、幅広い年齢層の会員が楽しめ、交流を図ることができるプログラムをこれからも企画し、こうした事業をとおして得られる家族の要望を他の事業にも反映していきたい。

会員数は約1,600家族で年々減少傾向にある。「友の会」は〔こどもの城〕の事業のよき理解者であるだけでなく、モニター的機能を持ち、一般客に対するＰＲを担い、集客効果のある大切な組織である。今後さまざまな対策を検討したい。

2. 一般利用

本年度も、特別期間を中心にギャラリーや青山円形劇場などを使って、外部団体との提携事業を含め、さまざまな展示やワークショップなどを積極的に行った。

【みて！ さわって！ うごかして！
～こどもの城探検隊～】

〔こどもの城〕では、夏休み特別期間に各事業部でさまざまな短期講習会やキャンプを行っている。しかし、まだまだそれを知る人は少ないと思われるので、児童福祉週間（ゴールデンウイーク）特別期間に、これらの活動を来館児・者に広く知ってもらう取り組みとして、気軽に遊びながらお

【「こどもの城友の会」の活動】

プログラム名	実施日	内　　容
友の会ファミリーハイキング	11月18日	地元の代々木公園から原宿・表参道を経て〔こどもの城〕までのルートで実施。14家族36人が参加。午前中は代々木公園で「魔法使いになるトレーニング」を全員で行い、昼食をともに取ってから、午後は家族単位で街を歩き、「魔法使いになるための試練」を経てこどもの城に到着、魔法使いの認定式をした。
劇場公演招待		下記の公演に抽選で会員を招待した（青山＝青山劇場／円形＝青山円形劇場）。 ◇こどもフェスティバル(円形)◇ソウル・コンテンポラリー・ダンスカンパニー 母emi（青山）◇月猫えほん音楽会2001(円形）◇PANTDANCEパントダンス(円形)◇2001スターダンサーズバレエ団 ドラゴンクエスト（青山）◇篠原聖一バレエ・リサイタル DANCE for Life 2001(青山)◇映画『シュレック』特別試写会（別会場）◇コンテンポラリーダンス ヒューマンゲイト 人間の門は開かれた(円形)◇ぼくらのサウンド2002(円形)◇おひさまおはなしコンサート(円形)
劇場公演優待		下記の公演で、料金割引などの優待を行った。 ◇少年隊ミュージカルプレゾン2001（青山・優先予約）◇キリン・ファミリー劇場「葉っぱのぱはパワーのパ～さっちゃんの大冒険～」(円形）◇キリン・ファミリーオペレッタ ぷっかりタウンにクルクルがくる「とびこむ絵本」(円形)◇鉄はうたう～親子体験ワークショップ　鉄の音具をつくろう（造形スタジオ）◇J Trad Duoつるとかめ CD発売記念コンサート（円形）◇緑MIDORI(円形)◇大和YA・MA・TO Kanazawa Akiko 心を歌う(円形)

もしろさを体験できる場をギャラリーに設けた。

特に映像関係では、おもしろさのほかに不思議さにも興味をもってもらい、夏休み短期講習会に参加すればその不思議を解き明かすことができることを伝え、講習会参加の意欲を高めることにもつながった。

キャンプの紹介コーナーでは、これまでの写真やビデオ映像を流して〔こどもの城〕のキャンプとはどんなものか、子どもたちの様子を知らせる機会となった。

【わくわく絵本パーク】

日本財団の助成事業として、声優による絵本の読み語り公演を青山円形劇場で実施した。

※「こどもの城から全国へ」（133～142ページ）参照。

【こどもフェスティバル】

来館児・者の多い児童福祉週間（ゴールデンウイーク）特別期間に、家族一緒に劇場で気軽に楽しめる質の高い催しとして、青山円形劇場で毎年実施している。演目は、5月4日「愉快なコンサート」（ロバの音楽座）、5日「おんがくがスキ！」（ガドガド）、6日「お星さまの色えんぴつ」（劇団かかし座）。ロバの音楽座と劇団かかし座の2公演は、（財）児童健全育成推進財団の優良巡 回劇事業の一環として実施した。

ガドガドは、音楽事業部スタッフと〔こどもの城〕の活動に協力してくれているミュージシャンがメンバー。日常の音楽ロビー活動を基盤に構成したコンサートで、タイトルの「おんがくがスキ！」のとおり、大人も子どもも“音楽が好き”になって楽しんでいた。ガドガドの活動は外部からの評価も高く、〈動くこどもの城〉のほか、派遣の要請も多い。

【企画展「大きさくらべ」】

親子プログラムの開発を目的に、親子で楽しみながらさまざまな大きさの単位について体験できる企画展を社会福祉・医療事業団の助成を受けて実施した。詳細は142ページ参照。

【第7回人形劇カーニバル】

毎年テーマを設定し、それにそった作品をプロの人形劇団に上演してもらっている。本年度は「ともだちって……」をテーマに、8劇団による「人形劇カーニバル」を4日間にわたって開催した。

出演は、糸あやつり人形劇団みのむし、パペットあるまじろ、高津人形座、人形劇・木ぐつの木、あ・ぶ・ぶ@人形劇場、パペットBOX、クレヨンカンパニー、エツコ・ワールド。パペットBOXとクレヨンカンパニーの指導・協力で、ワークショップ「新聞紙で人形を作って、みんなで遊ぼう！」も期間中に開催した。

前年度までは、青山円形劇場も使用して3日間の日程で実施したが、本年度は研修室のみで4日間にわたって実施した。開催時期も、従来のお盆の時期からずらした。

併せて、「つくって演じる人形劇2001」の講 習会を8月19日と9月9日に実施した。

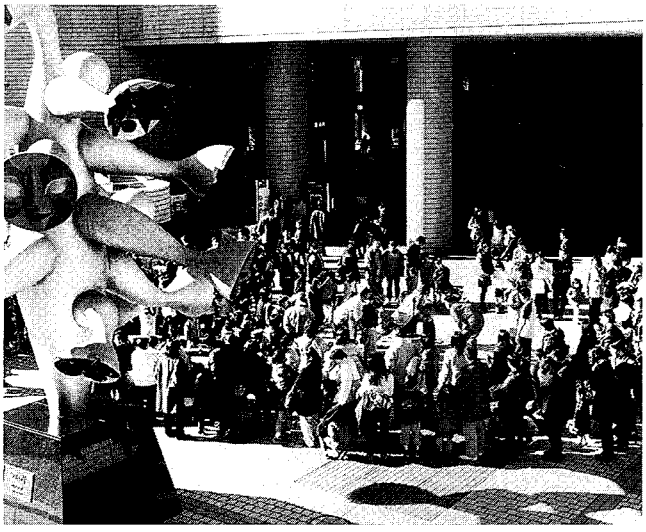
【第8回おりがみカーニバル】

手から手へ受け継がれ、子どもからお年寄りまで誰もが幅広く楽しめる折り紙。折り紙作品の展示とワークショップを、開館記念特別期間に実施した。日本折紙協会との共催事業。全国からこの催しのために募集した折り紙作品、ミニチュア折り紙作品のほか、大型のパノラマ作品を展示。ワークショップも行い、折り紙作品を見て楽しむだけでなく、折る楽しさ・飾る楽しさを紹介した。

また、児童館交流事業として全国の児童館・児童センターから折り紙作品を募集して「全国児童館おりがみ作品展」を行った。本年度のテーマは「未来」。全国21の児童館・児童センターからパノラマ作品の出品があり、〔こどもの城〕での展示後に巡回展示をした。詳しくは〈動くこども

「みて！さわって！うごかして！～こどもの城探検隊」

「第7回人形劇カーニバル」（ワークショップ）


「新春もちつき大会」

「アートスケープ2002」

の城〉実施一覧（139ページ）参照。

【子育てママの悠遊タイム】

対象は、3歳以下の子どもを持つ家族。ゆっくりとした時間のなかで母親同士の交流の時間を持ち、日常での“ゆとりある生活”のヒントを提供することと、父親と子どもたちがじっくりと接する時間を提供することを目的とした催し。母親はゲストを交えたトークやワークショップ、茶話会を楽しみ、父親と子どもたちは、保育研究開発部のスタッフと一緒に親子遊びに参加。

本年度は「香りゆたかな生活でリラックス」をテーマに、母親はアロマキャンドルの制作や、香りにまつわる話を楽しんだ。協力は、カリス成城。

父親と子どもたちは保育スタッフと隣室に移動して、親子遊びのプログラム。パネルシアターや簡単なクラフト遊び、父親とスキンシップしながらの運動遊び、おやつなどの内容で実施した。父親同士は会話が弾みにくいので、保育研修開発部の男性スタッフがリードし、趣味の話題などから参加者の会話をうながしていった。

【世界の絵本展～世界の国々から夢の贈り物】

エリック・カール、ブライアン・ワイルドスミスなど19か国の作家のすぐれた絵本作品を展示した。期間中には、都内近郊の大学の児童文化サークルのネットワーク「じゃんぐるじむ」有志による絵本の読み語り公演を実施した。メイツコア株式会社との共催事業として実施。

【アイスクリームのプレゼント】

アメリカのアイスクリーム・メーカー、Ben & Jerry's から、アイスクリームの寄贈があり（約1,500個）、12月23・24日にクリスマスプレゼントとして来館児・者に配布した。協力は、Ben & Jerry's Japan（株）。

【凧づくりワークショップ】

冬休み特別期間のプログラムの一つ。伝統的な遊びを紹介した。ギャラリーで実施。

入口付近のスペースは、1月3～7日に「エイ凧」作り、未就学の子どもも付き添いの大人と一緒に参加した。奥のコーナーではスタッフの指導で、事前予約制の「立体飛行機凧」作りを実施した。対象は原則小学4年以上、大人付き添いの小さな子どもも参加したが、父親の参加が多く、大人の熱心な参加が印象的だった。

【新春もちつき大会】

伝統行事の一つ、もちつき大会を実施。もち米50kgを2つの臼でついた。〔こどもの城〕のマスコット・キャラクターのマック・マックローも応援にかけつけ、子どもたちと一緒にもちつきにチャレンジするなど、活躍した。

【アートスケープ2002】

〔こどもの城〕での開催が17回目となった「アートスケープ展」は、本年度も前年度と同じく、アメリカンスクールインジャパン、ブリティッシュスクールイントウキョウ、クリスチャンアカデミーインジャパン、キニックハイスクール、武蔵野東学園、西町インターナショナルスクール、聖心インターナショナルスクール、清泉インターナショナルスクール、セントメリーズインターナショナルスクール、横浜インターナショナルスクール、横須賀ミドルスクール、横田ミドルアンドハイスクールの計12校が参加してアトリウム・ギャラリーで平成14年3月1～10日に開催された。首都圏にある、主に英語で教育を行うインターナショナルスクールと日本語校の合同美術展覧会。日本の小学5年生から高校生に該当する年齢の生徒たちが制作したさまざまな造形作品が展示された。

開会前日の2月28日夕方には、準備を終えた会場で参加校の教師、生徒、保護者などの関係者によるオープニングセレモニーが行われた。会期中の日曜日にはネイティブアメリカンの伝統的なインセンススタンドとカーニバルマスク作りのワークショップを実施。インターナショナルスクールの生徒たちの指導で一般来館児・者が楽しんだ。

【第10回ニッサンゆかいな絵本と童話展「点・10・じゆう展」】

「第17回ニッサン童話と絵本のグランプリ」で入賞した作品の原画、イラストレーターのはらだゆうこさんの作品、国際アンデルセン賞受賞作家の絵本などを展示した。見るだけでなく、参加して楽しめるワークショップを例年実施している。本年度は、はらださんに、1から10までの数字から想像するイラストを描いてもらい、それを下絵にしてモザイクのパーツを作る感覚で、参加者全員で10枚の壁画を仕上げた。ひとつのピースが「点」だとしたら、それを集めて「線」に、そして「面」につながっていくという意味を込めた。

3. ボランティアの活動と養成

〔こどもの城〕の事業に協力するボランティアを養成するために、「ボランティア講習会」(学生・社会人対象／年2回)、「女性ボランティア講習会」(おおむね30歳以上の女性対象／年1回) を実施している。

本年度の講習会修了者は合計70人。〔こどもの城〕で活動を希望し登録している人は、前年度からの継続者も含めて本年度末現在401人となった。

「ボランティア講習会」の定員が、前年度2回目(43期)から募集定員50人から30人となったため、全体として登録人数が減少している。

(ア) ボランティアの活動

【平常期間のプログラムの中での活動】

各部から依頼される活動 (保育、スイミング、キッズクラブ、ユースクラブなど) とボランティアが各部に働きかけて生み出された活動 (人形劇、紙芝居、影絵、パネルシアターなど) の2つに大別できる。年間をとおしてそれぞれの活動に取り組めるように、登録ボランティアのなかで小グループを組織して、それを単位として活動している。

グループの中で起こるさまざまな相互作用を活用して、それぞれの活動を活性化していこうということから、グループ単位での活動を中心にしている。スタッフは、ボランティアがよりよいグループ活動を行えるよう、グループワーカーとしてかかわりながら、支援している。

今までは、若い世代のボランティアグループに対し相談、介入の機会が多くあった。しかし、本年度の特徴として、女性ボランティアのグループ運営についての相談が増えたことがあげられる。

「私たちのグループは目標がはっきりしない」「あの人のリーダーシップに疑問を感じる」「人間関係がうまくいかない」「グループ運営が機能的ではない」などの相談である。女性ボランティアに比較的若い年齢層が参画しはじめたことも要因のひとつと考えられるが、それ以上にここ2年ほど実施している女性ボランティアの学習会の効果が出てきたことが要因となっていると考えられる。

学習会では、“自分と他人への気づき”“自己主張と自己表現”“グループ活動への気づき”をテーマにさまざまなワークショップを行ってきた。こうした学習の成果が、より積極的で問題意識を持った活動への取り組み姿勢を生み出したと考えられる。

【特別期間のプログラムの中での活動】

夏休みなど利用者が集中する時期に、より多くの子どもたちが一度に参加して遊ぶことができるプログラムを計画した。春休み、児童福祉週間 (ゴールデンウイーク)、夏休み、開館記念、冬休みの5つの特別期間に実施した。

本年度は国連が提唱する「ボランティア国際年」ということもあり、社会福祉・医療事業団の助成を受け、全国15の大型児童館のボランティア・スタッフが集まり、情報交換・交流をはかると同時に、子どものためのプログラムを行う「じょいんフェスティバル」を11月に〔こどもの城〕で実施した※「こどもの城から全国へ」(133～142ページ) 参照。

〔こどもの城〕のボランティアは、企画段階から積極的

「手作りおもちゃ」

「絵本のよみかたり」

L．I．T．の春イベント「ワクワクスタジアム2001」

L．I．T．の「キャッスルアドベンチャー」

にかかわった。11月24日に行われた15館合同の「遊びのフェスティバル」では、“旅行”をテーマにしたレクリエーションプログラムのほか、折り紙・木の実などを使ったクラフト、人形劇・紙芝居などの公演、〔こどもの城〕の活動（スポーツ遊び、音楽遊びのプログラムなど）に、他施設のボランティアと一緒になって取り組んだ。

世代や地域を超えて集まったボランティアが、お互いの違いを認め、尊重して、活動に取り組んだことで、改めて“遊びのボランティア”の意義を感じとっていた。

【L.I.T.（Leader In Training）の活動】

高校生の社会参加活動プログラム。本年度は、前年度の9月から継続しているメンバーの活動が8月まで、そして9月から本年度のL．I．T．活動を行った。L.I.T.は原則的に月1～2回の活動日を設けている。

本年度は、主体的で積極的なメンバーが多く加入をしてきた。グループ全体のムードが明るく、活気あふれるものになった。例年と比べ、出席率も非常に高く、年度途中でグループから抜けていくメンバーもいなかった。

L.I.T.はグループワークの手法を用いながら、年間活動に取り組んでいる。グループ全体のムードが活性化していると、所属するメンバーも積極的に活動するようになる。本年度のL.I.T.は、グループの状態が個人の変容につながる顕著な例であったと考えている。

グループが活性化したのは、もともと積極的なメンバーが多かったということもあったが、メンバーと活動内容を考える時に、できるだけ個人の特性を生かせるよう配慮したことも要因としてあげられる。音楽や演劇活動に興味があるものも多かったので、そうした活動を積極的に取り入れるように考えた。すなわち、グループに所属する個人、個人が自己実現をめざせるような取り組みを多くした。こうした取り組みが、グループの活性化につながったであろうと考えられる。

（イ）野外活動

「ジュニア・アウトドア・スクール」と「ジュニア・スプリング・キャンプ」の2つの野外活動を本年度も実施した。

夏のキャンプ「ジュニア・アウトドア・スクール」は、東北地方一帯に発令された低温注意報の影響で、夏とは思えない寒い日々が続き、雨も多く決して良好な天候とはいえなかった。しかし、事後のアンケート調査によれば、「来年への参加」について、小学生で89％、中学生で87％が「参加したい」と回答していることから、今回の体験が有意義なものであったことがうかがわれる。

ここ数年、班ごとにプログラムに取り組む“グループアクティビティー”を積極的に取り入れている。アンケート調査によると、評価は非常に高いが、反面、全体で取り組む活動に消極的になっている傾向がある。時代とともに変化していく、子どもたちのニーズを的確にとらえてプログラム作りを行うことは重要だと考える。しかし、失われつつある子ども文化をプログラムに反映させ、子どもが本来持っている躍動感あふれる心や体の動きを取り戻すことも重要ではないかと考えている。

こうした子どもたちの小さな変化に留意し、子どもたちがさまざまなチャレンジを前向きに取り組めるよう考えていく必要がある。

ボランティアは、この2つのキャンプに20～30人が参加し、スタッフとともにキャンプ運営を行った。ほかにも、下記の事業部が主催するキャンプにも多くのボランティアが参加し、班付きカウンセラーだけでなく本部運営なども意欲的に行った。

チャレンジキャンプ（体育事業部）／ちびっこ冒険団（プレイ事業部）／フェローシップキャンプ（プレイ事業部）／ゆきんこ冒険団（プレイ事業部）／スキースクールパート2（体育事業部）

「ジュニア・アウトドア・スクール」

「ジュニア・スプリング・キャンプ」

（ウ）ボランティアの養成

〔こどもの城〕でのボランティア活動を希望する人のために、年3回公募して講習会を開催している。希望者はまず講習会を受講し、〔こどもの城〕への理解や健全育成に携わるボランティア活動の基本的な考え方（子ども論、指導者論、ボランティア論）を学んでもらう。講習会をとおして、ボランティア同士の仲間作りを行い、共通基盤をもって活動に参加し、〔こどもの城〕に新しい風を吹き込む運動体となることを願って、ボランティアの養成に努めている。

【ボランティア講習会】

2回の講習会（第44期・45期）を実施し、社会人・学生合計54人が参加した。前年度（43期のみ）から定員を50人から30人にしたため、新規登録者の人数が減少している。しかし少人数での講習会実施で、受講生同士の人間関係作りが比較的行いやすくなったこと、職員もボランティア個人への細やかな働きかけがしやすくなったことで、修了後の活動への参加率が増加する傾向が見受けられた。

【女性ボランティア講習会】

「女性ボランティア講習会」は、ここ数年になく多数の受講があり（16人）、講習修了後も主体的に継続して活動を展開している。講習会直前の8月に発行された『こどもの城ニュース』（第119号）で“女性ボランティア”の活動が大きくが掲載された影響と思われる。「あの記事を読んで参加したいと思った」という参加者の声を多く聞いた。募集パンフレット以上に、活動内容や参加者の生の声を聞き、それに共感して参加したため、活動に入ってから、「こんなはずではなかった」という活動に対する価値観のズレもなくスムーズにボランティアとして参加できたようだ。

また、夏休みに子どもと一緒に〔こどもの城〕を利用した人が多く、年齢層も従来50代前後であったものが40代前後となり、子育て中のお母さんの参加が目立った。このことによって、各グループで課題となっていた“人数不足”も一部解消された。また違った年齢層の人が参画したことで、現代の子どものニーズを聞いて活動に生かす場面も多くなった。まさに“新しい風”としての役割を担い、女性ボランティアの活動が活性化した。

【ボランティアグレードアップ講習会】

ボランティア活動の資質向上をはかるために実施した。毎年、夏休み特別期間前のグレードアップ講習会は、野外生活に必要な技術（テント設営、野外炊事等）と、組織キャンプの理念の習得をベースにプログラムを作成している。これは、〔こどもの城〕のボランティアを希望する人が野外活動に精通しているケースが少ないことと、それぞれのキャンプに毎年多くの新人ボランティアが参加することがその理由である。

本年度は“キャンプでつなぐ　人・自然・心”をテーマに、2泊3日のキャンプ実習と、1回のワークショップを実施した。キャンプ実習では、快適な野外生活を行う基本となるテント設営法、野外炊事法、ロープワークを学ぶと同時に、その指導方法についても実習をした。さらに、“自分と自然との対話”をテーマに、まる1日を森の中で一人で過ごす「オーバーナイトソロ」、“自然と仲間との対話”をテーマに「フィールドワーク　自然と遊ぶ」を実施した。

〔こどもの城〕で行ったワークショップでは、応答構成訓練法を用い、「キャンプにおける子どもとのコミュニケーション」を学んだ。20人のボランティアが受講した。

4. 講座・クラブ

【社会福祉講座】

開館以来実施している「手話講座」を本年度も行った。受講者数は67人であった。講師は前年度から引き続き、手話通訳士　NHK手話ニュース845キャスター中野佐世子さん。前年中野さんが出版した『手話ソングブック』の手話の歌を取り入れる機会が増え、職員がギター演奏としてかかわった。また、ろうあ者の俳優を特別講師として招き、実際に手話でコミュニケーションをとる機会を設けた。

平成13年度活動一覧表

1．一般利用

〈展示・ワークショップなど〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
〈児童福祉週間〉 見て！さわって！ うごかして！ ～こどもの城探検隊～	4.28～5.6	夏休み特別期間の短期講習会の紹介をかねて、“体験できる展示”を行った。（ギャラリー）
〈　〃　〉 わくわく絵本パーク	5.3	158ページ参照。
〈　〃　〉 こども フェスティバル	5.4～6	5月4日「愉快なコンサート」ロバの音楽座、5日「おんがくがスキ！」ガドガド、6日「お星さまの色えんぴつ」劇団かかし座の公演。なお、ロバの音楽座と劇団かかし座の2公演は、（財）児童健全育成推進財団の優良巡回劇事業の一環として実施した。（青山円形劇場）
〈　〃　〉 マックロー グリーティング	5.5、11.3	〔こどもの城〕のマスコット、マック・マックローの誕生日である5月5日の「こどもの日」に、館内の子どもたちと握手をして回ったり、いろいろな遊びに一緒にチャレンジした。開館記念特別期間の11月3日「文化の日」にも館内の子どもたちと握手をして回った。
〈夏休み〉 企画展「大きさくらべ」	7.20～9.2	157ページ参照。
〈　〃　〉 第7回 人形劇カーニバル	8.16～19	「ともだちって……」をテーマに、8劇団が公演。「新聞紙で人形を作って、みんなで遊ぼう！」のワークショップも実施した。（研修室）
〈開館記念〉 第8回 おりがみカーニバル	10.27～11.18	子どもからお年寄りまで幅広く気軽に楽しめる折り紙に、多くの人たちに親しんでもらうための催し。日本折紙協会との共催。『全国児童館おりがみ作品展』を同時開催した。（ギャラリー）
〈　〃　〉 子育てママの悠遊タイム	10.28	子育てに追われる母親に、ホッとする時間を提供したいと企画した催し。母親はアロマキャンドル作りと茶話会、父親と子どもは保育研究開発部のスタッフの指導で、親子遊びのプログラムに取り組んだ。協力：カリス成城。（研修室）
〈冬休み〉 世界の絵本展～世界の国々から夢の贈り物	12.22～28	エリック・カール、ブライアン・ワイルドスミス、モーリス・センダックなど、19か国約60点の絵本の展示。絵本の読み語りも実施。（ギャラリー）
〈　〃　〉 アイスクリームのプレゼント	12.23・24	アイスクリーム・メーカーBen & Jerry's Japan株式会社より寄贈されたアイスクリームを来館児・者に配布した。
〈　〃　〉 凧づくりのワークショップ	H14.1.3～7	日本の伝統的な正月遊びを子どもたちに伝承していきたいと、毎年実施しているワークショップ。簡単に作れてよく揚がる「エイ凧」（期間中毎日）と、「立体飛行機凧」（1月5～7日、3日間で21人参加）の2種類。（ギャラリー）
〈　〃　〉 新春もちつき大会	1.4	できるだけ多くの人たちに参加してもらうために、ピロティで実施した。餅つきの前には、マック・マックローも応援のため登場した。（ピロティ）
アートスケープ 2002	3.1～10	東京近郊のインターナショナルスクールの子どもたちの合同美術展。（ギャラリー）
〈春休み〉 ニッサンゆかいな絵本と童話展 ～点・10・じゆう展～	3.26～4.7	第10回を迎えた絵本の原画を中心とした企画展。絵本の楽しさを伝えることを目的として、「第17回ニッサン童話と絵本のグランプリ」入賞作品の原画を展示。イラストレーター・はらだゆうこさんの作品も展示した。共催は日産自動車（株）。（ギャラリー）

〈その他〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
おもちゃ図書館マックロー	年末、年始を除く水曜日	心身に障害のある子どもたちが気軽に利用できる遊び場として、昭和62年（'97）に開設された「こどもの城おもちゃ図書館マックロー」。本年度も10数人に及ぶボランティアを中心に運営され、延べ49回開催した。年間250人を超えるボランティアの参加と、300人を超える利用者があった。全国に約500か所ある「おもちゃの図書館」のモデル的な活動として、全国からの見学者も多い。（会議室）
豊かな遊びを広げるおもちゃ展	11.27～12.2	玩具メーカーの協力で、障害を持った子どもたちにも使いやすい市販おもちゃを展示、紹介する「おもちゃ展」。併せて、各地のおもちゃ図書館ボランティア手作りのおもちゃの紹介も行った。（ギャラリー）

2. ボランティア関係の活動

〈平常期間〉

名　称	期　間（日　時）	備　考
保育活動（保育研究開発）	月～金曜日 9:45～16:00	保育クラブ・幼児グループの活動に、1 ～2 人程度参加して保育活動の運営補助。夏休み特別期間などには、短期で参加する活動も継続している。また、定期的な保育活動に入れなくなった経験者が中心となって、土曜日実施の「よちよちクラブ」へも本年度から参加している。（保育室ほか）
おはなし紙芝居のつどい（プレイ）	火曜日　15:00～15:30	プレイホールの週間行事として定着をしてきた活動。ここ数年同じメンバーで構成してきたが、女性ボランティア17期生が新たに加わった。ハッピーマンデーの振り替えで火曜日休みが増え、活動日が少なくなってきたことが課題となっている。（プレイホール）
みんなのにこにこ広場（プレイ）	水曜日　15:00～15:30	女性ボランティア人形劇・影絵の両グループが第2・3水曜日に公演。人形劇は、新規に女性ボランティア17期生がグループに入り、メンバーの充実が図れた。影絵は、新作『ブレーメンの音楽隊』を完成させた。（プレイホール）
おりがみあそび広場（プレイ）	木曜日　14:00～15:00	メンバーの入れ替えは多少あったものの年間をとおして精力的に活動した。（プレイホール）
王さんの楽器屋さん（音楽）	木曜日　15:30～16:00	音楽スタッフとの連携もよく、年間をとおして活気あふれる活動が展開された。（音楽ロビー）
手作りおもちゃ（企画研修）	第2木曜日、第2・4金曜日 11:00～15:00	女性17期生が加わり、活気あふれる活動が展開された。従来からのプレイ事業部依頼による“抱き人形”の制作に加え、保育研究開発部の依頼で“怪獣のたまご”の制作も行った。（ボランティア・オフィス）
みかんちゃんズのオパオパサンバ（音楽）	金曜日　15:00～15:30	例年どおり積極的な活動が展開された。新規メンバーの加入がないのが課題。（音楽ロビー）
絵本のひろば（企画研修）	第3金曜日 13:45～14:15	プレイホールでの活動が定着し、新規女性17期生も2人増えて、安定したグループとなっている。子どもの参加人数は多くないものの、絵本に熱中して30分間じっくりと話を聞く姿が見受けられた。プレイホールは子どもたちが自由に遊ぶ“動的な”場であるため、地声での実施が難しくマイクを使用している。ボランティアが機器に不慣れなことが課題であり、静的な絵本の活動がこの場所に適しているかどうかも検討事項となっている。（プレイホール）

名　称	期 間(日 時)	備　考
手足の不自由な子の水泳 (体育)	土曜日　17:00～18:00	講習会修了後は多くのメンバーが興味をしめすが、継続して活動するボランティアがなかなか定着しない。(プール)
土曜昔あそびの会 (企画研修)	第2・4 土曜日 14:00～17:00	定着したメンバーが継続して活動する安定したグループ。新しいプログラムの開発が課題。(ふしぎが丘)
キッズクラブ (プレイ)	毎月2回土曜日 15:00～17:00	小学校低学年30人の遊びのクラブ。ボランティアは、グループワーカーとしての視点からプログラムの立案・準備・実施にかかわっている。新しくボランティアが数人加わった。(会議室ほか)
青年人形劇 (企画研修)	毎月1回土曜日 14:00～15:00	棒使い人形、ハンドパペットを使い演じる人形劇。人形劇終了後は軍手人形で遊ぶワークショップも実施する。社会人になり忙しくなったため3年間ほど休んでいたメンバーが再び加入し、グループの活性化がはかれた。(音楽ロビー)
日曜体育室 (体育)	日曜日　14:00～17:00	体育事業部のキャンプ活動に参加をしているボランティアが、継続的に体育室のプログラム活動にも参加。『じょいんフェスティバル』のときも、体育室の鬼ごっこプログラムのまとめ役を担っていた。(体育室)
ユースクラブ (プレイ)	月2回日曜日 13:00～15:00	小学校高学年から中学生までの40人が対象。グループリーダーとしてのボランティアは、思春期の子どもたちにとっての“モデル”として大きな存在となっている。(会議室ほか)
パネルであそぼう (企画研修)	月2回日曜日 13:00～15:30	パネルシアターの公演とワークショップを行っている。新規メンバーが定着せず、慢性的な人手不足。社会人も多く、メンバーのコンセンサスをとるのも難しくなった。グループ維持のさまざまな取り組みが行われている。(プレイホール＝幼児コーナー)
日曜クラブ (企画研修)	月2回日曜日 14:00～17:00	ドッジボール、長なわ、フラフープなどの活動を行った。終了時間の30分前にはゲーム大会も実施。長く活動を続けていたメンバーが忙しくなり、活動メンバー集めに苦労することが多くなった。新規メンバーの加入を考えていきたい。(ふしぎが丘)
わいわいスタジオ (音楽)	月1・2回日曜日 13:00～17:00	手作り楽器のプログラムに、社会人(デザイナー)が入り、特技をいかした内容で本人のニーズにも合い、定期的に活動している。夏休み特別期間には手作り楽器短期講座の活動にも参加し、講師的な役割も徐々に担うまでになっていった。(Bスタジオ)
絵本のよみかたり (企画研修)	第2日曜日 14:00～14:20	青年ボランティアが中心となって継続的に運営。保育室2は毎週日曜日「1、2歳児の遊び場」として一般開放しているため、この時間帯でも乳児の参加が多い。出入り口で呼びかけをして、プログラム時間内は、対象年齢以外の子どもも参加できることを広報している。(保育室2)
ファミリープレイタイム (プレイ)	月1回　11:00～12:30	親子を対象に毎回さまざまなプログラムに挑戦。ボランティアリーダーはプログラムの運営をサポートした。(プレイホール)

〈特別期間ほか〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
〈児童福祉週間〉忍者武勇伝～こどもの城の乱～ (企画研修・プレイ)	5.3～6 11:00～16:00	ここ数年中心になって活動していた学生ボランティアが積極的な取り組みを見せた。とくに、次世代を担う若いボランティアを育てていきたいという意気込みにあふれた活動だった。4日間で延べ91人のボランティアが参加した。プレイ事業部と共同で実施。(ふしぎが丘)
〈 〃 〉マックローのおはなし広場 (企画研修)	5.4・5 11:00～16:00	人形劇、パネルシアターの公演と、紙コップ人形を作って遊ぶコーナーを併設。研修室で実施したため、あまり多くの参加者が訪れなかった。その分、幼児とその親にとってはゆったりとくつろげる場となった。作るコーナーでは、親や比較的年齢の高い子どもが積極的に参加する様子が見られた。2日間で延べ31人のボランティアが参加。(研修室)

〈特別期間ほか〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
〈夏休み〉 Go! Go! カッパラダイス～水あそび大作戦～ (企画研修・プレイ)	8.11～15 11:00～16:00 (受付時間)	水をテーマにしたチャレンジ形式のゲーム大会。児童福祉週間（ゴールデンウイーク）に引き続き、若いボランティアが積極的に取り組んだ。多くのボランティアが企画、準備、運営にかかわっているものの、そのメンバーの相互関係を結ぶのがますます難しくなっている。他者と積極的に関係を作っていこうとする意志、そのスキルに欠けるところがあるようだ。5日間で92人のボランティアが参加した。(ふしぎが丘)
〈開館記念〉 キャッスルトラベルで行く～あそんでめぐる日本の旅 (企画研修)	10.27・28、11.3・4 11:00～16:00 (受付時間)	毎年実施している“チャレンジゲーム”。今回は、行楽の秋をテーマにした「秋を探そう！もみじ狩りツアー」「フィッシュファイトツアー」「スターツアーズ」などのゲームを走破する旅行の形式で実施した。また、2001年のボランティア国際年にちなんで、助成金事業『じょいんフィスティバル』が2週間後に行われるため、同様の活動内容をその企画に盛り込むように働きかけ、準備活動を平行して実施できるように考慮すると同時に、併せて来館児・者への広報活動も行った。参加ボランティアは4日間で69人。(ふしぎが丘)
あそびのおもちゃ箱 (企画研修)	11.25 ～26 11:00～16:00 (受付時間)	『じょいんフェスティバル～遊びのボランティア大集合～』と日程が重なったため、計画当初から『じょいんフィスティバル』と関連させて企画・準備・運営を行った(「こどもの城から全国へ」＝133～142ページ参照)。(プレイホール)
〈冬休み〉 2002年あそびのおせち ～おなかいっぱいあそんじゃえ～ (企画研修・プレイ)	H14.1.3 13:00～17:00 1.4～7 11:00～17:00 (受付時間)	昔遊び大会。年間をとおして月2回の土曜日に昔遊びのプログラムを実施しているボランティアが中心になった。児童福祉週間（ゴールデンウイーク）、夏休み特別期間のプログラムと比べると、かかわったボランティアの数が少ない。メンバーも、学生ボランティアに比べ、長年ボランティアを続けている社会人が多かった。それぞれの行事によって、ボランティアが二極化している傾向が懸念された。5日間で延べ76人のボランティアが参加。プレイ事業部と共同で実施。(屋上遊園、Bスタジオ)
あそびのポケット～いらっしゃい！ ぽけっと商店街～ (企画研修)	3.14・15 13:00～16:00 3.16　11:00～15:30 (受付時間)	4回目となるこの行事は、前年度から始まった“お店屋さんごっこ”方式で実施。12月の女性ボランティア全体会で企画会議をする（35人参加）。前回製作した物品を生かしながら、改善することにした。「やおや」「魚屋」は前年どおり行い、前回の子どもの意見から「花屋」を追加。さらに、ボランティアの意見から接客サービスを楽しむ「レストラン」も開くことにした。その後、毎月の総会で話し合いを行い、イベントの中心となる実行委員数人を軸に準備活動を進めた。 プログラム開催当日は、乳幼児を中心に親子で参加する場面があった。特に「レストラン」では、１人ではなく家族で一緒に食べる光景が多くみられた。また、店でのアルバイトも遊びの一つに含めた。「花屋」は将来なりたい子どもでにぎわい、積極的な参加があった。連日200人をこえる親子が参加。ボランティアは、3日間で述べ57人参加。(フリーホール)
〈春休み〉 遊びの散歩道 (企画研修)	3.21、23・24 11:00～16:00 (受付時間)	“路地裏遊び”を中心に、来館児・者の多くが楽しめるドッジボール、回戦どん、こま、長なわ、ゴム段、ケンパなどを行った。幼児・低学年の子どもたちや、〔こどもの城〕で初めて出会った子どもたちが楽しく参加できるよう、看板やチラシでのムード作りなどに工夫を凝らした。3日間で、40人のボランティアが参加した。(ふしぎが丘)

〈高校生プログラム＝L. I. T.(Leader in Training)〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
春のイベント準備	4.1	昨年度から準備をしていたイベントの準備を行う。強いリーダーシップを振るうメンバーがいるために、なかなか相互関係が深まらない。リーダーシップを分散させるため、小グループに分かれて活動する。参加＝18人。
〃	4.8	企画書、装飾、ポスター、部品作りなどを小グループに分かれて行う。参加＝21人。
〃	4.15	準備活動を小グループで行う。以前よりもメンバーの相互関係は深まったようだ。もう少しグループの中での役割交替が必要とリーダー会議で話し合う。参加＝21人。

名　称	期間(日時)	備　考
春イベント「ワクワクスタジアム2001」	4.22　11:00～16:00	フリーホールで手作りおもちゃのワークショップを行う。「GO GO! 宇宙へ ミニロケット」は、ペットボトルを輪切りにして、その弾力でストローを飛ばすおもちゃ。「天までとどけ ノボカイト」は画用紙の裏側にストローをはり、たこ糸を交互にひいて動かすおもちゃ。それぞれのワークショップで、子どもたちとおもちゃ作りとそれを使った遊びを楽しんだ。来館児・者が少なく、手持ち無沙汰のメンバーもいて、全体的に緊張感にかけた。メンバーの自発性、積極性も少なく、今後の取り組みに課題を残した活動となった。
活動のふりかえり	5.13	反省会では、「今回の活動は来館する子どもたちの年齢対象にあっていたか」「子どもたちへの接し方で大切なことはなにか」「L. I. T. として、何を意識して活動したか」の3点について振り返った。その後今後の活動について話し合った。参加＝13人。
夏の行事企画会議	6.10	夏の企画の概要が決定する。タイトルは「キャッスルミステリーアドベンチャー～キャッスルガーデアンズ募集」。実施日を8月25、26日に決めた。参加＝16人。
夏の行事企画・準備	7.15	午前中からプログラムの準備活動。今回の活動をとおして「子どもの気持ちを考えることの大切さ」「よりよいプログラムを作るための姿勢」「仲間をお互いに尊重し、生かし合うことの大切さ」を学べるよう働きかけた。参加＝17人。
〃	7.20	強いリーダーシップを持つメンバーの積極性・行動力を生かしながら、全員が平等に活動に参加できるよう、配慮しながら進めることが今後の課題となった。参加＝14人。
『ジュニア・アウトドア・スクール』参加	8.3～9	L. I. T. の中から希望者10人が参加。本部スタッフとして「ジュニア・アウトドア・スクール」を支えた。今回は4人がユニットリーダーのサポートを行い、子どもたちの生活を支援。小学生のころから継続的にキャンプに参加していたメンバーと、L. I. T. からキャンプに参加したメンバーが、互いの特性を生かしながら、積極的な活動を展開した。宮城県国立青少年野営場（6泊7日／テント泊）。参加＝10人。
夏の行事『キャッスルミステリーアドベンチャー』準備	7.29～8.24（期間中7回）	8月14・15日は、自発的に合宿を計画し実施。本年度は、個々のメンバーとの関係を意欲的に結んでいけるメンバーが少なかったため、小グループで活動する機会を多く持った。反面、グループ全体のダイナミズムが起こりにくい状態になっている。今後に向けて、グループ同士の大きな動きを考えて行く必要がある。参加＝延べ95人。
『キャッスルミステリーアドベンチャー～キャッスルガーディアンズ募集～』実施	8.25・26	小1～3の30人を2日間に分けて募集。両日ともキャンセル待ちが出る状況だった。結局、1日目38人、2日目35人の計73人で実施した。〔こどもの城〕を守る“キャッスルガーディアンズ”の隊員を募集する形式にし、この段階から子どもたちの期待感を高めるよう配慮した。 当日は、午前中に集合し、まずは隊員になるためのトレーニング。これが子どもたちの緊張をほぐし、相互関係を高める活動となる。昼食はL. I. T. が作ったカレーを班ごとに食べ、午後は館内に隠されたさまざまなポイントをまわりながら、宿敵“赤いサソリ軍団”のアジトを突き止める。さまざまなゲームに挑戦し、見事“赤いサソリ軍団”を降伏させるというストーリー。L. I. T. はグループリーダー、プログラム運営リーダーとそれぞれに役割を分担し、運営に取り組んだ。低学年児童にとって、高校生とのふれあいは大変新鮮だったようだ。ころげまわるようにともに遊ぶ姿をみると、“若さ”の持つ有効性が実感できる。L. I. T. にとっても、小さな子どもたちとの活動は、他者理解と共感的理解の大切さを学ぶ絶好の機会となったようだ。参加＝延べ40人。
平成13年度L. I. T. 開講式	9.6	今期は27人の申し込みがあった。継続メンバーに比べると元気のあるメンバーが多い。またキャンプで関係性を持っている密なメンバーも多く、継続者がリーダーシップを振るう機会が少なくなる可能性が予測された。一人ひとり面談を行ったのち、「子どもと一緒に活動するボランティアの大切にしたいこと」をテーマにワークショップを実施。その後、年間計画について話し合いを行った。参加＝22人。
グループワークトレーニング	10.8	メンバーの相互関係をより深めるために、リーダーシップについて考えることを目的に情報を組み立てるグループワークトレーニングを実施した。その後、11月に実施する「オーバーナイトハイキング」のオリエンテーションを行った。参加＝23人。

名　称	期 間(日 時)	備　考
オーバーナイトハイキング 三浦半島	11.17・18	京浜急行三崎口駅から観音崎海水浴場までの約33Kmを一晩かけて歩いた。自己へのチャレンジと自己理解、助け合うことによる他者理解、グループとしての凝集性を高めることを目標とした。当日は流星群のピークの前日にあたり、満天の星のもと、多くの流れ星を見るチャンスにも恵まれた。全員元気にゴールへ到着。しかし、ゴールへ着いた途端、仲間と体験を分かち合うでもなく、さっそく携帯電話からそれぞれメールを送っている姿に、現代の青少年の課題が見えた。参加＝25人。
ボランティア体験	12.16	プレイホール、屋上を使い、ボランティアとして子どもたちと遊ぶ体験をした。午前と午後で、屋上での活動(長なわ、ドッジボール)と、プレイホールでの活動(ままごとなど)を2つのチームが交互に行った。その後、「子どもたちと遊んでみて発見したこと、気づいたこと、驚いたこと」についてグループごとに話し合った。参加＝17人。
冬合宿	H14.1.12～14	埼玉県・高原パーク横瀬キャンプ場で真冬のキャンプ活動を行った。講師に、(財)伊藤忠記念財団の矢部剛館長代理を招いて、「野鳥観察ハイキング」「コンパスワークの実際」の指導を受けた。外部講師を招いて実施したキャンプは、メンバーに新鮮な刺激を与えたようだった。参加＝21人。
今後の活動計画	1.27	活動が始まる前に、中心になって活動しているメンバーが「今のメンバーの気持ちや、何をやりたいか聞きたい」と相談に来た。そこで今回の活動の最初にその時間を設けることにした。「子どもと遊びたい」「L. I. T. の結束力をもっとつけたい」など積極的な意見交換がされた。その後、4月に向けて具体的な活動計画を話し合った。参加＝25人。
活動準備	2.3、17、3.17、24	4月のプログラム実施に向けて、2・3月に計4回の準備活動を行った。非常に出席率が高く、このグループの特性が出ていると感じた。例年のおもちゃ作りプログラムに加え、音楽やダンスの表現活動にも取り組んだ。
『ジュニア・スプリング・キャンプ2002』参加	3.27～31	昨年までは参加者だった1年生が多く、15人の参加となった。2つのグループにわけ、グループ単位で本部運営のサポートを行った。熱意もあり、メンバーの人間関係も比較的よかったため、L. I. T. の活躍はめざましかったが、人数が多いために作業がすぐに終了する、ボランティアリーダーとの関係作りが難しかったことなどが課題としてあげられた。国立妙高少年自然の家（新潟県／4泊5日／宿舎泊）

3. 講座・クラブなど

〈講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
手話講座（前期）	(人) 高校生以上（30）	(人) 34	火曜日 18:30～20:00	手話通訳士の中野佐世子さんを講師に招き実施した。手話初心者を対象に、手話の技法だけでなく、広く社会福祉の情報交換の場となるよう運営した。
手話講座（後期）	〃	33	〃	〃

〈短期講習会〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
立体飛行機凧のワークショップ	(人) 小4以上 (各日10)	(人) 計21	H14.1.5～7 13:00～15:00	手の込んだ飛行機型の立体凧を作るワークショップ。材料費800円。

〈専門指導者向け講習会など〉

名　称	対象・定員	受講数	曜 日・日 時	備　考
	（人）	（人）		
第45期ボランティア講習会	18歳以上（高校生不可）（30）	28	5.12～6.5 18:00～20:30 (5.25～27宿泊研修)	L. I. T. の元メンバーが4人参加（14%）。大学生が主体的に受講し、活気があった。修了後も4割がキャンプ活動に参加。日常活動やイベントへの参加も多く、学生のボランティア活動が増加。宿泊研修は東京都狭山青年の家。
ボランティアグレードアップ講習会「野外活動講習会～キャンプでつなぐ人・自然・心」	野外活動に参加するボランティア（30）	17	6.14 19:00～20:30	実習オリエンテーションを実施。持ち物、プログラム説明と当日の生活班ごとに分かれてのミーティング。初日夜の「焚き火の楽しみ方」では、ゲームでなく、個人が話を語らう課題で進める内容を提示し、実習までに考えてくる課題が出された。プレイホール。
	〃	20	6.22～24 （キャンプ実習）	雨模様の2泊3日の実習となった。2日目に実施した「オーバーナイトソロ」では、昼過ぎから森に入り、自分一人になれる場所を探し、一晩を過ごすプログラム。たった一人で自然と向き合うことによって、より深い自然体験をめざした。猿と出会うメンバーもいて、普段のキャンププログラムでは味わえない深い体験ができたようだ。 横瀬高原パーク（埼玉県）。
	〃	17	6.28 19:00～21:00	「キャンプにおける子どもとのコミュニケーション～こんな時どう対応する？～」をテーマに応答構成訓練のワークショップを実施。小学校低学年、高学年の2課題に個人で取り組み、その後、グループでそれぞれの意見を用紙に書き写し、意見交換をした。各人の応答内容に興味関心が集まり、改めてリーダーとしての在り方を考える機会となった。会議室。
第17期女性ボランティア講習会	概ね30歳以上の女性（20）	16	10.10、11、16、19、23、11.6	今期募集前月の「こどもの城ニュース」の特集が「女性ボランティア」だったため、利用者として来館をし、記事を読んで興味をもった30代～40代の子育て中の女性の参加が多かった。受講後も多くのメンバーが積極的に活動に参加し、新しいメンバーを迎え、活動の活性化がはかれた。
第45期ボランティア講習会	18歳以上（進路決定の高校生可）（30）	26	H14.2.2～26 18:00～20:30 (2.15～17宿泊研修)	進路の決定している高校3年生の参加が目立ったこと、またL. I. T. の元メンバーの参加も多く、学生を中心に活気ある講習となった。修了後は保育活動や、夏のキャンプ、代表者会への参加も目立った。宿泊研修は神奈川県三浦ふれあいの村。

〈野外活動〉

名　称	期 間（日 時）	備　考
ジュニア・アウトドア・スクール2001	8.3～9	小4～中3対象の6泊7日のキャンプ小学生30人、中学生31人、スタッフ45人の合計106人で実施。本年度は定員割れがあった。要因として考えられるのは、小学4年の新規参加者の減少。今後のキヤンプ運営のためにも、広くていねいな広報活動を進めていきたい。アンケート調査によると、キャンプの評価は概ね好評だった。しかし、班ごと個別に活動するプログラムの評価に比べて、全体で行うプログラムの評価が低くなっている。数年前と比べると逆転現象が起きている。子どものニーズとその課題を的確に捉え、キャンププログラムの開発を考えていかなければならない。国立南蔵王青少年野営場（宮城県）。
ジュニア・スプリング・キャンプ2002	H14.3.27～31	小3～中3対象の4泊5日のキャンプ。小学生52人、中学生25人、スタッフ44人、合計121人で実施。7回目にして初めて定員70人を超える申込みがあり、宿泊地に交渉し10人増員して運営した。桜が咲く東京を出発し、近年になく雪が少ない妙高でのプログラム運営が心配されたが、毎回子どもたちに好評である「イグルー作り」（各班1個ずつ作成）など、予定のプログラムを行うことができた。経験者が中心となって作業を進め、雪質の悪さに苦労するも、段取りの良い、かつ技術的にも前年を上回る安定した活動となった。子どもたちの満足度も高かった。国立妙高少年自然の家（新潟県）。

劇場事業本部

島﨑徹の世界「HUMAN　GATE」（写真＝塩谷武）

平成13年度の活動

1．主な自主・提携公演

（ア）青山劇場

舞踊企画における国際交流は、主に毎年夏の「青山バレエフェスティバル」を中心に個人アーチストやカンパニーの招聘という形で行われてきたが、ここ数年様相が変わってきた。それは、単に招聘し、鑑賞するという国際交流から、国際間の共同提携作業への移行である。異文化との共通点や差異もともに受け止め、同時代に生きる若いアーティストの課題や問題点を切り開いて行くためである。

本年度は、７月に韓国のソウル・コンテンポラリーダンスカンパニーが青山劇場公演「Soul　of　Seoul」を敢行し、劇場事業本部が制作面で共同作業をした。

また、８月には国際交流基金の協力のもと、ブルガリアが誇るパントマイミスト、ニッキー・ソティロフと、日本のマイムエンターテイナー平野弥生を組み合わせ、“雪女”を題材に新しい分野である「PANTDANCE」を共同創作、円形劇場で発表した。

さらに年があけた平成14年３月には、日本、カナダ、韓国のダンサーたちがあしかけ３か月にわたる共同創作に挑戦し、島﨑徹が構成・振付した大作「HUMAN GATE」を誕生させ、内外から絶賛された。この事業は平成13年度舞台芸術振興事業にも採択された。

このように海外のアーチストやカンパニーがゲスト出演し、それを鑑賞するという形態から、海外からのアーチストをレジデンスさせ、共同で舞台を創っていく作業はこれからますます必要になってくるだろう。それが時代の要請だからだ。

このほかにも、クラシックバレエに軸をおいた舞踊企画は自主、提携、貸館ともに減少し、やはりコンテンポラリーダンス系へのシフトチェンジが多くみられるようになった。

コメディア・デラルテ公演
「フラミニアの誘惑あるいは恋はルナティコ」

「室温～夜の音楽～」（撮影＝北村　光隆）

（イ）青山円形劇場

【音楽の玉手箱2001】

毎年、何が飛び出すか分からないユニークな企画で定評のある「音楽の玉手箱」。今回は、5月枠と6月枠に分けて開催した。5月のテーマは“デュオな夜”として、それぞれ一夜ごとに魅力的なパートナーを迎えてのスペシャル・デュオを、6月のテーマは“メロディアスな夜”として、メロディーメーカーとして定評のある2人の音楽家を迎えてのハート・ウォーミングなメロディーを届けた。

5月◇**佐山雅弘のデュオな夜**◇
第1夜：さねよしいさ子／第2夜：高泉淳子
◇**村上“ポンタ”秀一のデュオな夜**◇
第1夜：真矢／第2夜：仲井戸“CHABO”麗市／第3夜：吉田美奈子

6月◇**国府弘子のメロディアスな夜**◇
ピアノ・タペストリー・コンサート
◇**中西俊博のメロディアスな夜**◇
Leaping Bow！

【第16回こどもの城・マタニティ・コンサート～shima「風のうた・風のことば」クロマチック・ハーモニカの調べ～】

妊娠中の一日、音楽を楽しんでリラックスしてもらおうという「こどもの城・マタニティ・コンサート」の16回目。今回は、クロマチック・ハーモニカのｓｈｉｍａ（小林史真）を迎え、風そのものの音色であるような美しいハーモニカの演奏を行った。さらに、絵本の読み聞かせとハーモニカ演奏とのジョイントや、恒例の呼吸法指導や産科医と小児科医によるメディカルトークなどで、これからお母さんになろうとしている妊婦さんが、心身ともにリラックスできる場を提供した。

出演ミュージシャン＝小林史真、寺嶋陸也／メディカルゲスト＝野末源一、巷野悟郎／呼吸法指導＝市川栄子／共催＝こどもの城小児保健部／協賛＝人形の秀月、雪印乳業（株）、持田製薬（株）

【コメディア・デラルテ公演「フラミニアの誘拐あるいは恋はルナティコ」】

16世紀のイタリアに生まれた仮面喜劇「コメディア・デラルテ」の来日公演。イタリアからコメディア・デラルテの演出家、俳優、演劇講師、仮面製作者として名高いアントニオ・ファーヴァと彼が率いる劇団「テアトロ・デル・ヴィコロ」、およびファーヴァの家族からなる一座を招聘し、現代に生きるオリジナル・スタイルによるコメディア・デラルテの真髄を紹介した。

演目は、この来日公演を機に制作されたオリジナル作品。東京公演のほかにも、本国イタリアのレッジョ・エミリア市と米国ハワイのホノルルでも上演され、いずれも好評を博した。また、出演者には「五線譜のなかの動物たち」シリーズの構成と主演でもおなじみの役者・光瀬名瑠子が、平成9年度の文化庁派遣芸術家在外研修員としてアントニオ・ファーヴァ氏のもとで一年間、コメディア・デラルテの表現術の研鑽を積んだ関係で公演に参加。コメディア・デラルテが本来もっている、民族や言語の枠を超えたグローバルな喜劇性を創出するのに成功した。

作・演出＝アントニオ・ファーヴァ／出演＝オメーロ・アッフェーデ、ディナ・ブチーノ、ルカ・カイラーティ、アントニオ・ファーヴァ、マルチェラファーヴァ、フェルッチョ・ファーヴァ、光瀬名瑠子、ファブリツィオ・パラディン

後援＝イタリア文化会館（イタリア大使館文化部）、（財）日伊協会／協力＝アリタリア航空／助成＝（社）私的録音補償金管理協会（ｓａｒａｈ）／制作協力＝デラルテ舎
※「日本におけるイタリア2001」正式参加プログラム。

【室温～夜の音楽～】

ナンセンスな笑いの世界と幻想的な世界を行き来する作品を持ち味にする「ナイロン100℃」主宰のケラリーノ・サンドロヴィッチ（通称ＫＥＲＡ）が、初めて日常的な恐怖を主題にしたサイコ・ホラー作品に挑戦した。不条理で

第16回こどもの城・キリン・ファミリー劇場
「葉っぱのぱはパワーのぱ～さっちゃんの大冒険～」（撮影＝國田　茂）

青山演劇フェスティバル LAST SPECIAL since 1987
「欲望という名の電車」

悪夢のような事件が相次ぐ昨今だからこそ、「人間」そのものが内に秘めている狂気や不可解さを、社会性を盛り込みながらもＫＥＲＡらしい笑いを織り交ぜて描いていった。

音楽を担当する「たま」の３人が役者としても登場し、その他の異色で豪華な顔ぶれのキャスト陣が、童話的で幻想的な音楽が特徴の「たま」の生演奏にのせ、現実社会の中での恐怖を表現した。

本作品で、ケラリーノ・サンドロヴィッチが、第５回鶴屋南北戯曲賞を受賞し、第９回読売演劇大賞・演出家賞にノミネートされた。

出演＝佐藤アツヒロ、中嶋朋子、近藤芳正、三宅弘城、村岡希美、内田紳一郎、たま、ほか／作・演出＝ケラリーノ・サンドロヴィッチ／音楽＝たま／協賛＝富士通（株）

【月猫えほん音楽会2001 えほん×ジャズ＝めちゃ²楽しいシアターライブ】

１９９９年から始まり、大好評を得ている「月猫えほん音楽会」は、“ことば”の持つ魅力を新しい側面から取り上げた企画で、親子（小学生）を対象とした招待公演。

絵本の絵をスクリーン（月）に映しながらの読み聞かせとジャズ・ピアノの即興演奏を組み合わせた、絵本とジャズとのセッションライブ。さらにパントマイムを加え、観客参加で絵本の中のシーンを立体的に作り、ライブならではの生き生きとした時間を会場全員で共有することをめざした。

また、開演前に希望する観客には、猫のフェイスペインティングを施し、“猫道”と呼ぶ長いトンネルをくぐり抜けて入場するなど、さまざまな趣向でナマの楽しさを演出することに成功した。

現在、「絵本」と「読み聞かせ」の魅力が見直されている。それは、何かと暗い世相の中で絵本の持つ美しさと奥深さに人々が改めて目を向け始めたからでもあり、親子のコミュニケーション不足が指摘される昨今、絵本の読み聞かせがそれを深めるということに多くの人が気づいたからではないだろうか。

そのような関心の高さを示してか、定員１,７５０人のところ約７,０００人の応募数となった。

出演＝佐山雅弘（ピアノ）、波多雅子（進行）、本多愛也（パントマイム）、能祖将夫（朗読）／演出＝吉澤耕一／構成＝能祖将夫／美術＝小竹信節／協力＝東京動物園ボランティアーズ／主催＝（財）こども未来財団、（財）児童育成協会

【第16回こどもの城・キリン・ファミリー劇場 葉っぱのぱはパワーのパ～さっちゃんの大冒険～】

“こどもとこどもの心を持った大人のためのファミリー公演”として、観客それぞれの年齢層に応じて楽しめ、心に残る作品を毎年夏休みに上演し、好評を博していた企画の第１６弾。

今回は、小劇場系演劇の先駆け的存在であり、最近劇団としての活動を再開させた女性だけの集団“劇団青い鳥”によるオリジナル作品を上演した。普通の小学生が抱えている悩みとそれを解決しようとする努力を、おとぎの国のような世界と現実の世界を組み合わせたファンタスティックな設定の中で表現した。子どもたちは等身大の姿で描かれている主人公に共感し、勇気付けられ、大人たちは何気ないコトバが子どもたちの心にどのように影響しているのかを考えさせられ、それぞれに思いのある作品に仕上がった。

「こどもの城・キリン・ファミリー劇場」は、キリン福祉財団からの助成終了のため、本公演が最終回となったが、今まで培ってきた経験を生かし、これからも多くのファミリーに一緒に楽しんでいただける作品を提供できるように努力していきたい。

作＝天光眞弓／演出＝芹川藍／出演＝天衣織女、葛西佐紀、天光眞弓、ほか／共催＝キリン福祉財団

【青山演劇フェスティバル LAST SPECIAL since 1987 「欲望という名の電車」】

青山演劇フェスティバルは、1987年からスタートし“今を見つめる演劇”の祭典として、その時の時代を意識した

「ア・ラ・カルト～役者と音楽家のいるレストラン」（撮影＝北村　光隆）

第14回こどもの城・キリン・ファミリーオペレッタ「とびこむ絵本～ぷっかりタウンにクルクルがくる～」

作品を提供し、昨年までで14回・59作品を上演してきたが、今回、60作品目の「欲望という名の電車」で幕を降ろした。

篠井英介が主役のブランチを演じる「欲望という名の電車」は、92年に演出家の鈴木勝秀と篠井コンビで青山円形劇場において上演を試みた企画であるが、「女形による上演は認められない」という作者遺族の申し入れで断念した作品である。折にふれて篠井が遺族側に熱心に打診をして、今回やっと上演許可を取り付けることができた。そしてこの作品で鈴木勝秀が、3年ぶりに演出活動を再開した。9年越しの思いが、キャスト、スタッフ、そして全ての観客の思いにつながり、青山演劇フェスティバルのラスト・ショーにふさわしい素晴らしい作品になった。

出演＝篠井英介、加勢大周、久世星佳、田中哲司、ほか／作＝テネシー・ウィリアムズ／演出・美術＝鈴木勝秀／企画製作＝アトリエ・ダンカン、こどもの城劇場事業本部

【ア・ラ・カルト～役者と音楽家のいるレストラン】

役者と音楽家が一体となって作り上げる「大人の観客が楽しめる洒落たエンターテインメント・ショー」として高い評価を得ている本作品は、冬の風物詩として定着し、今回で13回目を迎えた。クリスマスの時期を迎えた、とあるレストランの開店から閉店までをショートショートのお芝居とバイオリニスト中西俊博を中心としたバンドマンによる生演奏でつづる音楽劇。今年は、ゲストとして東京壱組出身の個性派俳優・大谷亮介を迎えて、名（迷）キャラクターたちが、芝居・歌・ダンスを交えて思い切り楽しいショーを展開した。全23ステージが即日完売し、8,000人以上を動員することができた。

恒例となっていた大阪公演は、近鉄アート館が閉館したため今シーズンは已むなく休演となった。

出演＝高泉淳子、白井晃、陰山泰、大谷亮介（ゲスト）、中西俊博（バイオリン）、細野義彦（ギター）、北島直樹（ピアノ）、クリス・シルバースタイン（ベース）／構成＝白井晃／演出＝吉澤耕一／台詞＝高泉淳子／音楽監督＝中西俊博／協賛＝キリン・シーグラム（株）、富士通（株）

【第14回こどもの城・キリン・ファミリーオペレッタ「とびこむ絵本～ぷっかりタウンにクルクルがくる～」】

オリジナルの童話を、歌やバレエ、生演奏でつづるお正月恒例のファミリーオペレッタ。〔こどもの城〕のスタッフで創作するこの作品は、今年で14回目を迎え、大人も子どもも楽しめるファミリー向け公演として、常に高い人気と安定した動員を保っている。

上演は、今回からの新シリーズとなる『とびこむ絵本』。空から落ちてきた絵本から、天使たちが住む街「ぷっかりタウン」に飛び込んでしまうクルクルとトコトコ。そこでまき起こる事件と天使たちとの交流をとおして、勇気をだすこと、素直に気持ちを伝えることの大切さを描いた。また、新シリーズとおしてのテーマを“絵本の読み聞かせ”とし、親と子が語り合うこと、ふれあうことの素晴らしさを考えた。温かで楽しい登場人物たちが繰り広げる童話の世界と、観客参加型の演出により、観客を物語のなかに引き込み、子どもだけでなく大人からも多くの反響を得ることができた。

今後も、現代社会では忘れられがちな心の豊かさ、大切さを感じとれるような良質な舞台作品を創作し、より多くのお客さまに提供したい。

なお、この作品は、平成13年度厚生労働省社会保障審議会推薦児童福祉文化財に選定され、さらにその中より特別推薦に選定された。

脚本=山下哲／演出=高谷静治／出演=オペラクリエーション・イン・青山、こどもの城児童合唱団、平多正於舞踊研究所、岸辺バレエスタジオ、ほか／共催＝キリン福祉財団

平成13年度公演演目一覧表

1．青山劇場

名　称	期　間	回数	料　金	総席数	入場者数	入場率	備考
〈自主・提携公演〉	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
Soul of Seoul	7.3~4 (2)	1	A=4,500／B=3,500	1,078	573	53.2	
リーズの結婚	9.27~30 (4)	2	S=10,000／A=7,500／B=5,000	2,400	1,426	59.4	
Dance for Life 2001	10.29~30 (2)	1	S=8,000／A=6,000	1,110	784	70.6	
クリスマスの贈り物	12.25~26 (2)	1	A=4,000／B=3,500	1,186	1,095	92.3	
ブリリアント	12.27~28 (2)	1	8,000	1,156	1,070	92.6	
島﨑徹の世界　「HUMAN GATE」	H14.3.4~7 (4)	2	A=7,000／B=6,000	2,400	1,318	54.9	
Thank you! Broadway!	3.25~26 (2)	2	7,000	2,391	2,342	98.0	
(自主・提携公演　小計)	(18)						
〈内部利用〉							
こどもの城児童合唱団 児童福祉文化賞受賞記念コンサート	2.2~3 (2)	2	1,500	2,156	1,117	51.8	音楽事業部
(内部利用　小計)	(2)						
〈貸し館〉							
ポケモンピカピカコンサート (キョードー東京)	4.6~8 (3)	3	S=3,800／A=3,000	4,614	4,286	92.9	
NANTA (朝日新聞・PROMAX)	4.9~22 (14)	16	S=7,500／A=6,800／ジーンズS=5,500	18,441	12,452	67.5	
明治生命ミュージカル「アニー」 (日本テレビ)	4.23~5／20 (28)	34	S=7,800／A=5,800	37,842	33,092	87.4	
加藤登紀子コンサート (トキコプランニング)	6.22~24 (3)	3	S=8,000／A=6,000	3,450	3,003	87.0	
少年隊PLAYZONE (ヤングコミニュケーション)	7.5~8.8 (35)	36	11,000	39,672	38,866	98.0	
ドラゴンクエスト (スターダンサーズバレエ団)	8.9~12 (4)	3	S=8,000／A=5,000	3,210	2,458	76.6	
ピーターパン (ホリプロ)	8.13~28 (16)	21	一般=7,500／こども=4,800	24,234	23,686	97.7	
大江戸ロケット (ホリプロ+新感線)	8.30~9.24 (26)	23	S=9,000／A=6,500	26,591	20,720	77.9	
Forever Tango (ニッポン放送)	10.1~7 (7)	8	S=10,500／A=8,400	9,248	5,543	59.9	
東亜悲恋 (RUP)	10.8~28 (21)	18	S=8,500／A=7,500	24,320	22,680	93.3	
石川さゆり音楽会 (ビッグワンコーポレーション)	10.31~11.4 (5)	5	SS=10,500／S=8,400	5,731	5,181	90.4	
クリスマスボックス (関西テレビ+アトリエダンカン)	11.5~12.2 (28)	27	11,000	32,346	29,267	90.5	
ペギー葉山 (東京音楽文化協会)	12.6 (1)	1	S=10,500／A=8,000	1,156	887	76.7	
デジタルスタジアムアワード 2001 (NHK)	12.7~8 (2)	1	招待	1,030	723	70.2	
日本有線放送大賞 (TBS)	12.12~14 (3)	1	招待	907	830	91.5	
斉藤和義コンサート (ディスクガレージ)	12.16 (1)	1	5,500	1,200	1,170	97.5	
アニークリスマス (日本テレビ)	12.22~23 (2)	4	S=5,000／A=4,800	4,672	4,338	92.9	
サクラ大戦 (SEGA)	12.29~H14.1.6 (7)	9	SS=9,000／S=7,000／A=5,000	10,722	9,920	92.5	

名　　称	期　間	回数	料　　金	総席数	入場者数	入場率	備考
	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
小林桂コンサート　(ホットスタッフ)	H14.2.9 (1)	1	招待	1,164	922	79.2	
AUNコンサート　(ディスクガレージ)	2.10 (1)	1	4,200	1,164	459	39.4	
卒業公演　(東京スクールオブミュージック)	2.13~16 (4)	2	招待	1,960	1,772	90.4	
舟木一夫リサイタル　(アイエス)	2.20~24 (5)	7	S=8,000／A=7,000	8,418	7,780	92.4	
FINAL EXPRESSION　(ジェイクリップ)	3.1~3 (3)	3	指定=6,000／自由=4,000	3,258	2,785	85.5	
ホンク！　(ピュアマリー ミュージカル)	3.8~24 (17)	19	S=7,800／A=5,800／B=3,000	19,608	7,848	40.0	
(貸し館　小計)	(237)						
(青山劇場　合計)	(257)						

2. 青山円形劇場

名　　称	期　間	回数	料　　金	総席数	入場者数	入場率	備考
〈自主・提携公演〉	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
音楽の玉手箱2001 (第16回こどもの城マタニティ・コンサート)	5.14~20 (7) 6.13~15 (3)	9	前売=5,000／当日=5,500	3,032	2,449	80.8	
コメディア・デラルテ 「フラミニアの誘惑あるいは恋はルナティコ」	5.21~27 (7)	7	3,500	1,660	893	53.8	
室温~夜の音楽	7.2~21 (20)	20	前売=5,500／当日=5,800	6,894	6,654	96.5	
月猫えほん音楽会2001	7.26~29 (4)	5	招待	2,025	1,544	76.2	
PANTDANCE	8.8~10 (3)	2	4,000	528	288	54.5	
キリン・ファミリー劇場 「葉っぱのぱはパワーのぱ」	8.22~28 (7)	10	2,600	2,837	2,404	84.7	
青山演劇フェスティバル	9.4~24 (21)	20	5,500	6,687	6,349	94.9	
ア・ラ・カルト	12.4~26 (23)	23	6,000	8,851	8,568	96.8	
キリン・ファミリーオペレッタ 「とびこむ絵本」	12.27~ H14.1／7 (9)	11	2,800	3,981	3,685	92.6	
(自主・提携公演　小計)	(104)						
〈内部利用〉							
こどもフェスティバル	5.2~6 (5)	11	無料	3,459	2,821	81.6	企画研修部
おひさまおはなしコンサート	11.2~4 (3)	4	無料	1,320	1,076	81.5	企画研修部
三味線のつどい	H14.1.13 (1)	1	おとな=3,000 ／こども=1,500	338	175	51.8	音楽事業部
ぼくらのサウンド	3.22~24 (3)	5	無料	1,205	748	62.1	音楽事業部
(内部利用　小計)	(12)						
〈貸し館〉							
遊機械◎全自動シアター「食卓の木の下で」	4.4~26 (23)	23	5,500	7,465	6,581	88.2	
デンナーシステム「鶴瓶噺 2001春」	4.27~5／1 (5)	5	4,200	1,859	1,730	93.1	
鴻池企画「頑張れ！ 難病と闘う人々チャリティ・コンサート」	5.7~9 (3)	3	6,000	888	734	82.7	
アキコカンダ 「アキコカンダとダンスカンパニー」	5.10~13 (4)	4	4,000	834	597	71.6	
梯郁夫「Percussive Movement」	5.28 (1)	1	前売=3,500／当日=4,000	299	249	83.3	

名　称	期　間	回数	料　金	総席数	入場者数	入場率	備考
	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
テイクシステムズ「田原総一郎の熱論90分」	6.1 (1)	1	無料	350	300	85.7	
劇団ステージドア「チャーリーの恋人」	6.2~3 (2)	3	2,500	978	782	80.0	
Proposal「ファッションショー」	6.17 (1)	1	前売=1,800／当日=2,000	312	180	57.7	
オズエンターテイメント「沢田&池田コンサート」	6.18~19 (2)	2	6,300	788	704	89.3	
東宝芸能「ハロルドとモード」	6.20~24 (5)	6	4,500	1,884	1,824	96.8	
劇団影法師「氷山ルリの大航海」	6.28~7／1 (4)	5	前売=3,000／当日=3,500	787	711	90.3	
エデュケーションカンパニー「ビバ・メヒコ」	7.23~25 (3)	3	前売=3,800／当日=4,000	685	483	70.5	
メンズワーク「君を感じる時・恋するドライアイ」	7.30~8／5 (7)	7	指定=4,000／自由=3,000	1,614	1,252	77.6	
「光原エミカコンサート」	8.7 (1)	1	A=10,000／B=5,000	282	230	81.6	
藤原麻紀「紫炎」	8.11 (1)	1	前売=3,500／当日=4,000	264	119	45.1	
海老澤佐江子「Inner Trip」	8.12 (1)	1	4,200	564	406	72.0	
キョードー東京「渡辺真知子」	8.17~19 (3)	3	6,000	1,116	952	85.3	
テイクシステムズ「田原総一郎の熱論90分」	8.29 (1)	1	無料	350	300	85.7	
Actress Theater「Margot」	8.30~9.2 (4)	4	前売=2,000／当日=2,300	1,154	946	82.0	
RUP「世にも素敵なネバーエンディングストーリー」	9.25~10.8 (14)	13	前売=4,500／当日=4,800	4,359	3,833	87.9	
オズエンターテイメント「Live Cafe #3」	10.9 (1)	1	6,500	376	359	95.5	
ク・ナウカ「トリスタンとイゾルデ」	10.10~18 (9)	8	S=5,000／A=4,000／Z=2,000	1,987	1,662	83.6	
山の手事情社「Fairy Tale, Jam2001」	10.19~28 (10)	11	J=3,000／F=4,500	2,737	2,244	82.0	
古舘プロジェクト「ヨネスケの単なる野球好き」	10.31~11.1 (2)	2	4,000	648	571	88.1	
テレサ林「慟哭」	11.5~6 (2)	2	7,000	283	172	60.8	
テイクシステムズ「田原総一郎の熱論90分」	11.7 (1)	1	無料	350	320	91.4	
シューツ&ルーツ「放下14」	11.8 (1)	1	一般前売=3,000／学生前売=2,000／一般当日=3,500／学生当日=2,500	255	163	63.9	
地主律子ソロダンスリサイタル「Gaia・3」	11.9~10 (2)	2	前売=3,000／当日=3,500	272	200	73.5	
「西野博和コンサート」	11.11 (1)	1	5,000	242	199	82.2	
サッシュ「The SABRO'S VIEW」	11.13 (1)	1	4,800	674	619	91.8	
劇団青年団「雲母坂」	11.14~18 (5)	6	一般=5,000／学生=2,500	1,524	1,320	86.6	
TEAM共同責任「最後の晩餐」	11.19~25 (7)	8	前売=3,300／当日=3,500	2,256	1,760	78.0	
きりん社「ヒダノ修一」	11.26 (1)	1	4,000	366	285	77.9	
mauve「yaeコンサート」	11.27 (1)	1	前売=3,300／当日=3,500	301	285	94.7	
ドラスチックダンス“0”	11.28~30 (3)	5	4,000	1,214	1,066	87.8	
えん「オードゥラ」	12.1~2 (2)	2	前売=3,300／当日=3,800	528	224	42.4	
「西村雅彦トークショー」	H14.1.15~16 (2)	2	3,000	550	359	65.3	
オズエンターテイメント「LiveCafe #4」	1.18~19 (2)	2	6,500	1,182	1,001	84.7	

名　称	期　間	回数	料　金	総席数	入場者数	入場率	備考
	(日)	(回)	(円)	(人)	(人)	(%)	
山の手事情社「びん2002」	1／22～27 (6)	6	3,500	1,348	1,161	86.1	
シャクティ「枕草子」	2／2 (1)	1	6,000	238	210	88.2	
双数姉妹「サナギネ」	2／12～17 (6)	6	S=3,200／A=3,000	1,900	1,607	84.6	
日本映画学校卒業公演「ドランカー」	2／26～3/4 (7)	6	2,000	1,538	1,155	75.1	
テイクシステムズ「田原総一郎の熱論90分」	3／5 (1)	1	無料	350	320	91.4	
「原田俊英コンサート」	3／10 (1)	1	2,000	234	185	79.1	
システマ「つるとかめ」	3／15～16 (2)	2	前売=3,000／当日=3,500	424	230	54.2	
東京演劇アンサンブル「消えた海賊」	3／18～21 (4)	4	前売=3,500／当日=4,000	904	704	77.9	
「金沢明子コンサート」	3／25 (1)	1	前売=5,250／当日=6,300	301	197	65.4	
カルチャーリンクス「緑－MIDORI」	3／26 (1)	1	前売=4,000／当日=5,000	322	214	66.5	
アンリアレイジ「ファションショー」	3／27 (1)	1	1,300	602	520	86.4	
フリークルーズ「カワニナ」	3／28～31 (4)	4	前売=3,500／当日=3,800	1,248	691	55.4	
(貸し館　小計)	(174)						
(青山円形劇場　合計)	290						

広報部

平成13年度の活動

広報部の仕事は、一言で言えば、〔こどもの城〕を多くの人に知ってもらうことであるが、知ってもらいたいことは幅広く、またどのような形で伝えるかもさまざまである。

催し物を知ってもらうことを考えても、対象となるのはどのような人たちか、どのような方法で伝えればいいのか、興味を引きそうな言い回しは……等々、きめ細かな対応が要求される。ちらし等を配付したから伝わっているはず、という考え方でなく、伝えたいことがらを伝えるためにはどうすればよいか、というところから発想しなければならない。そのためには、情報として目にふれる → 興味を持つ → 参加してみようと思う → 参加する（行動をおこす）――ことを、一人でも多くの人にしてもらえるように知恵をしぼっている。

知ってもらいたいことは、催し物のことだけではない。もっと大切なことがらがある。それは〔こどもの城〕が児童健全育成のための総合施設で、教育ではなく遊びをキーワードにして子どもたちの健やかな育ちにむけた取り組みをしていること――を理解してもらい、家庭や地域でも子どもの育ちに関心をもって取り組んでもらえるようにはたらきかけることである。

はたらきかけ方もさまざまあるが、広報部の活動としては印刷物や新聞・インターネットなどの“メディア”を使って、多くの人に伝える方法が中心となっている。

〔こどもの城〕の機関紙「こどもの城ニュース」（B3判＝4色＋1色。月刊＝ただし年末年始は合併号として発行）の編集・発行のほか、新聞・雑誌・放送・電子メディアなど外部媒体への情報提供（パブリシティ）などのPR（パブリック・リレーションズ＝広報）活動。そして、ゴールデンウイーク・夏休み・冬休み・春休み特別期間のちらし・ポスター、講座・クラブ募集の案内ちらしなどの作成や広告出稿などを行ない、〔こどもの城〕への理解を得るために活動を行った。

少子化、価値観の多様化がすすむことにあわせて、情報を伝達するメディアも多様化してきている。時代にあわせた広報を考えていかなければならない。

1．パブリック・リレーションズ

〔こどもの城〕の活動を説明するとき、〈あそび〉をとおして児童の健全育成を図る施設であるということは、多くの人は納得してくれているようだが、具体的・実際的にどのような活動をしているのか、十分な理解が得らているとは思えない。

子どもたちにとって〈あそび〉とはなにか？　子どもの成長に果たす〈あそび〉の役割は？　教育の場で得られることと〈あそび〉の場で得られることとの差異は？――等々、子どもと遊びに限ってもさまざまなことが考えられる。それだけ、子どもと〈あそび〉の関係は多様で複合的であり、子どもの生活全般にかかわっている。子どもたちの育ちをサポートするために、さまざまに〈あそび〉の意味を考え、実践しているのが〔こどもの城〕ではないだろうか。それは、子どもと〈あそび〉を考える一つの提案の場であるともいえる。

〔こどもの城〕が何を考え、何をしようとしているのかを常に説明をして理解を得る努力が必要であり、子どもを考える開かれた場であることが、国立の総合児童センターである〔こどもの城〕が負わされた社会的な責務ではないか。その意味では、パブリック（公）とのリレーションズ（関係）作りの活動は重要と認識している。

（ア）「こどもの城ニュース」の編集・発行

〔こどもの城〕の利用者や周辺の学校、幼稚園、保育所などのほか、都道府県児童館連絡協議会をとおして全国の児童館・児童センターに配付している。

編集にあたっては、〔こどもの城〕の催し物の案内におわるのではなく、それぞれのプログラムが意図するもの――子どもたちが生活を豊かにするために考えてほしいこと、気づいてほしいことなど――まで伝えられればと考えて紙面作りをしている。

カラー印刷の１面は、小学校で習う漢字を中心とし、言葉使いも難しい漢語的表現をさけるようにしている。また、１色印刷の２面は、保護者や健全育成関係者を読者層と想定して、一般の新聞等とおなじ常用漢字の範囲で表現するように、用語にも配慮するよう心掛けている。

平成14年４月からの学校週５日制の実施をひかえて、子どもの休みの過ごし方が話題になっている。〔こどもの城〕の存在意義もますます大きくなってくると思われるので、「こどもの城ニュース」をとおし、今まで以上に〔こどもの城〕の活動への理解を図っていきたいと考えている。

「こどもの城ニュース」は、B3判、表面４色（カラー）・裏面１色印刷、各号２５，０００部発行。主な配付先は下記のとおり。

都道府県児童館連絡協議会など……	6,350部
こどもの城友の会……	約2,000部
都道府県民生主管部……	1,156部
保育所、幼稚園、小・中学校（渋谷区、港区）……	390部
渋谷区町内会長ほか……	202部
その他（一般入館者、招待者見学・視察者など）……	約15,000部

（イ）「こどもの城写真ニュース」

〔こどもの城〕への理解を、より深めてもらおうと、壁面に掲示する“写真ニュース”を作成している。公共の場などでよく見られる、新聞各社の写真ニュースを真似したもので、館内の壁面に掲示している。Ａ３判サイズ・カラー。毎月20日に更新している。

取り上げている内容は、直近に行われた各種の活動、健全育成関係者への講習会などから、季節のイベントや日常プログラム――それぞれにねらいをもって、多彩な活動をしていることをアピールしている。

“終わった”活動を取り上げる理由は、館内に掲示されているポスター・配付されているちらしなどは“お知らせ”がほとんどであること、自分が参加した活動以外のようすを利用者が知る方法が少ないこと――などによる。もちろん、写真が中心なので、撮れた（終わった）ものでないと、取り上げられないという物理的な理由もある。

（ウ）取材対応・パブリシティ（情報提供）

最近の雑誌の多くが“情報誌化”している。グルメ情報、遊び場ガイド、ショッピング情報等々である。多方面にわたる取材を裏付けとする、評論・分析的な記事は少なくなり、タイアップの記事広告のような紹介記事が中心になっている。

〔こどもの城〕は、子どもを持つ家族向けの情報として取り上げられることが多く、多数の問い合わせがある。最近の傾向としては、印刷（活字・紙）媒体だけでなく、インターネットなどの電子メディア関連からの問い合わせが多くなってきている。

雑誌関係の原稿締切りは早く、ゴールデンウイークの前後には、もう夏休みの催し物の問い合わせがくる。よりよいプログラムを行うために、直前まで時間をかけて内容を固めていきたいという気持ちは理解できるが、多くの人に

【「こどもの城ニュース」の主な内容】

	発行日	内容	発行部数
第115号	平成13年4月15日	“遊びのボランティア”って？？？	25,000部
第116号	〃 5月15日	パソコンは新しい“遊びの道具”工夫をすれば、いろいろな遊び方ができる	〃
第117号	〃 6月15日	音楽／造形／映像・科学などのワークショップがいっぱい	〃
第118号	〃 7月15日	映画をとおしていろいろな国の文化と出合う	〃
第119号	〃 8月15日	“経験”を生かし、子ども（家族）の遊びをサポート（女性ボランティア）	〃
第120号	〃 9月15日	親子で　友だちと〔こどもの城〕の“夏”を楽しみました	〃
第121号	〃 10月15日	21児童館参加、個性あふれる作品を展示（全国児童館おりがみ作品展）	〃
第122号	〃 11月15日	“音楽”をとおして“ふれあい”を～音楽ロビーのプログラム	〃
第123号	〃 12月15日	全国のボランティアが合同で〈遊びのフェスティバル〉	〃
第124号	平成14年2月15日	素材の性質を生かしてイメージを形に（こどもクリエイティブクラブ）	〃
第125号	〃 3月15日	〈あそび〉いろいろ春休み	〃

伝えて参加してもらうことも大切なことなので、早めの決定、早めの宣伝を心掛ける必要があろう。

一度問い合わせを受けた媒体へは、毎月１回定期的に１～２か月先の〔こどもの城〕の情報（催し物の案内等）を送付している。新聞社などのマスコミから地域のミニコミなど約160社。ファックス、Ｅメール、郵送などさまざまな方法を取っている。さらに、特別期間のプログラムや講座・クラブ受講生募集の案内なども随時送付している。

本年度の取材件数は、新聞23件、雑誌26件、テレビ・ラジオ15件、その他（電子メディアなどを含む）150件である。

2. 宣伝・広告

宣伝の媒体もさまざまなものがある。広く伝えるのに適したものもあれば、詳しく伝えるのに適したものもある。情報を伝えたい人の手元に届ける方法もいろいろである。

講座・クラブの受講生募集のように、対象とする人の地域が限定されるものは、地域を限定して配付できるものが効率的だし、特別期間の案内のように多くの人に知ってもらいたいものは広範囲に伝わるものが望まれる。〔こどもの城〕側がどのような情報をだれに伝えたいか――宣伝したいことがらを明確にして、予算のゆるす範囲内で最良の宣伝方法を模索している。

（ア）新聞広告

夏休み特別期間の告知、講座・クラブの新年度受講生募集のお知らせなど、別表のような宣伝活動を行った。

夏休み特別期間には、都営地下鉄とのタイアップ広告（沿線の観光案内のポスターの下部に広告を掲載）を行い都営地下鉄全駅に掲示した。また、講座・クラブの新年度受講生募集の際には、毎週の通いが可能と思われる地域（ドア・ツー・ドアで１時間程度の範囲）に新聞折り込み・各戸へのポストインに重点を移し、補助的に新聞広告を行う形にして、経費の節約に努めた。

また、小学生向けメディアである朝日小学生新聞に、毎月２回、記事広告の形で出稿している。

（イ）ちらし・ポスターなど

児童福祉週間（ゴールデンウイーク）、夏休み、冬休み、春休みの各特別期間に催し物案内のちらしを作成した。冬休み特別期間は、期間が短いことなどを考慮して、本年度から１色刷りにしてポスターの作成を取り止めた。他の３つの特別期間は、従来通りちらしと同じデザインのポスターを印刷した。

また、講座・クラブの一覧（新年度講座・クラブ）を作成し、新聞折り込み・ポストインにも使用した。

ちらし等は、資料請求したことのある人をリストアップして、ダイレクトメールを送るようにしている。

3. その他

（ア）渋谷スタンプラリー

夏休み特別期間恒例の「渋谷スタンプラリー」に本年度も参加した。「天文博物館　五島プラネタリウム」が長い歴史の幕を閉じたため、「ＮＨＫスタジオパーク」「電力館」「たばこと塩の博物館」「東京都児童会館」「こどもの城」の５館で実施した。

渋谷駅周辺にある各館が、協力して施設の存在と活動をＰＲするのが目的。５館の情報交換の場ともなっている。

（イ）その他

〔こどもの城〕のホームページは、企画研修部で管理し

【掲載した新聞広告の一覧】

掲載紙	形式	日時	内容
毎日小学生／中学生新聞		平成13年4月20日	児童福祉週間特別期間の催し物案内
朝日新聞（都内各版）	全5段ほか	平成13年7月8日～8月28日	夏休み特別期間の催し物案内
朝日少年少女スポーツ（埼玉）	半2段	〃　7月12日	
朝日小学生新聞	全5段	〃　7月15日	
毎日小学生／中学生新聞	タブロイド3段	〃　7月13日	
東京新聞（東京中日スポーツ）	全5段、半5段	〃　7月17日～8月15日	
朝日小学生新聞	全5段	平成13年12月21、29日	冬休み特別期間の催し物案内
東京新聞	〃	〃　12月19～30日	
毎日小学生／中学生新聞	タブロイド3段	平成14年1月1日（新年号）	
朝日新聞　都内各版	全5段ほか	平成14年1月25日～3月23日	平成14年度第1期講座・クラブ受講生募集
朝日小学生新聞	全5段	〃　2月16、28日	
毎日小学生／中学生新聞	93mm×127mm	平成14年3月22日	春休み特別期間の催し物案内
朝日小学生新聞（特約）	記事広告	毎月2回	記事広告の形で、さまざまなプログラムを紹介

【作成した印刷物などの一覧】

名　称	発行部数	内　容
平成13年度講座・クラブ一覧	200,000部	14年度全講座・クラブの案内（B4版2色4ページ）
こどもの城の案内（和文）	260,000部	8月と3月に増刷
こどもの城の案内（英文）	15,000部	8月に増刷
その他（各種ちらし・ポスター）	165,000部	GW、夏休み、冬休み、春休みの催し物案内 講座・クラブなどの募集案内（2期、3期、夏休み短期講習会）

【その他の広報活動】

名　称	日　時	内　容
都営地下鉄駅貼りポスター	8月5日～25日	都営地下鉄のタイアップ広告。B全判ポスターの記事下（200mm×728mm）のスペースで夏休み特別期間をPR。都営地下鉄全75駅に掲示。
新聞折り込み サンケイリビングのポストイン	平成14年2月8日 平成14年2月10日	平成14年度開講の全講座・クラブの案内と受講生募集のちらしを〔こどもの城〕周辺地域の読売新聞・毎日新聞の朝刊（計75,000部強）に折り込み広告を実施。本年度新たにサンケイリビングの各戸ポストイン（140,000部強）も行った。
ＪＲ渋谷駅（玉川口）案内看板	通年	山手線外回りホーム（玉川口）横の、駅周辺案内図に広告掲載

ている。広報部では、プレスリリースや各種ちらし作成時のデータを二次利用の形で提供しているが、十分な体制のもとで運営されているとは言いがたいのが現状。本年度から、運用体制の見直しを行うことになり、検討していくことになった。

4. まとめ

ＩＴ技術のめざましい進歩をしているなかで、メディアリテラシー（情報の読み取り方）の必要性が叫ばれるなど、“情報”が改めて注目されることになってきた。メディアをとおして、世の中に流されるものは、なにもかもが情報として扱われているが、これからは信頼性など、質が問われることになってくる。

情報を扱う部署として、いかにして〔こどもの城〕を多くの人に理解してもらえるか、ＩＴ時代の情報のあり方を考えていかなければならないと思う。

利用者サービス

平成13年度の活動

インターネットに対応するために前年度後半から準備を進め、ホテル・研修室のホームページを立ち上げ、本年度から本格的に稼働させた。インターネットをとおした問い合わせが増加した。

1．業種別の状況

（ア）ホテル

ホテルの利用状況を見ると、客室利用率は和洋室全体で85.0％、客数利用率では68.4％となっており、前年度に比べ客室利用率で 5.0％の増加、客数利用率で 3.4％の増加となった。客数利用率が客室利用率に比べて低いのは、ツインルームのシングルユースおよび和室の利用人員が客室定員より少ない場合が多かったためである。

3室しかないシングルルームの利用率は、窓のない部屋であるにもかかわらず、94.7％と極めて高率であり、ツインルームのシングルユースも32.7％と利用率が高く、シングルルームの需要が高い。

【ホテルの利用状況】

客室種別	利用客室数	客室利用率	利用者数	客数利用率
シングル	1,003室	94.7%	1,003人	94.7%
ツイン	6,138室	86.9%	10,759人	76.2%
和室	660室	62.3%	3,200人	47.7%
合計	7,801室	85.0%	14,962人	68.4%

（1）客室利用率＝$\frac{\text{利用客室総数}}{\text{営業日数（353日）×販売可能客室数（26人）}}$ ×100

（2）客数利用率＝$\frac{\text{利用客総数}}{\text{営業日数（353日）×収納可能客数（62人）}}$ ×100

※総客室数は27室、総定員は64人だが、このうちツイン1室を予備室としているため、販売可能客室数は26室、収容可能客数は62人とした。

4月から宿泊予約サイト「旅の窓口」に加盟して、インターネット予約を開始した。空室登録は、土曜日・休前日・特別期間などの繁忙期をのぞき、空室が目立つ日を中心に登録。さらに、予約状況をみながら、随時登録室数の増減を行っている。インターネット予約の売上高は全体の9.4％を占め、客室・客数の利用増に寄与している。

前年度に引き続き、旅行情報誌、ホテルガイドへの広告の掲載や関係団体の全国会議でのパンフレットの配付など宣伝に努めた。

（イ）研修室・ギャラリー

研修室利用率は合計で63.4％となり、前年度より4.4％増加した。

外部への有料貸しのほか、〔こどもの城〕の企画による催事などにも利用されている。とりわけ春・夏・冬休み、ゴールデンウイーク（児童福祉週間）などの特別期間中は、研

【貸し室の利用状況】

客室種別		有料利用		内部利用		計	
		件数	利用率	件数	利用率	件数	利用率
研修室	午前	1,796	50.9	295	8.4	2,091	59.2
	午後	2,466	69.7	292	8.2	2,758	77.9
	夜間	1,238	42.7	236	8.1	1,474	50.9
	合計	5,500	55.2	823	8.3	6,323	63.4
ギャラリー		76	21.2	191	53.2	267	74.4

（1）客室利用率＝$\frac{\text{各室を午前・午後・夜間各1件とした場合の年間利用件数}}{\text{年間営業可能件数}}$ ×100

※平成13年度における年間営業可能件数は、午前3,530件、午後3,540件、夜間2,898件の合計9,968件（日曜日・祝日の夜間休業のほか、じゅうたんクリーニング、工事などのため利用不能となった件数を除く）。

（2）ギャラリー利用率＝$\frac{\text{利用日数}}{\text{365日－（年末年始5日＋基幹停電日1日）＝359日}}$ ×100

修室、ギャラリーの内部利用の割合が極めて高く、限られたスペースでの充実したプログラム作りに寄与している。

（ウ）その他の業務

売店、自動販売機による販売、駐車場の提供、館内公衆電話の管理などについては、前年度に引き続き〔こどもの城〕事業活動に即応する形で利用者サービス事業の一環として実施してきている。

〔こどもの城〕の利用を促進しくいくうえで、これらの利用者サービス事業はいずれも欠くことのできないものなので、引き続き多様な利用者需要に合わせたサービスの向上を図っていく必要がある。

平成13年度の概要

1．業務の一覧

業種	店名等	場所	利用客席数	営業日・営業時間	備考
ホテル	こどもの城ホテル	6・7階	客室数 27 客室定員 64	無休（12月28日～1月2日を除く）	洋室24室（シングル3、Aツイン10、Bツイン11） 和室3室（4人用1、5人用1、10人用1） ※1泊 6,400円（税別）～
貸し室	研修室	8・9階	研修室 10 ※一部通しで使用できる。利用人員350人ぐらいまで	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝9：00～21：00	研修および会議など ※1単位時間11,500円～（税別）
	ギャラリー	1階アトリウム		無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝10：00～18：00	各種展示会および実演など ※1日30,000円（税別）
物品販売	売店	1階アトリウム	1か所	営業日時＝「こども活動エリア」の開館日時と同じ 毎週月曜日休業（月曜日が祝・休日のときは火曜日） 土・日曜日、祝・休日、春・夏・冬休みの特別期間＝10：00～17：30 その他の平日＝12：30～17：30	がん具、文具、造形用品、音楽用品、スポーツ用品、講座指定水着、催事関係用品、印刷出版物、衣料、雑貨、フィルムなど
	自動販売機	館内各所	飲・食・乳販売 15か所 たばこ 6か所 フィルム 1か所 テレホンカード 2か所	無休	ドリンク類、牛乳類、スナック類、カップ麺類
公衆電話		館内各所	15か所 19台	無休	
駐車場		屋内（地下2階～地下4階）、屋外（1階）	約126台 （業務車両分含む）	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝8：00～22：00	普通車両は地下駐車場、バスなど大型車両は屋外（1階）に駐車 ※普通車両 30分 300円（税込み） マイクロ車 1時間840円（〃） 大型車 1時間1,260円（〃）
飲食関係	カフェテラス「アンファン」	1階	客席数 140	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝7：30～19：00	ファミリーレストラン、弁当仕出し、パーティー、ホテル宿泊者の食事など
	すし「ひさご」	1階	カフェテラス「アンファン」内	無休（12月29日～1月2日を除く） 営業時間＝11：00～19：00	すし、和食、弁当・料理の仕出しなど
	劇場内「スナック」	青山劇場内地下および2階ロビー	立食	公演に合わせて営業 営業時間＝開演前・幕間	喫茶、軽食

3

こどもの城から全国へ

こどもの城から全国へ

平成13年度の活動

1.〔こどもの城〕のセンター的機能

〔こどもの城〕が目的を同じくする全国の児童館との交流をはかりながら、自分たちの持つノウハウを紹介したり、地域の児童館が持つアイデアを学んだりすることは、開館当時から、事業の中で極めて重要な要素であった。一方でこうしたセンター的機能は、〔こどもの城〕内で行われているプログラムの充実におうところが多く、同時にセンター的機能による他施設との交流によって得られる刺激がプログラムの充実をもたらすこともあった。

実際には、開館当初から継続して行っている児童厚生員等実技指導講習会、研修生・実習生の受け入れ、講師派遣、平成6年度から始まった〈動くこどもの城〉事業、前年度から始めた社会福祉・医療事業団や日本財団による助成金事業などである。

センター的機能の強化は、相当の負荷をおうことになった一方、〔こどもの城〕内では体験できない新しい世界が開け、新しい方向性を見いだすとともに、大型児童館や各地の児童館連絡協議会だけでなく、市民団体や地方行政との新しい協力関係を築くことにもなった。

(ア) 児童厚生員対象の講習会

【こどもの城児童厚生員等実技指導講習会】

児童館・児童センターで働く児童厚生員などを対象とした実技指導講習会を年3回開催。児童館ですぐにでも取り組めるプログラムの紹介や児童館活動のなかで起こりうる事例についての対処法など、実技を中心とした実践的な内容で行った。

講習会は通い型と宿泊型の2形態で行っているが、2泊3日で行う宿泊型講習会は、プログラムを集中して行える利点はもちろんのこと、全国各地から集まった参加者が講習会の合間に気軽に情報交換ができたり、生活を共にする同室の参加者と悩みを相談しあうなど宿泊ならではの効果がある。

3日間の講習は勤務の都合で難しいなどという場合に対応した2日間の通いの講習会では、主に首都圏の児童厚生員等の参加が多くなっている。参加希望者が多く、そのすべてを受け入れることは会場や内容の都合で難しく、参加者が講習会で得た知識を持ち帰って、周囲の児童厚生員等に広めていってほしいと願いながら実施しているのが現状である。

【その他の講習会】

児童厚生員等実技指導講習会以外にも児童館、保育所などの児童健全育成の現場ですぐに実践できる内容の講習会を開催してほしいという要望に応えて、「つくって演じる人

こどもの城児童厚生員等実技指導講習会
「アート探検 ハンズオン・素材・発想2002〜こどもの城造形スタジオの活動から〜」

動くこどもの城「お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ」
（千葉県印西市立そうふけ児童館）

形劇」「おりがみにつよくなる講習会」の短期講習会を実施した。

いずれも、「人形劇カーニバル」「おりがみカーニバル」の公演や展示の期間に合わせ日程を設定した。講習会を受講するだけでなく、本物を見ることの効果は絶大である。人形劇、折り紙はともに根強い人気を持っているのでこれからも継続していく予定である。これらのテーマに限らず、要望の多い新しいテーマにも挑戦していきたい。

（イ）研修生・実習生の受け入れ

大型児童館の初任者研修として、本年度は29人の研修生を受け入れた。日常活動をとおして仕事の感覚を養う意味で、多くの来館児・者がある〔こどもの城〕はその受け入れに適した場所である。経験者の研修は、本年度は実現しなかった。今後、半日、一日といった短期研修など、利用しやすい形での受け入れ方法について引き続き検討していきたい。

実習生は大学、短期大学、専門学校から依頼のあった保育学、博物館学等の科目履修のため実習の場として、学生を受け入れたものである。本年度は22人の実習生を受け入れたほか、日産自動車（株）が実施しているNPOラーニングシステムでの奨学生2人も受け入れた。

指導、教育をともなう実習生の受け入れは、時間のかかる仕事であるが、〔こどもの城〕の社会的役割を果たす上でも必要な事業として今後も継続していきたい。

（ウ）講師派遣

地域で開催される児童健全育成のための研修会や催しのために、〔こどもの城〕のスタッフが講師として招かれる例は年々増加して、本年度は131件にのぼった。

依頼内容は、年々広範なものになってきている。スタッフ個人の資質におうものと、〔こどもの城〕が今までに行ってきた事業内容を紹介するものに大別される。いずれの場合も、結果として〔こどもの城〕の事業目的に沿うものであれば対応してきた。日常業務に支障のない範囲で対応しているが、今後さらにこうした要望が多くなることも予想される。センター的な役割をはたすことと、多くの来館児・者が訪れる〔こどもの城〕という施設を運営することとのバランスを考えながら対応していきたい。

2.〈動くこどもの城〉

体育事業部が本年度のテーマとしている「おにごっこで楽しく体力作り」、音楽事業部で継続的に実施してきた「音楽ゲームセンターで遊ぼう！ スーパースターゲッター」を新規プログラムに加えた。本年度は、18都道府県、26地域にプログラムを派遣した。平成12年度から実施した「全国児童館おりがみ作品展」は、開催を希望するところが多かった（全国10か所で実施）。

新規プログラム「音楽ゲームセンターで遊ぼう！ スーパースターゲッター」は、栃木県で実施した。最初に指導者向けの実技研修を実施した後、一緒になって子どもたち向けのプログラムを運営するという形をとった。研修会だけでは、子どもたちの反応などを実感することができないが、研修と実践という形をとることで、研修の内容を肌で感じてもらうことができ、たいへん有効であった。今後の研修内容を考えていく場合、単に理論やスキルを伝えるだけでなく、いかに実践の場を準備していくか検討していきたい。

3. 助成金による事業

本年度は、児童館に対するセンター的な役割を充実させていくために、4つの助成金による事業に取り組んだ。

社会福祉・医療事業団、子育て支援基金助成事業としては、前年度から継続している「こどもの城ファミリーフェア事業」「小・中学生ボランティア交流事業」のほか、本年度は「子育てサークルネット支援事業」に取り組んだ。

助成金を受けて実施した事業は、全国規模で全国の大型児童館と活発に交流ができたこと、調査研究などを実施できたことなど、〔こどもの城〕にとって大きな財産になった。

さらに、絵本の読み語りの普及を目的とした公演「わくわく絵本パーク」を日本財団の助成を受けて実施した。

【こどもの城ファミリーフェア事業】

親子向けのプログラム開発とその啓発活動を中心に実施した。具体的には、絵本の読み語り公演「おひさまおはなしコンサート」の地方公演を実施したほか、親子遊びの事例集「おやおや こ・こ・こ」、親子スキンシップのための音楽CDを制作し、全国の児童館に配布した。

【小・中学生ボランティア交流事業】

都道府県立の大型児童館15館で活動するボランティアによる交流フェスティバル「じょいんフェスティバル」を

参加各館から提案されたプログラムをみんなで検討。
（第2回担当者会議＝9月29日）

〔こどもの城〕の来館児・者を対象に“遊びのフェスティバル”（11月24日）。前日は夜遅くまでみんなで準備作業に取り組みました。

大型児童館の“遊びのボランティア”が集う「じょいんフェスティバル」の“遊びのフェスティバル”

「ふしぎが森の手作りランド　森はともだち」（プレイホール）

「じょいんトラベル　現在・過去・未来ツアー」（ふしぎが丘）

「みんな集まれ！　わくわくシアター」（Bスタジオ）

「参加15館の施設と活動を紹介する展示」（フリーホール）

11月に〔こどもの城〕で実施した。来館児・者向けプログラムの企画・運営を行うとともに、ボランティア活動にかんする学習会などを実施した。参加館からは、「他の館の活動状況を把握できた、今後の活動に生かしていきたい」との声が多く寄せられた。

【子育てサークルネット支援事業】

本年度から実施。地域で活動する子育てサークルのネットワーク化をはかることにより、行政にとっても具体的な支援ができるとともに、サークル同士で相互に助け合い、地域の子育て支援の機運を高めようと実施した事業。全国

の自治体に対し子育てサークルの支援にかんするアンケート調査をするとともに、全国25の地域で市民によるネットワーク活動をモデル事業として実施してもらった。その結果を子育て支援のための冊子「みんなで子育て」にまとめ、全国の自治体に配布した。

【日本財団の助成を受けて行った事業事業】

前年度まで小学館や日産自動車などの協賛を受けて実施してきた声優による絵本の読み語り公演「わくわく絵本パーク」を、本年度は日本財団の助成を受けて実施した。〔こどもの城〕での公演のほか、えひめこどもの城で巡回公演を実施した。

4. まとめ

初めに述べたように、センター的機能が〔こどもの城〕の事業を新しい局面へ導く効果がある一方、機能の拡大が従来業務への負担となってきていることも事実である。ここ数年間センター的機能の拡大は、〔こどもの城〕からのアウトプットが多く、新しいアイデアを温めたり、新しいプログラムを開発している余裕がなくなっていた。こうした外へ向けた機能を失うことなく、〔こどもの城〕内部の充実に努められるよう、業務のバランスに充分配慮していきたい。

平成13年度活動一覧表

1.〈動くこどもの城〉プログラム一覧

〈子どもや家族を対象としたプログラム〉

名　　称	内　　容
お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ　（体育・小児保健）	赤ちゃんが自然に健康に成長していることは、母親でも意外と意識しないもの。音楽や楽しい遊具を使いながら、赤ちゃんと一緒にできる簡単な体操をとおして、表情や動きの新しい発見する。
身近な道具でスポーツあそび（体育）	身の回りにある道具を使って体を動かしてみる。新聞紙・棒・ひも、そして特定のスポーツの道具として使うことが多いボールなどの使い方を、人数や場所の広さによって変えていく発展型プログラム。発想を変えることによって、さまざまな運動遊び、スポーツへと展開していく。
「おにごっこ」で楽しく体力づくり（体育）	かつて、子どもたちは元気に軽快に遊ぶ中で、基本的な体力を自然に伸ばしていたが、現代ではその基本的な体力の低下が危ぶまれている。体力の中でも「敏捷性」「バランス」を養うための陣取りゲームや、遊びのなかで人気があり多彩な「おにごっこ」を存分に楽しむ。
ガドガドコンサート「おんがくがスキ！」（音楽）	ロック、クラシック、ラテン、民族音楽――音楽好きの4人が、従来の楽器のほかに、手作り楽器、民族楽器、身の回りの道具などを楽器にして演奏。今までにないサウンドは、文字通り寄せ集め（ガドガド）。すべての人に音楽をより身近なものとして感じさせるコンサート。
竹の響き「アンクルン・コンサート」（音楽）	アンクルンは、竹で作られたインドネシアの民族楽器。一つの楽器から一つの音しかでないため、“竹のハンドベル”とも呼ばれている。アンクルンのほかに、竹のマリンバ、ベースなどと一緒に、童謡やインドネシアの民謡を演奏。竹の優しく素朴な音のハーモニーが楽しめます。参加した子どもたちがアンクルンを体験するコーナーもある。
音楽ゲームセンターであそぼう「スーパースターゲッター！」（音楽）	オリジナルの音楽遊びを紹介。開催団体との協力で、実際に子どもたちにも体験してもらうプログラム。「踊る」「歌う」「聞く」「リズムをたたく」「楽器を体験する」など、音楽的要素を含んだゲームコーナーが屋台のように並ぶ。
アニメ・ワークショップ　（AV）	2枚の簡単な絵を描いて作る「ぱたぱたアニメ」、映画発明以前の動く絵を楽しむ“視覚玩具”の制作などをとおして映画、映像の仕組みを体験。また、制作の難しい複雑な「視覚玩具」も展示。
映像探検　写真ワークショップ（AV）	日常なにげなく撮っている写真の“写る仕組み”を体験。写真の発明以前に、画家たちがデッサンの補助的器具として用いていた“カメラオブスクラ”や、レンズを使わないカメラ“ピンホールカメラ”を使ったワークショップ。また、写真の仕組みや歴史を探る展示も行う。
こどもの城映画劇場　（AV）	子ども向けに作られた国内外の芸術的なアニメーションの短編作品――基本的に、〔こどもの城〕フィルムライブラリー「武藤行雄記念文庫」に収蔵された作品から数本を選ぶ――を上映。「武藤行雄記念文庫」にはカナダ国立映画制作庁（NFBC）のアニメーションをはじめ、世界中の優れた作品を約110本収蔵。
みんなで遊ぼうパペット・ランド（プレイ）	人形作りと人形遊びの2つの活動で構成。紙コップや封筒など身近な素材で人形を作り、作った人形で話をしたり、仲間とコーラスを楽しんだり、ごっこ遊びを繰り広げたり――イメージの世界をみんなで楽しむ、人形遊びのプログラム。
やってみよう！　パソコン遊びのプログラム　（プレイ）	「きれいなグラフィック遊び」、さまざまなペーパークラフトをパソコンでデザインしてから作って遊ぶ「パソコンクラフト」など、〔こどもの城〕で実施したプログラムの中から、いくつかを選択して実施。パソコンで楽しく遊ぶコーナーを一定期間設置する。
ボランティア交流プログラム（企画研修）	〔こどもの城〕で活動しているボランティアリーダーと地域のボランティアとの交流プログラム。ボランティアの養成やさまざまな活動についての情報を交換。

〈児童厚生員などを対象とした実技研修会〉

名　　称	内　　容
造形ワークショップ　（造形）	素材・発想・技法などを組み合わせると、さまざまなプログラムが生まれる。どこにでもある素材も、ほんの少しだけ発想を変えると、普段は見えないものが見えてくる。そうしたプログラムを何種類かを体験制作。背景となる考え方や発想法についても考える。
不思議な映像実験室　（ＡＶ）	“映像の時代”ともいえる現代に生きる子どもたちにとって、映像というコミュニケーションの道具を知ることは大切なこと。映像の基本的原理について、遊びをとおして理解させるワークショップ。
手作り楽器のワークショップ（音楽）	“がらくた”として捨ててしまうようなもの（金属の缶やフィルムのケースなど）を生き返らせて、音が出る“音の道具＝楽器”に早変わり。制作終了後には、作った楽器を使って全員で合奏。
打楽器で遊ぶワークショップ（音楽）	ブラジルのサンバやアフリカの太鼓「タムタム」を活用して、リズム遊びを手作りの楽器などで体験するワークショップ。
パソコン遊びのワークショップ（プレイ）	パソコンを使った遊びのプログラムをいくつか体験しながら、子どもにとってのパソコン活動の意味と、プログラムを計画・実施するときの方法などを考える。
絵本からひろがる遊び（プレイ・造形）	絵本作りの手法を紹介し、それをもとに色遊びやコラージュを楽しむ「絵本づくりの秘密」、絵本のイメージをもとに、かんたんな靴下人形を使って遊ぶ「みんなであおむしくん」の2プログラム。
絵本ワークショップ　（企画研修）	さまざまな絵本をモチーフにした、かんたんな絵本作りのワークショップ。絵本をコミュニケーションの道具としてとらえたプログラム。

〈巡回展示とワークショップ〉

名　　称	内　　容
ブルーノ・ムナーリ展　（造形）	1985年の〔こどもの城〕開館を記念して行われたブルーノ・ムナーリ氏の作品展およびワークショップから、グラフィック・アート、プレイシングス、絵本、オブジェなどの展示とワークショップを巡回用に構成したもの。子どもの触覚、視覚、体感覚を使って造形感覚を磨がき、心身ともに豊かに発展させるという考えが基本となっている。
ビクトル・ダミコ展 ～こどもアートカーニバル～（造形）	1995年の〔こどもの城〕開館10周年を記念して行われた「ビクトル・ダミコ展“こどもアートカーニバル”」を巡回キット化したもの。「色、光、触覚」を遊びながら体験できる21個のボックス型造形美術玩具は、子どもの造形意欲や創造性を喚起し、好奇心と感性に刺激を与える環境となる。このほかに、特別に設計されたイーゼルや回転式円形コラージュ・テーブルなどを加えた環境の中で、絵画とコラージュ制作を中心としたワークショップを実施。
造形ワークショップ展　（造形）	〔こどもの城〕造形スタジオの実践プログラムを、視覚的に分かりやすく、展示パネルの形式にまとめて展示。その中からいくつかのプログラムを子どもたちやその家族を対象に実施。パネル展示が中心のプログラム。
お父さんの少年時代　（企画研修）	児童館などを訪れる子どもたちのお父さん、お母さんが子どもだったころ、昭和30～40年代の“遊び”の展示。展示されためんこ、ベーゴマ、凧、日光写真などの遊び道具をきっかけに、親子のコミュニケーションをはかると同時に、子どもたちは昔遊びのエッセンスを体験。
絵本とコミュニケーション（企画研修）	絵本は子どもたちの感性をはぐくむ優れた媒体。子どもの様子を見ながらページをめくれば、自然と親子のコミュニケーションをはかることもでる。グラフィックデザイナーの駒形克己氏は、絵本の“コミュニケーションのためのツール”という側面に着目し、さまざまな絵本を制作するだけでなく、絵本作りのワークショップを実践している。〔こどもの城〕で実施した展示とワークショップで構成したプログラム。
全国児童館おりがみ作品展（企画研修）	各地の児童館活動の中で制作したおりがみ作品を集めた「全国児童館おりがみ作品展」（10月27日～11月18日／こどもの城）ののち、12月から全国で巡回展示。本年度は「未来」がテーマ。6月までは平成12年度の作品（テーマは「家族」）を巡回展示。

2.〈動くこどもの城〉実施一覧

都道府県	開催団体	日時	実施プログラム	催し	研修	展示
長野県	長野県児童館連絡協議会	5.24	打楽器で遊ぶワークショップ／絵本のワークショップ		○	
秋田県	秋田県児童会館	6.14	不思議な映像実験室		○	
宮崎県	社会福祉法人 ゆりがこ福祉会	6.16～24	全国児童館おりがみ作品展			○
埼玉県	所沢市立つばめ児童館	7.3・14	アニメワークショップ／不思議な映像実験室	○	○	
名古屋市	育ちあい広場	7.7	お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ	○	○	
〃	子どもと大人をつなぐ会	7.8	〃	○	○	
宮城県	塩竈市生涯学習センター ふれあいエプス塩竈	7.17～8.26	絵本とコミュニケーション	○	○	○
岐阜県	恵那市大井児童センター	9.8・9	おんがくがスキ！／打楽器で遊ぶワークショップ	○	○	
香川県	(財) 香川県児童・青少年健全育成事業団 さぬきこどもの国	9.16・17	竹の響き「アンクルンコンサート」／打楽器で遊ぶワークショップ	○	○	
栃木県	栃木県子ども総合科学館／栃木県児童館連絡協議会	10.5～7	音楽ゲームセンターで遊ぼう「スーパースターゲッター！」	○	○	
千葉県	市川市中央こども館	10.22	パソコン遊びのワークショップ		○	
佐賀県	鳥栖市社会福祉協議会	10.26・27	お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ／おにごっこで楽しく体力づくり	○	○	
兵庫県	姫路市立東児童センター	11.8～30	パソコン遊びのワークショップ	○	○	
山口県	山口県児童センター	11.16	打楽器で遊ぶワークショップ		○	
栃木県	野木町立新橋児童館	12.1～15	全国児童館おりがみ作品展			○
青森県	大鰐町中央児童館	12.1～7	〃			○
埼玉県	越谷市立児童館	12.13	お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ	○	○	
〃	川口市芝児童センター	12.19～24	全国児童館おりがみ作品展			○
宮崎県	清武町立かのう児童館	H14.1.7～12	〃			○
千葉県	印西市立そうふけ児童館	1.17	お母さんと赤ちゃんのすくすくスキンシップ	○	○	
埼玉県	上福岡市児童センター	1.20～26	全国児童館おりがみ作品展			○
静岡県	長泉町児童館	2.1～10	〃			○
大分県	九重町児童館	2.19～3.3	〃			○
鹿児島県	阿久根市社会福祉協議会	3.11～17	〃			○
熊本県	熊本県児童館連絡協議会	3.18	手作り楽器のワークショップ		○	
兵庫県	姫路市立北児童センター	3.20～27	全国児童館おりがみ作品展			○

3. 児童厚生員向け講習会

名　　称	対象・定員	受講数	曜　日・日　時	備　　考
	(人)	(人)		
平成13年度第1回 児童厚生員等 実技指導講習会	児童館職員ほか (50)	51	5.16、24	「手で遊ぶ!! 手遊び、手品、手話ソング～手は口ほどにものを言う !?～」をテーマに、より子どもに身近で親しみやすい活動として「手を使ってどこまで子どもと遊べるか」の可能性について挑戦してみた。また、手でも歌える手話ソングなど、児童館活動での新しい分野に挑戦した。講師は、にんぎょうげき「コロン団」代表・荒木文子さん、手話通訳士の中野佐世子さん。(研修室)
〃　第2回 〃	〃 (50)	42	10.24～26	「児童館のボランティア活動～ボランティア活動の困った! を解決するために～」をテーマに、児童館で活動しているボランティアの現状、共に活動して行く上での問題点などを実際の事例をあげながら参加者全員で解決策を考え、児童館におけるよりよいボランティア活動のあり方を考えた。講師は、大正大学吉澤英子教授。(研修室)
〃　第3回 〃	〃 (50)	51	H14.1.23～25	「アート探検　ハンズオン・素材・発想2002～こどもの城造形スタジオの活動から～」をテーマに、児童館で行うより身近で親しみやすい造形活動を〔こどもの城〕造形事業部が実践してきたさまざまなプログラムから紹介した。また、今、児童館で行われている造形活動で何が求められているのか、事前アンケート調査を行い、それに答えていくことで〔こどもの城〕のプログラム紹介にとどまらないで、児童館のニーズにも応えていく講習会とした。講師は、造形事業部スタッフ。(研修室)
つくって演じる 人形劇	〃 (120)	120	8.19、9.9	児童館、保育所、幼稚園などで、子どもたちを前にして本格的な人形劇を演じるための人形作りと、操作方法について、2日間にわたって指導者を対象んび講習会を行った。(研修室)
おりがみにつよくなる講習会	〃 (120)	109	10.28、11.11	児童館、保育所、幼稚園など児童健全育成の現場で使われる折り紙の講習会。1日目は「折り図の見方から装飾まで」、2日目は「立体作品の手法」がテーマ。(研修室)

「つくって演じる人形劇」

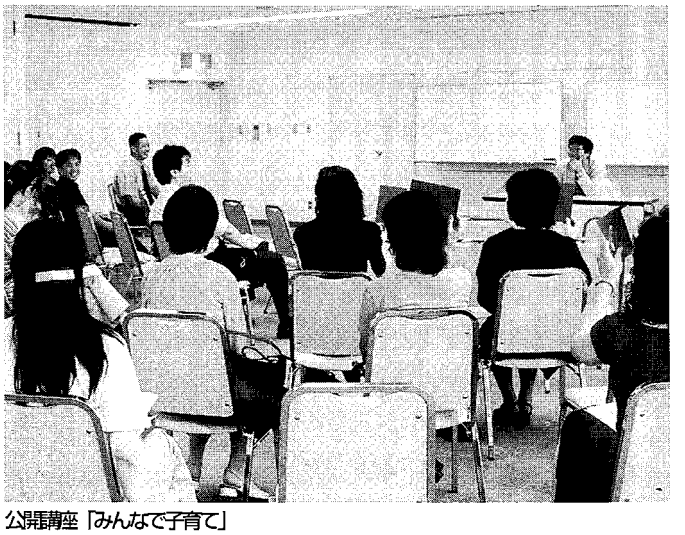
「おりがみにつよくなる講習会」

4. 助成金による事業

〈社会福祉・医療事業団助成事業　「こどもの城ファミリーフェア」事業〉

名　称	期 間（日 時）	備　考
公開講座「みんなで子育て」	6.9（第1回） 10.5（第2回） H14.2.15（第3回）	子どもたちの最も大切な生活の基盤である“家族”、そして“家族”を支える“社会環境”の大切さを広く訴えることを目的に3回シリーズで実施。 第1回＝「お風呂はどっちがいれる？～お父さんの育児参加～」 ゲスト：広岡守穂氏（中央大学法学部教授） 第2回＝「子どもと何を話す？ ～家族のコミュニケーション～」 ゲスト：波瀬満子氏（パフォーミング・アーティスト） ゲスト：保田克史氏（アニメーション作家） 第3回＝「子どもをどんなふうに叱る？ ～子どもとしつけ～」 ゲスト：今井登茂子氏（「とも子塾」主宰）
ファミリープレイタイム	6～11月	親子で一緒に楽しめ、親子のコミュニケーションをはかることができるプログラムの開発を目的に、〔こどもの城〕館内を使ってさまざまなプログラムを実施。夏休み特別期間には、企画展「大きさくらべ」をギャラリーで実施した。
親子遊びの企画展「大きさくらべ」	7.20～9.2	自分の体を使ったり、親子でスキンシップしながら、いろいろと大きさを比べる遊びを体験してもらう企画展。「単位」という科学的な概念を体験し、幅広いものの見方を身に付けると同時に、親子親子のコミュニケーションをはかる。テニスボールを単位として身長を計測する「テニスボール身長計」、30秒という時間を予測する「合わせて30秒」、光の三原色を使って色を作る「色くらべ」など、体験型展示を10点作成した。 （ギャラリー）
おひさまおはなしコンサート	11.2・3	親子で一緒に楽しめ、親子のコミュニケーションをはかることのできるプログラムの開発と普及が目的。本年度から、企画研修部がプロデュース・演出を担当。出演は小山茉美（声優）、渡辺亮（パーカッション）、人形劇木ぐつの木、音楽事業部スタッフ。 （青山円形劇場）
	12.9	地方巡回公演を大阪市で実施した。　（大阪府立大型児童館ビッグバン）
幼児期の親子遊び おやおや　こ・こ・こ	3月	「ファミリープレイタイム」で実施したプログラムを中心に、3～5歳児と保護者を対象とした親子遊びの事例集および親子スキンシップのための音楽ＣＤを制作、全国の児童館に配布した。

「おひさまおはなしコンサート」



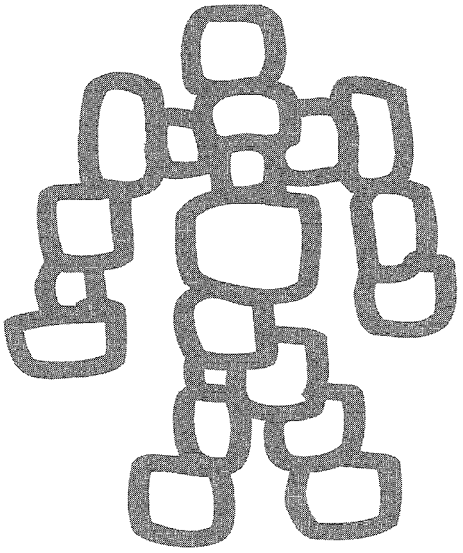
公開講座「みんなで子育て」

〈社会福祉・医療事業団助成事業　「小・中学生ボランティア交流」事業〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
ボランティア通信「じょいん」の発行		ボランティア活動を小・中学生をはじめとする、多くの人々に理解してもらうことを目的に冊子の発行した（年3回、特別号1回発行）。
じょいんフェスティバル	11.23～25	各地の大型児童館・児童センターのボランティアと〔こどもの城〕ボランティアとで、"遊びのボランティア"活動の周知、ボランティアの交流とネットワーク化をはかることを目的に、ボランティア交流フェスティバル「じょいんフェスティバル」を実施した。15館のボランティア約250人が参加。 参加館＝宮城県子ども総合センター（宮城県）／秋田県児童会館（秋田県）／栃木県子ども総合科学館（栃木県）／えひめこどもの城（愛媛県）／ぐんまこどもの国児童会館（群馬県）／富山こどもみらい館（富山県）／愛知県児童総合センター（愛知県）／兵庫県立こどもの館（兵庫県）／神戸市総合児童センターこべっこランド（神戸市）／さぬきこどもの国（香川県）／山口県児童センター（山口県）／大型児童館ビッグバン（大阪府）／福井県児童科学館エンゼルランドふくい（福井県）／東京都児童会館（東京都）／国立総合児童センターこどもの城（東京都）

〈日本財団助成事業〉

名　称	期 間(日 時)	備　考
わくわく絵本パーク	5.3	絵本の楽しさを子どもたちに伝えるために実施した、声優による絵本の読み語り公演。(株)81プロデュースと共同で制作。公演については、往復ハガキによる事前に申し込み制にしたが、1,000人を超える応募があり、抽選で600人を招待券。出演は、関俊彦、佐久間レイ、小林優子（声優）、人良のび太（ピアノ）　（青山円形劇場）
	9.15	えひめこどもの城で巡回公演を実施。2回公演を実施した。雨天にもかかわらず立ち見がでるほどの盛況で、地方公演への期待の大きさを感じた。　（えひめこどもの城）



こどもの城 事業年報

平成13年度

平成14年3月31日発行

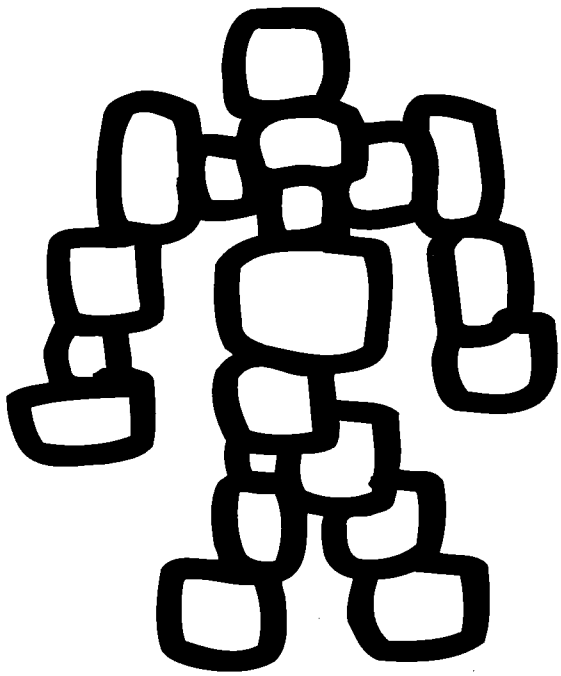
［編集・発行］

財団法人 児童育成協会

理事長　　高峯　一世

〒150-0001　東京都渋谷区神宮前5-53-1
電話　03-3797-5666

表紙イラスト ―――――― 田中靖夫
デザイン ―――――― COIL
印刷所 ―― オーイ・アート・プリンティング



財団法人 児童育成協会
こどもの城
〒150-0001 東京都渋谷区神宮前5-53-1
TEL 03-3797-5666(代表) FAX 03-3797-5676
http://www.kodomono-shiro.or.jp/